374-120
1200501450826
374
20

始

2537
ホ

帝國圖書館藏

日本文學辭典

三浦圭三

欠

日本文學研究

1537か

さんだら　三陀羅法師……二六六
さんちやう　三鳥―古今傳授に……二六六
さんていしゆんば　三亭春馬……二六六
さんでううだいじん　三條右大臣―さだかた「藤原定方」に……二六七
さんにんづま　三人妻……二六七
さんば　式亭三馬……二七〇
さんぷう　杉山杉風……二七一
さんぶん　散文……二七一
さんぼく　三木……二七一
さんまい　宮崎三昧……二七一
ざんむ　高橋殘夢……二七二
さんやう　頼山陽……二七二
さんゆふぐれのうた　三夕暮の歌……二七二
さんわ　唐來三和……二七三

シの部

し　詩……二七三
しあはせ　詩合……二七四
しあん　石橋思案……二七四
しうあん　中井甃庵……二七四
しうきう　周九……二七四
しうきよ　中村秋舉……二七四
しうきよう　周興……二七四
しうく　秀句―一語兩義に……二七五
しうこつ　戸川秋骨……二七五
しうじがく　修辭學……二七五
しうしき　秋色……二七五
しうせい　徳田秋聲……二七五
しうせいくわい　秋聲會……二七六
しうぜんじものがたり　修禪寺物語……二七六
しうかだいたい　秀歌大體……二七七
しうなん　山縣周南……二七七
じうん　似雲……二七七
しえい　藤井紫影……二七八
じえん　慈延……二七八
しかあはせ　詩歌合……二七八
じかあはせ　自歌合……二七八
しかう　嗜好……二七九
しかう　各務支考……二七九
しがく　詩學……二八〇

欠人

しがく　私學……三八〇
しかけぶんこ　仕懸文庫……三八〇
しがらみさうし　柵草紙……三八〇
しき　正岡子規……三八一
しきしないしんわう　式子內親王……三八二
しきていこさんば　式亭小三馬……三八二
しきのみこ　志貴皇子……三八三
しきぶ　高畠式部……三八三
しきものがたり　四季物語……三八三
しぎやうし　四行詩……三八三
じきゆう　中川自休……三八四
しぎんしや　紫吟社……三八四
しくわわかしふ　詞花和歌集……三八四
しげあき　富士谷成章……三八五
しけい　詩形……三八七
しけいがく　詩形學……三八七
しげき　史劇……三八七
しげきじふにきよく　史劇十二曲……三八七
しげこ　進藤茂子……三九〇
しげさと　熊代繁里……三九一
しげたね　鈴木重胤……三九一
しげのぶ　鶴峯戊申……三九一
しげはる　在原滋春……三九二
しげゆき　原重之……三九二
しげゆきしふ　重之集—しげゆき「源重之」に……三九二
しげより　松江重頼……三九二
しけん　森田思軒……三九三
しこう　山崎紫紅……三九三
しさうしや　詩草社……三九三
しざん　後藤芝山……三九三
じさんか　自讃歌……三九四
しじふはちくせ　四十八癖……三九四
ししもん　獅子門—美濃派に……三九四
しずこ　若松賤子……三九四
しせいし　市井詩……三九四
じせう　八文字舍自笑……三九四
しせつ　詩節……三九五
しせんかしふ　私撰歌集……三九五
しぜんしゆぎ　自然主義……三九五
しぜんしゆぎてきへうしやうし　自然主義的表象詩……三九六
しそう　芝叟—とくそう「近松德三」に……三九六

しだい　次第……三九六
しだいきしよ　四大奇書……三九六
じだいもの　時代物……三九七
したう　四道……三九七
したがふ　源順……三九七
しちごてう　七五調……三九八
しちごんぜつく　七言絶句……三九八
しちごんりつし　七言律詩……三九九
しちじふいちばんうたあはせ　七十一番歌合……三九九
しちじふにはうせい　七十二峯生—そはう「德富蘇峯」に……三九九
しちちんまんぼう　七珍萬寶……三九九
しちぶしふ　七部集……三九九
じちゆう　谷時中……四〇〇
じちん　慈鎭……四〇〇
しづがだけのしちほんやり　賤嶽の七本槍……四〇一
じつきんせう　十訓抄……四〇一
しづこ　油谷倭文子……四〇三
しつたん　悉曇……四〇三
じつぴやくゐん　十百韻—とつぴやくゐん「十百韻」に……四〇三
しつようこじ　漆植居士—瑞九に……四〇三
じつろくもの　實錄物……四〇三
して　師手……四〇三
じていき　耳底記……四〇三
してうだいなごん　四條大納言……四〇三
してつれ　師手つれ……四〇三
じてん　次點……四〇三
しなののみや　信濃の宮—宗良親王に……四〇三
しばしさう　司馬芝叟—とくそう「近松德三」に……四〇三
しはんけ　師範家……四〇三
しふぎよくしふ　拾玉集……四〇四
しふぎわしよ　集義和書……四〇四
しふぐわいかせん　集外歌仙……四〇五
じふさんだいしふ　十三代集……四〇五
じふさんや　十三夜……四〇五
じふしちかでうけんぽふ　十七箇條憲法……四〇六
じふしゐん　塚原濃柿園……四〇六
しぶつ　大窪詩佛……四〇六
しふゐぐさう　拾遺愚草……四〇六
しふゐぐさうゐんぐわい　拾遺愚草員外……四〇七
しふゐわかしふ　拾遺和歌集……四〇七

しへきだうじん 四壁道人—さちを「伊藤左千夫」に……四〇七
しへききよ 四壁居—さちを「伊左千夫」に……四〇八
しほ 詩歩……四〇八
しまちどりつきのしらなみ 島衙月白浪……四〇八
しみのすみかものがたり 紙魚住家物語……四〇八
しめい 四迷—ふたばてい「長谷川二葉亭」に……四〇九
しめすけ 奈河七五三助……四〇九
しもれいぜいけ 下冷泉家—師範家に……四〇九
じやう 新島襄……四〇九
しやうあん 南淵清安……四〇九
しやうい 田代松意……四〇九
しやういち 外山正一……四〇九
じやううん 薩摩淨雲……四〇九
しやうえう 松居松葉……四一〇
しやうおう 松翁—しやうえう「松居松葉」に……四一〇
しやうおう 松翁……四一〇
しやうかあん 松下庵—あきか「中村秋香」に……四一〇
しやうかうくわん 彰考館……四一〇
しやうがくゐん 奬學院……四一一
しやうきん 矢田部尙今……四一一
じやうぐうき 上宮記……四一一
じやうぐうたいし 上宮太子—聖德太子に……四一一
じやうぐうほふわふていせつ 上宮法王帝說……四一一
しやうさい 三宅尙齋……四一一
じやうさう 内所丈草……四一一
しやうざう 並木正三……四一三
しやうざう 林屋正藏……四一三
じやうざん 湯淺常山……四一三
しやうさん 鈴木正三……四一三
しやうざん 三宅嘯山……四一五
じやうざんきだん 常山紀談……四一五
しやうさんみものがたり 正三位物語……四一五
しやうしつ 里村昌叱……四一五
しやうじやう 茅野蕭々……四一五
しやうじんぎよるゐものがたり 精進魚類物語—魚鳥平家に……四一五
しやうたく 里村昌琢……四一五
しやうぢきしやうだいふ 正直正太夫—りよくう「齊藤緑雨」に……四一五
しやうちやうし 象徵詩……四一六
しやうちやうげき 象徵劇……四一六

しやうちやうしゆぎ 象徵主義—象徵詩に……四一六
しやうてつ 稻葉正徹……四一七
じやうとうもんゐん 上東門院……四一八
しやうとくたいし 聖德太子……四一九
しやうのせつ 紫陽之說……四二〇
しやうふう 正風……四二〇
しやうぶつ 性佛……四二〇
しやうへいかう 昌平黌……四二〇
じやうべん 淨辨……四二一
しやうほん 正本……四二一
しやうむてんわう 聖武天皇……四二一
しやうらく 三好松洛……四二一
しやうりやうしふ 性靈集……四二一
じやうるり 淨瑠璃……四二一
じやうるりじふにだんさうし 淨瑠璃十二段草子……四二三
じやうるりものがたり 淨瑠璃物語—淨瑠璃十二段草子……四二三
じやうわぶんがく 情話文學……四二三
しやくゐ 釋阿—しゆんぜい「藤原俊成」に……四二三
じやくぜん 寂然—よりなり「藤原頼業」に……四二三
しやくてん 釋奠……四二三
しやくにほんき 釋日本紀……四二四
しやくりやうぜん 釋良暹—良暹に……四二四
じやくれん 寂蓮……四二四
しやくわいげき 社會劇……四二四
しやくわいしゆぎしさう 社會主義思想……四二五
しやくわいせうせつ 社會小說……四二五
しやじつしゆぎ 寫實主義……四二五
しやせきしふ 沙石集……四二六
しやちく 大野洒竹……四二六
しやみめいくう 沙彌明空—明空に……四二六
しやれ 洒落—一語兩義に……四二六
しやれぼん 洒落本……四二六
じゆうししや 自由詩社……四二八
しやうぎはん 衆議判……四二八
しやうげんのう 祝言能……四二八
しやがく 朱學……四二八
しやくわんかくくわんし 主觀客觀詩……四三〇
しやくわんし 主觀詩—抒情詩に……四三〇
しやしがく 朱子學—朱學に……四三〇
しやじやうは 主情派……四三〇
しやんすゐ 朱舜水……四三〇

しゅじんくわう 主人公……四三〇
じゅだう 儒道……四三〇
じゅつさい 林述齋……四三一
しゅつぜかげきよ 出世景清……四三一
しゅつろ 出廬……四三一
しゅらもの 修羅物……四三三
じゅん 川田順……四三三
じゅんあん 木下順庵……四三三
じゅんいちらう 谷崎潤一郎……四三四
しゅんう 春雨—さちざう「中村吉藏」に……四三四
しゅんえうしふ 春葉集……四三四
しゅんこく 春國—さちな「伊藤左千夫」に……四三四
しゅんしよくうめごよみ 春色梅暦—梅暦に……四三四
しゅんすゐ 爲永春水……四三四
しゅんすゐ 爲永春水(二世)……四三五
しゅんすゐ 賴春水……四三五
しゅんだい 太宰春臺……四三五
しゅんちやうしふ 春鳥集……四三六
しゅんだいどくご 春臺獨語—獨語に……四三七
しゅんぜい 藤原俊成……四三七
しゅんぜいぢよ 俊成女……四三九
しゅんていしふ 春泥集……四三九
しゅんとう 森春濤……四四〇
じゅんとくてんわう 順德天皇……四四〇
じゅんなてんわう 淳和天皇……四四一
じゅんなゐん 淳和院……四四一
しゅんぴせう 俊秘抄—無名抄に……四四一
しゅうめうしふ 衆妙集……四四一
しゅんゑほふし 俊惠法師……四四一
しようきうわかしき 承久和歌式—近代秀歌に……四四一
じよか 序歌……四四一
じよかう 瀨川如皐……四四二
しよきくわん 書記官……四四二
しよくげんせう 職原鈔……四四二
じよけい 叙景……四四三
じよけいし 叙景詩……四四三
しよくさんじん 蜀山人—なんぽ「太田南畝」に……四四三
しよくにほんぎ 續日本紀……四四三
しよくにほんこうき 續日本後紀……四四四
しよくにんうたあはせ 職人歌合……四四四
しよさごと 所作事—演劇に……四四四
じよし 序詞……四四四
じよじ 叙事……四四五
じよじし 叙事詩……四四五
じよじやう 抒情……四四五
じよじやうし 抒情詩……四四五
しよぢよさく 處女作……四四五
じよぶん 序文……四四五
しよむ 昇曙夢……四四五
しよめいのつけかた 書名のつけ方……四四六
しらいしばなし 白石噺—碁太平記白石噺に……四四六
じらいやがうけつものがたり 兒雷也豪傑物語……四四六
しらう 井上士朗……四四六
じらうひやくしゅ 次郎百首—堀河院後度百首に……四四六
しらかはてんわう 白河天皇……四四六
しらぬひものがたり 白縫物語……四四七
しらべ 調べ……四四七
しらを 加舍白雄……四四七
しりつ 詩律……四四七
しろくへんれい 四六駢儷……四四八
じえん 慈圓……慈鎭に……四四八
しんいたこぶし 新潮來節……四四八
しんえうわかしふ 新葉和歌集……四四九
しんかい 信海……四五〇
しんがくだうわ 心學道話……四五〇
しんがくはやぞめぐさ 心學早染草……四五〇
しんきよくうらしま 新曲浦島……四五一
しんけい 心敬……四五一
しんけいかうく 新傾向句……四五一
しんげつ 新月……四五四
じんけんしんせつ 人權新說……四五四
しんこきんわかしふ 新古今和歌集……四五四
しんこくせうせつ 深刻小說……四五六
しんごしふゐわかしふ 新後拾遺和歌集……四五六
しんごせんわかしふ 新後撰和歌集……四五七
じんさい 伊藤仁齋……四五八
しんさるがくき 新猿樂記……四五八
しんさんじふろくかせん 新三十六歌仙……四五八
しんじ 新字……四五九
しんじ 神字—神代文字に……四五九
しんしち 河竹新七(二世)……四五九
しんししや 新詩社……四六〇
しんじのう 神事能……四六〇
しんせんずゐのう 新撰髓腦……四六〇

しんせんざいわかしふ 新千載和歌集……四六〇
じんせいくわん 人生觀……四六〇
しんせんせいしろく 新撰姓氏錄……四六〇
しんせんまんえうしふ 新撰萬葉集……四六一
しんせんらうえいしふ 新撰朗詠集……四六一
しんせんわか 新撰和歌……四六一
しんぞういぬつくばしふ 新增犬筑波集——淀河に……四六二
しんぞくこきんわかしふ 新續古今和歌集……四六二
しんたいし 新體詩……四六二
しんたいしせう 新體詩鈔……四六三
しんだいもじ 神代文字……四六四
しんぢゅうかさねゐづつ 心中重井筒……四六四
しんぢゅうてんのあみじま 心中天網島……四六五
しんぢゅうふたつはらおび 心中二つ腹帶……四六六
しんぢゅうもの 心中物……四六六
しんぢゅうよひかうしん 心中宵庚申……四六六
しんちよくせんわかしふ 新勅撰和歌集……四六七
しんつくばしふ 新菟玖派波集……四六八
しんてん 新點……四六八
しんにほんのせいねん 新日本之青年……四六八
しんばたんかひやうしやく 新派短歌評釋……四六八
しんぱんうたさいもん 新版歌祭文……四六八
しんびがく 審美學……四六九
しんらばんしやう 森羅萬象——萬象亭に……四六九
しんりせうせつ 心理小說……四六九
しんれいやぐちのわたし 神靈矢口渡……四六九
しんろてい 振鷺亭……四七〇
しんわ 神話……四七〇
じんわうしやうとうき 神皇正統記……四七〇

スの部

すがはらでんじゆてならひかがみ 菅原傳授手習鑑……四七二
すけくに 大江佐國……四七三
すけため 梨本祐爲……四七三
すけちか 大中臣輔親……四七三
すけとき 綾小路資時——性佛に……四七三
すけまさ 菅原輔正……四七三
すけよし 烏丸資芳……四七四

すずのや 鈴廼舍——のりながの「本居宣長」に……四七四
すぢがき 筋書……四七四
すてぢよ 田捨女……四七四
すとくてんわう 崇德天皇……四七四
すはうのないし 周防內侍……四七四
すみだはら 炭俵……四七四
すみよしものがたり 住吉物語……四七五
するがちやうにん 駿河町人——しやうえう「松居松葉」に……四七五
するがまろ 大伴宿彌駿河麿……四七五
すゐ 粹……四七五
すゐいん 江見水蔭……四七六
すゐこでんもの 水滸傳物……四七六
すゐしよしせつ 隨所師說……四七六
すゐなう 髓腦……四七六
すゐひつ 隨筆……四七六
すゐめい 河井酔茗……四七七
すゑ 末……四七七
すゑたか 賀茂季鷹……四七七
すゑつぐ 四辻季繼……四七七
すゑひろがり 末ひろがり……四七七
すゑひろじふにだん 末廣十二段……四七七
すんだいざつわ（しゆんだいざつわ）駿臺雜話……四七八

セの部

せあみ 世阿彌……四七八
せい 生……四七八
せいあぜう 井蛙抄……四八〇
せいあん 安藤省庵……四八〇
せいおんがく 聲音學……四八一
せいがいは 青海波……四八一
せいかく 性格……四八一
せいかくげき 性格劇……四八一
せいがん 梁川星巖……四八一
ぜいがん 梁田蛻巖……四八二
せいくわ 藤原惺窩……四八二
せいくわ 眞山青果……四八三
せいけいぶんがく 整形文學——固定文學に……四八三
せいげき 正劇……四八三
せいげつ 村上霽月……四八三
せいけん 三宅青軒……四八三

せいしやう 正章―ていしつ「安原貞室」に……四八四
せいせうなごん 清少納言……四八四
せいせうなごんき 清少納言記―枕草子に……四八四
せいせつ 佐々醒雪……四八四
せいぢせうせつ 政治小説……四八四
せいのことば 制の詞……四八四
せいび 夏目成美……四八五
せいひやう 末松青萍……四八六
せいふう 池袋清風……四八六
せいふぢよ 榎本星布女……四八六
せいべゑ 岡清兵衛……四八七
せいやうひざくりげ 西洋膝栗毛……四八七
せいら 松岡青羅……四八七
せいり 古賀精里……四八七
せいりう 青流……四八八
せいりがく 性理學―朱學に……四八八
せいれいしふ 性靈集……四八八
せいれいのう 精靈能―幽靈能に……四八八
せううう 櫻井蕉雨……四八八
せうえう 坪内逍遙……四八八
せうえうけん 逍遙軒―ていとく「松永貞德」に……四八八
せうけんかう 蕉堅稿……四八八
せうしこく 小詩國……四八九
せうせつ 小說……四八九
せうせつげき 小說劇……四九一
せうせつしんずゐ 小說神髓……四九一
せうそくぶん 消息文……四九二
せうちく 篠崎小竹……四九三
せうは 春泥舍召波……四九三
せうは 里村紹巴……四九四
せうはく 牡丹花肖柏……四九四
せうふう 蕉風……四九四
せうもん 蕉門……四九四
せかいくにづくし 世界國盡……四九五
せかいしゆぎ 世界主義……四九六
せきがはらのたたかひ 關ヶ原の戰……四九六
せきご 松永尺五……四九七
せきてん 釋奠―しやくてん「釋奠」に……四九七
せきとりせんりやうのぼり 關取千兩幟……四九七
せきのあきかぜ 關の秋風……四九七
せきふ 川村碩布……四九七
せきを 藤原關雄……四九八
せご 勢語……四九八
せつさい 森田節齋……四九八
ぜつかい 中津絕海……四九八
せつぎよくしふ 雪玉集……四九八
せつさい 西山拙齋……四九八
せつだう 齋藤拙堂……四九八
せつちうあん 雪中庵……四九九
せつちうあんれうた 雪中庵蓼太―れうた「大島蓼太」に……四九九
せつちうがく 折衷學……四九九
ぜつく 絕句……四九九
せつご 雪後―くわさう「中村花瘦」に……四九九
せつもん 雪門……四九九
せつれい 三宅雪嶺……四九九
せどうか 旋頭歌……四九九
せわもの 世話物……五〇〇
せんあ 香川宣阿……五〇〇
ぜんあ 善阿……五〇〇
せんかあはせ 選歌合……五〇〇
ぜんかう 芝全交……五〇〇
せんかく 仙覺……五〇〇
ぜんがくし 善學士―ためまさ「善滋爲政」に……五〇一
せんきぶん 戰記文……五〇一
せんく 千句……五〇一
せんくわ 煙亭仙果……五〇一
せんごひやくばんうたあはせ 千五百番歌合……五〇一
せんざいわかしふ 千載和歌集……五〇二
せんさうあんいちひと 淺草庵市人……五〇三
せんさうげき 戰爭劇……五〇三
せんし 長谷川千四……五〇三
せんしうあんさんだら 千秋庵三陀羅―三陀羅に……五〇三
せんしふせう 撰集抄……五〇三
せんしやうくわう 善相公―きよやす「三善清行」に……五〇四
せんしゆ 千首―千首歌に……五〇四
せんしゆのうた 千首歌……五〇四
せんだいはぎ 先代萩―「伽羅先代萩」に……五〇四
ぜんちゆうしよわう 前中書王―兼明親王に……五〇五
せんとうか 旋頭歌―せどうか「旋頭歌」に……五〇五
せんな 千那……五〇五
せんぼう 栗山潛鋒……五〇五
せんみやう 宣命……五〇五

せんみやうがき　宣命書―宣命に……五〇七
せんりう　川柳……五〇七
せんりう　柄井川柳……五〇七

ソの部

そういん　西山宗因……五〇八
そうがく　宋學……五〇八
そうかん　山崎宗鑑……五〇八
そうぎ　宗祇……五一〇
ぞうきほふし　增基法師……五一〇
そうくほふし　承均法師……五一〇
そうげいしゆちゐん　綜藝種智院……五一一
そうしやう　宗匠……五一一
そうすけ　並木宗輔……五一一
そうちやう　宗長……五一一
そうびん　僧旻……五一三
そうぼく　宗牧……五一三
そうぎほふしぢけうくん　宗祇法師兒教訓……五一三
そうまがき　總籬―通言總籬に……五一三
そかう　山鹿素行……五一三
そがきやうだい　曾我兄弟……五一三
そがものがたり　曾我物語……五一四
そきやう　小野素郷……五一四
ぞくあけがらす　續明鴉……五一四
ぞくかりんりやうざいしふ　續歌林良材集……五一四
そくきやう　即興……五一四
そくけん　安井息軒……五一四
ぞくご　俗語……五一四
ぞくこきんわかしふ　續古今和歌集……五一五
ぞくごしふゐわかしふ　續後拾遺和歌集……五一五
ぞくごせんわかしふ　續後撰和歌集……五一五
ぞくさるみの　續猿簑……五一五
ぞくしくわわかしふ　續詞花和歌集……五一六
ぞくしふゐわかしふ　續拾遺和歌集……五一六
ぞくせんざいわかしふ　續千載和歌集……五一六
ぞくほんてうぶんすゐ　續本朝文粹……五一六
ぞくよつぎ　續世繼―今鏡に……五一六
そぐわくわいけいざん　曾我會稽山……五一六
そせい　素性……五一七
そせいほふししふ　素性法師集……五一七
そせき　疎石……五一七

欠

篁村」に……五五一
たけもとざ 竹本座……五五一
だざいふまうで 太宰府まうで……五五二
たじやうたこん 多情多恨……五五二
ただあき 源忠秋……五五五
ただおみ 島田忠臣……五五五
ただおん 田達音―ただおみ「島田忠臣」に……五五五
ただことうた ただ言歌……五五五
ただちか 中山忠親……五五五
ただとも 穂井田忠友……五五六
ただのり 平忠度……五五六
ただひら 大江匡衡……五五七
ただひら 藤原忠平……五五七
ただふさ 大江匡房……五五七
ただふさ 藤原忠房……五五七
ただみ 壬生忠見……五五七
ただみち 藤原忠通……五五八
ただみしふ 忠見集―ただみ「壬生忠見」に……五五八
ただみね 壬生忠岑……五五八
ただみねしふ 忠岑集―ただみね「壬生忠岑」に……五五九
ただもり 平忠盛……五五九
たつみのその 辰巳の園……五五九
たつみふげん 辰巳婦言……五五九
たつを 馬場辰猪……五五九
たとへうた 譬喩歌……五五九
たにしきんぎよ 田螺金魚……五六〇
たねあき 千葉胤明……五六〇
たねかづ 柳下亭種員……五六〇
たねひこ 柳亭種彦……五六〇
たねひら 海上胤平……五六一
たねみち 九條種通……五六一
たねゆき 東胤行……五六一
たはれぐさ たはれぐさ……五六二
たひじ 大口鯛二……五六二
たびと 大伴旅人……五六二
たひやていりう 鯛屋貞柳―貞柳に……五六二
たふのみねのせうしやう 多武峯少將―たかみつ「藤原高光」に……五六三
たまかつま 玉勝間……五六四
たまこと 玉琴……五六四
たまぼこひやくしゆ 玉鉾百首……五六四
たまものまへあさひのたもと 玉藻前曦袂……五六四

欠

たみこ 荷田蒼生子……五六五
ためあき 安藤爲章……五六五
ためあき 藤原爲明……五六六
ためいへ 藤原[illegible]家……五六六
ためうぢ 藤原爲氏……五六七
ためかず 冷泉爲和……五六七
ためかね 藤原爲兼……五六七
ためこ 藤原爲子……五六八
ためさだ 藤原爲定……五六八
ためしげ 藤原爲重……五六九
ためすけ 藤原爲相……五六九
ためただ 冷泉爲尹……五七〇
ためただ 藤原爲忠……五七〇
ためとき 藤原爲時……五七〇
ためとほ 藤原爲遠……五七〇
ためなり 藤原爲業……五七〇
ためのり 藤原爲敎……五七一
ためのり 源爲憲……五七一
ためひさ 冷泉爲久……五七一
ためひて 冷泉爲秀……五七一
ためひら 藤原爲衡……五七一
ためひろ 冷泉爲廣……五七一
ためふぢ 藤原爲藤……五七二
ためふゆ 藤原爲冬……五七二
ためまさ 善滋爲政……五七二
ためむら 冷泉爲村……五七三
ためやす 三善爲康……五七三
ためよ 藤原爲世……五七三
たんか 短歌……五七四
たんかいくわう 淡海公—ふひと「藤原不比等」に……五七四
たんかせんかく 短歌撰格……五七四
だんきやう 斷橋……五七四
だんじやうるり 段淨瑠璃……五七五
だんしよくおほかがみ 男色大鑑……五七五
だんすゐ 北條團水……五七五
たんそう 廣瀬淡窓……五七五
たんそうしわ 淡窓詩話……五七五
だんたうしせん 談唐詩選……五七六
たんたん 松木淡々……五七六
たんていせうせつ 探偵小說……五七六
たんてき 耽溺……五七六
だんのうらかぶとぐんき 境浦兜軍記……五七九
たんばく 安積澹泊……五七九
たんばよさく 丹波與作……五七九
たんびしゆぎ 耽美主義—享樂主義に……五八〇
だんりんは 談林派—談林風に……五八〇
だんりんとつぴやくゐん 談林十百韻……五八〇
だんりんふう 談林風……五八一

チの部

ぢ 地……五八一
ちうこぶん 中古文……五八一
ちうしんすゐこてん 忠臣水滸傳……五八一
ちうぼん 中本……五八二
ちうむきやう 中務卿……五八二
ちかげ 橘千蔭……五八二
ちかふさ 北畠親房……五八三
ちかまさ 蜷川親當……五八四
ちかゆき 源親行……五八四
ちくざん 中井竹山……五八六
ちくしやうばら 畜生腹……五八六
ちくだう 齊藤竹堂……五八八
ちくはくゑんは 竹柏園派……五八八
ちくふう 登張竹風……五八九
ちくぶしま 竹生島……五八九
ちくらさんじん 竹羅山人—なんぽ「太田南畝」に……五八九
ちくれい 角田竹冷……五八九
ぢげふう 地下風……五八九
ちげつに 智月尼……五九〇
ちさと 大江千里……五九〇
ぢすけ 櫻田治助……五九〇
ちたて 城戸千楯……五九一
ちぢのやしふ 千々廼舍集—ありこと「千種有功」に……五九一
ぢとうてんわう 持統天皇……五九一
ちなみ 加藤千浪……五九一
ちはうぞくえう 地方俗謠……五九二
さはやじやう 千早城……五九二
ちびき 火石千引……五九三
ぢへゑ 津打治兵衞……五九三
ちまた 石槫千亦……五九四
ちやううそう 聽雨窓—ちくれい「角田竹冷」に……五九四
ちやうえいしきもく 貞永式目……五九四

ちやうか 長歌……五九四
ちやうかう 望月長好……五九四
ちやうかう 廣澤長好—望月長好に……五九五
ちやうこん 芍藥亭長根……五九五
ちやうかせんかく 長歌撰格……五九五
ちやうさぶらう 日貫長三郎……五九五
ぢやうざん 石川丈山……五九五
ちやうしうえいさう 長秋詠藻……五九六
ちやうすゐ 常世田長翠……五九六
ちやうすゐ 白井鳥酔……五九六
ちやうせうし 木下長嘯子……五九六
ちやうせつしふ 聽雪集—雪玉集に……五九八
ちやうづまる 長頭丸……五九八
ちやうばいぐわい 長梅外……五九八
ちやうはく 有賀長伯……五九八
ちやうめい 鴨長明……五九八
ちやうれんが 長連歌—連歌に……六〇〇
ちやくたうひやくしゆ 着到百首—着到和歌に……六〇〇
ちやくたうわか 着到和歌……六〇〇
ぢゆあみ 珠阿彌—もくあみ「元木阿彌」に……六〇〇
ちゆういうわう 仲雄王……六〇〇
ちゆうぐわい 後藤宙外……六〇〇
ぢゆうこう 志賀重昂……六〇一
ちゆうしんぐら 忠臣藏—假名手本忠臣藏に……六〇一
ちゆうしんすゐこでん 忠臣水滸傳……六〇一
ぢゆうれい 島田重禮……六〇一
ちゆうゐんぜんもん 中院禪門—ためいへ「藤原爲家」に……六〇一
ぢゆがく 儒學—儒道に……六〇一
ちようげつ 澄月……六〇一
ぢよかく 如覺—たかみつ「藤原高光」に……六〇二
ちよくせんしふ 勅撰集……六〇二
ちよくせんるゐだいわかしふ 勅撰類題和歌集—類題和歌集に……六〇二
ちよさくだう 著作堂……六〇二
ちよだう 栗田樗堂……六〇二
ちよぢよ 千代女……六〇二
ちよら 三浦樗良……六〇三
ぢよらいし 如儡子……六〇四
ちりひぢ 塵泥……六〇四
ちゐのないし 智惠内侍……六〇四
ちんざん 大沼枕山……六〇四

ちんせつゆみはりづき 椿說弓張月……六〇四
ちんだう 德田椿堂……六〇五
ぢんてんあいなうぜう 塵添埃囊抄—埃囊抄に……六〇五

ツの部

つう 井上通女……六〇五
つう 小野通……六〇五
つうきすいこてん 通氣醉語傳……六〇六
つうげんそうまがき 通言總籬……六〇六
つうせう 市場通笑……六〇七
つくしぶねものがたり 竺志船物語……六〇七
つくばくわい 筑波會……六〇七
つくばこ 筑波子—しげこ「進藤茂子」に……六〇七
つくばしふ 菟玖波集……六〇七
つくばもんだふ 筑波問答……六〇八
つけあひ 附合……六〇八
つたからまる 蔦唐丸……六〇八
つちみかどてんわう 土御門天皇……六〇八
つつみちうなごんものがたり 堤中納言物語……六〇九
つづらぶみ 藤籠册子……六〇九
つねあきら 橋本經亮……六一〇
つねき 橘常樹……六一〇
つねのぶ 源經信……六一〇
つねより 東常緣……六一一
つばら 小田桑……六一三
つま 妻……六一三
つむりひかる 頭光……六一五
つゆだんだん 露團々……六一五
つらき 春道列樹……六一九
つらゆき 紀貫之……六一九
つるひやくゐん 鶴百韻—初懷紙に……六二二
つれづれぐさ 徒然草……六二三
つゐく 對句……六二三
つゐくほふ 對句法……六二三

テの部

ていう 朴樫宇……六二四
ていか 藤原定家……六二四
ていかきやうぜうそく 定家卿消息—ていか「藤原定家」に……六二七
ていかん 藤井貞幹……六二七

ていきやうしき　貞享式……六三八
ていきんわうらい　庭訓往來……六三八
ていくわいしゆみ　低徊趣味―餘裕派小說に……六三八
ていしつ　安原貞室……六三八
ていしゆ　程朱……六三八
ていしんくわう　貞信公―ただひら「藤原忠平」に……六三八
ていぢやう　伊勢貞丈……六三八
ていぢやうざつき　貞丈雜記……六三九
ていとく　松永貞德……六三九
ていけん　角藤定憲……六三〇
ていもん　貞門……六三〇
ていりう　貞柳……六三〇
てうふくしゆう　調鶴集……六三一
てうみん　中江兆民……六三一
てうやぐんさい　朝野群載……六三一
てがらをかもち　手柄岡持……六三一
てきさい　中村惕齋……六三一
てきほ　野田笛浦……六三二
てつかん　與謝野鐵幹……六三二
てつかんし　鐵幹子……六三二
てつちやう　末廣鐵腸……六三三
てにをは　天仁遠波……六三三
てふはながためいかのしまだい　蝶花形名歌島臺……六三三
てふむ　蝶夢……六三四
てんかう　江馬天江……六三四
てんきせうせつ　傳奇小說……六三五
てんこう　豐田天功……六三五
てんぐわい　小杉天外……六三五
てんげん　片上天弦……六三五
てんずゐ　久保天隨……六三五
てんせい　佐野天壓……六三六
でんたつおん　田達音―ただおみ「島田忠臣」に……六三六
てんち　星野天知……六三六
てんちいうじやう　天地有情……六三六
てんとく　水間沾德……六三八
てんとくうたあはせ　天德歌合……六三八
てんとくよねんだいりうたあはせ　天德四年內裡歌合……六三八
てんぶじんけんろん　天賦人權論……六三八
てんのあみじま　天網島―「心中天網島」に……六三九
てんみん　竝河天民……六三九
てんりやう　菊岡沾凉……六四〇

ト の 部

どうえう　童謠……六四〇
とうおんぶ　東音譜……六四一
とうが　東雅……六四一
とうかいゆうしぎん　東海遊子吟……六四二
とうかいさんし　柴東海散士……六四二
とうがい　伊藤東涯……六四二
とうかいだうちうひざくりげ　東海道中膝栗毛……六四二
とうかいどうめいしよき　東海道名所記……六四三
とうくわんきかう　東關紀行……六四三
とうくわばう　東華坊―しかう「各務支考」に……六四三
とうこ　藤田東湖……六四三
とうこく　北村透谷……六四三
とうこくぜんしふ　透谷全集……六四四
とうざいあんなんぼく　東西庵南北……六四四
とうざいずゐひつ　東齋隨筆……六四四
とうざいゆうき　東西遊記……六四四
とうさく　平秩東作……六四四
どうじくん　童子訓……六四五
とうそん　島崎藤村……六四五
とうじゆ　中江藤樹……六四五
とうしよ　伊藤東所……六四六
とうほ　藤岡東圃……六四六
とうやしう　東野洲―つねより「東常緣」に……六四六
どうぶんつうかう　同文通考……六四六
とうや　安藤東野……六四六
とうやしうきがき　東野洲聞書……六四七
とうり　中根東里……六四七
とうり　伊藤東里……六四七
とうりさんじん　東里山人……六四七
ときなが　葉室時長……六四七
ときはづぶし　常盤津節……六四八
ときぶみ　紀時文……六四八
どくぎん　獨吟……六四八
どくぎんせんく　獨吟千句……六四八
とくげん　齋藤德元……六四八
どくご　獨語（書物）……六四八
どくご　獨語（諸曲）……六四八
とくさう　近松德三……六四九
どくしよろん　讀史餘論……六四九

どくぼ 國木田獨歩……六四九
とくぼく 平田秀木……六四九
とさにつき 土佐日記……六五〇
としごひのまつり 祈年祭……六五〇
としなり 藤原俊成—しゅんぜい「藤原俊成」に……六五一
としぶんしふ 都氏文集……六五一
としゆき 藤原敏行……六五一
としゆきしふ 敏行集……六五二
としより 源俊頼……六五二
とつぴやくゐん 十百韻……六五三
どどいつ 都々逸……六五三
とねりしんわう 舎人親王……六五三
とはずがたり とはずがたり……六五四
とほりんゑ 遠輪廻……六五四
とほる 源融—河原左大臣に……六五四
とみもとぶし 富元節……六五四
とも 供……六五四
ともいへ 藤原知家……六五四
ともきよ 小山田與清……六五五
よのこ 鵜殿餘野子……六五五
ともただ 藤原朝忠……六五五
ともつな 大江朝綱……六五六
とものり 八田知紀……六五六
とものり 紀友則……六五七
とものりしふ 友則集—友則「紀友則」に……六五七
ともひらしんわう 具平親王……六五七
とよかい 本居豐穎……六五七
とよたけざ 豐竹座……六五八
とよとし 賀陽豐年……六五八
とりかへばやものがたり 取替婆哉物語……六五八
とりもの 採物……六五九
とんあ 頓阿法師……六五九
とんかうほふ 頓降法……六六一
とんとんばう 頓々坊—ちくれい「角田竹冷」に……六六一

な の 部

ないよう 内容……六六一
なおこ 大塚楠緒子……六六一
ながうた 長唄……六六一
なしつぼのごにん 梨壺の五人……六六二
なかがはしんじゅう 中川心中……六六二

なかつかさ 中務……六六三
なかつかさしふ 中務集—なかつかさ「中務」に……六六三
なかつかさないし 中務内侍……六六三
なかつかさないしにつき 中務内侍日記—中務内侍に……六六三
なかとみのよごと 中臣壽詞……六六三
なかぶみ 藤原仲文……六六三
ながまさ 平間長雅……六六三
ながまちをんなはらきり 長町女腹切……六六三
なかまろ 藤原仲麿……六六四
なかまろ 安部仲麿……六六四
ながやのおほきみ 長屋王……六六四
ながよし 藤原長能……六六四
ながる 下河邊長流……六六五
なかをわう 仲雄王—ちゆういうわう「仲雄王」に……六六六
なぎのその 竹柏園—のぶつな「佐々木信綱」に……六六六
なぎのそのしふだいいつぺん 竹柏園集第一編……六六六
なぎのそのしふだいにへん 竹柏園集第二編……六六六
なぎのそのは 竹柏園派—ちくはくゑんは「竹柏園派」に……六六六
なしつぼのごかせん 梨壺の五歌仙……六六七
なしのもとしふ 梨本集……六六七
なぞ 謎……六六七
なつくさ 夏草……六六七
なつの 清原夏野……六六七
なにまる 茂呂何丸……六六七
なはまろ 内藏忌寸縄麿……六六七
なびこ 耕取魚彦……六六八
ないぶちようしやう 内部徵證……六六九
なほぶみ 落合直文……六六九
なほよし 熊谷直好……六六九
ならてんじゆ 奈良傳授……六七〇
なりつぐ 姉小路濟繼……六七〇
なりひら 在原業平……六七〇
なりひらしふ 業平集—なりひら「在原業平」に……六七一
なるとちうじやうものがたり 鳴門中將物語……六七一
なるへし 南留別志……六七一
ならまろ 橘宿彌奈良麿……六七二
なんかい 祇園南海……六七二
なんがく 南學……六七二
なんくわく 服部南郭……六七二
なんけい 橘南谿……六七三

なんすゐ 須藤南翠……六七三
なんせんせうそまんど 南仙笑楚滿人……六七三
なんそうさとみはつけんでん 南總里見八犬傳……六七三
なんぼ 太田南畝……六七四
なんぼく 鶴屋南北……六七四
なんれい 多田南嶺……六七五

に の 部

にごりえ 濁り江……六七五
にしう 尾藤二洲……六七六
にしきぶんりう 錦文流……六七六
にしのみやさだいじん 西宮左大臣—たかあき「源高明」に……六七六
にじふいちだいしふ 廿一代集……六七六
にでうけれいぜんけのたいぢ 二條家冷泉家の對峙……六七七
にんじやうぼん 人情本……六七七
にしやまものがたり 西山物語……六七八
にせむらさきぬなかげんじ 偽紫田舍源氏……六七八
につき 日記……六七八
にでうけ 二條家……六七八
にでうでんじゆ 二條傳授……六七八
にでうは 二條派……六七八
にでうぬんさぬき 二條院讃岐……六七八
にじふごげん 廿五絃—さうへい「森田草平」に……六七九
ににんびくに 二人比丘尼……六七九
にひまなび 新學……六七九
にひまなびいけん 新學異見……六七九
にうだうさきのだじやうだいじん 入道前太政大臣—きんつね「藤原公經」に……六七九
にほひのつけ 匂の附……六七九
にほんえいたいぐら 日本永代藏……六八〇
にほんえんげきけうくわい 日本演劇協會……六八〇
にほんき 日本紀—「日本書紀」に……六八〇
にほんぐわいし 日本外史……六八〇
にほんこうき 日本後紀……六八一
にほんこくげんざいしよもくろく 日本國見在書目錄……六八一
にほんしかろん 日本詩歌論……六八一
にほんしゆぎ 日本主義……六八一
にほんしよき 日本書紀……六八二

にほんせいき 日本政記……六八二
にほんそうこくふどき 日本總國風土記……六八二
にほんは 日本派……六八二
にほんふりそてはじめ 日本振袖始……六八三
にほんぶんがく 日本文學……六八三
にほんりやういき 日本靈異記……六八三
にようばうころし 女房殺し……六八三
にんぢやうぼん 人情本……六八五

ヌ の 部

ぬかだのおほきみ 額田女王……六八五
ぬすびとれんが 盗人連歌……六八五

ネ の 部

ネオロマンチシズム ネオロマンチシズム……六八六
ねぎしは 根岸派……六八六
ねぼけせんせい 寝惚先生—なんぼ「太田南畝」に……六八六
ねんさん 安藤年山—「安藤爲章」に……六八六

ノ の 部

のういんうたまくら 能因歌枕……六八六
のういんほふし 能因法師……六八六
のうがく 能樂……六八七
のちのえのしやうくわう 後江相公……六八七
のちのずずのや 後鈴廼舍……六八七
のちのちゆうしよわう 後中書王……六八七
のぶあき 源信明……六八七
のぶざね 藤原信實……六八七
のぶつな 佐々木信綱……六八八
のぶとも 伴信友……六八八
のぶな 中山信名……六八八
のぶみつ 栗原信光……六八九
のぶよし 刀利宣令……六八九
のりと 祝詞……六九二
のりなが 本居宣長……六九四
のりなが 藤原敎長……六九四
のりなが 藤原範永……六九四

ハ の 部

ばいおう 梅翁—そういん「西山宗因」に……六九五

はいかい 俳諧……六九五
はいかいあきのこゑ 俳諧秋の聲……六九七
はいかいうもれぎ 俳諧埋木……六九七
はいかいか 俳諧歌……六九七
はいかいごさん 俳諧御傘……六九七
はいかいし 俳諧詩—やまとし「大和詩」に……六九七
はいかいしきもく 俳諧式目……六九七
はいかいしんしき 俳諧新式—芭蕉翁廿五箇條に……六九八
はいかいたまもしふ 俳諧玉藻集……六九八
はいく 俳句……六九八
ばいくわ 中西梅花……六九八
ばいくわむじんざう 梅花無盡藏……六九八
ばいげつだう 梅月堂……六九八
ばいしつ 櫻井梅室……六九八
ばいしないしんわう 禖子内親王……六九九
ばいしないしんわうせんじ 禖子内親王宣旨……六九九
ばいしやうろん 梅松論……六九九
ばいせい 高瀬梅盛……六九九
ばいたん 杉浦梅譚……七〇〇
はいぶん 俳文……七〇〇
はいみ 俳味……七〇〇
ばういつ 杉田望一……七〇〇
はううんわかしふ 芳雲和歌集……七〇〇
はうげつ 島村抱月……七〇〇
はうげん 方言……七〇一
ばうしう 雨森芳洲……七〇一
ばうしんしふ 卯辰集……七〇一
はうた 端唄……七〇一
はうぢやうき 方丈記……七〇一
ばうとうに 野村望東尼……七〇一
はうめい 岩野泡鳴……七〇一
はうもつしふ 寶物集……七〇二
はうりやくかんき 保曆間記……七〇二
はうろう 放浪……七〇二
はうゑん 方圓—ばいしつ「櫻井梅室」に……七〇二
はかい 破戒……七〇二
はかせ 博士……七〇六
はぎその 芳宜園—ちかげ「橘千蔭」に……七〇六
はぎのや 萩之舍—なほぶみ「落合直文」に……七〇六
はぎのやかしふ 萩之家歌集……七〇六
ばきん 曲亭馬琴……七〇六
はくう 浦瀬白雨……七〇八

はくぎよくしふ 柏玉集……七〇八
ばくすゐ 堀田麥水……七〇八
はくせい 平木白星……七〇九
はくせき 新井白石……七〇九
はくちやう 正宗白鳥……七〇九
ばくでんせう 莫傳抄—無名抄に……七一〇
はくやう 白楊—さうへい「森田草平」に……七一〇
ばくりん 麥林—おつゆ「中川乙由」に……七一〇
はくれつてい 白劣亭—しあん「石橋思案」に……七一〇
はこでんじゆ 箱傳授……七一〇
はこねれいけんいざりのあだうち 箱根靈驗躄仇討……七一〇
はごろも 武島羽衣……七一〇
はごろも 羽衣(謠曲)……七一一
はしじやうるり 端淨瑠璃……七一一
はじん 早野巴人……七一一
はせを 紀長谷雄……七一一
ばせう 松尾芭蕉……七一一
ばせうおうにじうごかでう 芭蕉翁廿五箇條……七一一
はちかつぎ 鉢被衣……七一一
はちかのだいじ 八箇の大事—古今傳授に……七一一
はちけんでん 八犬傳—南總里見八犬傳に……七一二
はちしうぶんさう 八洲文藻……七一二
はちせうじん 八笑人—花暦八笑人に……七一二
はちだいしふ 八代集……七一二
はちのき 鉢の木……七一三
はちまんたらう 八幡太郎……七一三
はちもんじやぼん 八文字舍本……七一三
はつてん 發展……七一三
はつびんせうせつ 撥鬢小說……七一三
ばつぶん 跋文……七一四
はつまる 尾田初丸……七一四
はつくわいし 初懷紙……七一四
はながみねかうまんをとこ 鼻下峯高慢男……七一四
はなごよみはつしやうじん 花暦八笑人……七一四
はなさかせのぢぢ 花咲爺—「はなさかぢぢ」に……七一四
はなさかぢぢ 花咲爺……七一五
はなさんじん 鼻山人—東里山人に……七一五
はなぞのてんわう 花園天皇……七一五
はなのうへのほまれのいしぶみ 花上野譽石碑……七一五
はなのもと 花下……七一五
はなれきやうげん 放狂言……七一五

はまなり 藤原濱成……七三五
はまなりしき 濱成式—歌經標式に……七三五
はままつちうなごんものがたり 濱松中納言物語……七三五
はまおみ 清水濱臣……七三六
はやひとまひ 隼人舞……七三七
はやりうた はやり唄……七三七
はりまふどき 播磨風土記……七三八
はる 春……七三八
はるさと 村田春郷……七四四
はるには 本居春庭……七四四
はるのひ 春の日……七四五
はるのや 春廼舍—せうえう「坪内逍遙」に……七四五
はるまち 戀川春町……七四五
はるみ 村田春海……七四五
はるみち 村田春道……七四七
はるむら 黒川春村……七四七
はれこそで 晴小袖……七四七
はんか 反歌……七四七
ばんか 挽歌……七四八
はんがく 藩學……七四八
はんかんじん 半閑人—ちくれい「角田竹冷」に……七四八
はんかんぶ 藩翰譜……七四八
ばんかわかしふ 晩花和歌集……七四八
ばんけい 大槻磐溪……七四八
はんごほふ 反語法……七四八
ばんざん 熊澤蕃山……七四九
はんじ 近松半二……七四九
ばんしやうてい 萬象亭……七五〇
ばんすゐ 土井晩翠……七五〇
はんせつ 反切……七五一
はんたうかう 半陶稿……七五一

ヒの部

ひえだあれ 稗田阿禮……七五一
びかく 美學……七五一
ひかくぶんがく 比較文學……七五一
ひかくぶんがくし 比較文學史……七五一
ひかくしんわがく 比較神話學……七五二
ひかくぶんぽふがく 比較文法學……七五二
ひげき 悲劇……七五二
ひげをとこ ひげ男……七五二

ひご 肥後……七五四
ひこさんごんげんちかひのすけだち 彦山權現誓助劍……七五五
ひこばえ 比古婆衣……七五五
ひこひめしき 孫姫式……七五五
ひさおい 蒐木田久老……七五五
ひざくりげ 膝栗毛—東海道中膝栗毛に……七五六
ひさご 瓢……七五六
びざん 川上眉山……七五六
びじがく 美辭學—修辭學に……七五六
びしやもんだう 毘沙門堂—京極家に……七五六
びじゆつ 美術……七五六
びせうねんろく 美少年錄—近世說美少年錄に……七五七
ひぜんふどき 肥前風土記……七五七
ひだのたくみものがたり 飛驒內匠物語……七五七
ひでたふ 藤原秀能……七五七
ひとし 源等……七五七
ひとまろ 柿本人麿……七五七
ひなやりうほ 雛屋立圃……七五八
ひばいせんく 飛梅千句……七五八
びはのだいなごん 枇杷大納言—もろうじ「藤原師氏」に……七五八
ひひやう 批評……七五八
びぶん 美文……七五九
びめい 小川未明……七五九
びめう 山田美妙……七五九
びめうさい 美妙齋—びめう「山田美妙」に……七五九
ひやうきよ 淺野馮虛……七五九
ひやうすゐわかしふ 萍水和歌集……七五九
ひやうそく 平仄……七六〇
ひやくしゆ 百首—ひやくしゆのうた「百首歌」に……七六〇
ひやくしゆのうた 百首歌……七六〇
ひやくにんいつしゆ 百人一首……七六〇
ひやくはつちやうき 百八丁記……七六〇
ひやくゐん 百韻……七六〇
ひゆほふ 譬喩法……七六〇
ひらがな 平假名……七六一
ひらがなせいすゐき 遺稿松矢飯梅ひらがな盛衰記……七六一
ひろえ 越智廣江……七六二
ひろかた 屋代弘賢……七六二
ひろこ 片山廣子……七六二
ひろたり 中島廣足……七六二

ひろつな 佐々木弘綱……七六四
ひろなり 齋部首廣成……七六四
ひろなり 葛井廣成……七六四
ひろなり 平群廣成……七六五
ひろには 安部唐庭……七六五
ひろのり 足代弘訓……七六五
ひろみ 橘廣相……七六六
ひろみち 萩原廣道……七六六
ひろゆき 加藤弘之……七六七
びん 上田敏……七六七

フの部

ふうえう 小栗風葉……七六七
ふうえうわかしゆふ 風葉和歌集……七六七
ふうがわかしふ 風雅和歌集……七六八
ふうぞくもんぜん 風俗文選……七六九
ふうらいさんじん 風來山人—げんない「平賀源内」に……七六九
ふうらいろくろくぶしふ 風來六々部集……七六九
ふうりうぐんばいうちは 風流軍配團扇……七六九
ふうりうさいかいすずり 風流西海硯……七六九
ふうりうしだうけんでん 風流志道軒傳……七六九
ふうりうだいぜん 風流大全……七六九
ふうりうななこまち 風流七小町……七六九
ふうりうぶつ 風流佛……七六九
ふうりうれんりのこひ 風流連理戀……七七一
ふかく 立羽不角……七七一
ふかやぶ 清原深養父……七七一
ふくこがく 復古學……七七一
ふくないきぐわい 福内鬼外—げんない「平賀源内」に……七七一
ふくろのさうし 袋草紙……七七一
ふくわうゑんゐん 普光園院……七七二
ぶくん 武訓……七七二
ふさうしふ 扶桑集……七七二
ふさうしふえうしふ 扶桑拾葉集……七七二
ぶしうえどうたあはせ 武州江戸歌合……七七二
ふじぎやうじや 富士行者—かうかうかかく「角田浩々歌客」に……七七二
ふじのや 不盡廼舍—あきか「中村秋香」に……七七二
ふしみてんわう 伏見天皇……七七二

ふしもの 賦物……七七二
ぶしやうのえうじ 武將の幼時……七七三
ふせいけいぶんがく 不整形文學……七七三
ふぞくうた 風俗歌……七七三
ぶそん 谷口蕪村……七七四
ぶだうあふみはちけい 武道近江八景……七七五
ぶだうでんらいき 武道傳來記……七七五
ふたばてい 長谷川二葉亭……七七六
ふたはらおび 二腹帶—心中二腹帶に……七七六
ふちあん 不知庵—ろあん「内田魯庵」に……七七六
ふぢかはのき 藤河の記……七七六
ぶつそくせきのうた 佛足跡の歌……七七六
ぶつそらい 物徂徠—そらい「荻生徂徠」に……七七八
ふでのさが 筆のさが……七七八
ふとき 大根太木……七七八
ふどき 風土記……七七八
ふところすずり 懐硯……七七九
ふとん 蒲團……七七九
ふひと 史……七八〇
ふひと 藤原不比等……七八〇
ふぼくわかせう 夫木和歌抄……七八〇
ふみもち 大伴書持……七八〇
ふゆつぐ 藤原冬嗣……七八〇
ふゆのひ 冬の日……七八一
ふるかはもくあみ 古河默阿彌—しんしち「阿竹新七」に……七八一
ふるのなかみち 古の中道……七八一
ふるまろ 鹽屋古麿……七八一
ふるまろ 紀古麿……七八一
ふるみち 小野古道……七八一
ぶんかう 馬場文耕……七八一
ぶんかうだう 文耕堂……七八一
ぶんがく 文學……七八二
ぶんがくかい 文學界……七八三
ぶんがくし 文學史……七八三
ぶんがくひひやう 文學批評……七八三
ぶんきやう 花笠文京……七八四
ぶんくわしうれいしふ 文華秀麗集……七八四
ぶんくん 文訓……七八四
ぶんげいけうくわい 文藝協會……七八四
ぶんけんがく 文獻學……七八五
ぶんごふどき 豐後風土記……七八五

ぶつざん 村上佛山……七八五
ぶんしやうざうし 文正草子……七八五
ぶんせんし 文泉子……七八五
ぶんたい 文體……七八六
ぶんたいがく 文體學……七八六
ぶんちうくわう 文忠公……七八六
ぶんぽふ 文法……七八六
ぶんぶにだうまんごくどうし 文武二道萬石通……七八六
ぶんめいいつたうき 文明一統記……七八六
ぶんめいとうぜんし 文明東漸史……七八七

へ の 部

へいきよく 平曲……七八七
へいけものがたり 平家物語……七八八
へいじやうてんわう 平城天皇……七八九
へいしよくたん 乘燭譚……七九〇
へいぢものがたり 平治物語……七九〇
へいべゑ 富永平兵衛……七九〇
へうじゆんご 標準語……七九〇
へきぎよくしふ 碧玉集……七九一
へきごどう 河東碧梧桐……七九一
べつり 別離……七九一
へめてん 變目傳……七九二
へんぜう 僧正遍昭……七九三
へんぜうしふ 遍昭集—へんぜう「僧正遍昭」に……七九五
へんぜうはつきせいれいしふ 遍照發揮性靈集—性靈集に……七九五
べんのないし 辨内侍……七九五
べんのないしにつき 辨内侍日記—辨内侍に……七九五
べんべんくわんこりふ 便々館湖鯉鮒……七九五

ほ の 部

ほうかう 林鳳岡……七九五
ほうげんものがたり 保元物語……七九六
ほうさい 龜田鵬齋……七九六
ほうでうじらいき 北條時賴記……七九六
ほうらう 田川鳳朗……七九六
ほきいち 塙保己一……七九七
ほくかい 江村北海……八〇〇
ほくかい 片山北海……八〇〇

ほくざん 山本北山……八〇〇
ほくし 立花北枝……八〇〇
ぼくしのいへ 新社會劇牧師の家……八〇一
ぼくすゐ 若山牧水……八〇二
ぼくすゐかわ 牧水歌話……八〇二
ほくせい 草村北星……八〇二
ぼくたん 栗柯亭木端……八〇二
ぼくだう 立花牧童……八〇二
ほくばうさんし 北邙散史—さがのや「矢崎嶷峨の舍」……八〇二
ほくへん 北邊—しげあき「富士谷成章」に……八〇二
ぼくやう 半井卜養……八〇二
ぼくやうしん 牧羊神……八〇三
ほくりじふにとき 北里十二時……八〇六
ぼけいしふ 墓景集……八〇六
ほしすみれは 星菫派……八〇六
ほそかはげんしきがきぜんしふ 細川玄旨聞書全集……八〇六
ほつく 發句—俳句に……八〇六
ほつご 發語……八〇六
ほつしんしふ 發心集……八〇七
ぼつちやん 坊ちやん……八〇七
ほつま 秀眞—神代文字に……八〇八
ほづみわうじ 穗積皇子……八〇八
ホトトギス ホトトギス……八〇八
ほととぎす 不如歸……八〇九
ほふしもん 法師門……八〇九
ほふしやうじにふだうさきのくわんぱくだじやうだいじん 法政寺入道前關白太政大臣—ただみち「藤原忠通」に……八〇九
ほりかは 侍賢門院堀河……八〇九
ほりかはうだいじん 堀河右大臣—よりむね「藤原賴宗」に……八〇九
ほりかはがくは 堀河學派……八〇九
ほりかはひやくしゆ 堀河百首—堀河院初度百首に……八〇九
ほりかはゐんおんときひやくしゆ 堀河院御時百首—堀河院初度百首に……八〇九
ほりかはゐんこうどひやくしゆ 堀河院後度百首……八一〇
ほりかはゐんしよどひやくしゆ 堀河院初度百首……八一〇
ほりかはゐんたらうひやくしゆ 堀河院太郎百首—堀河院初度百首に……八一〇

ほりかはゐんにつき　堀河院日記—讃岐典侍日記に……八一〇
ほりだしもの　掘出しもの……八一〇
ほんかどり　本歌取り……八一〇
ほんせつ　本説……八一〇
ほんてうあういんひじ　本朝櫻陰比事……八一〇
ほんてうすゐこでん　本朝水滸傳……八一一
ほんてうすゐぼだい　本朝醉菩提……八一一
ほんてうぢよかん　本朝女鑑……八一一
ほんてうつがん　本朝通鑑……八一一
ほんてうにじふしかう　本朝廿四孝……八一一
ほんてうぶんかん　本朝文鑑……八一二
ほんてうもんずゐ　本朝文粹……八一二
ほんてうりくこくし　本朝六國史—六國史に……八一二
ほんてうれいさう　本朝麗藻……八一三
ぼんてんごく　梵天國……八一三

マの部

まいげつせう　毎月抄—ていか「藤原定家」に……八一三
まうしんせう　孟津抄……八一三
まがきのはな　籬の花……八一三
まがほ　鹿都邊眞顔……八一三
まくらことば　枕詞……八一三
まくらのさうし　枕草子……八一三
まさあき　石原正明……八一四
まさあき　飛鳥井雅章……八一五
まさあり　飛鳥井雅有……八一五
まさおみ　坂正臣……八一五
まさかぜ　高崎正風……八一五
まさたか　飛鳥井雅孝……八一五
まさため　冷泉政爲……八一六
まさつね　飛鳥井雅庸……八一六
まさつね　藤原雅經……八一六
まさもち　石川雅望……八一七
まさやす　飛鳥井雅康……八一七
まさずみ　源當純……八一七
まさよ　飛鳥井雅世……八一七
まさよし　尾崎雅嘉……八一八
まさより　飛鳥井雅緣……八一八
まさを　鎌田正夫……八一八
ますかがみ　增鏡……八一八

またて　藤原眞楯……八一九
まつさかのいちや　松坂の一夜……八一九
まつほのうらものがたり　松帆浦物語……八二〇
まな　眞名……八二〇
まひと　粟田眞人……八二〇
まひのほん　舞の本……八二〇
まひまひ　舞舞—幸若舞に……八二〇
まひるの　まひる野……八二〇
まぶち　賀茂眞淵……八二一
まへくづけ　前句附……八二三
まみ　吉備眞備……八二三
まみち　菅野眞道……八二三
まるほん　丸本……八二三
まんぎんしふ　漫吟集—契沖に……八二四
まんざいわかしふ　萬載和歌集……八二四
まんじゅのひめ　萬壽の姫……八二四
まんよふがな　萬葉假名—萬葉集に……八二四
まんえうしふさうもくならびにじふにぐわついめいしふ　萬葉集草木並十二異名集—莫傳抄に……八二四
まんえうしふ　萬葉集……八二四
まんな　眞名—まな「眞名」に……八二九
まんねん　上田萬年……八二九

ミの部

みかぜ　荷田御風……八二九
みかた　山田三方……八二九
みかたしやみ　三方沙彌—みかた「山田三方」に……八二九
みかどのまつり　御門祭……八二九
みかはごふどき　三河後風土記……八二九
みかんじん　未閑人—ちくれい「角田竹冷」に……八三〇
みくにまなび　皇國學—國學に……八三〇
みこひだりけ　御子左家—二條家並に師範家に……八三〇
みこひだりのおとど　御子左大臣—兼明親王に……八三〇
みちかぜ　大淀三千風……八三〇
みちかつ　中除通勝……八三〇
みちざね　菅原道眞……八三〇
みちしげ　中院通茂……八三一
みちちか　源通親……八三一
みちとし　藤原通俊……八三一
みちとも　源通具……八三一
みちなり　源通濟……八三一

みちのぶ 藤原通信……八三二
みちひこ 鈴木通彦……八三二
みちみ 中院通躬……八三三
みちむら 中院通村……八三三
みちやす 井上通泰……八三三
みちゆき 道行……八三三
みちゆきぶり 道ゆきぶり……八三四
みづがきゑがほ 美圖垣笑顔……八三四
みづかがみ 水鏡……八三四
みつかたいへいき 三日太平記……八三四
みづからのうたあはせ 自歌合—じかあはせ「自歌合」に……八三五
みつくに 德川光圀……八三五
みつとし 藤原光俊……八三五
みつなか 色川三中……八三五
○みつね 凡河内躬恒……八三五
みつねしふ 躬恒集—みつね「凡河内躬恒」に……八三六
みつのはままつ 水津之濱松—濱松中納言物語に……八三六
みつひで 烏丸光榮……八三六
みつひろ 烏丸光廣……八三六
みづほ 太田水穗……八三七
みつもの 三物……八三七
みつゆき 源光行……八三七
みつゑ 富士谷御杖……八三七
みとがく 水戸學……八三八
みとく 石田未得……八三八
みどりくわいふう 綠廻風—せいけん「三宅青軒」に……八三八
みなせさんぎんひやくゐん 水無瀨三吟百韻……八三八
みにしふ 壬二集—いへたか「藤原家隆」に……八三八
みにゐ 壬二位—いへたか「藤原家隆」に……八三八
みねもり 小野岑守……八三八
みねを 上野岑雄……八三九
みのは 美濃派……八三九
みふね 淡海三船……八三九
みもすそがはうたあはせ 御裳濯川歌合—西行に……八三九
みやうじやう 明星……八三九
みやうじやうは 明星派……八三九
みやうほふだう 明法道……八三九
みやがはうたあはせ 宮川歌合—西行に……八四〇
みやこのてぶり 都の手ぶり……八四〇
みらいき 未來記……八四〇

みわたし 見渡し……八四〇
みゑきち 鈴木三重吉……八四〇
みんかうにつそ 岷江入楚……八四〇
みんざん 中江岷山……八四一
みんぶきやうにふたう 民部卿入道—ためいへ「藤原爲家」に……八四一
みんやくやくかい 民約譯解……八四一

ム の 部

むかしばなしいなづまへうし 昔話稻妻表紙……八四一
むぐらゐ 葎居—おきなまろ「黑澤翁曆」に……八四二
むげん 小原無弦……八四二
むげんげき 夢幻劇……八四二
むさうこくし 夢想國師……八四二
むさうびやうゑこてふものがたり 夢想兵衞胡蝶物語……八四三
むしまろ 高橋蟲麿……八四三
むしまろ 下毛野蟲麿……八四三
むしまろ 安部蟲麿……八四三
むしまろ 安部蟲麿……八四三
むしんは 無心派……八四三
むぢゆうほふし 無住法師……八四三
むねたかしんわう 宗尊親王……八四四
むねたけ 德川宗武……八四四
むねながしんわう 宗良親王……八四四
むねはり 在原棟梁……八四五
むねゆき 源宗于……八四五
むねゆきしふ 宗于集—むねゆき「源宗行」に……八四五
むみやうせう 無名抄(傳源俊頼作)……八四五
むみやうせう 無名抄(鴨長明作)……八四五
むみやうひせう 無名秘抄—無名抄に……八四五
むめいさうし 無名草子……八四五
むらかみ 大伴村上……八四六
むらかみてんわう 村上天皇……八四六
むらさきしきぶ 紫式部—源氏供養に……八四六
むらさきしきぶ 紫式部……八四六
むらさきしきぶがにつき 紫式部が日記—紫式部日記に……八四七
むらさきしきぶにつき 紫式部日記……八四七
むらさきにつき 紫式部—紫式部日記に……八四八
むらさきひふ 紫被布……八四八
むろまちしゆみ 室町趣味……八五〇

メの部

めいか 宇野明霞……八五〇
めいかうぜうそく 明衡消息—明衡往來に……八五一
めいかうわうらい 明衡往來……八五一
めいくう 明空……八五一
めいげつき 明月記……八五一
めいさうたい 瞑想體……八五二
めいせつ 内藤鳴雪……八五二
めいぢしよねんのしりつがくかう 明治初年の私立學校……八五二
めいぢてんわう 明治天皇……八五二
めいぢはいく 明治俳句……八五二
めいどのひきやく 梅川忠兵衛冥途の飛脚……八五三
めいぼくせんだいはぎ 伽羅先代萩……八五三
めいめい 盧田冥々……八五三
めいりんかしふ 明倫歌集……八五四
めいろくしんし 明六新誌……八五四
めしもり 飯盛—がばう「石川雅望」に……八五四
めいけいだう 明經道……八五四

モの部

もくあみ 默阿彌—しんしち「阿竹新七(二世)」に……八五四
もくじやう 前田木城……八五四
もすゐ 戸田茂睡……八五五
もちとよ 芝山持豐……八五五
もちゆき 狩野望之……八五五
もと 本……八五六
もといへ 藤原基家……八五六
もとかた 在原元方……八五六
もときよ 元清—世阿彌に……八五六
もとざね 藤原元眞……八五六
もとすけ 清原元……八五六
もとすけしふ 元輔集—もとすけ「清原元輔」に……八五七
もとつな 姉小路基綱……八五七
もととし 藤原基俊……八五七
もとのもくあみ 元木阿彌……八五七
もとひとしんわう 職人親王……八五八
もとふみ 久米幹文……八五八
もとよししんわう 元良親王……八五八

ものがたり 物語……八五八
ものくさたらう 物臭太郎……八五八
もののあはれ 物の哀れ……八五八
もののな 物名……八五九
もものたらう 桃太郎……八五九
ももよ 大伴百代……八五九
もりたけ 荒木田守武……八五九
もりたけせんく 守武千句—獨吟千句に……八六〇
もりべ 楢守部……八六〇
もろあげ 諸擧……八六一
もろうじ 藤原師氏……八六一
もろえ 橘諸兄……八六一
もろすけ 藤原師輔……八六一
もろひら 加納諸平……八六二
もん 門……八六二
もんざゑもん 近松門左衛門……八六六
もんじ 文字……八六七
もんじやうせい 文章生……八六八
もんじやうはかせ 文章博士……八六八
もんとくじつろく 文德實錄……八六八

ヤの部

やいう 横井也有……八六八
やいち 芳賀矢一……八六八
やうめいがく 陽明學……八六九
やうらう 養老……八六九
やかもち 大伴家持……八六九
やぎふむねのり 柳生宗矩……八七一
やくもくでん 八雲口傳……八七一
やくもごせう 八雲御抄—順德天皇に……八七一
やしやうくわう 野相公—たかむら「小野篁」に……八七二
やす 麻田連陽春……八七二
やすすけわうのはは 康資王母……八七二
やすひて 文屋康秀……八七二
やすまろ 太安麻呂……八七二
やすよ 良岑安世……八七二
やすよし 藤原保吉……八七三
やつか 藤原八束……八七三
やどやのめしもり 宿屋飯盛—まさもち「石川雅望」に……八七三

やなぎだる 柳樽（川柳）……八七三
やなぎだる 柳樽（俳諧）……八七三
やは 志田野坡……八七三
やはたのきやうぢよ 八幡の狂女……八七三
やぶだん 野夫談……八七五
やほやおしちうたさいもん 八百屋お七歌祭文……八七五
やまうば 山姥……八七六
やまきずゐなう 山木髓腦—無名抄に……八七六
やまとし 大和詩……八七六
やまとまろ 百濟倭麿……八七六
やまとものがたり 大和物語……八七六
やみのはいばん 闇の杯盤……八七七
やりのごんざかさねかたびら 鎧の櫂三重帷子……八七八

ユの部

ゆうけいたい 雄勁體……八七九
ゆうしはうげん 遊子放言……八七九
ゆうどうぶんがく 遊動文學……八七九
ゆうはう 菊池幽芳……八七九
ゆうれいのう 幽靈能……八八〇
ゆきいへ 藤原行家……八八〇
ゆきぢよごまいはごいた 雪女五枚羽子板……八八〇
ゆきち 福澤諭吉……八八〇
ゆきなが 信濃前司行長……八八一
ゆきのぶ 垣本雪信……八八一
ゆきのり 海野幸典……八八二
ゆきひら 在原行平……八八二
ゆきよし 藤原行能……八八三
ゆげのみこ 弓削皇子……八八三
ゆづる 岸本弓弦……八八三
ゆはらのおほきみ 湯原王……八八四
ゆふぎりあはのなると 夕霧阿波鳴門……八八四
ゆみながし 弓流し……八八四
ゆみはりづき 弓張月—椿說弓張月に……八八四
ゆや 熊野……八八四

ヨの部

ようしやばこ 用捨箱……八八五
ようれん 涌連……八八五
よごと 壽詞……八八五

よさのおほきみ 譽謝王……八八五
よしか 都良香……八八五
よしき 大塚嘉樹……八八六
よしざね 藤原良實……八八六
よしたか 藤原義孝……八八六
よしただ 曾根好忠……八八六
よしつね 藤原良經……八八七
よしつねせんぼんざくら 義經千本櫻……八八八
よしとも 壺井義知……八八八
よしの 榊原芳野……八八八
よしのしふゐ 吉野拾遺……八八九
よしのぶ 大中臣能宣……八八九
よしのぶしふ 能宣集—よしのぶ「大中臣能宣」に……八九〇
よしのものがたり 吉野物語—本朝水滸傳に……八九〇
よしひさ 貝原好古……八九〇
よしもと 二條良基……八九〇
よじやうほふ 餘情法……八九一
よつぎ 世經—榮華物語……八九二
よつぎものがたり 世繼物語—大鏡に……八九二
よつな 大伴四綱……八九二
よどがは 淀河……八九二
よねじらう 野口米次郎……八九二
よのなかひやくしゆ 世中百首……八九二
よのなかひやくしゆゐせう 世中百首繪抄—世中百首に……八九二
よはのねざめ 夜半の寢覺……八九三
よひかうしん 宵庚申—心中宵庚申に……八九三
よみぼん 讀本……八九三
よもさんじん 四方山人—なんぼ「太田南畝」に……八九三
よもた 坂本四方太……八九四
よものあから 四方赤良—なんぼ「太田南畝」に……八九四
よものうたがき 四方歌垣—まがほ「鹿都部眞顏」に……八九四
よものとめかす 四方の留糟……八九四
よやうのがく 餘姚之學……八九四
よゆうはせうせつ 餘裕派小說……八九四
よよし 四十四……八九四
よりざね 源頼實……八九四
よりなり 藤原頼業……八九四
よりなり 清原頼業……八九五
よりまさ 源三位頼政……八九五
よりもと 大中臣頼基……八九五

よるのつる 夜の鶴……八九六
よろこんぶひいきのえぞおし 悦贔負蝦夷押領……八九六

ラの部

らいざん 小西來山……八九六
らうえい 朗詠……八九六
らうさう 老莊……八九七
らえうしふ 蘿葉集……八九七
らくくん 樂訓……八九七
らくしゆ 落首……八九七
らくしよろけん 落書露顯—れうしゆん「今川了俊」に……八九八
らくてんきよ 樂天居—さざなみ「巖谷小波」に……八九八
らくばいしふ 落梅集……八九八
らくびんのせつ 洛閩之說……八九八
らざん 林羅山……八九八
らびじん 裸美人—胡蝶に……八九九
らふう 羅風—ろふう「三木露風」に……八九九
らんかう 高蘭閣更……八九九
らんぐわい 辻嵐外……八九九
らんさい 藤井懶齋……九〇〇
らんざん 高井蘭山……九〇〇
らんしう 五井蘭洲……九〇〇
らんせつ 服部嵐雪……九〇〇

リの部

りいう 河野李由……九〇一
りうがくせい 留學生……九〇一
りうきよ 佐久間柳居……九〇一
りうけい 矢野龍溪……九〇一
りうそん 柳村—びん「上田敏」に……九〇一
りうほ 野々口立圃……九〇一
りうほく 成島柳北……九〇一
りうほくぜんしふ 柳北全集……九〇一
りうらう 廣柳浪……九〇三
りうりきやう 柳里恭—きふん「柳澤淇園」に……九〇三
りがく 理學—朱學に……九〇三
りくがく 陸學……九〇三
りくかしふ 六家集—ろくかしふ「六家集」に……九〇三
りくわわかしふ 李花和歌集……九〇三
りくこくし 六國史……九〇四
りけん 中井履軒……九〇四
りげん 木下利玄……九〇四
りさうしゆぎ 理想主義……九〇四
りさうは 理想派……九〇四
りぢやう 瀧亭鯉丈……九〇四
りつご 律語……九〇四
りつざん 柴野栗山……九〇五
りつし 律詩……九〇五
りつぼ 野々口立圃—りふほ「野々口立圃」に……九〇五
りつりやうきやくしき 律令格式……九〇五
りつふん 中村栗園……九〇五
りとう 櫻井吏登……九〇六
りやうかう 兩香—しあん「石橋思案」に……九〇六
りやうぎげ 合義解……九〇六
りやうしう 塚原蓼洲—しふしふん「塚原澁柿園」に……九〇六
りやうぜん 良暹……九〇六
りやうた 大鳥蓼太……九〇六
りやうたい 凉岱—あやたり「建部綾足」に……九〇七
りやうぢんひせう 梁塵秘抄……九〇七
りやうと 岩田凉兎……九〇七
りやうとく 鷄冠井令德……九〇七
りやううんしんしふ 凌雲新集—凌雲集に……九〇七
りようううんしふ 凌雲集……九〇七
りよくう 齋藤緣雨……九〇八
りわう 李王……九〇八
りんえうるゐぢんしふ 林葉累塵集—ながる「下河邊長流」に……九〇八
りんかしふ 林下集……九〇八
りんぐわい 前田林外……九〇九
りんぢよわかしふ 林女和歌集……九〇九
りんゑ 輪廻……九〇九

ルの部

るゐかう 黑岩涙香……九〇九
るゐかうじ 類柑子……九〇九
るゐだいさうやしふ 類題草野集—草野和歌集に……九〇九
るゐだいわかしふ 類題和歌集……九一〇
るゐだいわかしふ 類題和歌集—怜野集に……九一〇

レの部

れいうん 田岡嶺雲……九一〇
れいこ 荒木田麗子……九一〇
れいすゐ 遲塚麗水……九一一
れいぜいけ 冷泉家……九一一
れいぜいためすけ 冷泉爲相—ためすけ「冷泉爲相」に……九一一
れいぜいは 冷泉派……九一一
れいやしふ 怜野集……九一一
れうい 淺井了意……九一二
れうしゆん 今川了俊……九一三
れうしゆんべんえうせう 了俊辨要抄—れうしゆん「今川了俊」に……九一三
れきしせうせつ 歴史小説……九一三
れんが 連歌……九一四
れんがしんしきつゐか 連歌新式追加……九一五
れんがしんしきつゐかならびにこんあん 連歌新式追加並今案—連歌式目に……九一五
れんがぬすびと 連歌盗人—盗人連歌に……九一五
れんがひきやうせう 連歌比況抄……九一五
れんがほんしき 連歌本式……九一五
れんげつに 太田垣蓮月尼……九一五
れんしやう 蓮性—ともいへ「藤原知家」に……九一六
れんばい 連俳……九一六

ロの部

ろあん 内田魯庵……九一六
ろあん 小澤蘆庵……九一七
ろうくわほふ 臘化法……九一七
ろえう 山本露葉……九一七
ろかう 瀬川路考……九一八
ろくかしふ 六家集……九一八
ろくかせん 六歌仙……九一八
ろくこくし 六國史—りつこくし「六國史」に……九一八
ろくじゆゑん 六樹園……九一八
ろくでうけ 六條家……九一八
ろくでふえいさう 六帖詠藻……九一八
ろげつ 石井露月……九一八
ろげんばう 仙石盧元坊……九一八
ろすゐ 青木鶯水……九一九
ろせき 水落露石……九一九
ろだう 那波魯堂……九一九
ろてん 内藤雪沾……九一九
ろばん 幸田露伴……九一九
ろふう 三木露風……九二〇
ろふう 秋元蘆風……九二〇
ろぶん 假名垣魯文……九二〇
ろんどんたふ 倫敦塔……九二〇

ワの部

わうだいもの 王代物……九二四
わうやうめいのがくせつ 王陽明の學說—「餘姚之學」に……九二四
わうらい 往來……九二四
わか 和歌……九二四
わかくぼん 和歌九品……九二六
わかさくしき 和歌作式—喜撰式に……九二六
わかししき 和歌四式……九二六
わかしてんわう 和歌四天王……九二六
わかしよがくせう 和歌初學抄……九二六
わかていきん 和歌庭訓—ていか「藤原定家」に……九二六
わかどころ 和歌所……九二七
わかなしふ 若菜集……九二七
わがはいはねこである 吾輩ハ猫デアル……九三一
わかふるのやまぶみ 和歌布留の山ぶみ……九四〇
わかんこんかうぶん 和漢混淆文—和漢混合文に……九四〇
わかんこんがうぶん 和漢混合文……九四〇
わかんらうえいしふ 和漢朗詠集……九四〇
わかんれんく 和漢聯句……九四一
わき 脇……九四一
わきつれ 脇連……九四一
わくせつ 或說……九四一
わくもん 惑問—ろあん「小澤蘆庵」に……九四二
わくんのしをり 和訓栞……九四二
わじ 倭字……九四二
わじせいらんせう 和字正濫抄……九四二
わせだしし や 早稲田詩社……九四二
わせだぶんがく 早稲田文學……九四二
わに 王仁……九四二
わひせう 倭秘抄—無名抄に……九四三
わぶん 和文……九四三
わみやうせう 和名抄—和名類從抄に……九四三
わみやうるゐじゆせう 和名類從抄……九四三

われから　わらから……九四三

ヰの部

ゐしう　維舟―しげより「松江重頼」に……九四四
ゐちう　岡西惟中……九四四
○ゐなかげんじ　田舍源氏―にせむらさきゐなかげんじ「偽紫田舍源氏」に……九四四
○ゐねんぼう　惟然坊……九四四
○ゐん　韻……九四五
○ゐんぶん　韻文……九四五

エの部

ゑけいほふし　惠慶法師……九四五
○ゑほんたいこふき　繪本太功記……九四五
○ゑみのおしかつ　惠美押勝―なかまろ「藤原仲麿」に……九四六
○ゑんじゆあん　圓珠庵……九四六

ヲの部

をうかう　川田甕江……九四六
○をうぎせう　奥儀抄……九四六
○をかし　をかし……九四七
をかぜ　清原雄風……九四七
をぐらのみこ　小倉親王―兼明親王に……九四七
○をぐらひやくにんいつしゆ　小倉百人一首―百人一首に……九四七
○をつじん　越智越人……九四七
をにたけ　感和亭鬼武……九四七
○をにつら　上島鬼貫……九四八
をののたうふう　小野道風……九四八
をののたうふうあをやぎすずり　小野道風青柳硯……九四九
○をののみちかぜ　小野道風―とうふう「小野道風」に……九四九
をののみやだじやうだいじん　小野宮太政大臣―さねより「藤原實頼」に……九四九
をやまだともきよ　小山田與清―よせい「高田與清」に……九四九
○をりく　折句……九四九
○をりたくしばのき　折りたく柴の記……九四九
をんないまがは　女今川……九五〇
をんなころしあぶらぢごく　女殺油地獄……九五〇

日本文學辭典

アの部

あいならせう　塵囊鈔（塵添塵囊鈔）　七卷十五册

僧俗の故事や、和漢の事實五百卅六箇條をあげて解說したもので、よく註釋書に引用されて居る。著者は僧行譽で、文安三年（一一六〇）五月觀勝寺金剛佛子行譽の奥書がついて居る（大日本佛敎全書刊行會發行）

あいゑんてう　哀婉調

明治三十年前後島崎藤村の詩風、一、纖細・二、華麗・三、女性的近代的着想等が目立つ。「藤村」及び「一葉舟」をも見よ。

あううくわんせきぶんらうし　奥羽觀迹聞老志　廿八卷

仙臺藩士、佐久間義和（洞巖）享保四年（一三七九）の著、奥羽地方の地理歷史を綜合して、名所舊蹟・古詩・古歌・古傳說を詳叙したもの、全部漢文で書かれ德川期鄕土誌中出色の作である。橋南谿が北遊の際、奥田直助の宅で一見して推稱した（東遊記一ノ六）のも本書で、近頃「奥の細道」研究者が無二の參考とするのも本書である。今は義に宮城縣で活版に附したものが廣まつて居る。

あうぎせう　奥儀抄　三卷

藤原清輔の著と稱せられるが、僞書であることを藤岡博士が論じて居られる（日本評論史一九三―一九五）上卷には六義六體三種體等廿四項、中卷には古歌の註と和歌の雜事について記し「あかれさす」を日の異名「しづくしく」を雨の異名など隨分間違もあるが德川時代盛に讀まれたものである（歌學文庫卷一）

あうゐん　押韻

韻文をつくるのに一定の位置の音の韻を諧和にすること。

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今玆在　捧持每日拜餘香

起承結の三句の終りの「涼腸香」の音は押韻されてある。この種の押韻は和歌にもあつて

花か　あらぬか　なみのよするか、

などいふ、このやうに語句のしまひに押韻したものを「脚韻」と云ひ

あらばあふ夜のありもこそすれ

のやうな頭韻と區別する。

あかぞめゑもん　赤染右衞門？

王朝時代女流歌人として名高く、其咏は收めて赤染右衞門集（群二七七、一〇、二七八―三〇九）にあり、後拾遺（三十餘首）、詞花（八首）、新古今（十首）等の諸集にも散見する。又榮花物語の作者としても擬せられてゐる。大隅守赤染時用の女で、子女の頃を倫子（藤原道長の妻一六二四――一七一三）に仕へ、後大江匡衡に嫁ぎ、一子擧周をあげた。擧周の病危篤の時、身を以て平癒加住吉の社前に祈り

代らんと祈る命は惜しからで
さても別れむことぞ悲しき

と捧げた所、冥護空しからず病氣も癒え、その身も無事であつたと云ふ。

あがたゐのかしふ　（安賀當居の歌集）

縣居家集　一卷

縣居は賀茂眞淵の家號で翁の歌文を集めたものを「縣居家集」といふ。門人加藤宇萬伎の編で、明和九年、二四三二）刊行、後更に阿我太居の拾遺として寛政二年（二四五〇）に「のむらのぶもと」が追補したと跋文にあるものも一緒にされてゐる。

眞淵の歌文集はまだこの外に「縣居文歌」「賀茂翁家集」「賀茂翁集」「賀茂翁歌」「賀茂眞淵翁全集」などがある（各項參照）

あがたゐぶんか　縣居文歌　寫本二卷

眞淵の門人楫取魚彦主として之を編み、その友數人之を助けて天明元年（翁の歿後十三年）に成る。翁の歌數百首文數十篇より成る。

眞淵の歌文集はまだこの外に「安賀當居の歌集」「賀茂翁家集」「賀茂翁集」「賀茂翁歌」「賀茂眞淵翁全集」などがある（各項參照）

あかはら　都赤腹？

平安朝の漢詩人で、嵯峨天皇の朝に仕へ文章博士になつた。その詩は經國・凌雲・文華秀麗の三集に出て居る。

あかひと　山部赤人？

聖武の朝の頃の人萬葉歌人として柿本人麿と並び稱せられる。特に短歌に秀いで自然美を咏じて可憐優美の情趣を發揮したものが多い（但し、長歌も巧みでかの富士の歌などは殊に名高い）

春の野に菫つみにとこし我ぞ
野をなつかしみ一夜ねにけり

わかの浦にしほみちくれば潟をなみ
あしべをさしてたづなきわたる

などは代表歌となつてゐる。彼の長短歌は萬葉集三・六・八等に散見し短歌は山邊赤人集（群二六一、九、九八八―九九五。續國五〇四―五〇九）に收められてある。一般には山邊とあるが山部の方が正しい

あかほん　赤本

表紙の赤い本といふ意味で、德川時代中、貞享年間から寛延初期にかけての草双紙をいふ。極めて幼稚な繪畫本位の小說で、作者も始めは署名せず畫家だけが名を出したが、享保の觀水堂丈阿以來作者も署名することになつた。內容は大抵妖怪變化とか、何々合戰とかの類で、文學的價値は乏しいが、これが段々發達して黑本となり黃表紙となつたのである。

あきか　中村秋香（不盡廼舍、今かくれが、乾坤蘆、松下庵）　天保一二、九――明治四三、一、二九、七十歳

駿河の人、父は靜岡藩士中村錄翁、幕末・明治の過渡に閲歷してその修養も奉職も兩時代に跨つて居るが、晩年には東京音樂學校教授・第一高等學校講師・宮內省御歌所寄人などを勤めた。國文に精通し、作歌に長じ、文章も亦優れて居つた。落窪物語評釋・吉野拾遺詳解・伊勢物語評釋等何れも一字一句を忽にせぬ註釋の好著である。秋香歌がたり、秋香歌集も亦博く讀まれた（今の成蹊實務學校長中村春二氏はその令息である）

あきこ　晶子　明治一一、一二、七――

與謝野鐵幹氏夫人で、實家は堺市甲斐町の駿河屋と云ふ菓子舗で姓を鳳と云ふ。幼より文學の趣味を有ち京都府立第一高女卒業後、鐵幹氏經營の新詩社に入つてその天才を認められ、遂に鐵幹氏と結婚して益々歌才を發揮し、明治の新派歌壇に確實な地歩を築いた。後更に訓詁・論說に筆を執り、日本古典全集の校刊に盡されつゝある。その著は

一、歌集に、みだれ髪・小扇・戀ごろも・舞姫・夢の華・佐保姫・青海波・常夏・春泥集・夏より秋へ・さくら草・旅の歌等

二、訓詁に、新譯源氏物語・新譯榮華物語

三、論說に、激動の中を行く・愛・理性及び勇氣・愛

の創刊、

以上の業績中、殊に女流歌人新派の先蹤として大きく輝いて居る。その咏は、女性らしい感激を強い形式で表現して而かも優雅の態を失はない。就中春泥集までの作に秀逸が多い（尙各歌集並に「晶子短歌全集」の項を見よ）

あきこたんかぜんしふ　晶子短歌全集

三冊

與謝野晶子の歌集で同女史の歌風を知るには便利な書である。卽ち、女史が作歌を始めた明治三十三年から大正七年頃へかけて十八年間の貴重な收穫を集めて居る

第一冊　みだれ髪・小扇・毒草・戀ごろも・舞姫・夢の華　常夏

第二冊　佐保姫・春泥集・青海波・夏より秋へ（上）

第三冊　夏より秋へ（下）・さくら草・朱葉集・舞ごろも・晶子新集（大正九、一〇、二五　新潮社）

あきしのげつせいしふ　秋篠月清集

「月清集」を見よ。

あきすけ　藤原顯輔　？—一八一五？—久壽二

王朝末の歌人顯季の末子、歌道執心によつて父より柿本人麿肖像を讓られ、近衞天皇の天養元年六月二日には崇德院の仰せを受けて詞花和歌集十卷を奏進した。彼自身の詠は金葉以後の諸勅撰集（金葉に十數首、千載にも十數首等）久安六年百首、大治三年住吉歌合等にあり。尙次の諸作がある。

左京大夫顯輔卿集一卷（群二三五、九、五一三—五二一續國七六〇—七六六）。長承三年中宮亮顯輔朝臣家歌合一卷、久安五年、家成卿家歌合判・崇德院百首の歌奉りけるに

秋風にたなびく雲の絶間より
もれいづる月のかげのさやけさ

あきすゑ　藤原顯季　一七一五—一七八三

天喜三—保安四、六十九歳

隆經の子、顯輔の父に當り、世に六條修理大夫といひ彼の家一流の歌を六條家といふ。累進して正二位にいたる。歌は後拾遺以後の諸勅撰並に承暦二年內裏歌合、寛治七年郁芳門院歌合、堀河百首等に出てゐるし、彼の作には明月鈔（散逸）、永久四年六條相家歌合判・元永元年實家卿歌合判・元永二年內大臣殿歌合判と別に修理大夫顯季集（六條修理大夫集一卷（群二四五、九、四九七—五一二）とがある判詞の多いことは彼が

一世の歌人として世の推重する所となつてゐたことを想はせる。

あきなり　上田秋成　二三九四—二四六九　享保一九—文化六、六、二七、七十六歳

德川時代の國文家。實家は未詳だが養家は丹波國氷上郡上田村出身で多田源氏の裔で、その頃は一廉の豪商であつたが、彼、性悃介不羈、到底商賣に適せないので、自己の好めるまゝに俳諧・訓詁・創作・茶道に心を傾けた。就中文章と和歌と小說とが名高い。彼の生涯は大體左の通りである。

第一期（一—二八）生ひ立ちから部屋住みまで、痘瘡で、右の中指を損れ、それが爲めに力の入つた文字が書けなくなつたとか云ふ。

第二期（二九—三三）結婚のこと、諸藝聞耳世間猿世間妾形氣などを書いた。

第三期（三四—六三）雨月物語の名作を出し、火事にあうて長柄に卜居し、醫を開業して長續きせず京都南禪寺に移つて頗る自適した。蓋し彼の最も得意の時期であつた。俳諧の切字を論じた「也哉抄」亡き師匠加藤宇萬伎の詠草を整理した「靜舍歌集」城崎入湯中源氏物語評論を小說體に綴つた「ぬば玉の卷」の出たのも當期なり。本居宣長と音韻假名遣論を戰はしたのも當期だ。

第四期（六四—七六）京都の縉紳に出入し、詠草「藤簍册子」が知人の手で校刊せられた（藤井乙男秋成遺文・國刊六期・上田秋成全集、尙「雨月物語」「藤簍册子」を見よ）

あきのよのながものがたり　秋の夜の長物語

男色小說、「西山の桂海律師（後に瞻西上人）が花園左大臣の御子梅若といふ稚子と契をかはし、事のまちがひから山と寺とが大喧嘩となり、梅若は「己故にこのさわぎ」とて勢多の流れに身を投げ、律師は之を哀しんで西山の岩藏に庵室を結び、又東山に雲居寺を草創し、梅若が菩提を弔ひ餘生を淸く暮らした」といふ筋のもので著者年代共に未詳、或は云ふ應永年間（二〇五四—二〇八七）と（黑川博士）。處がこの瞻西上人は藤原基俊と同時代に實在した人だからそれを物語の主人公の名とするには少くともそれ以後でなくてはならぬし、一方嘉吉年間（二一〇一—二一〇三）の奥書ある原本があるといふからには少くとも室町期嘉吉以前の作といふことだけは明言出來よう。文は漢語と佛語とを交へ

た雅文である（群三一一、一一一、一六四—一八六・日文一九・國文大觀四・校國系一九）

あきわう　安貴王　？

天智天皇—志貴皇子—春日王—安貴王—市原王—五百枝王と代々史上に見えて安貴王は志貴皇子の御孫に當り天平元年三月從五位下、同十七年正月從五位上に昇叙、萬葉歌人でその咏は集の二・四・八の三卷にある。

あくわいしふ　亞槐集　三卷

あすかゐかしふ「飛鳥井家集」を見よ。

あけがらす　明鴉　一册

谷口蕪村の編、几董・馬南等の連句・俳句を集む。安永二年（二四三三）に成り、後同五年に續明鴉といふのも出た（俳諧文庫一二・日本俳書大系九）

あけぼの　歌集　あ計ほ廼

竹拍園主佐々木信綱が門下生の第三番目の短歌・美文・新體詩集で、新井雨泉・吉光寺朝子の二人が第一、第二になかつた人である（四六版二一〇頁、明治卅九年六月廿八日修文館）

あけみ　井手曙覽（橘曙覽）　二四七二—二五二八　文化九—明治元、五十七歳

越前福井の生、少時京都の兒玉士敬について歌を學び、天保十年に江戸へ出て國學を修め、弘化三年足尾銅山に行つて子弟を教へ、後藩主松平慶永の知遇を受けた。性淡白にしてよく清貧に安んじた。而も忠君愛國の志厚く、王政復古の際や福井藩士が奥羽出征の際には和歌を献贈して賀頌激勵の意衷を披瀝した。家集に志濃夫廼舍集があり、隨筆に園爐裏譚があり、歌論に古今集垣間見がある。

彼の歌は萬葉振で、田安宗武などに一歩を進めて、萬葉の眞髓を把握して之を自家境遇に味照したもので、幕末掉尾の歌人として特筆されてゐる。

たをやめの袖吹きかへす夕風に
　湯の香つたふる山中の里

又日常の些事を詩化して好笑洒落の裡尚よく氣品の都雅を保つ。

こぼれ糸綱につくりて魚とると
　二郎太郎三郎川に日くらす

蟻と蟻うなづきあひて何かこと
　ありげにはしる西へ東へ

又清貧安居の述懷は殊に獨樂吟五十餘首によく表れてゐる。その一首に

たのしみは夕顏棚の下涼み
　男はてゝら女は二布して

畫賛にも秀咏多く、敗荷の畫に

莖折れて水にうつぶす枯蓮の
　葉うらたたきて秋の雨ふる

咏史の多いのも一特徴で、楠公櫻井訣別の圖に

一日生きば一日心を大君の
　御爲につくす我家の風

又連作（數首連續して一篇の歌想をなすもの）の試みもある。（堀名銀山の咏）（山田秋市氏橘曙覽傳並短歌集、校註和歌叢書六、三三一—四六八志濃夫廼舍集）

あけらくわんかう　朱樂菅江　二三九八—二四六〇、元文三—寛政一二、六十三歳

本名は山崎景貫、幕府手先與力を勤めたが、和漢の學に通じ、狂歌を以て世に聞えた。その著に八重垣緣結・狂歌大體がある。又彼の狂歌は朱樂館家集一卷（國刊一期新群一〇）を始め色々の狂歌本に出てゐる。古今の馬鹿集（一名狂言鶯蛙集）二十卷も彼と四方の赤良との合撰である（國刊一期新群一〇）自畫に賛したものに

あふみのや鏡の山といふつらの
　春にうつらん翁さびても

離別歌に

ゆくさきは勿論あしの名所とて
　大阪たびのふみ出しのよさ

雜歌に

二階から又三階の箱ばしご
　もひとつあがれたとひふふとも

あげん　僧亞元　二四三三—二五〇二　安永二—天保一三、九、二一、七十歳

江戸本願寺中妙泉寺の僧で、桂園門下中指折の歌人、その歌は亞元詠草・亞元集・六帖和歌題に收められ桂園門下の歌合にも散見する（六帖和歌題は、續歌學全集第十編桂園門下家集中にある）その門人中稻村三羽は殊に有名である）今秀咏二三をあげると、

さら〳〵と流れ落ちても行く水に
　心のとまる夏は來にけり

三日月

すみぞめの夕の空の薄雪の
　うちにほのめく三日月の影

すだれ

玉だれの小簾のうちこそゆかしけれ
　さしても思ふ人はなけれど

（尙「柵」五十一には彼が木下幸文に贈つたかつしかの里を結句においたものが九首あつてその生活を推すことが出來るし、景樹との師弟の情誼消息は桂園遺聞一の消息第十七に亞元宛の細信でよくわかる）

あこがれ　憧憬

石川啄木が十八歳の秋から廿歳の春にかけて作つた七十餘篇の詩を集めたもので、この頃著者は高村砕雨・平野萬里などと鐵幹の新詩社に在つたが、この一書によつて頓に詩名を高めた。卷頭に上田博士の序詩があつて、在來の詩を「おほうそ鳥の名にし負ふ、いつはり聲のだみ聲」と罵り

聞かずや春の山行に　林の奥の伐木の
丁々として山更に　なほも幽なる山彥を
こはそも仙家の斧の音か　よし足引の山姥が
めぐりめぐれる山めぐり　輪廻の業の音づれか

否そは我が啄木の詩である」旨が歌つてある。尙與謝野寛の跋があり、開扉に「此書を尾崎行雄氏に獻じ併て遙に故郷の山河に捧ぐ云々」とのデヂケーションがある（啄木全集二、一―二二八）

あさかしや　淺香社

明治廿五年落合直文が組織した短歌の一團をいふ。明治新派の短歌はこの社によつて發生した。與謝野鐵幹・服部躬治・大町桂月・鹽井雨江・久保猪之吉・尾上柴舟・金子薫園等はこの社の主なる新進歌人である。

あさせのなみ　淺瀨の波

廣津柳浪二十九年一月作の小說。梗概は

「萬字樓の新造お勝は情夫の三吉に血道を擧げてそれに貢ぐとて客の紙入を盜みかけて發覺し、それを庇つてもらつた關係もあり兼々懇想してゐた辨三を結句今では弗箱にして辨三にれだつては三吉にやる。三吉は色魔と云ふかたでお勝一人ではやりきれず、河岸の東雲と云ふ女と兩方にかゝり合つて二方取をやつて居る。それから思ひついて東雲を身受けして彼女に外で自由に稼ぎ出ささうと云ふのでどうしても五圓足りない、それをお勝に出させる手管になつてゐる。お勝は之を辨三から貰ふ筈で例の婦曳宿のお倉さんの宅で遇ふ所が辨三はそれまでに友達がお勝と三吉との關係を告げたものがあつたので、金は懷に持ちながら與らないで、三の野郎と關係があるかどうか白狀しろとせめる「てんで覺えの無いこと今夜の金は叔母さんに頼まれたのだから是非におくれよう」とたのむが中々くれない。その中二人とも一杯機嫌になつて（お勝は下駄を預けておいて草履ばきで出かけた）楠樹の鮫陰を通り過ぎて左へ砂村へ通ずる枝川に架つた小橋の上に立ち止まつて懷手したまゞぐつすり寢込んでポタリと紙入を落した。

惡いとは思つたが五圓の金が欲しさにお勝はそれを拾ひとつた。

「雲は全く吹拂はれて星月夜に川面も暗からず淺瀨の波は退汐に激してきら〳〵と光りながら流れてゐる

（一〇〇〇）

フと途中で目をさました辨三は、マアもつと一緒に歩かうと云つてとう〳〵長州邸まで來た。前には汐入の材木置場があつて水も深く險難な所である。材木の根方に腰掛けて話してゐる中、辨三紙入の無いのに氣がついてガロ〳〵驚ぎ出したのでお勝も氣が咎めて無言で懷から出した。「おのれにつくい奴め」とお勝を打たうとして何かのはづみで空を打ちもんどり打つて川へザブリン……

一方では三吉―此とても約束の刻限が來てもお勝がやつて來ないのみか、どうやら辨三とふざけてゐるらしいので、それと目星をつけてお倉さんの家に行つて下駄まで見つけたが「斯う〳〵してだいぶさつき出た」と云ふそれからと云ふもの氣違ひのやうにあつちへはしりこつちへはしり、交番の巡査にまで怪しまれた。驅けずつてゐる途端バタ〳〵とお勝の逃げて來るのに出あつて、偖こそ此太え阿魔め　と四の五の云はさず花崗石でこめかみを割つて打ち殺した。辨三が翌朝富岡門前の警察署で自首した三吉と出會つた時はまだ濡れ鼠であつた（一〇一九）（柳浪叢書後篇）

あさやす　文屋朝康　？

康秀の子、延喜の朝に仕へて六位、大舍人大允、大膳少進を歷任し、その咏は古今・後撰の兩集に採られて居る。

あしあと　足跡　（八十六回）

德田秋聲が明治四十三年讀賣新聞に連載した小說で、同氏作の「黴」の姉妹篇と謂はれて居る。「お庄」といふ一少女（作者の周圍にそのモデルに當る女が在つたものと思はれる）が生ひ立ちから、年頃の娘となり戀人からのふみを脊負揚に秘藏したことから上京しての下女奉公、芳太郎といふ某通運會社の社員に嫁ぎ、面白くないので男裝して知人の家へ逃出す處までを描いたもので、作の出た當時も好評であつたが近頃益々有名になつた。

田山花袋氏の評

そのかよわい女のかげに廣いライフが無限に展開されてゐる樣がいかにも人をして物を思はしめずには措かない――他人をこれ丈に細く書いたといふ事と、複雜した事件を印象的に運んで行つたことと、物語風にならないやうに描いて行つたことと、さうしたことに私は非常に興味を覺えた。客觀の藝術――いかやうにも人生の泉を汲出すことの出來るやうな客觀の藝術を私は「足迹」に見た（卷頭解題）

（菊版半截、秋聲傑作集第一卷二六七―五四四、大正九年十一月廿三日、新潮社）

あしかががくかう　足利學校

下野國足利郡足利町に在つて、創立者については小野篁だとも國學の名殘だとも謂ふが比較的信をおくに足るものは、もと足利氏が子弟の學習場として設けたものといふので、鎌倉大草子には始め政所に在つたといふが、政所は即ち足利氏の主政府である。又鑁阿寺舊記中貞和年間に興隆したとあり、興隆者は足利基氏とある。後花園天皇永享十一年上杉憲實が再興して群書を集め僧快元を庠主とし學制を布いて純然たる學校の體をなしてから子憲忠孫憲房相繼いで之が維持に努め、應仁元年長尾景人が此地に封ぜられて、政所から今の地に移し、大に規模を擴張し、永正大永の頃からは諸國の學徒が笈を負うてこの地に集り、永祿天正の頃即ち九華が庠主の時を以てその全盛期に達した。學制も次第に整ひ訓導・司講・司監・司籍・司客・書記・司計・司掃等の役員をおき秩序整然たるものであつたが德川時代弘化後次第に廢れかゝつてゐたのを明治維新の際藩主戸田忠行が藩學と合併して學則を改正し又面目を一新したけれど次いで廢藩置縣と共に全く廢絶してしまつた。

こゝの特色は學校たるに在つて文庫ではなかつたのだが、それでも貴重なる書に富んで、中には支那へ逆輸入したものもある（尤も經書ばかりを藏してゐるのだが）宋版毛詩注疏三十册・左傳注疏二十五册・尙書注疏二十五册・禮記注疏三十五册・周禮二册・周易注疏十三册、文選六臣注廿一册・古寫本古文孝經一册、鈔本論語義疏十卷等はその主なるものである。

近古文藝暗黑の時代、東方僻遠の一地角に天下好學の徒の望みを繫ぎ得た功績は我が文化史上特筆すべき一美事であるのみならず、由來關東武士に文雅の士が多かつた（長尾景仲・太田道灌・直江兼續等）のも暗々にこ

の學府の提撕に俟つものがあつたらうと想はれる（續史一三・杉田精一氏足利學校考・古類文學部二、一〇九一―一一一八）

あしがらやま　足柄山

資料、時秋物語一・日本人物史七ノ三

新羅三郎については

大日本史一四三ノ一二・前太平記三二ノ一三・史籍集覽改正三河後風土記一一一・集古十種、兵器弓矢一・坪内逍遙筐の秘曲（詩）、大町桂月源氏と平氏の九（桂月全集五卷五九―六〇）

あしで　芦手書

戯書の一體、源氏物語湖月抄、梅枝一四の註に

「芦手歌は繪の中を文字につくりたる物也或註に、あしでとは芦などを下繪に書き文字を書き添へたる也歌繪とは「や」といへば矢をゑにかき「わ」といふに輪を書き「に」といふに荷を繪に書くなり花あしでの色葉は芦の葉の中に文字をかく也水石鳥などのかたにも書きなす也中峯和尙の笹の葉がきといふ文字の體笹の葉に似たるが如き也」（廣文庫第一册四七四―四九〇）

あしやだうまんおほうちかがみ　芦屋道滿大内鑑

竹田出雲が王代物の傑作、享保十九年（二三九四）十月五日の書下しで、時代を王朝村上天皇の御代とし、背景を宮廷・和泉信田の森・攝津阿部野等にとり、陰陽道の大家芦屋道滿の高弟安部保名が嘗て泉州信田の森の白狐を助けたので白狐は之を恩とし、保名が愛妻葛の葉を敵にさらはれて氣も狂はんばかりなるを白狐自ら葛の葉に化けて「無事で歸りました」と云つてそれより阿部野に新世帶、一子安部童子を產んで五歲になるまで育て上げ、本當の葛の葉が歸て來るといふので障子に書きおきを認め

戀しくば尋ねきて見よ和泉なる
しの田の森のうらみ葛の葉

と口に筆を加へて一首をとゞめ涙ながらに出て行く（こゝの處一番劇的效果あり）さて安部童子は父が道と母が神秘の通力に不思議の奇瑞數しれず、名も晴明と晴れやかに、道滿の秘傳殘らず傳へ受け、宮廷百司列座の席で逆臣のたくみを殘らずトひ當て

「末の代迄も晴明と云ひ傳へ書傳へ家の波風動きなき御代に羽をのす雛鶴の龜卜の八數大八洲君萬歲の壽に民千載の五穀成就富榮なるこそ目出たけれ」

で結ぶ（帝文四七　五一一―五九三）

あすかゐかしふ　飛鳥井家集（亞槐和歌集） 三卷

室町時代（文明・寛正の交）の歌人にして歌學者たる飛鳥井雅親の家集で、雅親が權大納言であり、祖先の雅經の明日香井集と紛れやすくもありするので一に亞槐集と謂つて區別してゐる。

あすかゐしふ　明日香井集　寫本二卷

鎌倉初期の歌人藤原雅經の家集で、今群二四二、九、三三六―三九〇に收めてある。これの底本となつた古寫本の奥書には「元仁四年卯月四日戸部尚書在判」とある。

あすかゐけ　飛鳥井家

代々和歌と蹴鞠とを以て朝仕した家筋で、花山院の流れの難波頼經の子雅經が先祖で、明治に入つて伯爵を授けられた。

雅經―教定―雅有―雅孝―雅家―雅緣―雅世―雅親―雅俊―雅綱―雅春―雅敦―雅賢―雅宣―雅章―雅知―雅直―雅豊―雅香―雅重―雅威―雅光―雅久―雅典―雅望

あだちがはら　安達が原（黑塚）

謠曲。シテ鬼女（前に嫗、ワキ東光坊祐慶、ツレ同行山伏、紀洲那智の東光坊祐慶諸國行脚の途次、陸奥の安達が原に行きくれてとある小家に宿を乞うた處そこは鬼女の棲處とて閨の内は死屍纍々と積み重れてあつたので、驚いて逃げようとすると、鬼女は本相をあらはして「鬼一口」とかみつかうとする、絶對絶命となつて、坊は咒文を唱へると法力に責め伏せられて颯々の朝嵐と共に消え失せるといふ謠曲中鬼女物として有名なもの。

拾遺集の兼盛の歌「みちのくの安達が原の黑塚におにこもれりといふはまことか」といふがあり、大和物語第五十六段に之を取材したらしい戀物語がありそれからこの謠曲が出來、更に戲曲「奥州安達が原」となつて、鬼女實は安部頼時の妻「巖手」となつて居る。

あちき　阿直岐　？

上代、百濟の學者。應神天皇の御即位第十五年八月に來朝して馬二頭を献じ、又菟道稚郎子に經典を教へた。

あつこ　稅所敦子　安政四―明治三三、二、四　七十六歳

明治初期の女流歌人。林氏、京都に生れて稅所篤之に嫁ぎ、その夫の本國鹿兒島藩に下り温良貞淑よく憚慳の姑を感化し、廿八歳にして夫に訣れた時、彼女は悲痛の餘り夫に殉じようとしたのを姑泣いて縋り「今そなたに死なれてはこの母が生きる瀨がないから、是非に思ひ止まつてくれよ」と頼んだ位であつた。藩主島津久光の息女香蘭院が近衞忠房に嫁がれる時、選ばれて附添となり、明治八年掌侍に任ぜられて英照皇太后及び昭憲皇太后に奉仕し、多くの女官に儀式・典禮詩歌の心得を授け、上下の厚き敬意を受け、明治三十二年二月四日腸を病んで逝く、七十六歳。歌集を「御垣の下草」と云ふ（單行本もあり續歌學全書第拾二篇にもある）平明温藉な歌風である。彼女を宮中に推薦したのは故高崎正風男爵だが、刀自の棺前に捧げた誄辭には「忠孝慈貞」の人となりをほめた名句が聯れてある。

あつしげ　菅原淳茂　？

道眞の子、文章博士となり、兵部丞・大學頭・右中將・式部權大輔等に歷任したが父に肖て詩賦の才あり、嘗て宇多法皇に仲秋の宴に侍して詩を奉つた時「故右相（道眞）をして之を見しめざるを怨む」とおほめを戴いた。その詩文は扶桑集や本朝文粹に出てゐる。

あつただ　權中納言藤原敦忠　一五六六―一六〇三　延喜六―天慶六　三十八歳

藤原時平の子で、醍醐朱雀の朝の歌人、歌は權中納言敦忠卿集（群二三五、九、一七三―一七五、續國四二八―四二九）に收めてある外、後撰（十餘首）・拾遺（五首）等の諸集にある。

あひ見ての後の心にくらぶれば
昔は物を思はざりける

あつただしふ　敦忠集（權中納言敦忠卿集） 一卷

王朝中期歌人藤原敦忠の家集で歌は纔かに數十首、重に戀歌でおくしげ殿、近江のかういなどとの贈答が多いが、醍醐天皇の崩御に

君なくて立朝霧は藤衣
いけさへきるぞ戀しかりける

と云ひ、今年二つの「あづま」といふ女の兒の母がこの兒を産む時亡くなつたと云ふので

むつごともまだいひいでゞ別にし
人のかたみはあづまなりけり

などの哀傷歌もある（群二三五、九、一七三―一七五、續國四二八―四二九）

あつたね　平田篤胤　二四三六―二五〇三　安

永五、八、二四―天保一四、九、一一、六十八歳

秋田の藩士大和田清兵衞祚胤の男、幼名正吉、通稱大學（又大壑とも）伊吹廼舍と號した。父祚胤が一見識ある人でいつも「孔子がもし我國に生れてゐたらきつと皇國の學問を第一としただらう、君子は本を務むといふが眞にその通り、汝も成長後は專ら國學を以て世に盡せ」との意を語りきかせた。さて彼が江戸に出て松山の藩士平田藤兵衞篤穩の嗣となり（廿五歳―藩の財政難で、俸給百三十兩の延滯から不快を感じて身を退き、諸侯の三徵七辟を斷つて一人無束縛の學徒を以て帷を垂れた事跡は確かに一篇の立志美譚である。僅かの渡し錢に困つて河を泳いだり、大八車を曳いたり俳優仲間に入つて脚本の訂正をしたり、名狀すべからざる苦心の下に次第に堅實な歩みをつゞけて、遂に一家を樹立し、百餘種の力作を遺し幕府の忌諱に觸れて不遇の裡に志節を曲げず、死して國學四大人の一に班し贈正四位の御沙汰を賜はつた。

思ふに彼は見識卓拔、精力絶倫にして且つ意氣に動く學者肌の人であつた。彼の見識は父を繼承して更に多くの伸展を見た。古史成文・古史徵開題記・神代系圖・靈能眞柱・天朝無窮曆・扶桑國考等に見えた思想は要するに國學中心の大聲疾呼で、世間多くの徒が佛に溺れ儒に耽溺してゐるのに向つての一大批評に歸する。又彼の精力非凡さは三十六歳の十月に門弟柴崎直吉が郷里靜岡に淹留して衆生を敎へたが「最早越年に日もない、余は少々著述をしたいからどこか靜かな室を一つかしてくれよ」と謂つて一閑室を供せられ、七夜八晝に書き上げたもの即ち「古史徵」で、それがすむと「しばらく休むから決して起すな」と謂つてやがて衾を引きかつぎ高鼾して一日二夜を寢つゞけして醒めればキヨロリとして少しも平日と變りはなかつたといふ。

古史徵についで彼は生涯の力作を約十年間に著しつゞけた。その頃學室の戸外に竪一尺二寸許巾二尺許の口演一札を張札した。その文言は

この節別して著述取急ぎに付き學用窮理談の外、世俗無用の長談御用捨可被下候塾生といへども學事疑問の外呼ぶ事無くば來るべからず道義論辨の事においては終日終夜の長談たりとも厭ひ無之候事未五月

彼の幼時一藩の先輩子弟たちは彼が餘りに剛情なのを憎んで暗に申合をして輪講の席上態と皆で彼の說に反對したところが、彼は益々意氣を高め神色俊勵怒髮逆立すばらしい權幕で一同を大向にまはして激論するものだから皆はその意氣込に呑まれて中止したといふ。文政六年古史成文を朝廷に奉るとき、豫め神籤を採り幸に吉兆を得たので

せゝらぎに潛めゝ龍の雲を起し
天に知らるゝ時は來にけり

と述懷した。その他本居宣長に名簿を贈つたことや大平と贈答した次第を見ても彼は確かに意氣の人であつたことが肯かれる。彼の述作中殊に有名なものは

（神道）古道大意・靈能眞柱
（太古史）古史成文、古史徵、古史徵開題記、古史本史辭經
（雜）神字日文傳、出定笑語、歌道大意（逸見仲三郎氏慶長以來國學者史傳一六二―一七八國學者傳記集成一一一二―一一八五並に同書一六八七―一七〇〇追加、氣吹屋門人錄）

あづまあそびのうた　東遊の歌

王朝初期から外來歌舞と共に式樂となつた東遊の舞に合せた歌をいふ。語義は「東國の風俗歌であそび即ち歌舞に用ひらるゝもの」の意である。この名稱は早く淳仁天皇天平寶字七年正月の處に「作唐、吐羅、林邑

隼人等樂」（續日本紀）があるが正しくこの名の明記されてあるのは三代實錄の貞觀三年三月十四日東大寺大佛供養の所に

先令二門舍人端貌者廿人一供中倭舞上次近衞壯齒者廿人東舞

とある。それで、以後歷代行はれた。大鏡を見ると宇多天皇の寬平元年十一月賀茂の臨時の祭を始められた時もこの舞樂を用ひられ、敏行が

ちはやぶる賀茂のやしろの姫小松
よろづ代ふとも色はかはらじ

と咏み、朱雀天皇の天慶五年四月には將門純友平定の褒報として石清水の臨時の祭を始められた時には貫之が

松もおひまたも苔むす石清水
行末さほく仕へまつらむ

と咏んだとある。これ以來兩社の常儀となり又平野・日吉・春日・松尾・祇園・大原野等の諸社にも次第に用ひられ神事專用の樂舞となつたが、例外としては競馬の時だけ用ひられた。

舞の振は體源抄・續敎訓抄・童蒙抄などに駿河の有度濱天女が起源であると云ひ、謠曲羽衣にもさうした語句

があるが、これは多分丹後比沼山天女の傳說から想ひついた附會であらうといふ。靑摺の小忌の衣に細纓老懸櫻の直衣に帶劍といふいでたちで、舞の振は非常に雄壯で從前の倭舞の優美な振と好對照をなす。蓋賀茂祭にはとかく荒々しいことが行はれて居たので神人の好尙か稽へてこの舞を選ばれたものであらうといふ。

（今日宮中では春秋二季の皇靈祭神武天皇祭に用ひられ諸社では賀茂・男山・春日・熱田・氷川・八阪・北野等の祭に用ひ「東遊譜」載するところの歌篇悉く用ひられてゐるが、その中求子の歌などは時宜によつてその歌詞を變へることになつてゐる）

東遊歌譜は已に奈良朝末期淡海三船が神樂歌催馬樂の譜をきめた時これも一緒に撰ばれたものと臆測せられるが、記錄面では延喜廿年十一月十日勅定とある（撰者は多分催馬樂などと同じ藤原忠房であらう）ついで一條左大臣雅信が大いに手を入れ四辻季繼も與つて努力し爾來神樂歌催馬樂の撰譜の都度手を入れられたらうといふ。

歌は

一歌・二歌・駿河歌・求子歌・加太於呂志（大廣歌）一

歌は神樂歌の阿知女作法といふ格で歌唱を促す意の序歌、求子歌は神威の尊嚴をたゝへたもの、後の三つは皆戀歌といふのだから、その着想から見ては神樂歌と催馬樂の中間に位して居る。之が文學的價値も之に準じその想の天眞思無邪、その形式の斬新その語彙と取材との民衆的な點にある。

一歌

ヲヲヲヲヲ、ハレナ、手をととのへろナ、歌ととのへナ、相模の嶺ヲヲヲヲ。

二歌

我が夫子（せこ）が、今朝の琴手は、七つ緒の、八つ緒の琴を、調べたる如（ごと）や、奈平可介（なをかけ）山の、かづの木ヤヲヲヲヲ

駿河歌

ヤ有渡濱（うごはま）に、駿河なる有度濱に、打寄する波は、七くちの妹（いも）、ことこそよし、ことこそよし（一版）

以下六段まで

下上

アハレ千早振、賀茂の社の姫小松（一段）

アハレ姫小松、萬代經とも、色はかはアハレ色はかはらじ（二段）

加太於呂之

大びれや、小びれの山はヤ寄りてこそ（一段）

よりてこそ、山は良らなれや遠目はあれど（二段）

（群三五〇、一二、二九四—二九六・千秋季隆氏謠物評釋一五九—一六八・小中村清矩氏歌舞音樂略史上、四一—四三・高野辰之氏日本歌謠史一四八—一五四）

あづまうた　東歌

萬葉集十四卷の全部（短歌二百卅一首）及び廿卷の一部に入つて居る東國人の歌で、その特色は方言訛語を取り容れて地方情調を表し、地方特有の動植物を入れて地方色を發揮した點にある。東國の方言は重厚で力量があつて（さりとて九州訛りの如く粗硬でなく）非常に素樸味に富んで居るが、歌材中特有のものは、草に、いはゐづら・はまつづら・たはみづら・山かつらに、おほゐ草・うけら・ゐつこ草、木には弦葉・動物には新桑繭・小岫が雉子植物では、桓內柳・椎のこやで・根やはら小菅・根白高萱・若かへる手・藤のうら葉などである。

例

筑波嶺の新桑繭の絹はあれど
　君がみけししあやにきほしも

うべ兒なはわぬにこふなもたとつくの
　ぬがなへ行けばこふしかるなも

古類文學部一、七六二—七六四・萬葉集一四、二〇卷・長塚節全集四、一—四四

あづまうど　置始東人（おきそめの）？

萬葉歌人、歌は集の一、二卷にある。

あづまかがみ　吾妻鏡（東鑑）　五十二卷）四十五（卷缺）

鎌倉幕府の日誌で、武家記錄としての始めてのものである。

記載範圍は治承四年（一八四〇）源頼朝の伊豆旗あげから文永三年（一九二六）七月まで八十七年間。

將軍は頼朝・頼家・實朝・藤原頼經・同頼嗣・宗尊親王執權は時政・義時・泰時・時氏・經時・時頼・時宗

文體は和臭を帶びた漢文、一例として曾我兄弟の一節をあげる。

卷十三、建久四年五月廿八日癸巳

小雨降。日中以後霽。子尅。故伊東次郎祐親法師孫子。曾我十郎祐成。同五郎時宗。致レ推二參于富士野野御旅館一。殺二戮工藤左衞門尉祐經一。又有二備前國住人吉備津宮王藤內者一。依レ與二于平氏家人瀨尾太郎兼保一。爲二囚人一。被二召置一之處。屬二祐經訴一。申無レ誤之由一之間。去廿日　返二給本領一。歸國。而猶爲レ報二祐經志一

自二途中一更還來。勸二盃酒於祐經一合宿談話之處。同被レ誅也。爰祐經。王等內等所レ令二交會一之遊女。手越少將。黃瀨川之龜鶴等。則喚二此由一祐成兄弟討二父敵一之由。發二高聲一依レ之諸人騷動。雖レ不レ知二子細一宿侍之輩。皆悉走出。雷雨擊レ鼓。暗夜失レ燈。殆迷二東西一之間。爲二祐成等一多以被レ疵。所レ謂平子野平右馬允。愛甲三郎。吉香小次郎。加藤太。海野小太郎。……此間小舍人童五郎丸搦二得曾我五郎一仍被レ召二預大見小平次一。其後靜謐。

作者は誰とも判らないが、當時大江・中原・三善の人人が幕府に仕へてゐたのだからそれ等の人々か若くはそれ等の指導を受けた人々の筆であると推せられる。記事は比較的確實で頼家横死の個處など一小部分の外はあまり筆を曲げたところがないから、政治史・風俗史の考察には勿論、平家物語・源平盛衰記・增かゞみ・曾我物語などを見るにも事實と潤色との對照觀を得るには必要な資料である。

現今流布のものは慶長本が土臺になつてゐる。これは慶長十年（一六〇五）に家康が京都南禪寺の僧承兌に命じ林羅山とも相議せしめて北條本を底本として木版で印行せしめたものである。この慶長本を底本として寛永本が出た。之に二種ある。

一つは寛永元年（一六二四）春播磨の人菅玄同、同聊卜の兄弟が慶長本を訂正し、和訓を加へ、整板を用ひて印行したもので。

今一つはそれの再版で寛文元年（一六六一）の奥書のあるものである。

明治廿九年（一八九六）高桑駒吉氏が諸異本を校合して半紙形十册本として出されたものは多くの學徒に裨益を與へたが、昨大正十五年（一九二六）古典全集に取り容れられて一層便利になつた。これの第一の始めの解題に左の記事がある。

一、「吾妻鏡」には古寫の異本が多い。轉寫を重れて傳はつたが爲めである。其等の古寫異本には一二册に過ぎない殘缺本「伏見宮家本」「前田侯爵家本」の如きが有り、やゝ完本に近い「北條本」「宮內省圖書寮本」（舊忍藩藏）「島津公爵家本」「吉川子爵家本」「京都府圖書館本」「黑川眞道本」其他には誤字及び脫落の個所が有つて、彼れ是れを比較校合する事業が未だ學界に完成されて居ない。たとひ完成されるにしても如此く異本の多い書籍は恐らく定本を得る事は不可能であらう。

と、そこでこの書の諸異本を考證した單行本もある。

榊原長俊　東鑑異本考　寫本一册

は始めに左記諸異本をあげ

一、活字本　東鑑　二、板本　東鑑　三、假名本　東鑑　四、古寫本　東鑑　五、東鑑脫漏

次に「東鑑部類」として

一、東鑑末　二、東鑑纂　三、東鑑綱要　四、吾妻鏡提要　五、東鑑三箇有職　六、東鑑疏

次に外國東鑑傳說として曝書亭集・昭代叢書等の文を引き、最後に詳細なる改正板本東鑑の目錄が載せてある。

又、同書の補遺としては

東鑑脫漏一册・東鑑脫漏抽纂一册・林無東鑑末寫本一卷

等があり、閱讀の便をはかつては、東鑑集要　二卷・東鑑莊名　寫本一卷・伊勢貞丈　東鑑不審問答　寫本一卷・吾妻鑑類標　寫本　二卷・安藤有彥　東鑑曆纂改補　一卷

などがある。尙明治以後の發刊では

高桑駒吉氏の吾妻鏡集解　二册（二十九年）・吾妻鏡備考　二册（三十二年）（內容は東鑑綱要・東鑑末錄・東鑑集要・東鑑曆纂改補・關東開闢年代記・將軍執權次第・關東評定傳・吾妻鑑人名考）

の外、島津侯爵家所藏の「吾妻鏡纂」が史籍集覽の一部として印行卷十六—四十六の補遺である。東鑑脫漏も同叢書に加へて印行卷二十六の增補である。三十六年續國大本、第四、五は北條本を底本として諸書を對校せられ、大正三—四、國刊本は四期に三册本として吉川本を底本として發刊された。

あづままろ　荷田東麿（春滿）　二三〇一—二三九六　寛永一八—元文一、七、二、九十六歲

山城伏見稻荷山の社預、本姓は荷田、氏は羽倉（世に彼一家の學を羽倉學と云ふ）と云ひ、近世古典復興を唱へた先驅者として有名な國學者である。その業績は

一、神道　神代卷講義

二、古典　小汀抄・齊明紀童謠考・出雲風土記考・萬葉集童蒙抄（この書殊に有益）

三、訓詁　古今序古注考・伊勢物語童子問・伊勢物語修刪・僞類聚三代格考。

四、歌　春葉集（續歌一、彼は戀歌を排斥し彼自身も歌はなかつた）

等の著がある。

九歳の時の咏

稲荷山今日は小鳥の音を絶えて
　音するものは谷川の水

書

踏わけよ倭にはあらぬから鳥の
　跡を見るのみ人の道かは

五、將軍吉宗の召に應じて國史律令典故の問に答へたこと。

六、國學校を伏見に建てることを計畫した（これは許可は得たが、實現しない中に歿した）（國刊一期續々群一〇荷田大人創學校啓）

などである。明治になつてから正四位を追贈された。

あづまもんだふ　吾妻問答　一卷

室町時代連歌の名家宗祇江戸に遊んで有志の懇望に任せて連歌の式作法を說いたもので、文明二年三月廿三日（二一三〇）の作、同法師の新菟玖波集と共に連歌史の好資料である（群三〇三、一〇、一〇一八—一〇三三）

問の事項は左記の廿四項である。

一　問曰。連歌道中古當世とて人申侍は、いつ頃を中古とし何の代を上古とするや。此外にかず〳〵不審の事侍るを尋ね申べし月待出る程のこと種にの給ふべくなむ。

答曰云々

一、本歌のとり樣侍とはいかやうの事にや。

一、源氏の物語の付樣いかやうに仕べく哉。

一、當時、木に名木を付草に名草を付る事を嫌侍とは如何樣事ぞや。

一、或は名所を好み或は名所を嫌ふ人侍は如何。

一、付にくき連歌とて當世嫌事侍は如何樣句に候哉

一、稽古にはいづれの抄物を見てよく侍べきや。

一、同稽古に初中後侍よし承候いかやうの心に候哉

一、作者の心げに初中後候はんや。

一、發句にも仕樣侍にや。

一、脇句第三にも故實侯哉。

一、連歌に、或は歌の上句、また歌の下句とてあしきよしを申は如何。

一、連歌に序の歌の樣に付たる句とはいかやうの事哉。

一、連歌にも未來記と申事侍とかや如何。

一、我分限より心をたかくつかひまたひきくつかふとはいかやうのことぞや。

一、連歌に本とすべき句の體侍る哉。

一、句の作樣に中古當世侍とは如何樣の事ぞ哉。

一、神祇釋敎の句にする樣侍とは如何。

一、詞にかけあはぬ事侍とは如何。

一、一座のはやきを好みまた遲きを好事何をかよしと申べからむ。

一、和歌連歌の時心づかひ侍とは如何。

一、文字あまりの事人により侍るとは如何の事候哉

一、可案前句又案ずまじき前句など申事いか樣の事に候哉。

一、執筆の事、うい〳〵しく侍といへども、しゐてつかふまつれなど候にもさやうの時も定て古實おほく候はん承度候。

あつみつ　藤原敦光　一七二三—一八〇五、康平六—久安六、八十三歳

明衡の子、敦基の弟・堀河・鳥羽・崇德の三朝に歷仕し文章博士・大學頭・式部大輔等に任ぜられた。歌は金葉集に、詩文は、續文粹　卅五文集・朝野群載等に出てゐる、外に左記の諸作がある。

一、延曆寺起請（天承元年朝野群載）二、日光山中禪寺私記一卷（群四四二）・三、本朝帝紀（今なし）・四、續本朝秀句三帖（詩集）・五、和注切韻一卷（一名、詩文大體）・六、柿本影供記一卷（群二三八）弘法大師御誕生記一篇（卅五文集）

あひ（をかし）

「をかし」を見よ。

あひおひ　相生

「高砂」を見よ。

あひぎこえ　相聞

萬葉集歌體の一種で、親子兄弟夫婦男女知人等心やすい同士贈答する消息歌をいふ。その中男女間の贈答が段々多くなつたので王朝以後の歌集では「戀の部」が之に代つて部立てされるやうになつた。

あひぎこえ　相聞

與謝野寛の歌集、氏の圓熟した歌體を集めて居る。即ち三十五年以後四十二年に至る八ケ年間の短歌約一千首を集めたもので、森鷗外の序、著者の自跋があつて高村光太郎氏が裝幀して居る（四六版三三六頁、四十三年三月廿五日、明治書院）

あふぎのうらみ　扇の恨　五幕—十三場

福地櫻痴、三十一年作の脚本

序幕　天保八年三月十八日午後

一、谷中安養寺門前の場

大阪天滿の大鹽平八郎が一味のもの「澤田一角」江戸に遁げてこの寺の一室にかくまはれてゐるのを與力「鬼兵衞」出世の手蔓と意氣込んで探偵に來る。

二、同門陣の場

畫工采女セツセと畫を書いてゐると一年大阪で知り合になつた一角がヒヨツコリ來て、大鹽の連累で嫌疑を受けてゐるから暫らくかくまつてほしいと頼む。「よろしいこゝは目に立つ、夜になつたらソツと根岸の宅の方へござれ」と行き勝手を敎へると、一角は兩刀を采女に預け風呂敷包を解いて女裝束を取出して變裝して出かける。行きちがひに采女と戀仲の坂東歌扇といふ女、銀杏返し、ぱつちりとしたる小紋縮緬の紋附二枚重れ、友禪の長襦絆、朱珍の帶、都てお狂言師の拵へで來て一角を本當の女と邪推し、色々と嫉妬をいひとど機嫌を直して明夜の逢瀬を契つて歸る。

三、同堂の場

町方同心黑澤五郎、青山新造、手先鬼兵衞外六人は一角詮議の爲めとて寺に押しかけ、住持虛誕和尙を糺問するが「知らぬ」「存ぜぬ」の一轉張で一向に埒が明かぬその中一人が天井の板が一枚外れてゐるのに氣づき偖こそ怪しいとて須彌壇の下まで探させる。

四、門陣裏手の場

一角の衣類と紙入の鏡の落しの金物から鬼兵衞は生田松江（一角を助けて衣裝まで貸した女）に目星をつけて引上げる。

第二幕　天保八年三月十八日夜

一、向兩國中村屋の場

中村屋の踊の浚ひに歌扇出席してサンザめいて居る最中、鬼兵衞が來て松江の紙入を見せて「これが安養寺に落ちてあつた」といふ歌扇びつくりして「もつと聞きたいことがある」とて別席を乞ふ。

二、中村家小座敷の場

歌扇は鬼兵衞に委細をきゝ、お頁けに今宵松江が根岸の宅へ忍んで行くことまでも聞いて、ムラ〳〵と嫉妬氣を起し鬼兵衞同道現場取押へに行くことを討合はす。

三、根岸宅間住家の場

松江、采女を訪うて「一角樣は私の恩人何分共によろしく」との願ひに「この宅とても油斷はならぬが出來るだけはかくまひませう」といふ折柄歌扇道成寺を踊つて衣裳もそのまゝ駕籠を馳せ賃をとらせて入るや遲しと怨みつらみを並べると、奥から澤田一角は松江と共にそこへ出てありのまゝを告げて詫びるとこれで歌扇も誤解が解け一角は采女がはからひで上野の寒泉院へ逃げて行き松江は暇をつげて門を出ると間もなく捕手にかゝり猿轡をかけて縛られ、つゞいて鬼兵衞一同が連れて闖入、采女を責めて一角のありかをいへとて散々に責めさいなむ、男いとしいばつかりに歌扇が一角の行く方をいふと、よしきたといつて采女を引立て「女はお構ひなし」とトツ〳〵と連れ歸る。

第三幕　天保八年三月廿一日

一、評定所訴所之場

種々の捌きがあつて後に一角も召される。一角の態度は極めて堂々たるもので特に繩打をやめて武士の待遇を受ける。

二、評定所大白洲の場

白洲の場にて一角惡びれもせず、幕府の政治を攻擊する。

……成程將軍宣下は御大禮に相違なけれど如何程にも御手輕に遊ばされば出來ること、飢饉に迫る貧苦の百姓枕を並べて饑死をいたすに比べて見る時は、たとへ御大禮を止められても御救ひあるが乍恐御仁政ではござるまいか。

町奉行筒井伊賀守（惜い武士だと云ふ思入にて）「猶追々呼出す、吟味中入牢申付る」と云ふ。

第四幕　天保八年九月十九日

一、山谷八百善の場

大盡菱刈彌太夫、常盤の例を引いて歌扇に一時赤井の嫁機をとつて采女を助けよと言ひきかす。

二、同じく座敷の場

酒宴の場、歌扇赤井に强ひられて酩酊。

三、今戸別莊之場　同日の黃昏より夜中

歌扇赤井に引きとめられて今戸別莊に淹留、いよ〳〵采女を救ふ誠意無くして徒に自分を自由にしようとする底意を見ぬき、相手の膝にもたれるやうにして短刀を奪ひとう〳〵赤井を斬り殺し燈を消して退去。淺草寺の四ツの鐘――。

第五幕　天保八年九月廿日

一、牢屋敷門前の場

采女牢中にて頓死（實は毒殺）歌扇遺骸を引取りたしと申出。

二、奥服橋外捕物の場

歌扇かねてのしめしの通り采女の死は似せとばかり思

ひ込み、よく見れば本當に死んで居るのに且驚き且怒り、又もや鬼兵衞に切つてかゝる。通行の八百屋荷物を引くりかへして逃げて行く。鬼兵衞八百物を執つて防がうとする。大立廻り――。

終に鬼兵衞は肩先よりあびせ掛られてあツと倒るゝ、此時下手より葬送の一列棺桶を擔いで十人ばかり出で來る。是を見て棺桶を捨てゝ乘女の乘りし駕籠を舁遣へて上手に逃入る。此所へ上下よりばら〳〵と大勢の手先出來り歌扇を取り卷く。歌扇は棺桶の上に上りて咽を突く（幕）

「江戸見聞誌」の記事と、作者の知人橘村居士洋行の土產話の或る悲劇とから工夫して歌舞伎座に書下したもので、始め「舞扇恨之刀」と題し可なりの好評であつたのを更に推敲を加へたもので氏が作劇の技巧の圓熟した頃の作風を見るによいもの（櫻痴全集上編六九三―八一五）

あふぎのまと　扇の的

資料、平家物語一一ノ四・參考源平盛衰記四二ノ二四・太平記三三ノ九・新群類なすの與一・鎌倉史八ノ三五山鹿語類二ノ二二九・和漢三才圖會二一ノ一五・花月雙紙二・日本人物史七ノ四・三養雜記三ノ一五・日本人名辭書・刪修近古史談「了伯聽平語」・理齋隨筆四ノ一五・廣文庫第一册八九〇―八九五第十四册五三一―五三三・奥の細道那須ノ項・宮田秋堂薩摩琵琶歌扇の的朝野書店國刊一期八（舞曲）那須與一（幸若舞の本）

あぶつくでん　阿佛口傳

「夜の鶴」を見よ。

あぶつに　阿佛尼？

鎌倉初期の女流歌人且つ國文學者、平度繁の女で初め堀河院の女御安嘉門院に仕へて「四條」と云ひ「又右衞門佐」とも呼ばれ、後歌人藤原爲家に嫁いでその後妻となり、繼子と實子との土地爭ひについて遙々鎌倉に下つて幕府の裁斷を仰いでとう〳〵實子の勝訴になつた。その時の紀行があの有名な十六夜日記である。又歌學について「夜の鶴」（群二九二）を書いてゐるし歌をよむことも巧みで良人の爲家の妻たるに恥ぢないものがあつた。その歌は續古今（二）・續拾遺（五）・新後撰（一）・玉葉（六）・續千載（一）・續後拾遺（一）・風雅（八）・新千載（二）・新後拾遺（一）・新續古今（三）等の諸集に載つてゐる。

あぶつにあづまくだり　阿佛尼東下り

いざよひにつき「十六夜日記」を見よ。

あぶつにかいだうき　阿佛尼海道記

いざよひにつき「十六夜日記」を見よ。

あぶつばうみちのき　阿佛坊道記

いざよひにつき「十六夜日記」を見よ。

あふみあがたものがたり　近江縣物語

五卷

雅文小說で、德川期石川雅望の作（帝文三二・珍名著文庫六）

あふみげんじせんぢんのやかた　近江源氏先陣館

時代物淨瑠璃、明和六年（一七六九）十二月近松半二・八民平七・松田オ二・三好松洛・竹田新松・近松東南・竹本三郎兵衞等の合作、大阪冬の陣を脚色したもので鎌倉は江戸・阪本城は大阪城、人物は略左の通り對照すればよくわかる。

和田兵衞―後藤又兵衞、三浦之助―木村重成、片岡造酒頭―片桐且元、宇治の方―淀君、頼家―秀頼、時姫―千姫、大江入道―大野治長、北條時政―德川家康、佐々木高綱―眞田幸村、佐々木盛綱―眞田信幸、

あぶらかす　油糟　一册

松永貞德三部の書（御傘淀川油糟）の一つで、山崎宗鑑が犬筑波集の前句に貞德自ら附句を試みたもの。題名は宗鑑が油を販いで身すぎしてゐたのでその糟といふ自遜の稱へである。これは貞德の俳諧についての技倆を見るに最も恰好の書で一つの前句に對して二三句から多いのは十四句、廿句といふのもある。その一二例

宗　霞の衣すそはぬれけり
貞　天人やあまくたるらし春の海
宗　しうとの爲の若菜なりけり
貞　母方をつかする春のゐほしきに
宗　おもふまゝにはいはれさりけり
貞　諍ひも理はもちなから內のもの
宗　何事も道の奥意はさとりにて
貞　遺物は臨終ならて書ておけ
宗　いかにして古歌は上手にかきつらん

此等の附け味は之を從來に比して「をかしみ」の點は同じだが、優美と雅致とを帶んだ情趣に一段の進境が見出される。

（寛永二十年（一六四三）板行今俳諧文庫第二編にも入

る）

あまうつなみ　天うつ浪

幸田露伴後期の力作で長篇なのが第三篇までで未完結のまゝになつてゐるのが惜しいものだ。

第一編

宇都宮二荒山神社の廣前に「此影此心淪るまじ必ず信義を盡し合はん」と出郷の誓ひを立てた七人の若者があつた。七年たつた今しも其一人の「羽勝」は首尾よく遠洋漁業を終へて歸國した其歡迎の小集に加はるものはたつた三人、一人は面淸らにして桃花の如き「山瀨荒吉」で此は新聞記者、一人は骨太岩壘づくりの「日方八郎」と云ふ陸軍少尉、今一人は布袋肥りで丸顏の下り眼の膽ッ玉の太い「島木萬五郎」とて實業家である。談はいつしか來會はさぬ友の噂に及んだ。名倉の病氣、樽井の北海道行から水野の失戀談に至つて議論に花が咲いた。水野（靜十郎）は七人の中最年少で（廿四才）且頭惱もよく眞面目で進取的の男で、小學校の教師をして餘暇には讀書に耽つて居た。島木は上京後相場で失敗してどうにも運轉がつかなくなつた時、五十圓の融通を彼に賴んだ。水野は快く承知して自分の原稿を山瀨の處で金にして島木に與へた。さうした事情で二人は殊に親密であつた處から此席でも水野の消息は主に島木が物語つた。それによると水野の學校へ近頃赴任した「岩崎五十子」と云ふ女教師がある。それが女教師には稀な美人で而も勉强家で所謂現在に滿足せない風の女で、水野は段々此に戀するやうになつた而も謹愼なる彼は之を打明けることを敢てし得ないで徒に煩悶して居る。五十子の父は早く亡くなつて母の「お關」は遊藝の師匠をしてゐるが、兎角品行がよくなく柄も惡い方なので五十子とは氣が合はない。五十子の弟の「松之助」（十七歳）も彼女が教育の必要を主張して自ら後見してさる學校へ通はせて居る。獨學苦心した水野は此點に於ても五十子を崇拜してゐると云ふのであつた。之を聞いて一番にいきり出したのは日方少尉で「咄堂々たる男子が戀の爲に友誼を無視するとは怪しからんガイ山瀨僕と一緒に彼奴を引張つて來よう」と云ふ。山瀨は「それも可いが後が白けるからマア〳〵後のことにしよう」と抑へる。島木は早くから道樂をしたゞけに物のわかりもよく「戀は人情の自然に發動するもので別に咎め立てするにも及ぶまいが水野のやうなのが思ひ詰めると却つて險呑だから其點は注意を要する」と言つた。

東京在四木村山路吉右衞門と云ふのに水野は下宿してゐた。校長の口がゝりでたゞの商賣氣を放れて大層親切に世話をしてくれた。お濱と云つて今年十七の極めて快活な無邪氣な可愛らしい娘もあつた。此數日來五十子は病床に呻吟してゐる。村醫の尾竹の診斷では風邪だと云ふが、素人目で見ても眞の風邪とは請けとれない。水野は心も心ならず自ら汽車で駈けつけて淺草一の名醫相良公平の來診を乞うた。書生との談判に一喧嘩して餘り大聲になつたのが奥座敷で碁を圍んでゐる主人の耳に入つたのでやつと快諾して來て貰つた。其診斷の結果彼女は膺望扶斯だとのことで種々療養の注意をして歸つた。五十子の下宿と云ふのは平井といふ名だいの慾婆で、彼女が此惡病に取りつかれたと聞いて「一時も早く此處を出て貰ひたい」と迫り水野が道理を說いてもなか〳〵承知しない「たつておいてくれよならば毎月の拂ひと若し死にでもしたら座敷を汚した謝罪に廿兩若しよくなつたら祝ひに十圓くれるとしつかりお前樣呑込んでおいて下さい」とあこぎなことを言ふ、水野にもとよりそれだけの當ては無いが、病人の爲とて快く承知をした。思へば思へば他人から觀たら此程愚な話は無からう。五十子には嫌はれて枕もとへも寄りつくことも得うせないで居て、蔭でくよ〳〵氣をもんで下宿の婆に頭を下げて大まいの金を心配せねばならぬとは……と思はぬでは無いが而も尙一道の光明を胸に描いて彼は島木の許に走つた。濱町の島木の下宿を叩くとお作と云ふ氣さくな女が出て室に通し島木の指圖で葡萄酒に乾燥牛肉を出した。他愛なき友のもてなしに言ひ惡い處を切り出して「どうぞ百程何分賴む」と云つたら「よし來たどうにかしよう」と二つ返事で承知してくれた嬉しさ、併し其後には諄々たる忠告を加へて（此處氏が常識的戀愛觀が遺憾なく島木の口に托してゐる（一〇五―一一八）最後に、

千言萬言饒舌つても身體を大切に仕て呉れろといふたゞの一句に止まるのだ（一一九）

と云つた。水野も深く彼の友情を感謝し、道々千思萬想の內鬪を續けつゝいつか雷神門まで來かゝつた。かなはぬ時の神佛だのみに、彼も彼女の全快を祈つた。と見れば我傍にも又人ありて熱心に普門品を唱へてゐる。「あゝ憂を抱くものは我一人ではなかつた」と稍心强い心地。そこへ薩摩下駄を響かせて書生が二人生意氣にも觀音信仰をけなしニイチェの超人論にかぶれて得々と一つ家の畫を批評し「惡人の偉大な精神」など云ふ

語を弄して去つた。鄙經の老人は水野を顧みて「困つた者が居ます」と云つた。

百圓の才覺を頼まれた島木も、實は今乘るかそるかの大勝負をかけて居る最中なので「敗軍の退き際に持鎗を所望されたやうな氣持だが、元來竹を割つたやうな性質とて、「百兩ばかりの鼻糞金が何だ」と朝からチビリ〳〵と酒を呑んでもう來さうなもんだ、がまだか、まだか」と人待顔實は人を待てるに非ず彼は今買ひ方を張つてゐるので唯一心にあらし來よかしと待てゐるのである……と見る〳〵空の色峻しく雲は雲を沸かし風は風を呼んでザーツ〳〵と刻一刻にはげしくなつた。

「ヒヤお出でだ、ヒヤお出でなすつた」と大騒ぎ。同宿の伊東は反對に大しよげ、眞に一刻千金とは島木の事だ（此處の描寫は近刊有島武郎氏の「死を恐れぬ男」よりももつと緻密に寫實的に出來てゐる（一六四——一八一）

其金で羽勝千造を呼んで一萬二千圓を彼の所有にして船を仕立てゝ、遠洋漁業、利益は折半、損をしたとて元はたゞとのんきなもの……！

五十子の下宿の平井の婆とても人に好かれたいとのしほらしい十七八の時代はあつたのである。秘藏娘の「お里」と云ふに兵作と云ふ養子をした處、其兵作外に情婦があつて財産根こそぎ其方に貢いでもう絞るものが無い頃と見てとると養家をブイにして今は牛込のあたり榮耀に暮らして居る。お里は幽靈のやうにやせ衰へて瘠癈疾で亡くなり、婆さんは我家を追つ立てられて渡る世間は鬼ばかり、よしそれならばこちらも鬼になるまでのこと。一文二文稼ぎだめして高利に廻し、次第に太つて我家を買戻し、偖こそ件の如きえこぢになつたものである。——吉右衛門、お濱、水野打よつてこんな噂をして居ると、松之助が宙をきつてやつて來て「姉さんが危…危篤、あゝ僕はどうしたら可いだらう」との急報に水野はあたふた駈けつけた。

風は猶吹けどやゝ衰へて「四十七士の墓どころ、雪は消ても名は殘る」と村の兒が遠方にて唱ふ金切聲の幽に聞えくるも時にとりて忌はし（二一二）

お關は五十子の義理の母であつて五十に近くぶつてりと太つて赤ら顔のたゞぴらたい女で、玆に出入して彼女と關係してゐるのは傳さんと謂つて四十才男の色黑の脂ぎつた下品な男、所がもう一人此家に養女とも寄生ともつかぬ「お龍」と云ふ女がある。「さして美しといふにはあられど光り流るゝが如き眼の中に情あつて世に云ふ男好のする、何處となく仇つぽき、廿歳ばかりのすらりとした女（二二二）である。お關が傳さんに語る處に據れば、お龍の父は元内務省の屬官で、日光羊羹見たやうに、變に乾固まつた朴實な人だのに、彼女は生れついて蓮葉で好いた男になら命でも抛り出して悔いないと云ふ一氣もので娘の頃八百屋お七のしたことが尤だと主張して皆が笑つたと云つて、泣いて悔しがつた。それが年頃になつて矢張お關のうちへ出入の建具屋の息子の源と云ふいなせな男と出來あつた。所が父は老死して彼女は靜岡の叔母に引きとられた。源は始から結婚の女もあり、唯一時の花としてゐた。あとでそのことが知れてお龍は一月十三日の夜雪の降る中を阿倍川へ身投げをしようとして人にとめられた。それから一寸いざこざがあつて今ぢやわしが養女だと云ふ。幸レッテルが美いからあれを囮にして一儲けしようと二人は早やそんな惡い下相談をしてゐる。

第二編

前の「お關」と「傳さん」とがお龍の噂嘶の續きで「あの娘の考ではたとへ貧乏人でも片目でも其心意氣さへ姿の氣に入りやあ姿やあ悦んで亭主にする……全體目上の者が壓制わざを仕ようとするのは蟲が嫌つてならぬと云ふのだ」とも云ひ「源」を殺さうと云ふので四月四日の夜袂にピストルを入れて、銀鼠の頭巾を被つてあの家の横町の角に立つて居たが、都合よく其頃お龍はお關の所に泊めて居たので事情を察して豫め源に内通してやつたので、纔に無事なるを得たとも云ふ。其内お龍は湯から歸つて來た。

もとより色白の特に浴上りなれば少し上氣して紅潮したる面の一トしほ麗しく、嫣然と笑める頰に笑靨少しよりてこれが短銃を袂にして情なき男を擊たんとしたる恐ろしき女とは更に見えず、たゞこれ垂枝櫻の艷に咲きほこつて吹けよ春風吹かば狂はん。降れよ春雨降らば濡れんと春は十分の花の色香に溢るるばかりの優〻き情の浮めるを見るが如し（一六）

お關は水野への義理にお龍に言啣めて五十子へ見舞にやつた。而も水野のことを「書を讀んでるばかりの書生坊で柔かいんだか硬いんだか何だか恰で赤小豆の煮えこじけた樣な變な厭な男さ」（二八）と云つてゐる。

水野はあの平井の婆「お澤」の處につけておいたお鹽といふ婢から五十子の容態が平穩だと云ふのでいつになく平和な氣分で、下宿で吉右工門爺さん、お濱とゆで栗を喰ひながら茶噺に耽つて居る「初は甚く嫌はれて

居た男の其の親切が通じて思ひ思はれるやうになるといふ趣向を書いた(四〇)人情本の話から魯敏孫の話がはずむ。お濱の性格がよく活躍する「妾あ他の夫人になつたり他人の良人になつたりする人は大嫌ひだわ。魯敏孫のお友達になつたら可いと思ふの……　(四三)嫉ひなものが好になる人情なんて、そりやあお行列の時分の人情ぢやなくつて？　(四五)　五十子さんが今に快くなるとネエ屹度大變に先生が好になるんでせうホ、、それが人情つて云ふものなんでしやう。左樣ぢやあ無くつて？「(四九)など聲句を連發する併又「前の世つていふものがあるかと思ふと何だか怖いやうな氣がするのネエ(六〇)(玆に兼好の句が引用してあるがお濱の所謂前世はもつと哲學的のもので兼好の所謂それは、唯常識的の前世だから、うまく適合して居ない)と云ふ水野はいつしか嘗て讀んだ「幻と謎」との一章を思ひ出した。

爾見よ此の刹那の。此の關より彼方には涯なき路の長路ぞ遙に亘れるなる。刹那の關より此方にも涯無き路の長路は遙に亘れるなる。

思へ爾起りし事のかつて此路に起りし事ならぬやある？　思へ爾、爲されしことのかつて此路になされしならぬやある？　思へ爾萬般の事、萬般の物此の路に上り此の關を過ぎりしものやある？(六四)

其夜彼は思ひ寢の惡夢に醒めて汗びつしよりそれから犬の遠吠で氣が、りになつて、五十子の樣子を見に行つて尾竹に遇つて首を垂れて力無く行き盡して吾妻橋の方に去らうとして、ふと此間の普門品の老人に遇ふ。老人は敬虔な態度で此節の西洋かぶれの若者の風潮を批評し「信をお冷やしなすつては可けません」と云ふに「佛力甚深測るべからず、……萬年萬々年の前に萬年萬萬年あり萬年萬々年の後に萬年萬々年ある。此の歳月の久しくて久しきを思ひ……神の御心即ち意義なり。佛の御心即ち意義なり。化醇の大法はこゝにあるなり。歸善の定數こゝにあるなり。大慈の光明は柔かに山村水郷を包めるなり。我は此の温暖き意義の中より生れたる子なり。佛の子なり。正眞の子なり。我と神佛とは血の相通へるなり」と悟り老人から普門品の古びたのを讓られ、御籤を引いて見ると

登レ舟待ニ便風一　月色暗朦朧
欲下帳ニ香輪一去ら　高山千萬里(一二八)

とあつて終りに「病事は十に六七本復無し。長びきたらば後は息災になる事もあるべし。よく信力をもて佛神を頼みて吉」(一二九)とあつた。水野は又相良を訪うた。その歸るさ同じ汽車に乗つたのが例のお龍で而も人ごみの中で、お龍は水野の足を踏んで怪我をさせた。お龍は白の絹ハンカチが裂いて手機用にそれをくくつて平あやまりにあやまつた。身體よりは心の痛みに痛みつかれた水野は「イイエ此しきの事何でもありません」と却つて氣の毒がつた。一座はお龍の艷なる姿に注目した。それにも構はず水野の傷を庇つて心での後になつて立派な傑れた人なんぞが若し萬一十年廿年まいか(一四三)と早くも慕はしく思つた。水野は又此によつて「眼に見えぬ其血こそは尊くも尊き人の眞誠の生命にして眼に見ゆる此血は言ふにも足らぬ。ただ鹹き紅き水なるを……あはれ此優しげなる若き人の若し人に思はれなば人を思へかし(一四六―一四七)と思つた圖らず見合はした瞳と瞳にはどちらも心の露を宿して居つた。やがて着驛

同じ車に乗りて同じ道を同じ所へ行く身ながらも心はそれ〴〵のおもむく方に馳するも浮世の態なりや(一四九)

聽てお龍は交番所に少しばかり本を置いたやうな室で再び水野と對談した。一朶の芙蓉已に充分の醉を帶び機會が與へた偶然の因緣は一層水野其人をなつかしむるやうになつた。無邪氣で美しいお濱も一寸お龍に會つただけで早や仲好しになつた。見舞の口上を述べてお關が病氣で來られぬ杯言ふのは「こんな正しい人に」と思つて氣がさした。それだのに歸つてお關に其樣子を報告すると、

「だから唐變木で鈍痴氣だといふんだアネ」

と云はれたので、お龍は

「なんですッて？　マア！」

と瞋るともなく恨むともなく裏視むともなき一種の語調で反問した。

日方と島木とが會つて又もや水野の噂を立て、「どれ一つ魂を入れかへさせに行つて來よう」とて日方は、山路の家を訪づれた。其樣子の滑稽なことつたらない。お鍋は「女を呼ばるのに君だなんてホ、、ハ、、、(三四)」など云つて笑つた。水野が留守なので其を待つ間の退窟しのぎに持てこし二罎の酒をチビリ〳〵やりながらノートブックを手まかせに開けて見た。感想、覺書の雜抄に交つて第七番凶の御籤や。

立ちて居る方便も知らに我が心天つ空なり地は踏め

ども。天地に少し至らぬ大丈夫と思ひし我や雄心も無き。大丈夫のさとき心も今は無し戀の奴と我は死ぬべし。

久堅の天みつ空に照れる日の失せなん日こそ我が戀止まめ。など萬葉の相聞歌なども、書いてあつた「可けない〳〵こんなことでは……と獨りでかぶりをふつて居るとそこへ水野が歸つて來た。彼は日ぎめの淺草詣りをしてお龍とそのお友達とか云ふ立派な夫人とに遇つて無理に强ひられて御馳走になつて共爲歸りが遲くなつたのである。日方は「猿が物を含んで溜めて居るやうに思つた事を口の内にまごつかせては居られない乃公だ」(二二八)と冒頭して極力水野の改心を促した。

新聞を見ても書籍を見ても戀だ、蕈だ、蝶だ、百合だと女臭いことばかり流行つて居て、まるで明治の若い奴は戀をするために此の世の中へ生れて來たので……(二二三)……情無い奴だ——。正氣に返らんか、朋友の情誼だ、身にしみて受けろ(一四〇)

とビシリ〳〵と續けさまに打つた。流石の水野も嚴然居ずまひを正して眼つき險しく無言に見返しゝがあゝ思へば今我こゝに何をか言はん(二四一)

と陰忍して居ると、此時隔ての襖がサッとあいてお濱がスーッと出ていきなり日方の手から普門品を奪ひ取りそれで以て日方の五分刈頭をぴしや〳〵と打つて水野の膝に突伏し

だから觀音樣なんぞ信心するのはなかしいと云つて涙が止めたのに、先生が餘り夢中になるもんだから人に馬鹿にされて、それもみんな五十子さんが惡いお蔭よ(四二七)

と憤慨する。そこへ羽勝がやつて來た。一しきり外の話に變り、又もとへ戻つて日方は叩かれて別に惡い顏もせず「流石は日本女子だ」と言つてケロリとして更に某陸軍大將の戀や文覺上人の戀を引例して「戀をするならアンナ風にしろ」とも云つた。

羽勝は水野を評して「美しい戀を持ちながらまだ感情の訓練を經て居ない」と云つた。水野は衷心此二人の至情を感謝した。而も情に徹底しようとする彼は「僕に生命の有らん限りは一日に一日だけ此の心を懷いて苦んでも悶えても生存へようと思ふ(二七八)

と云つた。世馴れた吉右衛門は、氣がきかして水野の指揮なきに酒肴をととのへお濱お鍋に給仕をさせ娘が最前の無禮を詫びた。「こりや場面一段面白くなつた」と

日方は多々益々である。

羽勝は、水野の感情を鎭靜する爲此際一緒に遠洋航海に出かけようと勸めると日方もそれが可からうと贊成した。

第三編

酒に醉うた末に水野はひとり心にお龍のことを思つた同伴のお形と云ふ驚くべき美人からお龍の身の上を聞いて悲しみぬいて猶有餘る愛を充分の理解を以て同情してくれることを滿心に悦びつゝ彼女を思つた。老人(吉右衛門)は思ひ出したと云ふ風で「先刻高田(校長)さんから先生に一寸來てくれいと言傳がありました」と云ふ。何の事だかさつぱり分らぬが水野は直ぐと學校裏の校長の宅へ行つた。老い耄れた片田舍の校長は一見して「人の子を誤るやうな强い人」では無くて「決して人の子を害はぬ古りたる教育家」と樣な心細い印象を與へる人だ。

用件は外で無い「近頃君が觀音樣へ日參をするので世間ではありや妄信に陷つて居る杯言つて其筋でも現任校においておくのは可けなからうとの事で……」「イヤ有難う……わかりました。では退職願を出しませう」で、つまり諭旨退職の話であつた。水野は却つて厄介な束縛がとれて氣がさつぱりした。

一方病人の五十子は薄皮を剝ぐやうに經過がよくて尾竹は大威張、看護婦の芳野も下婢のお鹽もホット息をついだが誰より悦んだのは水野であつた。

或日淺草で又もやお龍と一緒になつた。

「……」

「……」

聲無くて其處に呼ぶ聲ありたり應ふる聲ありたり。(三四)

やがて女は

今といつて今は何樣御禮の爲やうも存じませんが、何ぞの折には、屹度貴卿のために貴卿の優しい御芳情に對して其丈の御返禮を爲やうとは思つて居ります貴卿の御心は長く忘れません(三七)

と言つた。此は恐らくは彼女が彼に對して一度は言はう〳〵と思ひ詰めてゐた一端であつたらう。

お形はお龍が姉とも慕ひ賴める美人で其身分はと云へば一代分限の筑波某と云ふ六十男の外妾に過ぎないが容貌も才も趣味も優れてゐるので七年程前に先妻の亡くなつた時本妻に引き直さうとせられた時、自から謙つて「私故にあなたの不名譽を招いては可けま

せんから」とて辭退した。

正室になりや正室だけの荷を春貢はなけりやあなりませんからネ。力の無い妾が其樣な事を仕て肩を凝らすよりやあ、氣樂にして斯樣して居る方がマア宜ささうですから(五五)

さも云つてゐた(此篇にはお形の趣味、性格が最よく寫されてある。)お形と云ふ女は露伴氏の扱つた女性中珍しい標型である)お龍は水野の退職をきいて直ぐここへ飛んで來て其救濟方を賴んだ。お形は快く承知をし主人に就職口を見つけささうと言つて更にお龍が此事に深入しないこと。水野のやうな主人を持つ女は不幸な事などを言ひ聞かせた。

お關は靜岡のお龍の叔母のところへ公然お龍を養女にしたいと申込んだ。叔母もさるものお關の胸の中をちやんと看拔いてゐるから綺麗に斷つた。するとこんどは此迄のお龍の養育費をウンと請求して來た。叔母は其事件を齎らして上京し、始めてお形を訪うて物のわかつた意見を聞き。一先づ宿に引き下つた。それは丁度昨日のことで、今日またお龍の居るところへやつて來て思ひがけぬ處で叔母姪が奇妙な對面をした。お關のやうな惡辣はないが頑固で理まへを言ひ張つて一歩も退かぬ叔母の性格も、なか〳〵面白く書かれてある。

田舍婆は田舍婆だけの意地も有りやあ根性つ骨も突張つて居るところを見せつけて遣つて間違つたことは云はない妾だもの何貢けるものか思ふさま捩ぢ合ひ拔いて勝鬪を吐いて歸らうと思つた(一四〇)

お形は叔母の前で「あすこを去つてここへ來い」と勸めた。お龍とてもあすこに何の未練もないが唯一つ水野とのかゝはりの之が爲に切れることが惜しかつた(一五〇頁の比喩はシムボリズムの例にでもなりさうな程長々しい)叔母は田舍でおとなしく結婚しろと云ふ。お龍は此にはてんで應じやうとしない。

妾あ何樣あつても何だか分らないで牛か馬みたやうに拂いでる田舍の人の御飯を喫べるために生きてるつて云つたやうな其樣な分らない人と一生暮すなんかつていふ事は到底出來ないんですから(一五四)

など云つたが結局お形の家に引とられお關とのたて引もお形に任せることにした。折からお富の父親が來て、御大切の菓子鉢を割りましたとかで市内を方々探しましてもちつとも同じのがありませんし、よしあつても私どもの身代では手に合はぬ高價なものださうで

すのでマアお詫びをするより仕方が無いと思つて、彼女を連れて上りました」と云ふ。お形は快く之を許し「こちらは何とも思つてゐやしないものを、そんなに心配しておくれでない。それよりか富やに一日も早く歸つて來てもらひたかつたのだ」と云ふ。も一人のお春がしく〳〵泣き出す。「わたしはこんないいお家は無いと思ふがお富樣の居ない間だけと云ふのでお世話になつたのだからもうお暇が出るかと思ふと悲しい」とお形はそれをも憐んでおいてやることにした。

あはれお形は一つの器を失つて六人の心を得たるなり、お形も流石に心樂しきなるべし……例の治め切つたる顏つきの口の邊に見ゆるか見えぬ程の誇りの笑を含みたり(一九五)

お形はお龍と云ふ友達を得て連彈の調べ面白く今日も座敷で三味が鳴る……そこへやつて來たのがお關で女中のお杉お富お春皆びつくりして其鼻息の荒いのに驚いてゐる。一段終つてお形が應接すると急に猫のやうに大人しく雀のやうに世辭を囀りお龍に會つてもニコ〳〵して「まあ、お仕合はせだどうぞ御機嫌克く」と云ふ。これはなかしいと思つて後でお形に聞くと、

「蚊を拍けばお前掌が汚れやうぢや無いか。蚤を潰しやあ矢張爪が汚れるはネ(二三五)と彼女は多くの自腹を切つたのである。

お龍は或夜例の如く女中に床をとつて貰つて寢に就くと、いつも上に懸つてある鷺の額が今宵は殊更眼につく

鷺は夕暮の小闇きに立てるなり燈火の光は弱々さして其暗さに同じきなり畫には魂魄ありや鷺は今動き出さんとす(二五五)

すつと以前のこと「姉さん此繪は淋しくつて厭な繪なことネエ」と云ふとお形は「そんな事をお云ひでないこりやお前の書いた繪ぢやないか」と戲れ「こりや少し譯があつて持つてゐ繪なのです」と云つた「譯つて何だらう?」と今は新に疑ひ出した。姉さんは一體どう云ふ徑路を通つて來た人だらう? とも思はれかけた。姉さんとても矢張靜岡の叔母の若いだけのものでは無からうか。廣い世界に誰一人自分を解して居てくれるものがない。水野さんに戀して五十子さんから横取りするやうなさもしい女に見られて居ると思ふと情なく味氣ない。一身の外に眞實の味方なし。

然樣思つては濟まない事ながら、此繪の中の詩が物を云つたなら、屹度姉さんの往時も分らうけれど姉

さんもやつぱり辛い悲しいかの瀬を越してそして今のやうに一人立同樣な身におなりに相違ない。そして此の鷺は其の因緣の紀念でもあらう。鷺も物を云はず姉さんもお話しぢや無いけれど、自分に比べて姉さんの往時をおもふとあゝ何と無く朦朧と解るやうな氣がする！（二六九）

など聯想を辿つてゐる。額なる鷺は尙心も無く立ち盡して

爾我が心を知れりや我は謎なり

と云はぬばかりに默々又寂々。

第一編　三十九年一月一日、菊版二四八頁、口繪　梶田半古畫「お龍身投げ」の處

第二編　三十九年六月十五日、菊版二七〇頁、口繪　鰭崎英朋畫水野の下宿（父とお濱と水野と）

第三編　四十年一月一日、菊版二七〇頁、口繪　久保田米齋畫　お形に引きとられたお龍の寢室（鷺の掛軸）

あまのかるも　海人の苅藻

蓮月尼の家集、續歌一一に收む、尙れんげつに「大田垣蓮月尼」を見よ。

あもりごと　天降言

縣門で萬葉振の歌人として聞えた田安宗武の歌集で、之によると彼の歌は、丁度源實朝の定家に於けるが如く眞淵召聘以前（新古今集風）と以後（萬葉風）との歌風の推移や、その根柢は漢學的な思想や趣味であつたことがわかる（續歌校註和歌叢書六、九三—一三〇尙「宗武」を見よ）

あやたり　建部綾足　二三七九—二四三四。享保四—安永三、三、一八、五十六歳。

小說家、俳人歌人兼畫家、津輕城下弘前に生まれ、早く南都に出で後江戸・京・浪花と轉々して武藏の熊谷で客死した。俳號を涼袋（後に凌岱　畫號を英親（又寒葉齋）と云ひ綾足は歌についての號だが片歌主唱に熱中した頃は片歌道守と云つた。性磊落不羈、聰慧俊敏にして且つ覇氣に富み・始めて乙由・希因の流を汲んで俳句を以て一家を爲し、後片歌（古事記にある五七七の詞形）を復活しようとて自ら斯道の中興を以て任じてゐたがあまり大した反響もなかつた。

彼は隨分常識を逸した奇行が多く妻は二人とも妓女を娶り、始めの妻は自分の不在中、弟子と通じたので平氣で離別してその弟子にくれてやり、後の妻は賀茂

眞淵の門に學ばせて自分はその妻から教はり、藩主が畫の學資にとて三百金も補助されたのに之を遊蕩費にはめて、長崎から歸つて「山の芋の畫でござる」とて黑闇子のやうなものを塗りこくつて主君の怒を買ひ、伊勢の龍保野に碑が建てゝ片歌の祖として日本建尊を祭るやうな芝居氣を出すと云ふ風であつた。けれども彼の文は非常に生彩があつてその小說には構想の妙があると稱せられてゐる。西山物語（帝文三一）吉野物語（帝文三二、一名を本朝水滸傳と云ふ）は名高い。その他片歌に關して、片歌二夜問答・片歌百夜問答・片歌道のはり道・片歌道のはじめ・片歌東風流・片歌舊宮集等の著がある。

あやつりにんぎやう　操人形

德川時代の竹本豐竹二座で盛んに興行した偶人劇で戲曲の臺詞により人形遣が人形を操つて劇を演ずるもの吉田三郎右衞門・辰松八郎兵衞などは人形使の名手で表情眞に迫るものがあつたといふ。もと西宮の傀儡師引田某に始まるといふが起源についてはまだ外に諸說がある。今日往時の操人形の面影をとゞむるものは大阪の文樂座である。

あやぬの　文布

しづこ「油谷倭文子」を見よ。

あやを　菅沼斐雄　二四四六—二四九四　天保五　四十九歳

始め北村姓を名のる。備中吉濱の人、家號を蘆渚、又は桔梗と云ひ、桂園門下中直好、幸文、知紀についで重きをおかれた人で、師、景樹が江戸を去る時、とゞめて自身に代つて桂園派の風を布かせた。彼當時の居は隅田川岸の夕瀾館と云ふのであつた。それ程の名流だが纒まつた歌集としては一册もない佐々木信綱博士が續歌を選ばれる時、斐雄歌集と題して第八編に取り容れられた。その中には流石にこの派の風を代表して、想調のめでたい秀咏がある。

ゆく春もゆきがてにする道ならし咲き續きたる
山吹の花

夕立のしづくまだちるくれ竹の葉ごしに見ゆる
夏のよの月

いかでさはつれながらん同じ世に生れあへる
も契ならずや

あやを　井上文雄　二四六〇—二五三一、寛政一二—明治四、一一、八、　七十二歳

通稱は玄眞、號は柯堂・歌堂・調鶴など云ふ。元田安家

の侍醫であつたが、後、日本橋茅場町に住んで歌人を以て立つた初岸本由豆流の門に入り、後一柳千古に就いた。その得意なのは和歌で景樹以來の名家と謂はれた。文も亦、巧であつた。歌論の著には、伊勢の家づと、道のさきはひ、摘英集序言などがあつて、江戸派掉尾の光輝を放つてゐる。選集よりも家集の方が個性を發揮してゐて面白いこと。桂園派の餘弊は平弱に失せること、用語の自由なるべきこと、俳諧歌の奬勵すべきことなど多くの優れた意見を有してゐた。彼が德川幕府に同情した歌があると云ふので、七十に近い老の身で入牢したのも閲歴の一特色である。家集を調鶴集及び同續篇とし今續歌十一に收められてゐる。王朝趣味や田園趣味の咏に富み、滑稽洒落の歌、時勢諷刺の述懷なども交り家集としては特徴に富んだものである。

おもと人半蔀おろす袖口のあらはなるまで吹く
野分かな
名をとへば知らずと云ひて椎拾ふめざしいつくし誰が子なるらん
故郷のあはれの限見つるかな奈良に飛鳥に寺めぐりして
ともし火の花をかぞへて少女子があすのよきさが占へつるかな
岡越の切通したるつくり道うの花咲けり右にひだりに
賤が屋のむくげゆひまぜし竹垣に目白さへづる秋の初風
夏の日はいつゝ長居の客人をかへして後もなほ長くして

あやをかしふ　文雄歌集
調鶴集をいふ。あやを「井上文雄」を見よ。

あゆびせう　脚結抄　五卷
德川時代有數の語學者富士谷成章の助動詞助詞の書物で（彼は言語を挿頭（かざし）、裝、脚結、名、の四種に分けた）あらゆる脚結を、屬五種、家十九種、倫六種、身十二種、除八種の五大別五十小別して、歴史的にも地理的（俗語と對照）にも、意義用法にも用意周到に論ぜられてある。之が補遺とも謂ふべき脚結小鈴や脚結增抄とを併せ見れば有益な文法書である。

あらの　曠野
芭蕉七部集の一つで、古人今人の俳句中自家の風と他派の句とに拘らず、芭蕉の詩眼を以て採擇し、附錄として荷兮野水越人等の連句十卷を添へた「冬の日」に比べると輕く「春の日」に比べると和樂の調子が出てゐる。

あらればしり　踏歌
踊歌をいふ。男は正月十四日、女は同十六日、京中美麗の男女を宮中に歌舞せしめられ、之を踏歌といふ。その歌詞の終りは必らず「萬年阿良禮（あられ）」とはやす（意は「萬年あるべし」といふこと）ので「あらればしり」といふ。これは後に萬歳樂といふのに當るといふ。天武天皇第三年に催されたのが記錄に見える早いものである（廣文庫第二册一九〇—一九二）

ありいへ　藤原有家　一八一五—一八七六久壽二—建保四、六十二歳
大貳藤原重家の子左京大夫顯季の孫で新古今和歌集選者の一人である。土御門の朝に大藏卿に任ぜられ、順德帝の建保三年（一八七五）に六十一歳で出家し、晩年從三位に叙せられた。歌は千載（一）新古今（二十一）續古今（七）等に出てゐる。

水邊自秋涼
すゞしさは秋やかへりてはつせ川ふる河の邊の杉の下かげ

ありくに　藤原有國　一六〇二—一六七一、天長五—寛弘八、七十歳
右大臣內麿の後裔、輔道の子、世に勘解由相公と云ふ。圓融・花山・一條の三朝に仕へ、左大辨・參議・太宰大貳等に任ぜられた。漢詩文を能くして、その作は本朝文粹（十一卷）・本朝麗藻・類聚句題抄等に出て居る。又、勘由相公集二卷（一名藤原有國集）もあつたが今は傳はらない。

ありあけ　蒲原有明　明治九、三、一五——
東京の人、名は隼雄、國民英學會に學んだ外は獨學である。三十年代、象徴詩の代表詩人で草わかば・獨絃哀歌・春鳥集等、佳什約二百五十篇外に五十餘篇の譯詩が書いたが、今は詩壇を退いて居る。有明詩集は前諸集の合編としてアルスから版行して居る。

ありこと　千種有功　二四五七—二五一四、寛政九—安政元、五十八歳
近世末期、制禁の詞に尙舊慣を墨守して居た堂上家に出て桂園の流を汲み、別に一派清新の歌を咏じたものは千々迺舍（ちぢのやしう）、千種有功である。家集を千々迺舍集と云ひ今續歌十に容れてある。

釣垂れて歸らむとすれば賀茂川の柳の木の間月の

すゞしき
駒の蹄ぬらさぬ程の波よせて月靜なる打出の濱
千度見て千度めづらし雲風に委定めぬ富士の柴山

ありすけ　御春有輔　？

古今集歌人、延喜中左衛門權少志、同權少尉となる河内に生れ、出でて藤原敏行の家人となる（貫之集にはこの有輔が甲斐へ下る時兼輔の兵工佐が加茂川の邊で別宴を張つたことが出てゐる）

あやなくてまだきなき名のたつ田川渡らでやまむ物ならなくに

ありつね　紀有常　一四七五―一五三七、弘仁六―元慶元、六十三歳

紀名虎の子で、その妹靜子は文德帝の妃でその妃の御子惟喬親王と云ふ續柄なのでよく親王の御供をし親王や業平と歌の贈答などをしたことが、伊勢物語や古今集に出てゐる。仁明文德清和の三朝に歷仕し從四位下周防權守まで進んだ。思ふに彼はまだ〳〵發展すべき人物なのが、外戚政策の關係上、始終藤原氏が厭迫を加へたが爲めに不遇に終つたものであらう。三代實錄にはその人となりを「惟清聲有二儀望一」と出てゐる。

渚院で業平が
狩くらしたなばたつめに宿からんあまのかはらにわれは來にけり

と咏んだのに對し惟喬親王に代つて有常のこたへた。

一年に一たび來ますきみまてば宿かす人もあらじとぞおもふ

は有名な即興だ。

ありなが　菅原在良　？―一七八二？

―保安三

是綱の弟で世に北野三位と稱し攝津守に任ぜられた。漢詩漢文和歌をよくし、歌は新勅撰・續千載・續後拾遺等にも選ばれ家集に、菅原在良朝臣集一卷（群二五五、九、八三〇―八三一、續國八九五―八九六）がある。

山家郭公
都人まつらんものを山里に聞ふるしたるほとゝぎすかな

又漢文は續文粹、三十五文集等に載せられて居る。古今著聞集卷五「文學」の部に

「永久三年七月五日、式部大輔在良朝臣、御侍讀にて、始めて御前へ參りたいけるに、先づ朗詠をしける。幸逢二堯舜無爲化一、德是北辰、太公望　過二周文一等

の句なり。次に古事を語り申しけり。聞くもの感ぜずといふ事なし。次に管絃ありけり。主上御笛を吹かせ給ふ。更闌けて、在良朝臣罷出けるに、藏人朝隆脂燭さしておくりけり、ゆゝしくぞ侍りける。」

ありまろ　荷田在滿（羽倉在滿）　二三六六―二四一一、寶永三―寛延四、八、四　四十六歳

京都の人、荷田東滿の甥で、叅はれてその嗣子となり、始め漢學を伊藤東涯に學び深くその才氣と强記とを愛せられた。その後妹蒼生子を連れて江戸に下り幕府に仕へ專ら皇朝の學を講じ殊に律令に於ては近世を通じての權威者となつた。後更に田安家に聘せられて優遇を受けたが多病の故を以て仕を退き後任には賀茂眞淵を薦め我身は退いて私に門戸を張つた處又就いて學ぶものが多かつた。家は貧しかつたが記憶力が强くて編著に引用した語句は、大抵は暗記したものだといふ。性も亦剛毅、相手の高貴にも關せず平然我意を張るので周圍のものが却て彼の爲めに危ぶむ位だつたと云ふ。その著の多くは律令中心の有職故實で、他に歌論・歌集・訓詁・雅文小說の類もある。

家記所繫考・大嘗會具釋・大嘗會便蒙・百人一首解・令三辯・本朝度制略考・羽倉考・裝束彙考家集・長月物語・家乘・白猿物語・國歌八論・古今集左註論

あをほん　青本

青本黃表紙が始め崩黃表紙をつけた頃の名稱、尙きびやうし「黃表紙」を見よ。

（國刊一期新群七、大久保葩雪前期青本書目、一、同漣水散人編大久保豐補青本年表一、同、五車樓主人編大久保豐補增補續青本年表一）

あんさい　山崎闇齋　二二七八―二三四二　元和四、一二―天和二、九、一六、　六十五歳

名は敬義、通稱嘉右衞門、號は垂加、性豪邁不羈父將來を案じて出家させ、絕藏主と稱せしめた。始め京の妙心寺に居り、後、土佐及江寺に移り長ずるに及び谷時中、野中兼山等について朱子學を學び大に感ずるところありて還俗して、歸京遂に儒學を以て一家を成し、江戸にも出て子弟を敎へ一代の門弟上は公卿諸侯より下は布衣の士に至るまで無慮六千餘人、就中會津藩主保科正之の知遇を受けて居た。晚年神道五部書に儒敎を加味して「垂加神道」を唱へた。その說牽强附會の箇處が多いが、尊王の風を鼓舞するには與つて功があつた。明治四十年十月正四位が贈られた。その弟子に佐藤直方・淺見絅齋・三宅觀瀾等が傑出し、その著に日

本書記註・神代卷風華集・垂加文集・續垂加文集・垂加文集拾遺・江府紀行・遠遊紀行・再遊紀行等があり、經義の著には文會筆錄・四書序考・大學啓蒙集・孟子要略・朱易衍義・論孟精義等がある。

あんさいずゐひつ　安齋隨筆　三十卷

考證家伊勢貞丈の隨筆で、「皇國の典故事物の權輿及び字訓の誤などかず〳〵」を記し、短文ばかり集まつて居るが看過してはならない貴重な文字がある。今故實叢書に入る。

あんぽふほふし　安法法師　？

傳記不詳、中古歌仙傳に「大納言源昇卿の孫內匠頭の嫡男、母は神祇伯大中臣安則の女俗名趁」とあるし家集に「安法法師集」といふがあつて、中に惠慶法師との贈答歌があるところから、略々同時代の人と察せられる（廣文庫第一册一二九七）

イの部

いうけんせうろく　輶軒小錄　二卷

山林・丘陵・動植物等の、珍談奇談十四項を集めた和漢混淆文の隨筆で序文に楊子雲が輶軒絕代語に倣つて名づけたといふ。（輶軒は支那で朝廷から四方に使するものの乘る車で、方々で色々の事を聞込むとの意）、國刊六期新三十幅及び百說四に入る）

いうこく　藤田幽谷　二四三四—二四八六、安永三—文政九、五十三歲

水戸藩の儒者で、名は一正、字は子定、通稱次郎右工門。その先祖は參議篁だといふ。少壯、志水元禎、立原東里等に學び、進步のあと著きものあり、十八歲にして正名論を著して大義名分を論じ、又西土詰戎記を書いて、偸安姑息の輩を警めた。藩侯に仕へて修史の事に與り、終に彰考館總裁となつた。幽谷遺稿・幽谷雜記等の著が名高い。

いうさい　細川幽齋　二一九四—二二七〇、天文三—慶長一五、七十七歲

室町・德川の兩期を過渡して、一世に重きをなした歌人。名を藤孝といひ元足利十三代將軍義昭の臣であつたが、世の變遷に連れて、織田・豐臣・德川の三家にも歷仕した。思ふに當時にあつては誰が覇權を握らうとも彼が如き教養と趣味とを有するものは同樣に必要としたもので、彼亦忠臣二君に仕へずと樣の氣慨心を顧る餘裕もない程歌道に熱心であつた。彼は文武兼備の士で、關ヶ原の役には丹後田邊の城を死守して防戰をさ〳〵手ぬかりがなかつた。後陽成天皇が唯一古今傳授を受けてゐる彼を惜しませられ、勅使を賜はつて包圍の三成方（小野木重勝）を退去せしめられたことは有名な美談となつてゐる。

家集を衆妙集（國刊一期續々群一四）といひ、二條家風の「やすらかに正しい」咏ひ振で、古歌の趣向や成句をもよく消化し切つて咏みこなしてゐる。

仙人（やまびと）の住家とやいはむみだれ碁の音してふくるともし火の影（山館燈）

尙その著の中歌學書には玄旨聞書全集・詠歌大概抄などがあり、紀行に九州道の記・東國陣記などがある。その門人中堂上家では中院通勝・烏丸光廣・智仁親王西三條實條等つまり近世初期の有名な歌人は皆彼の門流であつた。

いうしないしんわう　祐子內親王　？

後朱雀院の皇女、續世繼物語に「中宮嬪子」のうみ奉り給へるひめみやは祐子內親王と申しき、長曆二年四月廿一日に生れ、延久四年おくしおろし給ふ。後に二品の宮と申しき云々」（廣文庫第二册三七六）

いうしよくこじつ　有職故實

皇居・儀式・官位・服裝・器物・風俗（冠婚葬祭）・年中行事・制度等の典型となれるものを云ひ、中古以來それ〳〵專門家が出來、今日と雖も之を以て職を奉ずる人は勿論、國史國文を研究するには是非一通り究めねばならぬ（古類文學部二、九〇五—九二三有職學、林森太郎氏有職故實）

いうしんは　有心派

鎌倉初期の連歌作家、雅麗典雅にして短歌さながらの趣致を失はない一派の人々のことで、又之を柿の本ともいふ（その部を見よ）藤原良經慈鎭等がこの派に屬する、古類、文學部一、一〇〇〇—一〇〇一）

いうぢよのぶんがく　遊女の文學

國文學上一個の研究題目となるべきものであらう。早く萬葉集に

松浦河七瀨の淀はよどむとも我は淀まず君をし待たむ

と大伴旅人に贈つた女を始め多くの遊行娼婦の咏があるし。古今集にも源實が筑紫入湯に行かうとする時、江口の遊君「しろめ」が

命だに心にかなふものならば何かわかれのかなしからまし

と惜別した。徳川期にも三浦屋の高尾は「忘れればこそ思ひ出ださず」と名句を吐いたし（但しこれに似た歌詞は早く小歌に見える）

その數に入るも恥かし夏の菊　（染之助）

と謙遜したり

夏やせと人に答ふる汨かな　（薫）

と身の上をかこつたり

我なのせて曲輪を出せ風　（たま）

と自由にあこがれたりした。

いうへい　前川由平　？—二二九〇　？—寶永七年　？—歳

浪華の人、夕舟子・半圃子などと號し、剃髪後は自入居士と號した。西山宗因の高足で俳をよくし、その著に明骨集といふがある。

いがくのきん　異學之禁（寛政異學之禁）

我邦に於て官憲の力を以て學風を統整した一例として顯著なもので光格天皇の寛政二年（二四五〇）幕府の儒官柴野栗山等の献策を時の老中松平定信が取り上げて將軍（十一代家齊）の許可の下に「爾後、朱子學以外の儒學を嚴禁する」旨をふれて之を勵行した。今日から觀れば、學問の自由を壓迫する不合理な法令のやうにあるが、當時は古文辭學派と朱子學派とがひどく軋轢して居つたから學制改革上已むを得なかつたものと觀られて居る。

いがごえだうちうすごろく　伊賀越道中双六

天明三年（二四四三）四月廿七日、近松半二・近松加作の合作淨瑠璃。「澤井股五郎、放蕩に身を持崩し恩師渡邊靱負を殺して寶刀を奪ひ、入質して逐電、靱負が一子志津馬は妹お谷の戀人唐木政右工門の助力を得て之を伊賀街道で仇討する」といふ筋で、志津馬を戀する瀬川の心盡し、瀬川の父平作が澤井の行方を志津馬に知らせたいばつかりに、澤井にゆかりの重兵衛が他家へ養子にやつた我が實子であるのを幸に、人なき曠で有り體に云はせ「落ち行く先は九州相良」と聞いて皺腹なかき斬る處、さては政右工門の關所ぬけ、岡崎の活劇、舊師山田に救はれるところなど、重に東海道を背景にして居る。伊賀越物の中の傑作なり、仇討物中でも優れてゐる（帝文三七、九一—一八三）

いきうつしあさがほにつき　生寫葬日記

山田案山子稿、翠松園校補といふので嘉永三年（二五一〇）正月に出版された。もと芝屋芝叟が一夜讀切

の長話から取材したものである。

「秋月弓之助の娘深雪（みゆき）は、一とせ宇治の螢狩に宮城阿蘇次郎を見初めたが、しみ〴〵話す間もなく父が國元へ歸參かなつて歸途につき、男は叔父駒澤家を嗣いで次郎左工門と改名、主君大内家の要務を帶びて鎌倉に下らうとする途次又もや明石で邂逅し、せめてもの心やりにとて男は「露のひぬま」の唱歌を書いた扇を女の船に投げ與へた。女は國に歸り間もなく緣談が整つて大内家の家臣駒澤次郎左工門に嫁ぐことに内定。その夫とは明け暮れに戀ひ焦がれてゐる以前の阿蘇次郎とは知らず「立つる操を破らじ」と家出をして遙々都へ上つて聞くと鎌倉に行つたとのこと、樣々の手ちがひに路用も使ひ果たし、お賣けに釐耶山の荒妙といふ惡婆に誘拐され、生れもつかぬ盲とさへなつて、昔し樂しみに覺えた琴を鳴らして、憐みを行路の人に乞ひ、行き行いて島田の宿まで下つた時、駒澤は主君義興が遊女瀬川の色に溺れて政治を怠つて居られるのを諫め止めて、今山口のお國元へ歸らうといふので、同じ宿に投じ、旅のつれ〴〵この頃評判の菩女として深雪を呼んで一曲を彈かせると哀音身につまさるゝ思ひして、試みに身の上語りをさせると深雪は涙ながらに悲戀の過去を語る。「元私は中國生れ、仔細あつて都のすまい一とせ宇治の螢狩に思ひそめたる戀人の處尋ぬるたよりさへ云々」は、さはりにもなつて有名なものだ。これで駒澤は驚いて眼病の靈藥と金子一封に「宮城阿蘇次郎事駒澤次郎左工門」と書いた扇とを亭主德右工門に托して「やつてくれい」と云つて立つ。後で之をきいた深雪は、狂せんばかりに驚いて早速後を慕うたが、悲しや大井河は生憎の雨に水嵩まして川止め……とど德右衛門（宿屋の亭主にして秋月家の舊臣）の命かけて生害の忠義に、この生き血に件の藥を和して、服藥してみる〴〵中に清眼となり、國に歸つて目出度く結婚。大内義興の素行も治まり、惡臣岩代一味も誅伐され主家も臣家もめでたし〴〵に終る。「宿屋の段」は今日も切狂言として演ぜられる。

いざよひにつき　十六夜日記（阿佛尼東くだり、阿佛尼海道記、阿佛坊道記）

鎌倉初期歌道師範家藤原爲家（定家の子）の後ぞひの妻。安嘉門院四條（後に出家して阿佛尼といふ）が實子爲相の所領を繼子爲氏に横領せられたといふので憤慨の餘りよろづの憚りを忘れて遙々鎌倉に下り、淹留數年終に彼地に歿したが、訴へは勝になつて所領は爲

相に下された。十六夜日記はその時の海道下りの紀行で、題名はその出發が建治三年十月の十六日の曉であつたのと、本書の始めに「ゆくりもなくいざよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる」とあるところからついたのであらう。この事件の係爭年限は前述建治三年(一九三七)から弘安三年(一九四〇)まで四年越になつてゐて(書き上げ整理は最後の弘安三年らしいと云ふ)純然たる紀行はその始め十月十六日から廿八日まで十三日間である。即ち十六日、京を出發、守山、野洲川(近江)・十七日、をののしゆく、さめが井 十八日、せきのふぢ川、不破、かさぬひのうまや(美濃)・十九日、ひらの、むすぶの神、すのまた、一宮・廿日、おりど、熱田の宮、鳴海潟、二むら山(尾張)・八橋(三河)・廿一日、宮ぢ山、わたうと・廿二日たかし山、ひくまの宿・廿三日、天りうのわたり、みつけのこふ(遠江)・廿四日、さやの中山、ことのまゝの社、きく川・廿五日、大井川、うつの山、てごし・廿六日、わらしな川、おきつの濱、(駿河)・きよみが關海ちかき里、ふじの山、浪のうへ・廿七日、ふじ河たごの浦、こふ、三島の明神(伊豆)・廿八日、はこれ路、はや川、きさか、まりこ川、さかは(相模)・廿九日月かげの谷(相模、鎌倉)・十二月廿二日、都のたより、春都のたより、卯月のはじめつ方・八月二日、となつてゐる。

文體は中古文體で同じ頃の東關紀行海道記の新文體と好對照を爲してゐる。

「日記の全體は、平安朝時代の土佐日記、更級日記等の紀行を模倣してよく書いてあるが、猶時代の趨勢を免れる事が出來ず、韻致に於て下つてゐるのはせむ方がない。しかし當時の舊文學の代表として恥かしからぬものである(尾上柴舟博士)」

始め爲家は和歌所領たる近江の小野の莊、播磨の細川の莊の中、後の方たゞ文券を以て長子爲氏に讓つたが、爲氏に不孝の振舞があるといふので、文永十年七月と同十一年六月と兩度の文券で更に爲相に讓つておいて自身は建治元年に薨じた。遺子三人は歌道三派の祖となつた。

爲家…{ 爲氏…二條家……／爲教…京極家(又は毘沙門堂家)… } 先妻の子
　　 爲相…冷泉家……阿佛尼の子

所が爲氏は依然細川の莊を横領して返さない。爲相はそを爭ふにはまだずつと幼い。そこで實母の彼女が憤

起した。二男の爲教は爲氏と相好からぬ仲とてこれも彼女に味方した。にも拘らず爲氏は「亡父は繼母の讒言を信じて細川の莊を取上げようとしたのだから返すには當らない。」爲教は歌の指導を受けたりしたかはりで(これは爲氏の誣ひ言だと想はれることは吉澤義則博士のお說にくはしい—國語國文の研究—)繼母に媚びてゐるのだ」と云つて頑としてきかなかつた。そこで裁判も埒があかずお負けに色々の支障で延滯したがとう〳〵勝訴にきまつた……が彼女は遂に鎌倉の地で亡くなつた。阿佛尼屋敷といふのがその跡で、後に英勝寺の寺域となつてゐる。

流石に和歌の家の後室だけあつて歌は隨所に出てゐる。そして道すがらの風物に對して、限りなき哀感と强い憤慨と、高い矜持と、温い母性愛とをこきまぜた叙事的叙情文を綴つてゐる。彼女の交際範圍もこの書によつて略左記の人々であつたことがわかる。

一、侍從爲相・二、大夫爲守・三、山の律師(源承)・四、阿闍梨(慶融)・五、紀内侍・六、濱松、舊知數人・七、宇都山にて、阿闍梨の知人・八、大宮院、權中納言・九、爲兼一〇、式乾門院の御匣殿・一一、姉君中ノ院ノ中將(今は三位入道)の妻・一二、妹・一三、和德門院の新中納言の君。

原本の諸異本數種あり、註解諸本は今も盛んに發行されつゝある。が、高田與清(初め二卷)北條時隣(後一卷)合著の十六夜日記殘月抄(國註十四)が凡ての點に於て整つてゐる。

いしかはのいらつめ　石川郎女　?

萬葉集女流歌人だが傳は不明だ唯「藤原宿奈麿朝臣之妻、石川女郎、薄愛離別　悲恨作歌也」とあるだけだ歌は萬葉集第二十卷に出てゐる。

いせ　伊勢　?—一五九九　?—天慶二

大和守藤原繼蔭の女で、宇多醍醐の朝の有名な女流歌人として、數奇な運命に弄せられた佳人として有名である。始め敦慶親王に愛せられて中務を生み、次で藤原仲平に通じ、仲平が伊養子になる時棄てられて五條にわび、煩悶のよすがに大和を經めぐつてゐる中七條后に召されて宮仕をし、宇多天皇の寵を得て世に「伊勢の御」と云ふは女御だつたからである。行明親王を產み、親も悅び我身も悅びしたかひもなく、その御子は早世、ついで天皇は御退位、我身も暇を賜はつて再び五條の閑居、それも暫らくして再び七條后に奉仕し老いて後は山城の葛野郡桂の里に穩やかな餘生を送つ

た。彼女の歌はその風貌と共に優麗温雅、加ふるにその閲歴と相俟つて、何處かに人の同情を惹く趣があると謂はれてゐる。古今（二〇餘）後撰（六〇餘）以下の勅撰集に澤山採られ、家集に伊勢集上下二卷（群二七三、一〇、一六八—一八七・續國四八七—五〇四）があつて、歌集であるが一部日記のやうな長い詞書がある。

なにはがたみじかき芦のふしのまも逢はでこの世を過してよとや

しでの山越てきつらん時鳥戀しき人のうへかたらなむ

久方の中におひたる君なれば光りなのみぞたのむべらなる

人しれずたえなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはまし物を

有はてぬ命まつまのほどばかりうき事しげく思はずもがな

（國華三四三號二一三筆者不詳伊勢圖）

いせしふ　伊勢集

「いせ」伊勢の項參照。

いせのたいふ　伊勢大輔　？一七二二　？

？—康平五

伊勢祭主大中臣輔親の女で、初めて上東門院彰子に仕へた時、偶々櫻花を獻ずるものがあつたので、彰子の父道長「これを題で一首咏め」と云ふ。彼女言下にいにしへのならの都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかなと誦したので大層褒められたと云ふ。

歌名は紫式部、和泉式部等と相並んで高く、後拾遺（二〇餘）新古今（七）等に載り、家集に伊勢大輔集（群二七八、一〇、三一〇—三一七、續國六一三—六一九）がある。

年ごろありし人のまだしのぶるほどに石山にこもりておとせぬに

みるめ社（こそ）あふみの海のかたからめ吹だにかよへしがの浦風

おとせぬ人に冬の末つかた

忘られてとし暮はつる冬草のかれはは人もたづねざりけり

いせふう　伊勢風

萬葉の門人、伊勢山田の岩田涼菟が開いた俳句の一派で、涼菟の門人に神風館曾北、中川乙由があり、乙由の門下に樗良や加賀千代や綿屋希因があり、櫻井梅室

成田蒼虬などその末流である。俳系七世門葉非常に張つてゐる。

いせものがたり　伊勢物語　二卷—百二十五段

各段大抵「昔男ありけり」から始まつてその男の戀物語と之についての戀歌の贈答を乘せてゐる。各段に一顆々々の妙味あり、相聯なつて百二十五顆となる。併しその全部を讀了して目をつぶつて考へて見ると「昔男」といふ業平らしい好色の貴公子があつて、首都に地方に、宮廷に、郊外に、田舍わたらひに、各種の女と艶な交渉を展開した有樣が想像せられる。記中の歌は古來人口に膾炙したものばかりで殊に業平の咏が多い。一例をいふと

五月まつ花たちばなの香をかげば
昔の人の袖のかぞする

は、嘗て橘かをる花蔭に相見し人をなつかしんだ追憶思慕の咏と想はれるのに、伊勢の作者は之を脚色して昔男あり、相知れる女、次第に男の愛のさめて行くことを苦にし、まめやかに後見しようといふ他の男に身をまかせて地方下りをした。

多くの年をへて、前の男宇佐の奉幣使を命ぜられ彼の地に下つた處、その所の祇承の官人（接待役）の妻は即ち當年の女であつた。饗膳已に整つた時、男、官人に「君、細君を出してお酌をさせ給へ、でないと僕は飲まないよ」といふ。「おやすいこと」とて早速召し出したら男有合せの着の橘をかざして

五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

とよんだので妻はそのかみを思ひ出して感に得堪へず、遂に尼になつて山奥に隱れすんだといふ。と。以て作者構想の巧緻さを想像することが出來る。

著者は未詳である。

一說には在原業平の作だといふ（この說が一番多い）なる程彼の歌が多く採られてゐる點、彼のことと、彼の歌とに謙遜の辭を用ひた點などこの臆想の根據になりさうな事も少くない。お負けに法橋顯昭の袖中抄には「朱雀院の塗籠に業平自筆のこの物語がある」ともある（がこれはどうも怪しい）けれども「芦川行幸の時の歌」は業平歿後だからこれはつまり業平の作を伊勢が補つたものだ」と云ふ。

がしかし伊勢、が補つたと觀てよささうに想はれるのは、單に時代關係だけであつて、伊勢が補つたので伊勢物語といふにしては肝腎の前著者を無視したことに

なるし伊勢物語の題名は、妹脊物語即戀愛作話の意だとも、えせ物語即ち僻言物語の隱語だとも（伊勢人はひがことずなり云々の古歌の意から同樣の意があるとする人もある）云ふが、要するに和泉式部所藏の一本のやうに始め伊勢齋宮の記事が少々頭にあつたので始めの事項をとつてやがて全篇に名づけたものと見るが一番至當であらう。文體から推せば簡結・古雅・男性的で、記事の內容中二條后の密事を書いてゐるのに伊勢はその二條の后の御姪の七條后溫子に仕へた人で殊にこの書は伊勢自ら書きつゞつて奉つたと云ふのだが態々御主君の御尊族の密事を暴露しよう筈もなし、記事も大體は時代があつてゐる點が多いが尙延喜・承平・天曆の頃の歌が交つて居る以上その點からも疑問の餘地がある。

要するに寬永以前の或る男子（恐らくは業平）の手で大部分が出來、それ以後の或る男子の手で補筆するか轉々模寫の間に增段されたものでなからうか？

（古今集中明らかにこの物語によつた詞書の部分たとへば、羈旅の歌の「からころもきつゝなれにし」「名にしゑはゞいざことはむ」の如きは古今當時編者は之を典據視したのであらうから、兩書に共通の歌の中、詞書を伊勢物語に採るものと否らざるものとを區別し、この側から解決のつく點もあらう）

文集作品の種類からいふと此書は「歌物語」といふもので、歌話と歌とを一緒にした歌集、又は非常に詞書の永い歌集と見てもよい。又非常に歌の多い短編聯作の戀愛小說と見てもよい。王朝の物語は何れにしても若干の和歌を挿まないのはないが、この書や大和物語は殊に「歌物語」的色彩の濃いものである。

原本中、定家が天福二年に校合した天福本が普通に行はれ、別に塗藏本は朱雀院の塗藏にあつた別本とかいふのを定家の女民部卿局が愛藏してゐたものだと寬文四年初冬冷泉左中將爲清の奧書がついてゐる。（群三〇七、一一、一—三三）が流布本とは大分內容に疑問があつて、つまり別本と看做すべきものだといふ。

尙本文を漢譯した眞字本（眞字伊勢物語といふ）もある。

註釋の書は澤山あるが、

藤井高尙　伊勢物語新釋

が良註と謂はれてゐる。

（尙國華には澤山この物語を繪畫化したものがある。一〇七號二〇二、二〇三、土佐隆相筆伊勢物語名所歌合繪卷　八一號六四二、六四三光琳畫伊勢物語畫八九號九二—九三光琳畫伊勢物語畫　一一七號一六二—一六三光琳畫伊勢物語色紙繪　一二四號六六—六七抱一畫伊勢物語圖　一四二號卷頭二、三、四、住吉如慶筆伊勢物語繪卷　一九六號四〇九、四一一、住吉如慶筆伊勢物語繪卷　二三三號二九九、光琳筆伊勢物語圖　二六〇號、一七七土佐光起筆伊勢物語繪卷　二八三號一四三岩佐勝以筆伊勢物語圖）

いそのかみささめごと　石上私淑言　二卷

本居宣長文化十三年（一二四七六）の著、歌道につき著者自らいそのかみふるき歌人の心になつて今の人にささめききかさうといふ態度で執筆したもの、全篇問答體で書かれてある（續歌二、本居宣長全集五）

いたみふう　伊丹風

西山宗因の門流宗旦に始まり、上島鬼貫に大成し、鬼貫の門人高橋只川、山下其勢によつて繼承せられ、伊丹を本場とした俳風を云ふ。その特徵は「附け」に新味あり俗言をも多く取り入れ、俳句は脫俗自然、用語や姿よりも着想の詩味に重きをおいた。

いちあくのすな　一握の砂

石川啄木四十三年出版の歌集で四十一年夏以後の作歌一千餘の中から選んだものである。卷頭「函館なる郁雨宮崎大四郎君、同國の友文學士花明金田一京助君に捧ぐ……また一本をとりて亡兒眞一に手向く」とあり

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる。

大といふ字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて歸り來れり（神を愛する歌）

教室の窓より逃げて
ただ一人
かの城址に寢に行きしかな（煙）

神さびし七山の杉
火のごとく染めて日入りぬ
靜かなるかな。

人ひとり得るに過ぎざる事をもて
大願とせし
若きあやまち（秋風のこころよさに）

函館の床屋の弟子を
おもひ出でぬ
耳剃らせるがこころよかりし。
世わたりの拙きことを
ひそかにも
誇りとしたる我にやはあらぬ（忘れがたき人々）

手套を脱ぐ手ふと休む
何やらむ
こころかすめし思ひ出のあり。
賣り賣りて
手垢きたなきドイツ語の辭書のみ殘る
夏の末かな（手套を脱ぐ時）

など所謂生活派の代表的な感味の横溢したもの五百五十一首を收めてある（啄木全集第二卷四二三—五六三）新興文藝叢書第一編、春陽堂

いちえう　樋口一葉　明治五、三、二五—二九一一、二三、廿五歳

山梨縣の出身、舊幕臣則義の第七女で東京池ノ端小學校卒業後歌文を中島歌子女史に、小説を半井桃水氏に就て學んだが、大部分は獨學苦心によつて修業し、早く父に訣れ、貧苦の一家を春貢うて筆耕し、廿四年一月以來始めて小説を作り、闇櫻・濁り江・丈くらべ・われからと一作毎に聲價を高め、明治を通じて第一流の閨秀作家たるの名を博した。彼女が創作壇に立つたのは僅かに五ヶ年であつたがその間に書いた二十餘編こそは明治斯壇の貴重なる收穫であつた。彼女は又文をよくし「通俗書簡文」は廣く行はれ、日記文にもその生活苦の體驗をさながらに述べた立派なものがある。書も巧みで假名書が殊によろしい。今「一葉全集」二册にそれ等の大部分が收められてゐる（湯地孝氏樋口一葉論）

いちえうしふ　一葉集　詩五編　散文三編

島崎藤村三十一年の春發表の第二詩集で「春やいづこに・鶯の歌・銀河・白磁花瓶賦・きりぎりす」の五編を收め、散文「利根川だより・木曾谿日記・七曜のすさび」の三編がそへてある。詩風は矢張り若菜集の成長した形想である「若菜集參照）（藤村全集第一卷二七五—三九三、これは原本とは幾分變へられてある）

いちく　田川移竹　二三七〇—二四二〇、寶永七—寶歴一〇、五十一歳

徳川期の俳人、京都の人、松本竿秋（松本淡々の門人）について俳諧を學び一名俳として知られて居つた

いちぐ　高梨一具　二四四一—二五一三、天明元—嘉永六、七十三歳

出羽の生れで、早く出家して禪僧となり、磐城の福島で一山を住持し晩年は江戸に出た。俳人乙二の門に入り俳諧をよくした。別號、一具庵。

いちごりやうぎ　一語兩義　（言掛、秀句、酒落）

「不死」の藥を燒いたので「ふじ」の山と云ふとやうに一つの語に二つの意（こゝでは藥と山）を含ませるいひ方、我邦人のひどく好んだ修辭で、竹取や古今の歌の頃から用ひられ謠曲道行文には更に多く用ひられ、徳川期には戯曲始め各種文學にとられ殊に戯作ではこれが唯一の生命のやうになつてゐるが、文學的見地から見てはさほど價値あるものではない。

いちじく　無花果

中村春雨が三十四年五月大阪毎日新聞の懸賞に當選した小説で、當期の家庭小説中の傑作である。梗概は、「戀に破れた鳩宮庸之助は渡米して多年の苦學に神學士の肩書を得、愛人惠美耶をつれて歸つた處、兩親は異人の嫁を悦ばず、彼の姉で新橋の藝妓にまで身を沈めて彼の學資を見てくれた姉お柳は今富豪田島の愛妾に圍はれて居るが、これとて惠美耶を悦ばない、田島も「牧師などよして會社の外國課にあきがあるからそれへ勤めてはどうか」など勸めるけれども彼は飽くまで敬虔なる神への奉仕者として淸い生涯を送りたいと思つた。然るに彼が初戀の岸野家の令孃お澤は彼を慕ふの餘り郷養子を殺して牢屋に入り獄舍の中で彼の胤お卷を産み落したといふ……これを聽いては自責の念に堪へず早速監獄を尋ねて久しぶりにお澤にもあひ、暗い囚で生まれたといふ吾娘をも見た……つゞいてお澤の逃亡、彼のかくまひ、それがあらはれて共々入獄やがて放免といふに至るまで、惠美耶が純眞高潔の愛は益々高く熱く、宛ら神の試錬を歡んで受けるが如きいそ〳〵しいかしづき振りに、父も母も姉もお澤も周圍は次第に好感を持つやうになり、遂にこの暗鬱な一族が救うて靈の彼岸に希望を認めて明るく世を過すやうにした。彼も亦一時は自殺まで企てたが、これも惠美耶の愛によつて甦り先輩植木牧師の忠告に從つて光明ある使徒の生活に入つた。」（菊版二八五頁明治廿九年廿五日、金尾文淵堂）

いちてう　淺田一鳥？
德川期櫻町天皇の延享頃の人、大阪に居り、元謠曲の師匠をして居たが後、戯曲に筆を染め豊竹座の座附作者となつた。一谷嫩軍記、四段以下はその傑作で他との合作で有名なものに播州皿屋敷・祇園祭禮信仰記・玉藻前曦袂等がある。單獨の作には渡邊橋供養・玉藻前曦袂・道成寺現在鱗等凡て三十四種ある。

いちのたにふたばぐんき　一谷嫩軍記
寶暦元年（二四一一）十二月大阪豊竹座上演の爲めに書下されたもので、三段目陣屋の段までは並木宗輔の遺稿あとの二段を淺田一鳥・浪岡鯨二が增補した。「義經か一の谷を攻める時須磨の陣所の若木の櫻ないたはつて「一枝を切らば一指を切るべし」の制札を渡された。熊谷は之を「平家の若公達を無下に殺すな」との謎と解き、丁度一騎打の相手が敦盛であつたので我子直家を斬つて身替りにした（敦盛の母藤の方は熊谷の愚人である）すると御影の里の彌陀六の家に敦盛の幻が現れて、青葉の笛を渡し石塔を跳りへて消えた。それで疑がかゝつて彌陀六は義經の前に召し出されたが眼敏くも義經は「彌陀六實は彌平工宗清なること」を看ぬき、平治の亂の當時彼のお蔭で一命を助かつたことを懷ひ、之を咎めず却て昔の恩を謝した。「あの敵となり味方となるも夢の夢、假のこの世に味氣なし」と世をはかなんだ熊谷は一念發起入道して諸國行脚の途にのぼつた」
之を主想として尙薩摩守忠度が岡部六彌太に討たれたことを脚色して居る。蓋し熊谷物は「熊谷蓮生坊」「一谷さかおとし」「須磨都源平躑躅」「扇屋熊谷」の四作があつてこれはその次に出て最も多く「須磨都源平躑躅」に示唆を受けて居る（並木宗輔淨瑠璃集、演藝畫報、大正四年三月號「一谷嫩軍記研究」依田學海氏戯曲十種）

いちはらわう　市原王　？
萬葉歌人、天智天皇の御孫安貴王の御子、天平一五、五從五位下、勝寶元四、從五位上、勝寶二、一二、正五位下、寶字七、正、攝津大夫、寶字七、四、造東大寺長官、歌人は萬葉、三、四、六、八、二十の各卷にある。

いつきう　一休　二〇五四—二一四一、應永元—文明一三、一一、二一、八十八歳
名は宗純、號に狂雲子・夢閨・瞎驢・國景篤等。紫野大德寺華叟宗曇の弟子となり法統をついで四十七世の住持となつた。性磊落にして機智に富み、一世の知識

として奇僧として名高く、書をも畫をも文章・詩・狂歌までもよくした。詩文を集めたものに狂雲集六卷（續群三三二、一二ノ下五三九—五九三）がある。その他「一休和尙行實一卷」「一休和尙諸國物語圖繪一卷」「一休和尙年譜一卷」「一休骸骨一卷」その言行談義を記した書物も澤山あつて後の講談落語の種を提供して居る（國華三四號一二九一休山居窮僧聽松風圖、一一九號二〇二—二〇三佛鬼軍繪圖、一七四號卷頭傳土佐廣周筆一休禪師肖像）

いつく　十返舍一九　二四二六—二四九一　明和三—天保二、七、二九、六十六歳
近世江戸の戯作者殊に滑稽本作者として有名な人で、本名は重田貞一と云つて駿府の町同心重田與八郎の二男、若い時大阪に出て町奉行小田切土州に仕へたが、窮屈なので暇を乞ひ材木屋の婿養子に入つたが此も長持ちせず、並木千柳、若竹笛躬と連合で木下蔭狹間合戰と云ふ淨瑠璃を合作し、後フラリと江戸に行つて通油町の地本問屋蔦屋重三郎方に食客となり錦繪につかふ奉書紙の攀水引を手傳つてゐる中、畫を書いたり文を綴つたりすることが面白くなり、寛政七年處女作として「心學時計草」三册の草双紙を出し、享和二年「東海道中膝栗毛」初編を出してから世評頓に上り、爾後一篇成る毎に洛陽の紙價を高からしめ、書肆も歎んで彼に旅費を給し續々道中物を書かせた。彼辭世の狂歌に「此世をばどりやおいとまにせん香のともについには灰左樣なら」彼一代の作は三百餘種、その中重なものは續帝文二一と三三に「一九全集」「續一九全集」として收められてある。

いづこへ　何處へ（どこへ）
正宗白鳥が四十一年十月一日　早稻田文學に載せた小說で、氏の出世作であり、自然主義の代表作である。現實暴露の悲哀と、絕望のあきらめを描いてこれほど鋭いものは他に類例がないまで激賞せられた。梗概は主人公「菅沼健次」は傳統の道德・宗教・風俗の一切を否定しながらも、新たに到達すべき目標はと云へば所謂「何處へ？……」ともあてどがつかない、堪へがたい孤獨に惱みながら敢て他の同情にすがらうともせぬ。人間はつひに自分一人であり、自分と他人との間には越えがたい溝渠が横たはつて居ると信じ、唯淋しい冷笑と皮肉とがあるだけだと思ふ。
「彼れは激烈な刺戟に五體の血を沸立たさねば、日に〳〵自分の腐り行くを感じ、青春の身で只時間の

中に食はれつゝ生命を維いでゐる現狀を堪らなく思つた。そして空想を逞うして色々の刺戟物を考へた。普通の麻睡劑は何の効目もない。酒なら燒酒かウヰスキーを更にコンデンスした物。煙草なら阿片。戀なら櫻木のお雷やお鶴のやうな女と甘つたるい言葉を交換したのでは微醉もする氣遣はない。正義も公道も問題ぢやない。自分を微温の世界から救ひ出して筋肉に熱血を送らすか、腸まで蕩ろかすか、それが自分の唯一の救世主だ。革命軍に加はつて爆裂彈に粉碎されようとも、山賊に組して縊首の刑に合はうとも、結果が何であれ名義が何であれ、自分を刺戟する最初の者に身を投げて長くても短かくても或は即刻に倒れてしまつてもよい。そしてこんな刺戟物が自然に自分の前に現はれれば自分から進んで近付いて行く。戰爭も、革命も、北極探險も、人間の怠屈醒ましの仕事だ。平坦の道には倦むが險崖を攀上つてゐれば時をも忘れ欠伸の出る暇もない」

いつさ　小林一茶　二四二三—二四八七、寶暦一三—文政一〇、六十五歳

近世俳人として有名（殊に昨年は一百年忌に當るので色々と論議された）。俳諧寺、蘇生坊などの號がある信州水内郡柏山村の人で、幼い時から繼母の虐待を受け、江戸に出て貧苦の中に夏目成美の保護と指導とを受け、半ば乞食同樣の俳行脚をしてまで風雅專念に渡り、父母の死別後は又その遺産について親戚と忌まはしい紛爭を生じ、遂にあきらめて淸貧寧處の道を辿つた。彼に同情の句の（殊に弱者に）多いのはその苦楚の境による。

やれうつな蠅が手をする足をする
やせ蛙負けるな一茶こゝにあり
我と來て遊べや親のない雀

けれども大體は滑稽善謔の句風である。

雀の子そこのけ〳〵お馬が通る
いうぜんとして山を見る蛙かな
おらが世やそこらの草も餅になる
罷り出たるは此藪の蚤にて候
うつくしや障子の穴の天の川
大根引大根で道を敎へけり

尙この外に「何のその百萬石も笹の露」といふ風雅の氣炎や「どうなりとあなたまかせの年の暮」と云ふ運命に從順な述懷や「ひいきめに見てさへ寒きそぶりかな」と云ふ自贊句など有名なものが多い。「一茶句集」「聯句集」「おらが春」等の作がある（俳諧文庫第十一篇・一茶一代全集・一茶遺墨鑑等に收載）

いつさい　佐藤一齋　二四三二—二五一九、安永元—安政六、八、二四、八十八歳

近世有數の大儒、江戸の人、名は坦、字は大道、捨藏と稱し、一齋・愛日樓・老吾軒など號した。初め美濃岩村藩に仕へ、後辭職して、林家の門に入り大に造詣する所あり。文化二年には林氏の塾長となり、天保十二年より幕府の儒官に任ぜられた。その學は陽明學派に屬し、間接ながら、維新の宏謨に貢獻するところもあつた。彼は又講義の名人で、聽衆に適切な講說をした。尙又四書・五經・小學に訓點を施したものが世に行はれ之を一齋點といふ。その著に愛日樓詩文集・日光山行記などがある。

いつさう　一草

古今傳授の中にあつて「かはなぐさ」といふ河藻の一種をいふ。

いづたり　和田嚴足　二四四七—二五一九、天明七—安政六、七十三歳

肥後熊本藩士弓削平八の二男（和田は養家の姓）名は千尋後嚴足と改め通稱を震七郎といふ。性來酒を好み嚴足の名も和泉樽からの思ひつきで、又醉步蹣跚の意から「眞雲（まゆり）」ともいひ、嘉永七年の大地震以後は「震」字をさけて「馬百合」とも書いた。長瀨眞幸に國學を學び、殊に萬葉を愛讀して形想共に體得して居つた。人となり不羈磊落物に拘らず、而かも尊皇尊侯丹心燃えて火の如く、慨然たる國士の意氣を以て藩務に鞅掌したが、樸實剛直、毫も相手の感情を顧みないので君侯の覺えめでたからず、生涯不遇の裡に暮らしたが、彼の世界には別に酒あり、歌あり（武術さへも堪能で殊に槍の達人）悠々として寧處した。

その歌、力めずして萬葉の眞髓を得たるが如き趣あり、酒の歌・櫻の歌・丈夫振の歌など一言すれば高雅飄逸の趣致に富んで居る。又長歌にも秀で「楠公五百年祭」の歌の如き最もその眞面目を發揮して居る。

酒のまむ友だちもがもしくしくに雪のふる夜は
寂しきものを
みるからにまうら樂しも花ぐはし櫻は花の神に
かあるらむ
美はしき御國の色を言擧せず示さんとこそ花は
さくらめ
ささらがた錦の裏はかへし見じ糸の亂れも物う

かるべみ

（肥後文獻叢書第五卷中、和田嚴足歌集、和田嚴足集補遺、佐々木信綱氏近世和歌史二五〇—二五四

彌富破魔雄氏和田嚴足と其の家集

（尙この嚴足は從來あまり認められなかつたが、明治三十四五年頃「心の花」誌上右彌富破魔雄氏が「不遇の歌人和田嚴足」と題して紹介せられてから有名になり、ついで同氏が「さたしか」「國學院雜誌」其他一二の雜誌に寄せられ、最近では當地東奥日報紙上「竹葉漫語」と題する隨筆に大分嚴足のことを書いて居られる。同氏は現に余の先輩だがこの嚴足と同じ熊本縣出身である）

いつぷう　西澤一風　二三二五—二三九一、寛文五—享保一六、五、二四、六十七歳

實名は山本治重、通稱を正本屋九右衛門といひ、心齋橋南江四丁目に住んで書賈を營んで渡世とし、傍ら戲曲小說に筆を執つた。戲曲では北條時賴記（合作）が一番有名で竹本座で、二ヶ年續けて上場された。本朝檀特山・建仁寺供養も名高い（皆合作）。小說では御前義經記（帝文三二）・風流今平家・傾城伽羅三味線等が有名だ。辭世に曰く

散りゆくや風に常盤の木の葉雨

いつぽう　西澤一鳳　二四六二—二五一二、享和二—嘉永五、一二、二、五十一歳

西澤一風の曾孫で、父を利右衛門と云ひ、彼はその二男に生れ、幼名を利藏と云ひ後正本屋利助を名のる。家道豊にして道樂として俳句や狂歌を嗜み、遂に劇作をもなすやうになり、道樂が嵩じて遂に劇作專門家となつた。而かも金の爲めにするに非ず、名譽の爲めに作るにも非ず。幼名に因んで李叟と號し（水谷不倒氏は、恐らく簑笠翁を以て自任したものであらうと云はれた）編著十數種百數十卷、就中傳奇作書七編二十一卷・皇都午睡三篇九卷（二書共新群一）は斯道有益の良著と云はれ「言狂作書」三卷は戲曲の作法を錄したもので、當時偏く愛讀せられた。從來狂言作者は役者の意を迎へることにのみ汲々としてゐたが、彼は自分の自由な立ち場からこの弊を矯めることに努め爾來作者の地位は遙に高上した。

尙彼が編作には、脚色餘錄三編九卷・綺語文章四編十二卷・讃佛乘二編六卷・徒然文顯三卷・勢語句抄三卷・綺語堂發句集一卷・忠臣藏類聚大成四十八卷・源平類聚大成十八卷・當世榮花物語十八卷・戲財錄一卷等がある。

彼が曾祖父の名「九左衛門」を名のつて退隱する時の狂歌は「臍の緒を落して四十九左衛門是より先きは生きただけ德」（國刊一期新群一、水谷不倒氏西澤一鳳小傳）

いづみしきぶ　和泉式部　？

後一條・後朱雀・後冷泉の朝の女流歌人として梨壺五歌仙の一人に數へられてゐるが、王朝を通じて最質共に優れた女流歌人としては寧ろ彼女こそ第一人者たる觀がある。始め和泉守橘道貞に嫁し、一女（小式部內侍）を産み、夫の歿後中宮上東門院に仕へたが、才色共に秀で、誘惑も多く爲めに幾たびか戀の對象をかへ（爲尊親王・敦道親王・敦明親王・藤原保昌・道命阿闍梨等）貞操上とかくの非難は免れぬが、和歌にかけては特出して居つた。家集に和泉式部集五卷（群二七五・一〇、二二五—二五六・續國一一六四—一一九〇・和泉式部續集丹叢五・六、二册）があり、後拾遺（六〇餘）・千載（二〇餘）新古今（二〇餘）等にも採られてゐる。又別に和泉式部日記がある。これは敦道親王との情事を主にした日記であるが、散文は彼女の不得手だつたと見えて歌に比べると見劣りがする。

その咏亡き小式部內侍を悲しんでは

もろともに苦の下には朽ちずして埋れぬ名を見るぞ悲しき

夫保昌の不機嫌を心配して貴船の社へ日參の頃には

物思へば澤の螢も我身よりあくがれいづるたまかとぞ見る

うき世のさがを歎いては

いかにせむいかにかすべき世の中は背けば悲し住めば住み憂し

など歌つたが、一番多いのは戀の種々相であつた。

あらざらむこの世の外のおもひでにいまひとたびの逢ふこともがな

人の身も戀にはかへつ夏蟲のあらはに燃ゆと見えぬばかりぞ

岩つつじ折りもてぞ見るせこがきし紅ぞめのきぬに似たれば

いづみしきぶしふ　和泉式部集

いづみしきぶ「和泉式部」を見よ。

いづみしきぶにつき　和泉式部日記（和泉式部物語）

和泉式部が上東門院に在仕中長保五（一六六三）年四月より、翌年正月までの日記で、主として帥の宮敦道親王との情事を委曲に寫して居る。思ふに式部の數多き

戀愛生活中、白己の容姿と年齢と境遇と、對手の地位と風采と愛と齢とに於て最も樂しい一箇年であつたらう、けれども彼女は矢張獸人であつて文章家ではないといふ評が當つて居らう。

扶桑拾葉集・群三二〇、一一、五四五—五七五等に收まる。

いづみしきぶものがたり 和泉式部物語

「和泉式部日記」を見よ。

いづも 竹田出雲 二三五一—二四一六、元祿四—寶歷六、一〇、二一、六十六歲

名は清定、父は清一と云つて阿波出身、彼は江戸で生れて、京で傀儡師をして、大阪へ來て寛文二年操座竹本座主となる。享保八年文耕堂と合作して近松の閲を乞うて「大塔宮曦鎧」を出したのを手始めに、三十餘篇の戲曲何れも相當の出來榮えを示したが、中にも傑作と定評のあるのは菅原傳授手習鑑・義經千本櫻の二種で、尙彼が主として立案構想して合作した假名手本忠臣藏は斯界の獨參湯としていつでも何處でも大當りをとる名作である。之を近松の作と比べると文詞の妙、着想の詩趣に於て一歩を輸するものある代りに、構想の整齊、舞臺上の効果に於ては一段優つてゐる。(續帝六竹田出雲傑作集)

尙彼の作品中佳作と認めらるゝものは、平假名盛衰記・蘆屋道滿大内鑑・三桝大夫五人囃・甲賀三郎窟物語・小栗判官車街道・今川本領猫間館・男作五雁金・雙蝶蝶曲輪日記・小野道風青柳硯

いづものくにのみやつこがかんよごと 出雲國造神壽詞

出雲國造が新たに家督相續した御挨拶として潔齋して忌室に籠り、卜定せられたる日時に上京して色々の國つものを捧げ自家に傳はる出雲神話を奏上して御代を謳歌する詞で、上代文學壽詞の中でも古いもの優れたものの一つである。出雲國造とは地方官としてのそれではなく大化の改新以後在來の國造中その國の國社の神官として任命せられて尙國造の名を稱するもので出雲の大社の國造は世々天菩比命の子孫が任ぜられて居る(今の千家男爵家がそれ)壽詞は吉詞・餘其騰・賀辭・齋賀詞・吉事などあて神話中のめでたいもの即ち吉兆の神話とも謂ふべきもの、このことは元正天皇の靈龜二年二月に始まり爾後定例となつたその式次第の細かなことは貞觀式にある。

いづもふどき 出雲風土記

天平四年(一三九二)に進獻した風土記。古風土記中完全に殘つて居るのは唯この一種だけである。尙ふどき「風土記」を見よ。

いとえ 橘糸重 明治六、一〇、一八—

東京府士族橘良珉第五女、東京音樂學校卒業後同校教授として奉職傍故佐々木弘綱翁や今の信綱博士の許に通ひ、竹柏園門下の才媛として聞えた人で、專門の音樂以外文も詩もよくしたが就中歌が一ばん秀でてゐる。その咏は思ひきつた强い表現によつて女性の感激を高潮したものが多い。

竹柏園集第二編(三十五年五月廿七日發行)中より

恐ろしき名をおはされて捨られてしげみにひそむ鬼あざみ哉

おもひ出も望もなくて經ぬべくはなか〳〵安き世ならまし

ひろき世にひとり殘りて身も老ぬ今はの水をたれにもとめむ

いたづらの昨日の悟り今日のまどひはかなきものは心なりけり

玉琴(明治四十一年四月十五日發行)中より

あたゝかき春の光に垣こえて野にくるひたる蝶に罪ありや

消えていにし昔の夢にすかされていけるともなくいけるわれ哉

來し方をさながら夢となしはてゝ獏にはませむ思ひも出でじ

しのぶれどあまりにつらき夕べかな我胸さゝむ劍かせ人

いなふね 田澤稻舟 明治一一—明治二九、九、一〇、十九歲

山形縣鶴岡の人、名は錦子、父は醫師、文學少女とも謂ふべき型の人で、故郷を飛び出して上京し山田美妙齋と戀愛のうき名を流したそれも束の間やがて破鏡の歎を抱いて歸郷、煩悶遂に病を發して逝いた(一說には自殺だともいふ)二十八年から廿一年にかけて小說醫學修業・白薔薇・峯の殘月・小町湯を文藝倶樂部に寄せその他尙數篇の作品があつた。

いぬつくばしふ 犬蒐玖波集 一卷

山崎宗鑑の俳諧句集で「蒐玖波」は日本武尊の故事から連歌や俳諧に襲用した題名だがそれに「犬」をつけたのは「通俗化滑稽化」を意味するものであらう。蓋し和歌に制の詞がやかましくなつた時それに對する一種の解

放運動として連歌が唱へられたものが、段々世を襲れるにつれて又もやその連歌に繁鎖な制限が出來た。斯の如きは、その當初の趣旨に戻るものとして更に〳〵俳諧なるものを立てゝ、一頃俗なり卑賤なりと卻けられた巢本調の通俗的なをかしみたつぷりな俳諧なるものを始めたのが彼れ宗鑑の立つてゐる俳文學史的位置でそを如實に示したのがこの一卷である。

一、連句

碁盤のうへに春は來にけり
うぐひすの巣ごもりといふ作り物
あなうれしやな餅いはふ頃
梅が香のまつ鼻へ入春たちて
かすみのころも裾はぬれけり
佐保姫の春たちなから尿をして
しうとのための若菜なりけり
澤水につかりて洗ふよめが脛
うそをつき〳〵花をこそ見れ

二、發句

わかなといふ下女しかられければ
つまれてはまたたゝかるゝ若菜哉
衣川ちかき所にて

辨慶もたつやかすみの衣川
手をついて歌申し上ぐる蛙哉
若々しいつまであらしふきのたう
ぬす人をとらへて見ればわが子也

この書は永正十一年の編に係り、その版行寛永の比であらうといふ（俳諧年曆略記・國書解題・池田秋晏氏日本俳諧史）今は俳二に收まる、

いはしみづものがたり　石清水物語（正三位物語）　二卷

鎌倉時代、源氏物語系統の小説で「常陸守の男「鹿島の君」が右大臣と宰相の君・との間に出來た姫君を戀しても得られず、後に石清水で夢に姫に逢うてそれをせめてもの心やりとして出家する」といふ筋で年代は寳治元年から文永八年までの二十四年間の作と推定せられる（國刊一期續々群一五）

いはみぢよしき　石見女式　一卷

王朝歌人四位安部清行（一四八五—一五六〇、天長二—昌泰三）の作といふ。和歌四式の一つ、本文傳はらず石見女體腦寫本一卷原本に校正を加へたものだといふ

いひかけ　言掛

「一語兩義」が見よ。

いへ家　二卷　二十回

島崎藤村四十三年作の小説で「春」に繼ぐ自叙傳小説とも謂ふべく、自然主義派の代表作として特筆せらるるものである。

「漢籍の素養深く公共心に富んだ小泉忠寛の五子の中長男「實」は、性來の山師氣質に、度々の失敗を重れて二度まで入獄し、遂に滿洲へ飛び出す。二男の「森彦」は養子に行つて一女お延をあげて後、單身上京して、ずつと宿屋住まひをして、一度弟に二百圓無心を言うた外は一厘も身内の補助を借らず。二度おつきあひでお茶屋に行つた外は、ちつとも惡遊びもせず殆終「三吉」と力を合はせて一族を保護する。三番目の「お種」は橋本家の達雄に嫁いだ。こゝは名だいの賣藥屋で大番頭の嘉助、手代の幸作、下女のお春までもおいて商賣繁昌正太とお仙との一男一女を儲けて始めは極順境だつたのが、生活が贅澤になり銀行が破綻して主人の達雄はお種を連れて、伊豆の伊藤の溫泉に入浴に行つて、急用があるから一寸上京すると云つたなり、行方不明となり、新橋の某妓と、名古屋にしのび、後には神戸で小學校教員をつとめ最後に實と滿洲に出かけた。四番目の「宗藏」は若い時の惡あそびに、梅毒をうつされ一生廢人として實や三吉や森彦の厄介になつた。末の三吉は此編中一番太い線で描かれてあつて、恐らくは作者自身の閲歴であらうと思はれる。文學者で詩人で、牧野と云ふ愛護者によつて、大した勞作を出版して、幸に世間から多大の反響を受けたり、もとの先生が經營してゐる信州の田舍の私立學校で、俸給を割引して、献身的に授業したり、あらゆる物資の供給をしながらもこれが、人道上正しいことかどうか、或は、實により以上の救濟を庶幾する望ましからぬ奬勵となりはすまいか」と反省したりするところ最も讀者の同情を唆るものがある。妻は名倉の總領娘「お雪」と云つて誠にやさしい、田舍娘始めは彼女の從兄の勉に宛てた手紙の一件から、又三吉の女友達の曾根一件から二三回、愛の破綻を見やうとし、三吉自身のメランコリーな氣質から、結婚を呪つたり、家を庵にしたいと思つたり單身漂泊を願つたり、ホームを解散しようとしたりするが、お勝、お菊、お繁、種夫、新吉、銀造と段々子供が出來て、それが病氣したり、亡くなつたり、あどけない言動を演じたりするにつれて、苦樂を共にする結合がだん〳〵二人を深みへ導いて、「もう、どうして

もお雪は自分には無くてはならぬもの」になつた、又一夏、お雪が母の死につき子供を連れて歸省の留守に三吉叔父さんの御用を聞くべく森彦の娘のお延や、實の娘のお俊お鶴などがずつと手傳ひに來てゐた時に、中年の戀の特徴とも謂ふべき性の衝動で、一度お俊の手を握つて、後で、烈しい自責の念に驅られるところなどを見ると、三吉はどうしても文學者らしい欲求と反省を告白してゐる。達雄の子正太は、叔父の引越しと聞いて額を鈎る麻繩を持つて來る程の氣轉者であるが、衰へた橋本家を再興しようと云ふので、榊と云ふ同じやうな富豪の息子のなれの果てと二人、兜町の鹽瀬に勤めて一攫千金を夢みてゐる中、向島の小金と云ふ藝妓にかゝり、妻の豊世が意見すると叱り飛ばしてその着物を質におかせて、その金で小金と芝居觀に行つたりなどして色酒に身を持崩し、失敗に焦れて遂に結核となり、名古屋の病院で亡くなる。

小泉家と橋本家とは、共に舊家で、共に、村民からは立てられて、一方は公共のために、一方は半ば公共のために、半ばは我家の生活の派出なために(正太の結婚式に千五百圓も費した)產を傾け、それをもりかへさうとして實は色々と事業を計畫し、達雄は計畫するところまで行かず、國へ歸へれば、お種も悦ぶし、村も滿更知らぬ顏もせぬ所を、偶然にも實と共に滿州へ飛び出した。名家頽廢の氣風の頗る相似たものがある。お雪の實家の名倉家は、前兩家とは反對に父は精力主義の人で、老いての後も、大抵の外出は徒歩で疲れることを知らない。三吉があまり小泉の一族をかばふのを兄弟孝行も考へものだと云つた。

曾根は最も新しい女、始終第一義的の思索の無解決に惱まされてゐる人。お種は舊日本の女らしい女、家を城廓として飽くまで夫に親切な人。お雪は現代舊派を代表する女、夫の急用に、父から貰つたお金を出すところなどは、山内一豊夫人式で、嫁いだ匆々「絶望の雪子より、戀しき勉樣」など書いた長い手紙を書くところは明治式で、「阿父さん、わたしを信じて下さい」と泣いて夫に訴ふるところはこの新舊二式が、うまく融合しかゝつたところであらう。豊世も現代の女性でお雪よりは稍新しく、氣位が高く、女子職業的觀念もあつて、簿記を習つたりするが、お種と一緒に東京に下宿してゐる間にお種は達雄に、彼女は正太に遺棄された時のことで、世にも珍しい嫁姑の親密が成立つて隨分立入つたことまでお種の指導を受けたので大分舊

思想も混入した。

お俊は近頃の女學生によく見られる型(タイプ)で、一種異性を惹きつける魅力があつて、而も容易に誘惑にかゝらない强い女である。お鶴とお福とは都會の處女的無邪氣お仙とお春(橋本家の女中)とは田舍娘の初心な型である。實、達雄の山師氣に三吉の聰明と、正太の俊才と森彦の英明果斷と名倉の父の强い意志とをつきまぜた男性ならばよくこの三家ともを榮えさせることが出來たらう。

其他、此篇に現はれ人物には、お雪の妹で、勇の妻になつたお福、橋本家の大番頭で、老人で頭が禿げて、寫眞をとる時、樹の蔭を選んで立つた嘉助、同若い手代で後に事實上橋本家の賣藥業を相續した幸作とその妻、正太や三吉と心安い、温和で、邪氣のない青年山脇直樹、三吉の舊師で、結婚の媒介者たる大島先生大島先生の先生に當る田舍の私立學校長、實の手先になつて奔走した稻垣夫婦、お倉の姉お杉、寺島家、豊世の母、拓落失意の人で、三吉が東京へ引起す時花輪を汽車の窓から贈つた老理學士、三吉の創作の愛護者牧野、名倉の父母、祖母、風景畫家S氏お雪の季の妹お茂などがある」

以下逐次要項をあげる(頁數は新潮社縮册版による)

上卷(一—二二八)

一、

三吉久し振に歸省、妹の嫁いでゐる橋本家の座敷に滯留。

お種「私は家を出ない。女はこんなもの」と云ふ(八—九)

お種出入の啞の髮結を通じて村のニュウスを知る(一七)

家と家との結合てふ結婚觀(一九)

二、

三吉橋本の藏書をあさり、漢譯の舊約全書などを見る。(二三)

阿仙とても濃厚な土地の女の血をわけた娘(二四)

ネブ茶の御馳走(二七)

正太の生ひ立ち(二七)

直樹(二九)

御嶽參り(二九)

三吉夢物語(三一)

御嶽祭り(三二—三四)

お種の受けた小泉家の教育(三二—三三)

祭の夜物語り（三五）東京にある小泉家のこと。實や森彦や宗藏の噂）
お仙とお春との娘らしい對話（三七）（姿がよく似合ふことなど）
記念撮影（四〇—四一）

三、

三吉出發歸京（四三）
實の生ひ立ち（四四—四五）
少壯な孝子、痛ましい犧牲者（四四）
直樹の父（四四）
三吉の結婚話（四四）
お倉、宗藏（はみをかへす癖）三吉—實の入獄中の留守居の苦を共にした心の結び（四九）
稻垣は實の手先（五〇）
お俊、蕭のけいこ（五一）
宗藏の生ひ立ち、並に三吉との關係（五二—五三）
宗藏絶望の語（五六）
三吉結婚式の話（六〇—六一）
稻垣の細君訪問（六三—）
三吉の就職口—西京の方、信州の方、後の方に決定（六五）

四、

名倉乘船の電報（六五）
結婚式の話（六六—六七）お杉手傳（六八）
お倉嫁いだ時の思ひ出語り（六九）
三吉宗藏の世話を頼む（七一）
挨拶まはり（七一）
三吉の女友達にも引合はせ（七三）
曾根—お雪の眼に映つた彼女（七三）お雪のクラスメートの叔母に當る人、細長いせともの火鉢を別々に出す家風（七二）

五、

お雪の妹お福來る（八四）
お雪お福南向の部屋で、舊い寫眞を取出し、昔噺に耽る。世取りの年長の妹、丸十の分家の次の妹。
お福は母に宛て、妹の勸めで勉（從兄）と結婚する旨の手紙を書く（八七）
母からの手紙はお雪の唯一の樂しみ（八七）
三吉、馬鈴薯を掘るよろこび（八八）
お雪姙娠の兆候。
三吉、妻の不在中、彼女が勉に宛てゝの手紙を見る。
一種のラブ、レターで、戀しいあなたを振り棄てゝ心

ならぬ夫を夫として、かしづく不幸を訴へたもの、終に「戀しき勉樣へ、絶望の雪子より」とある。三吉悒悒として散策、校長の宅に行く。ソクラテスとその妻君の話や、アメリカ夫人の話を聞いて心持稍和む（九二—九四）
三吉、勉にあて、手紙を認め、妻にも讀み聞かす—三角關係の一法式（九六—九六）
お雪口では云へませんからとて、手紙で夫に辯解する（九七）
勉の返事二通（九九）
月を越えて名倉の父來訪（九九）
三吉の悅び（一〇〇）
三吉、女を知りての失望（一〇二）
嘉助行商の序に三吉の家に寄る（一〇二）
三吉は家に歸ると、直ぐ郵便のことを聞く（一〇四）

六、

曾根千代よりの手紙（一〇五）
曾根の人となり（一〇五—一〇六）
三吉、曾根を尋ねた處留守、歸途、曾根と始めて逢つた時のことなど思ひ出す—メンデルゾンの曲（一〇七）
珍客直樹（一〇七）姉さんと云うて貰ふお雪の悅び。
（一〇七）
三吉曾根とかけちがひ（一〇九）曾根の境涯（一一一）
お雪は自分が夫の伴侶でないことをしほれて云ふ（一一二）
三吉の家庭、骨牌の遊び、直樹の若い物言ひ、一同大笑ひ（一一四）
曾根三吉を訪れ。—大晦日に日記を燒いて、元旦に遺言狀を書いておきました。だまつて贈物をおいて行く人（一一六—一一七）
父としての三吉「房ちやんは俺の子か？」と疑つてみたり、「この子は可愛くて〳〵」と愛して見たり（一一七—一一八）
三吉漂泊を思ふ（一一八）
かんしやくが起きると餘計働くお雪の癖（一一九）
母の手紙（一一九—一二〇）
夫婦の無理解（一二一—一二二）
お雪又姙娠の兆（一二三）
お房の智慧熱は夫婦和合のモチーヴとなる（一二四）
三吉、お雪に隱れて曾根を訪ふ。曾根が、東京から借りて來た本は、三吉も、曾て長くその思想に住んで居たもの（一二八）

三吉夫婦の氣まずさ（一三一―一三二）
三吉、會根へ最後の手紙を書く（一三二―一三三）
解散の宣告（一三三―一三五）直樹の調停、淺間山の話。一度行かない馬鹿、二度行く馬鹿（一三五）

七、

一年たつた（一三七）
お房のもゝずれ（一三八）
お雪近所の兒に教へる（一三八）下女の學問嫉ひ（一三八）
三吉東京より歸る（一三九）父さんの土產はいつでも本ばかりだ（一三九）
お杉の死（一三九）
お房のあどけなさ（一四〇）
隣のおばさん「又赤さんのお出來なさる兆候云々」と云ふ。
實の電報「スグカネオクレ」（一四二）お雪實父から貰つた金を出す（一四三）
子供を育てる經驗（一四三）
三吉夫婦、田舍風に漬物で茶を飲む（一四四）
三吉、三ヶ月ばかりかゝつて書いた草稿を賣る（一四五）
甲州の人西（小壯官吏）中村（新聞記者）來訪、ゾラ主義の批評、牛額と云ふ蕈の鹽漬（一四六―一五二）
三吉大根をつゝしてやる（一五六）
森彥よりの消息（一五七）―實又もや入獄、實の家族保證の相談（一五七）
母と子とは一緒になつて泣いた（一六〇）
三吉家婢の取扱に就いて妻と衝突（一六〇―一六二）

八、

翌夏橋本達雄、お種夫婦、汽車で通過、三吉夫婦、お房と、二歳のお菊とを連れて、プラットまで面會に行く（一六三―一六四）
達雄出發（一六五）伊東行。
橋本若夫婦（正太、豐世）便船で、伊東に行く（一六五―一七五）
正月入湯客の餘興―お種、林の隱居と田舍萬歲の二輪加（一七五）
豐世上京（一八〇）
竹翁の昔から續いた橋本の家が、一夜の中に、土蜜が崩れた（一八一）
窓の外にはあたゝかい雨の降る音がする……お種夫を思うて情思綿々（一八三）

九、

豐世上京簿記を修む。
お種上京豐世寺島の母に百圓貰ふ（一八六）
姑と嫁との共鳴（一八七）
豐世、達雄のありかを、お種にあかす（一八八）
三吉上京（一八九）
お雪二番目の妹お愛（一八九）
森彥の話―正太の婚禮に千五百圓（一九〇）三吉藏で日記を見たおもい出（一九二）三吉俸給を割いて學校に盡す。橋本の妹お種を引きとることを承諾（一九三）
お種云ふ…… わたしはさう云ふ日を送つてゐる（一九五）
妹と三吉と豐世と一つ蚊帳の寢物語り（一九八）

一〇、

一年餘の後、お種三吉の宅のかゝりうどとなる。彼の女らしい滿足子供に馴染まれて（二一一）
三吉勞作を思ひ立つ（二一二）
「妙なものだて」はお種が、達雄の噂をする時の冒頭としていつもの癖（二一六）
小泉の老母の身だしなみ―六十あまりになるまで、おしろひを塗る（二一四）
お雪さん、髮をハイカラに結つてあげよう（二一五）
三吉木曾の方へ「繁ちやん」を養子にやらうと云ふ。
お雪の反對（二一六―二一七）
正太來訪（二一七）
お種、嘉助に迎へられて、家事の整理に、故郷へ歸る（二二〇）
無心のお房の子守歌（二二二）三吉はこれに勇氣を得て牧野宛に電信を書く（二三一）
牧野三吉の生活を保障す（二二三）
于澤山な系統（二二五）
三吉東京へ引越す（二二五）老理學士や、牧野の見送り（二二七―二二八）
下卷二二九―四九一

一、

東京へ移轉後お繁死ぬ。一年過ぎてお菊も死ぬ（二二九）
企業のために、さすらひの正太（二三一）
實出獄、森彥、山林事件解決、三吉勞作仕上げ（二三一）
或ロシヤ人の書いたものに「酢乳」云々。
三吉が勞作を終へた心持（二三三―二三四）
種夫出產。お延國から仕事の爲めに上京（二三六）

達雄教員をしてゐるとの話（二三六）
三吉、正太に金若干をやる（二四〇）
お房發熱入院（二四一）腦膜炎。死亡（二四八―二八九）
三吉、磯邊の温泉宿に宿泊（二五五）
名倉の老祖母の死、土產を澤山持たせてお雪をかへす（二五六―二六一）

二、

お雪の留守居、娘達の集まり、お俊、お鶴、お延、三吉の白髮を拔く（二六六）若い集ひ氷買ひ（二六七）お俊、人の裏を見る（二六八）お俊墓を好む（二七〇）お俊祕密話（二七〇―二七一）直樹の手紙（二七二）

三、

實、三吉に遇ふ（二七三）四十圓の無心―家の道具を入質（二七四）
娘達に浴衣地を買つてやる（二七五）
三吉お俊の手を握る（二八〇）お倉に四十圓を手渡す（二八五）
直樹三吉を訪ふ「俺は逃げよう」と三吉は云ふ（二九一）
正太と榊と來る（二九一）
お雪歸る（二九六）
三吉は以前のやうに自分が苦痛なしには、考へられなくなつた（二九八）

四、

三吉、努力の爲すなきを感ず（三〇〇）
風景畫家S氏、三吉の家相が惡いと云ふ（三〇一）
三吉、大島先生に遇ふ（三〇二）
森彦、三吉に「二階のある家は危いぞ、お仙の妹が亡くなつたのも二階からおちたのだ」と云ふ（三〇六）
市內に引越したお雪の眼には、流行に後れまいとする女のかみかたちが眼につく（三〇七）
女中山出し「八百屋のおかみさへ三味線を彈く」とて驚く。
正太、額のつり紐を中途で求めて來た（三〇九）
風景畫家のSさん（三〇九）
三吉、モルモットのニックネーム（三一〇―三一一）
正太の通ふ鹽瀨仲店（三一一）
三吉と榊どちらも豪家の息子のはて（三一三―三一九）
二人「金、金」と呼ぶ（三一九）
森彦の手紙いつも簡單（三二〇）三吉と二人して實を戒む（三二一―三二三）
實の滿洲行（物あはれな描寫）（三二三―三二五）

三吉、新しい長篇に筆を執りかける（三二八）
正太「初冬らしい夜を語りたい」とて三吉を案內す（三二八）小金をよぶ（三三〇）老松姐さんも（三三一）
三吉、森彦の宿を訪ふ（三三四）
三吉、豊世やお種を評して「自分を高く買ひ過ぎてる」と云ふ（三三六）
三吉と森彦と二人して、正太を戒めようと相談する。（三三七）水天宮守り札（三三八）正太、三吉を訪ふ（三三九）
山ナの勉來訪（三四一）
幸作、正太よりも年若今は橋本の番頭（三四二）
森彦と三吉出し合つてお俊の嫁入の支度をしてやる。（三四七）
兄弟のために金策することの可否の疑問（三四七）
すてばちの宗藏の强味（三五〇）
お俊三吉の矛盾「演說では女は眼をあいて男を見よと云ひながら、自分達始の躾けはそれとは正反對」を怀かる（三五一）
お鶴腦膜災で死亡（三五四）
忠寬の最後話題に上る（三五六―三五七）
お俊の嫁ぐことに就いての可否の議論（三五九）
正太　三吉お俊は古い家から出た芽（三六〇）

六、

幸作養子分（三六一）
お種と達雄との往復書信の噂（三六三）
お仙上京、三吉に逢つて悅ぶ（三六六）迷ひ兒となる（三六六―三七四）正太の近くに火事（三六九）
三吉の戲談―お種の後から眼隱し（三七六）
二男新吉、三男銀造をお種に見せる（三七八―三七九）
實に預かつた父の遺筆、忠寬の歌集、萬葉假名の短册
絕筆「慷慨憂憤の士を以て狂人と爲す悲しからずや」
おれを熊にするとて「熊」と云ふ字を書いた話（三八一）
森彦の二女お絹、勉强のために上京（三八一）
正太三吉の受判で二千圓かりたしと申込む（三八三）
豊世「今までの家風は沈默に過ぎるからもつとめいめいの思惑を云ひませう」と云ふ（三八七）
森彦「自分の茶屋あそびは二度だけしかない」と云ふ。

七、

鹽瀨破產、更に「廣田」と云ふものゝ名義にて營業（三九二）
一同撮影（三九二）正太「世が世なら傳馬の一艘も買ひ切つて云々」の歎（三九二）

豊世正太の愛妓「小金」を評す（三九一）三吉「家と云ふものは煩しい」とて歎く（三九二）
お雪（三十一歳）安眠の有様（三九七）—この頃に於ける三吉夫婦の關係（三九八—三九九）橋本の姉と、名倉の母とは兩極端（三九九）
お福男子を產む（種夫と同年）
三吉此儘「家」を祇園精舍と見る（四〇四）
正太、廣田の店のために一策を立てたと云ふ話、紀文甍具の噺（四〇五）
夫は家を寺と觀ても妻は尼には非ず（四〇六）
お雪「女なんぞに生れるもんぢやない」の歎（四〇八）

八、

達雄滿洲に行つたとの噂（四〇九）
相場師の神經質と嫉妬心とは藝術家以上（四一一）
三吉「女を見ると苦しくなつて來る」と云ふ（四一二）
正太、向島の小金との關係を語る（四一五）
三吉絶望「夫と妻とは別々の道。」（四一六）
歐羅巴の南で出來る葡萄酒（四一七）
森彦三吉に二百圓無心（四一九）
森彦、事業の徑路を語る（四二一—四二五）名倉の父
三吉を「兄弟孝行だ」と評す、舊家に生まれたもので なくては味はれない頽廢の氣。
三吉夫婦の何氣なき對話が眞劍に落ちる。おれとお前とは、どつちが先に死ぬる（四二九—四三〇）名倉の老人（四三〇）
森彦新事業に着手（四三一）
豊世なぐられた上に着物を質に入れて小金の芝居見の費用を工面する（四三八）
三吉、正太を評して「器用な素人には成れるが、無器用な專門家には成れぬ（四四〇）
三吉夫婦關係の一進化（四四一）

九、

三吉、十二年振に歸京（四四三）
幸作の妻お島（四四七）
お種「俺は何事も云ひません是が御挨拶です（四四五）
嘉助の伜（四四七）
木曾名物の御幣餅（四五二）
花などを植えて舊い家などを見ながら云々（四五四）
黑船の古い木版圖（四五正）
あんまり云ひ合つて論理ごちや〳〵となり、頭ぼんやりとなる（四五七）
森彦の妻（四六〇）

桑畑の中から堀出された忠寛の石印（四六二）
三太咯血、肺結核の宣告—嚴かなこゑ（四六五）若い妻の壓迫にたへられない云々の正太の詞（四六九）

一〇、

正太の至るところ女あり（四七七）
お雪、夫に「私を信じて下さい」と云つて泣く（四七八）
豊世が、そばに居ては三分一しか正太の壽命が持たぬ「四七九」
正太の死。
お雪の述懐「私は自分のことを考へますと、なんですか斯う三人別のものが、そこへ出て來るやうな氣がします。極く幼い時分と、學校に居た娘の頃と、それからお嫁に來てからと—三つづゝ別々の自分ぢやないかと思ふやうな、まるでその間が切れちやつてゐるやうなものです（四九〇）（大正四年三月十三日新潮社縮册版菊版半截四九一頁）

いへたか　藤原家隆　一八一八—一八九七　保元三—嘉禎、四、九、八十歳

光隆の子で、鎌倉初期定家と並び稱せられた歌人で、後鳥羽上皇の寵を受け從二位宮内卿にまで進んだ。その私領が壬生にあつたので、世人壬生二位と稱し、家集も壬二集と云ふ（六家集に入つて木版本で世に行はれてゐるが、續國二二九—三九六にもある）その歌風は

一、卽興的なること

あはれにぞ若木の梅ぞ匂ひけるもしやと植ゑし老のねざめに

二、平明優雅なること

橋のこじまが崎の旅衣ぬれてぞかをる山吹の花

三、佛教的觀照の着想に富めること（晩年は殊にこの傾向がある）

なにはの海雲井になして眺むれば遠くもあらじ彌陀の御國は

四、清新な叙景歌に富むこと

いく里か月の光も匂ふらん梅咲く山の峰の春風
しがの浦や遠ざかりゆく浪間よりこほりて出づる有明の月

五、眞情流露の佳什多きこと

よもすがら聞かぬをきゝてかなしきはあら磯波のあかつきの聲

六、情景融合の秀咏多きこと

あけばまた越ゆべき山の峯なれや空ゆく月の末の白雲

等が特徴で歴代勅撰集に採られた數は二百二十六首、内譯すると

新古今三七・新勅撰三七・續後撰一六・續古今二七・續拾遺一二・新後撰一五・玉葉一一・續千載六・續後拾遺九・風雅一一・新千載六・新拾遺一七・新後拾遺九・新續古今一二

いへつぐ　石上宅嗣（いそのかみ）？

奈良朝末期の學者にして兼て詩歌をよくした。左大臣藤原麻呂の孫に當り、孝謙淳仁稱德光仁の四朝に仕へ文部大輔、式部卿等を經て正三位權大納言に至る。「宅嗣辭容閑雅にして時に名あり、風景山水に値ひ時に筆を把て之に題す。寶字より後宅嗣及び淡海眞人三船文人の首となす。著す所詩賦數十首あり。世多く傳へて之を譯す」（萬葉集人物傳）とあつて、歌は萬葉集に出、詩は經國集に出てゐる。

いへつね　藤原家經？

官は式部權大輔父は參議廣、後拾遺集頃の歌人である

居易初到香山こゝろをよみ侍ける

いそぎつゝ我こそきつれやま里にいつよりすめる秋の月ぞも（後拾遺）

水邊納涼といふ事をよめる

風ふけば河邊すゞしくよるなみのたちかへるべきここちこそせれ（詞花）

家集に藤原家經朝臣集（續羣四三九一、六ノ上―二五五―二六一、丹叢四）

いへなが　藤原家良　一八五二―一九二四、建久三―文永元、七十三歳

鎌倉初期の歌人で、大納言忠良の子四條帝に仕へて内大臣に任ぜられたので、後世衣笠前内大臣と呼ぶ。歌は續後撰（一二）・續古今（二〇餘）・續拾遺（一八）等に採られてゐる。

淺緑霞の衣春は來ぬ裾野の若葉今や摘まゝし（國刊一期續々群一五家長日記一卷）

いほぬし　庵主

增基法師の紀行で、京を出發して熊野詣りする中途の矚目を綴る。文章も歌も優美である。作者は叡山の僧で歌文共に秀で、その作には他に「遠江ノ道記一卷」といふのもある（扶桑拾葉集三、群三二七、一一、八八〇―八九二）

いまかがみ　今鏡（續世繼、彌世繼）十卷

大鏡の後を受けて後一條天皇から高倉天皇まで百四十六年間のことを書いた國文の史書。作者は一、中山忠親（黒川春村）といふもあるが、本文下に忠親をほめた記事があるので、二、源通親（屋代弘賢關根正直博士）だともいふ。けれどもこれとて唯本文中通親のことはわざと掠めて書いてあること、源氏のめでたいことを記して氏族の誇りを示したことなどからの推測であるから、要するに、三、鎌倉當時の源氏の誰かの作（尾上八郎博士）とも云はれる。つまり不詳である。但し年代は略々嘉應元年頃といふに一致して居る。それは本文待賢門院の薨去は應保元年十月三日であるのを「それも失せ給ひて八九年にもやなり侍りぬらむ」とあるのに徴しても「宗能の内大臣……八十にやあまり給ひぬらむ、一人殘り給ひつるとぞ」とあるその宗能の薨去は嘉應二年二月二十一日のことであるのに照らしてもたしかだといふ（余思ふに時代の姿は直後に正しく凝視し難いこと恰も今日大正の日本文學史を書くのがむづかしいやうなものである。そこで實際は遙かに下つての世に筆を執りながら作者老獪の作意を以てわざと嘉應元年頃と思はせるやうにあやなしたのかも知れぬ已に嘉應元年といふカメラの位置さへ定まればあとは本文雜多の記事に年代的統一をつける位のことは譯ないことである。近頃國文學史の考察によく内部徴證いふことが行はれるがこれは唯文學史研究の一補助としてか、論者がその作品の細微にわたつて精讀してゐることを示すかの外の何物でも無からう。有益は有益だが之を以て唯一の研究法かのやうに早合點することは「わい〳〵天皇」と黄表紙にあるからとて事實そんな天皇があつたかのやうに誤解すると同樣の結果に陷るであらう）

偖て、この書の發端は明らかに大鏡をまねたあとが見えるが、その趣向の立て方が一段と趣味深く作られてある。

「頃は三月、春も暮れ近い十日頃のこと自分（作者）は友達と初瀬參りをしての歸るさ、とある木蔭を宿として一人の女童をつれた老嫗と會ひ、住所はとゝへば「都に百年狛の邊に五十年今は春日野のわたりに住んでゐます」といふ、「私の祖父は世繼と申します私幼名は「あやめ」紫式部の君のところへ女童としてお宮仕をして……「百度錬つたあかゞれ、今鏡とつけようか小鏡と云はうかと仰せられました」ともいふ、友が「では以前のことも委しからうから話して下さい」と所望すると「祖父が申したる萬壽二年から數へて今年は嘉應二年ですから百四十六年……では、その間のことを申し

ませう」といつて語をついだ。

すべらぎの巻　三巻　天皇の御記・臣下ふぢなみの巻　三巻　藤原氏・むらかみの源氏　一巻　源氏・みこたちの巻　一巻　皇子皇女・むかしがたり　一巻　傳記逸話・うちぎき　一巻　同上

と次第して居る（國大一七、校國系一二）關根正直氏校定今鏡一名續世繼・同證註今鏡・今鏡新註以上三書共六合館）

いまかくれが　今かくれが

あきか「中村秋香」を見よ。

いまがはかべがき　今川壁書（今川帖）一卷

今川了俊が弟仲秋が誡めて日常の作法心得二十三箇條を示したもので、後水尾天皇の元和寛永の頃から一時童蒙必讀の書とせられた。伊勢貞丈が註した「今川壁書解」一卷さへ出た位であつた。

いまがはでふ　今川帖（今川狀）

いまがはかべがき「今川壁書」を見よ。

いまどしんぢう　今戸心中

廣津柳浪明治卅五年の小說、梗概は

「花魁の「吉里」は平田と灼熱の戀に落ちた。平田は國の事情でどうしても東京を引拂つて歸らねばならぬ事になつた。歸れば財産の始末をして妻を迎へて田舍の若旦那として暮らさされるは知れてゐるので平田も進まぬ。吉里は尙更進まぬ。或は男が自分を謀つて居るので無いかとまで疑ぐる。平田の無二の親友の西宮は吉里のつれの小萬と此も大分馴染が重つてゐる。一對の歡喜が夜毎々々の樂しい酒宴となつて此樓上を賑はして居たのにもう今晩かぎり平田は來ない。西宮も吉里に氣を兼れて來ない。小說は卒爾として其最後の一夜から始まる。吉里の男に對する執着、ちれて、すれて泣いて慕うて果ては平田に焦がれ死にせんばかり……それでもとう〳〵別れにくい別れを敢てした。

その宵から「善さん」と云ふ男、此も吉里へ幾夜々々の思ひを運んで之が爲に身上をたゝみ上げて餘す所僅に五圓、せめて一言吉里の優しい詞をかけて貰いたさに夜があけるのもかまひなく彼女の室に待つて居る。戀人に去られた遣る瀨なさが、やがて此うらぶれ男に對する同情となつて、心よく盃を汲みかはした。平田に別れ際に貰つた拾圓を出して善さんに三日振居つゞけさせて歸したが、其後も吉里の方から呼びよせて三日にあげず逢うて居た。無節操を標榜する色里とは云ひ條此程ひどい變りやうは？と云つて皆吉里を難じた

文なしの善さんに接近したお蔭で身の廻りのものは段段無くし、果ては廓の誰彼に小口から借りて歩いて非常に評判が惡い。とゞ煤掃の日皆が草臥れて慰勞會よろしくと云つた體で一餐を傾けてゐる處へ酔つぱらひになつて來て又酒をと云ふ。容色も態度も昔の美も嗜もなく、誰の目にも非常に荒んでゐた。而も誰一人彼女の心事を解するものは無かつた。善さんに見替へたと云ふのはホンの外面的のことで、心は日とても夜てても片時とても平田のことを忘れた時なく、否其平田との離愁の熱烈さに殆ど堪へ得ないので、其鬱悶を遣るべき新刺戟としてこんな破目に陷つたのである……其夜吉里は廓を拔けて出た。「次の日の午時頃淺草警察署の手で今戸の橋場寄りの或露路の中に吉里の着て行つたお蕊の半天が脫捨てあり、同じ露路の隅田河の岸には娼妓の用ゐる上草履と男物の麻裏草履とが脫捨ててあッた事が知れた（一七五）」吉里と善さんとは斯うして心中した。而も女の本意は小萬に宛てた遺書に

「平田さんに濟み不申候。西宮さんにも濟み不申候お前さまにも濟みませぬ、されど私事誠の心は寫眞にて御推もじ被下度暮々も念じ上參らせ候……

さとより

おまん樣

人々（二七四）」

そしてその寫眞を見ると平田と吉里と表と表とを合せて裏には心と云ふ字を大きく書き紙捻で十文字にからげてあつた（柳浪叢書前編一九九—二八九）

いまやう　今樣

王朝中期から鎌倉時代にかけて流行した歌謠の一種でその起源は和讃（空海のいろは歌）であらうといふ。和讃は漢讃より漢讃は梵讃より起るといふから、今樣に佛教歌の多いのも自らその系統を示してゐる。さにかく王朝に於ける新體詩とも謂ふべく、その詞形色々ある中、最も普通なるは七五四句若くは八句の一節のものであらう

園生の梅の追風に　わがすむ山も春めきぬ

かど田も雪は村消て　若菜つむべく野はなりぬ

軍記物にある妓王妓女や佛や靜等の白拍子の舞の臺詞も多くはこの今樣である。慈鎭の「四季」の今樣などは明治に入つて作曲もせれた。

いもせがひ　妹背貝

漣山人の小說。春夏秋冬に節を分けて水無雄と艶子の悲戀を描く。氏の小說としては有名なもの（作者はそ

の後間なしにお伽文學に轉じた)(四六版一〇八頁明治廿二年八月十二日新著百種第四號)

いもせやまをんなていきん　山婦女庭訓　十三鐘　衣懸柳　妹背

明和八年(一七七一)正月廿八日竹本座への書下し、三好松洛後見、近松半二・松田ばく・榮善平・近松東南合作上代物唯一の傑作で蘇我氏の滅亡を取材したもの、「鎌足の男淡海、入鹿を誅せん爲め烏帽子折の求馬と身をやつし、名を變へて機會の到來を待つ中、入鹿は一瓜黒の鹿の血汐と凝著の性ある女の生血を混じて鹿笛にそゝぎかけて吹き鳴らす時は、不思議にも前後不覺の眠りにおちる」といふことを確かめ、種々苦心の結果鹿の爪は臣下芝六の苦心で禁苑の三笠山の鹿を擊ちとり女の生血は彼に戀してゐるお三輪(杉酒屋の娘)が犧牲となり、今一人の戀人橘媛(入鹿の娘)が手引で浪花の獵師鱶七(實は腹心の臣下金輪五郎)と共に首尾よく入鹿を誅戮する。之に絡んで、妹山の領主太宰小貳國人の女雛鳥と、背山の領主大判司清澄の息久我之助との美しい悲戀や、采女が天皇を慕うて猿澤の池に身投げするなどがあつて構想雄大、措辭優婉、而かも感味の多い作で、久我之助雛鳥の川一つ隔てて、相呼び相したひながら父母の手にかゝつて死につく場面や、求馬と橘媛とお三輪との三角關係を緒環の絲で操つる場面(神話三輪山傳說から着想)などは取り別け好評であつた(帝文四七、一八五—二七四)

いやよつぎ　彌世繼

「今鏡」を見よ。

いろはうた　伊呂波歌

假名四十七字を重復しないやうに並べて、轉迷改悟の想をもつた七五調の和讃。

色は匂へど散りぬるを　我世誰ぞ常ならむ
有爲の奥山今日越えて　淺き夢みじ醉ひもせず

作者は空海(弘法大師)だといふが確かではない。又この句は涅槃經四句の偈「諸行無常　是生滅法　生滅々己　寂滅爲樂」を和譯したものだといふ。

いろはじるゐせう　伊呂波字類鈔　十卷

後の下學集・運歩色葉集・節用集の先蹤をなすもので貴重な内容を含んで居るが作者も年代も不明である。黑川春村氏は、「今、續群雜部(八八七卷)の二卷がその原本で、本朝書籍目錄字類部に「世俗字類抄四卷」とあるのはその後内容が增加したので、現存十卷はその後更に增したもの。自分の所藏に係るものは三卷本で別本とも謂ふべきだ」と考證せられてゐる(黑川春村氏碩鼠漫筆一二二—一二四　廣文庫第三册二六九—二七〇)

いろはぶんこ　いろは文庫

文政二年(一八一九)作、奥書に

江戸　狂訓亭　爲永春水撰
江戸　一筆庵　溪濟英泉畫

とあつて、

正史實傳いろは文庫

と題し、赤穗四十七義士の演義的史話で、文章もおちつきがあつて手法も手堅く、考證も行き屆いてゐるが實はこれは春水の弟子染崎延房(即ち二世春水)の作だといふ。

(十八卷第三十五回の始めには大石良雄の眞筆まで木彫して……

こゝに寫し出せしは復仇の後に京都紫野大德寺の瑞光院の使僧へ遣はしたる返書にて大星氏の自筆なり

兎に角に思ひははるゝ身の上に
しばし迷の雲とてもなし

這は姫女達の看てよろこぶ類ひにあられど凡義士の筆跡は些に書殘せし反古までもなつかしく其ときの事なも思ひやらるゝわざならずや

花の雲空も名殘になりにけり　大星良雄
世の中は春の炬燵の心かな　同　良金

いんえい　陰影

前田夕暮の「牧穫」以後即ち明治四十三、四、五年の自信ある佳什約六百首を集めたもので、題の「陰影」はこの集を箱根の芦の潮畔の旅籠屋で撰んだ時の著者の情調からつけたものであらう。表紙は正宗得三郎氏の意匠で、佳調の一二をあげると

初夏の雨にぬれたるわが家のしろき名札のさびしかりけり
人に別れ職業(しごと)に別れしづやかにわが悲しみを見守りあらむ
新聞のにほひ冷たく指さきに秋を感ずる日となりしかな
しづやかに運命の前に歩み行く二人が時にかはしたるふみ　(以上四十三年)
家もてば見あひの宿をたのみくる人もありけり如月はじめ
わが友の忘れゆきたる手袋を手にはめてみれば冷たかりけり

何なして生きてありやといふごとき人の瞳にあ
ふはつらかり
病院の秋の露臺におぼえけり看護婦がうたふ唄
のひとふし（以上四十四年）
彈力なき心のうへに冬よきて闇のおもさをおく
かひそかに
君うばひて逃れにし日の心ふとかへりぬ夜の町
を歩めば
荒海の音にまじりて石を切る鑿のひびきの骨に
泌み來る
弱きままに押され押されて行く如きおびえここ
ろをひとりかかへつ（以上四十五年）

（四六版二〇〇頁　大正元年九月十五日東京堂）

いんぐわものがたり　因果物語　三册

寛文元年鈴木正三の假名草子で、佛説の因果の理を世間の苦樂順逆に例證として「寛永の話」「元祿の話」と樣に、現代別に作者が聽書の體にして地名人名に固有名詞をつかつて實在性を濃くした一種の因果譚で、王朝の靈異記や今昔物語の跡についで立ち、剪燈新話式怪談物の先蹤に位置して居る。

（此の書數本あり、眞片假名文のを正三が遺著とせり。蓋し門人等堅く祕して世に出さゞりしを竊に寫取り剩へ恣に他の物語を雜入して板行するものありければ門人義雲、雲歩等師の正本か梓に鏤めしものとぞ。平假名文にして繪入の本には正三道人聞書とあり、これ恐らく義雲等の所謂僞本なるべし（列傳體小説史上、二六、淡海堂發行實錄珍話因果物語）

いんぷもんゐんのたいふ　殷富門院大輔

?—一八七〇　?—承元四

鎌倉初期の女流歌人、從五　下藤原信成の女で出でゝ殷富門院（後白河天皇皇女）に仕へ才媛の譽があつた。歌は千載　五）・新古今（一〇）・新勅撰（一五）等に採られてゐる（丹叢七、殷富門院大輔集）

いんようほふ　引用法

古詩・古歌・古句の有名なものを本文の中に引用して文の裝飾とするもの。謠曲・戲曲・紀行等種の作品に見られる

例「うみ越しに見えてぞ向ふ鏡山年經ぬる身は老が身の云々

（謠曲志賀、大友黑主の作といふ、「鏡山いざたちよりて見て行かむ年へぬる身は老いやしぬるとし」を引いたもの）

ウの部

うかう　鹽井雨江　明治二、一、三—大正二、二、一、四十五歳

豐岡藩士鹽井健助の男、明治廿八年七月帝大國文科を出て日本女子大學・奈良女子高等師範學校に教鞭を執り、多くの女學生から敬慕されてゐた。氏が功績は、第一に教育者として十有八ヶ年の獻身的努力をあげればならぬが、第二には新體詩作家として第二期この詩極盛時代武島羽衣等と相呼應して優婉綺麗の佳作を出したことである。「磯の笛竹」「深山の美人」など殊に愛誦せられた。第三には著書、中にも新古今集詳解はこの集唯一の註釋書で、最近義弟大町桂月氏の追補によつて益々完璧に近いものになつた。又「文學研究」は講義の草稿に整理を加へられたものだが、洋に偏せず和に拘らず穩健な立説である。短歌や美文や飜譯文（湖上の美人）にも優れたものがあつて、今は「雨江全集」に收められてある。

病床の聲

身はつひに草にはてぬる露なれど清かりし世ぞ
ほこりなりける
うつくしき形げかりをこらしつゝ菓子にも見ゆ
る世の委哉
命なにそは唯だ露の身とは知れ思ひおく子のあ
まり小さき
死なれじな老いますます母の明日の世を弱き妻子に
うちまかせつゝ
いねぬ夜も幾夜つもれる病む胸をつきさく夜半
の落葉數へて

うきぐも　浮雲　三編十九回

長谷川二葉亭作の小説、坪内逍遙の書生氣質と共に、眞の意味に於ける、明治小説の始めを代表する作で、文學史的價値の多いことゝ、寫實の達者なことゝ、文致の輕妙なこと、隨つて滑稽味に富むことゝが、衆評の一致する長所である。作者はこれによつて、新舊思想の衝突を寫さうとしたものらしく、お勢が新、お政が舊どつちつかずの逡巡不斷（即ち過渡的態度）が文三としてある

第一編

第一回、アヽラ怪しの人の擧動、

十月廿八日の午后三時頃、神田見附の、人足繁きやちまたを、春の高い男と、中背の男と、二人がこんど其

奉職先の某省で淘汰せられた噂をしてゐる。高い方は内海文三(主人公)中背の男は本田昇と云ふのである。

第二回、第三回、風變りな戀の初擧入。上、下、

「文三、は靜岡の舊藩の子で、早く父に訣れて、明治十一年、十五歳の春から、叔父の園田彌兵衛が、東京で可成りに暮らしてゐる處へ引きとられ、そこから何處かの私立學校へ通つて、首尾よく卒業、さるつてがあつて某省淮判任御用掛を拜命した(一〇—一一)

從妹のお勢は三つ下で幼い時から馴れ親しんでゐる處から、母のお政は、下に弟の勇(いさむ)も在ることなり、お勢を文三に娶はせたいと思つてゐた。父の孫兵衛(目下不在、居つたところがお政次第になるお人善は元よりその考であつた。お勢は淡白で卒直で、大分輕躁(おいそれもの)者で何でも移り氣に稽古する。始めは清元を習つたが、隣りへ官吏あがりの人(元は儒者)が來て、その娘のお勢とは二つ三つ上なのが學問に凝るのをまねて、自分も同じ、芝邊の某塾に通學し、その半可通の女教師にかぶれて、だん〳〵文明がり、十八歳になつた昨今では駿河臺の何處かへ英語を習ひに行つてナショナルリーダーのフォースに親しんでゐる。女の癖に君や僕を使ひ、洋裝がして見たいなども云ふ(一九九)さもかく文三とは正反對に、始めから自由我儘に育つて充分にお轉遽振を發揮してゐる(一〇—一一)それでも文三に對しては異性的の考へが擡頭するに連れて、段々優しく、慎ましく接するやうになり、殊に英語の指導を受ける時などは非常に大人しい。母のお政はお勢には義理の母で、孫兵衛の後妻、生れもそんなによくはなし、無學で、淺薄で、唯眼前の物質欲だけが強くて、至つて現金である。文三に見込があると看るや、我から進んで、是非にお勢と一緒にしようと主張し出した。お勢は、まだネンネでそんなことには一向氣が乘らない。このことを聞いて一番嬉しがつたのは文三であつた。そこへ國の母から手紙が來て、「こちらで親類先の「お留さん」と云ふよい娘がある、からそれを迎へてはどうかと云つて來た。お勢に夢中の文三は、一も二もなく反對ではあるが、母思ひの彼には、無下にことはることもしかねて「まだ早いし、今はそんな事どころではないから、何れゆつくり考へて」とお茶を濁しておいた。

「下女のお鍋も來ず、叔母のお政も粹を通してか、知らぬ顏の彼が居室で、お勢と親しく對坐し、四方八方の話の末に「早くお嫁さんをお迎へになつてはどう?

……」「……」「おつ母さん孝行のあなたにも似合はない」「だが、僕は、母不孝なんです」「ナセ」「ナセッて親よりかまだ大切なものがあるんですから?……」「親より大切なものつて?……そりや、わたしだつてありますわ」

「エ貴孃にも」「ハア、有りますわ」「誰……誰れが」「人ぢやないの。アノ眞理」「眞理」と話が進んだ時、彼はブル〳〵とふるへた「あなたは清淨だ。それだのに僕は……僕は……」と言つてあとは何も得打あけない。「アラ月が……」とまるでかけ違つた方へ話が持つて行かれて、折角のラヴシインが代なしに破されたが、卑怯な彼はどうしても此以上は言ふことが出來なかつた。言はうとすると言葉も態度も樣式になつて「豈、夫れ、而して」と出て來る(二四—四〇)

第四回、言ふに言はれぬ胸の中、

「絲目の切れた奴凧の身の上、其時々の風次第で、落着く先は籬の梅か、物干の竿か(四一)と言ふ今の文三は、諭旨免職になつたことを叔母や從妹に、どう發表したものか、發表すれば叔母の態度が、ガラリと變りはすまいか、よし叔母はとにかくとして、お勢の愛がさめるやうなことになつては大變だと、獨り心に、とつおいつ。それとも知らぬお勢は、思ひを募らせる程美しく、(四七)折しも、須賀町のお濱さんに誘はれて藝人親睦會から歸つた母と、長唄清元の優劣論に花を咲かせてゐる。文三の嫁の話から、お勢の嫁入の話が出て「私はお嫁なんぞに行かないわ、生一本で通す方が可い」(五四)など駄々をこねる。第五、六回胸算違てから見一無法な難題。

翌朝思ひ切つて免職になつたことを叔母に告げると、案の定態度一變「それ見たことか、課長樣に取入つておきなさいつて、あれ程私が勸めるのに、そんな陋しいことなんか言つて、澄まし込んでるからだ」を口始めに、散々棚卸しをする。大愚ある叔母とは知りつゝも、文三胸に据え兼ねて、我室に入つて、悔し涙をかみしめた。第六回、どちら附かずのちくらが沖、失意の文三に引きかへて、彼よりもずつと無能な本田昇は課長の御覺えめでたく、新に五圓增俸の三十五圓となつて、得々としてやつて來た。それを聞いたお政は早や心がその方に傾いてゐる。本田は快活で、人を笑はすことが上手だが、誠意のない、長持ちのしない男である。「何なら僕が課長に賴んで復職の出來るやうにしてやつても可い」など、大變な優越的の態度でひけらかすのが、文三には癪に觸つてたまらず、プイ、と

その場が外すと、後は三人でどつと大笑ひ、やがて團子坂の菊觀を約して本田は歸つた。

第二編

第七回、第八回、團子坂の菊觀、上、下、

約束のその日が來た、母子は今日を晴れの盛粧して出た。母は道々年頃の娘を見かへして、その風采や服裝の、お勢以下なるを確めては、その都度滿足をする。(一一〇)中途で、本田は課長とその令妹とに遇つた。例に依つて彼一流の得意な挨拶をし、相手を哄笑させておいて、やがて入口の處の母子と一緒になつて、お勢の發議で、上野公園に廻ると、中學生の一群が來合はせて「レツト、アズ、ゴー、オン」など言ふ中に勇が居て「オヤお母さん一寸!」と言つて、「友達と何處かで、何かが喰ふんだ」とか言つてお金をねだつてゐる。その應待が手間どれたので、本田はお勢に向つて喋々喃々と自分の戀を語るとよりは、寧ろ、しやべり立てる。お勢は始めから本田なんか尊敬してゐないから、上面(うはつら)だけで接する(一一二—一一五)

その留守に文三は舊師の石田(英國へ留學してゐたとかで、通を振りまはす人)を訪うて、就職方の斡旋を頼んだ。「その中、心掛けておくが、差當つて一寸した飜譯物があるから近に取りに來い」とのことであつた(一三五—一三八)

第九回、すわらぬ腹

始めに勇の少年氣質の面白い描寫(一四八—一四九)があつて、次は本田が、足繁く園田家へ出入する處へ近近馘首された中から二三の復職者がある筈だ。何なら僕が運動してやつても可いと又しても高飛車なことを言ふ。「好意は謝するがマアよさう」とはれて(一五一—一五四)二階の居室の、窓に凭つて、獨りでプンプン怒つて下を睨めてゐると、下はさりげなき巡査が怪怪な顏つきをして、サツサと行つてしまつた(一五八)

第十回、負けるが勝

The ever difficult task of defining……

上では、文三が、飜譯物に熱中してゐる。下では本田がお勢とふざける。文三は前々からの侮蔑に對する憤怒がムラ〳〵とこみあがつて、ノツ〳〵這入つて來た彼をにらみつけて「爾來絶交だ」と言ふ。婉轉滑脫の彼は却つて文三を侮辱して「イヤ僕がわるかつた…」などと馬鹿にして凱歌をあげておりて行く(一八二—一九三)

第十一回、取付く島、

叔母は、文三に「わたしが、課長樣に頼んでゐげるから、是非復職なさい」と勸める。「それには滿更表面だけの親切に止まらないだけの眞實がある。文三は再び叔母に對する感謝の念を取りかへす(二〇三)が、どうも、あんな情實の府へは、再び足を入れたくない……と言つて國には老母が待つてゐる。こゝにはお勢が嫁がずに居る…「煮えきらぬ彼は益々思案にあぐんだ(一九九)結果、お勢に相談した(二〇八)ところ此は又慳もほろゝの挨拶「あなたが、本當に善いと信ぜられる通りをなすつたら可いぢやありませんか(二一三)と言ふ。

第十二回、いすかの嘴、

文三は、お勢の反省を促すつもりで、近頃本田のやうな犬畜生と夢中に騷いでゐる愚を責めると、あべこべに、お勢は散々文三の弱點を數へ立てる。その結果、愛の勝利が破裂して「モウこれつきりお互に物も言はない」と言ふ所まで荒けた(二一六—二二一)その夜母はお勢に本田の許へ嫁かぬかと勸めた(二二三)

第三編

第十三回、

破裂後の文三は、又凋れかへつて、後悔してゐる。

第一四回、

お勢は本田が來ても、すね〳〵しくして、取り合はぬその點稍文三の意を强うする處で、種々苦悶の結果、お勢と示談しようと決心した。

第十五回、

併し文三の和解の申込は、極めて拙なるものであつた。それが爲めに、お勢は(心からではないが)晩餐の席で、當てこすつたり、母は「お勢は賣り物だから、ムザと手をつけてくれな」だの「叔母さんに考へがあると言つたのは、こちらに相當な娘があつたら、お前さんに世話しようとのつもりだつた」だの嫌味を言はれる(尤、後の方のことは、これまでとても繰返したことがあるが…)

第十六回、

一時は不興げに見えたお勢も、實は、心から文三が憎いのではないから、打解けられては、流石に嬉しく、母が止めても「あなたは下等な人間だからだまつてらつしやい」とはねつけて、又候文三と親しくなつた。文三は、今は「お勢について非難すべきは、唯輕躁の一點だけだ」(二五三)と思ふやうになつた。

第十七回、
本田が課長の令妹に英語を敎へに行くと聞いて、お勢は又もや嫉ましさが手傳つて、本田と物を言ふやうになつた。本田は近くの梅本から料理を取寄せなどしてお勢を抱いたり、爪つたり散々戯れてゐた。文三の心の影は又々曇つた。

第十八回、
本田もそろ〳〵持前の飽きが來て話すことも實社會的なことで、ちつともお勢の意を迎へやうとはしなくなつた（二六七）お勢も母から尋れられても、本田へ嫁ぐのは嫌だと言ふ（二七三）

第十九回、
文三の心の影は又晴れやかになつた。その頃になつてお勢は色々と煩悶し出した（二八三）その樣子や叔母の態度を見て文三も亦煩悶し出した。心の曇のフワフワ〳〵と、晴れては曇り、曇つては晴れと言ふ有樣である（第一回から第六回までは二十年七月、第七回から第十二回までは廿一年二月、ここまでは毎回題目をつけてあるが以下は毎回の題目はない、そして以下の分の發表は廿二年十月であつた。二葉亭全集改版第一卷一—二九四）

うきち　田口卯吉　安政二、四、二〇——
舊靜岡藩士で、明治初年藩より選まれて東都に英醫經濟の學を修めて官途に就き、十一年野に下つて經濟雜誌社を創め出版と實業方面に業績著しく三十二年三月法學博士の學位を授けられた。
明治十二年から發刊した東洋經濟雜誌は單にその記事內容による貢獻のみならず又一般の雜誌經營者に有益な暗示を與へた。彼亦文を能くし、日本開化小史・自由貿易・日本經濟論・經濟策等皆有益の著と謂はれてゐる。號を鼎軒と言ひ、歿後その文を集めて鼎軒文集が發刊された、尙最近には鼎軒全集、八卷が發刊されつゝある。

うきよさうし　浮世草子（浮世草紙）
德川前期京阪に勃興した寫實小說のことで、主なる作者は井原西鶴・江島屋其磧などである、浮世はうつしよとか、裟婆、この世とかいふ意で、つまり現實の世相を寫した草紙の意である（浮世は又德川期のはやりことばで王朝の「今樣」と同じやうに何にでも冠せられた）（國刊一期新群七大久保葩雪浮世草子目錄同五期江戸時代文藝資料第二、三、四、五册には四十六種百九十八卷の浮世草子が入れてある）

うきよどこ　柳髮新話　宇喜世床　六卷
式亭三馬の滑稽本浮世風呂の續篇　帝文一三・國民文庫三五）
尙本篇の特徵をいへば、對話本位（膝栗毛の滑稽は、對話と事件）で武家・町人・學者・隱居・若物・姑嫁・町女房・後家とあらゆる階級の面目を簡結な筆致で巧みに髣髴せしめ得た點にある

うきよぶろ　浮世風呂　八卷
文化六年（二四六九）式亭三馬作、滑稽本中、一九の膝栗毛と並び稱せられる傑作で、場面を錢湯に採り、之に出入する浴客の男女、年齡上下、土地、職業等の各氣質を而白をかしく寫したもので、いはゞ「裸うきよボンチ」とも名づくべきもの、就中上方ッ兒と江戸ッ兒がめい〳〵の特徵に痰呵を切つて口角泡を飛ばしながらつひ湯に流して消える一節の如きは最も佳章であらう故藤岡博士はこの作を以て、伊藤單朴の錢湯新話に暗示を得たものとせられ、列傳體小說史には三馬の諷刺はサッカレーの如く婉曲精緻なる能はず……モリエールの普遍奧妙……フイールヂングの酒々落々、スキフトの嚴酷周到、アヂソン、スチールの如く溫雅風流なる能はず、彼れは單に諷刺家として見るも十九世紀の吾人が大に推重すべきものに非るが如し（下、二四八）と評してゐる。この後の評は少し酷であらう。少くとも我國文學史上、諷刺滑稽文學の流れの上に位置させて正當に眺めたならば矢張優れた作品と謂つてよい。この書の明治以後坊間に販がれるものはザラに多いが比較的正確なのは帝文十三國民文庫三五などである。
（尙松陽堂、金櫻堂からも發行した）

うげつものがたり　雨月物語　五卷
明和五年（二四二八）上田秋成廿五歲の三月に出來た小說本で、從來の雅文小說の脈を曳き、後來の馬琴京傳の讀本に影響を與へた傑作である。
題名は本書序の末段に
明和戊子晩春、雨霽月朧朧之夜、窓下編成、以昇梓氏、題曰雨月物語云
とある。妖怪變化を取りいれ傳奇的着想に趣向をこらし、趣味道德の調子も相當に高く、文體は美麗な和漢混淆文で、夢幻劇的筆致に富んでゐる。
白峯・菊花の約・淺茅が宿・夢應の鯉魚・佛法僧・吉備津の釜・蛇性の淫・靑頭巾・貧福論の九短篇小說を收めてある。
一、安永五年本・二、文永堂本・三、明治廿二年古

著百種第二輯（菊花の約と青頭巾）四、同廿六年不言巴氏校訂本・五、同廿八年帝文第三十二篇・六、同卅六年名著文庫第三編・七、同四十三年國民文庫第三十二篇・八、大正元年有朋堂文庫第一輯上田秋成集の中・九、同五年鈴木敏也雨月物語新釋（尙小泉八雲の英譯に（菊花の約）"Promise Kept" 「夢應の鯉魚」"The Story of Kogi" がその著 "Japanise Micellany" 中にある）

うけらがはな　茅が花

德川時代江戸派歌人の明星橘千蔭の歌文を集めた家集（歌が大部分）書名は武藏野の「うけらが花」を以て名づけたもの（續歌二）

うこん　右近　？

右近少將季繩の女であること、七條后（醍醐后、基經第三女温子）に仕へたこと、その咏後撰（五）・拾遺（三）新勅撰などに出てゐることの外傳記不明。

わすらるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな（小倉百人一首）

うじむね　藤原氏宗　一四六九—一五三二、大同四—貞觀一四　六十四歳

藤原葛野麿の子で、官は右大臣に至る。清和天皇の勅を受けて撰んだ貞觀格十二卷・貞觀式二十卷は後世故實家の典據として貴重されてゐる。

うた　歌

廣義では韻文の總稱、次は擘にあげて節をつけて歌ふ（唄ふ、謠ふ）律語、次はからうた（漢詩）に對するやまとうた（和歌）、次には和歌の中特に五七五七七の短歌をいふ。

うたあはせ　歌合

左右各幾番かに別けて一番から順々に取組ませ、各自味方の辯護と相手の非難とに議論を闘はせ、最後に勝の多い方を以て勝にする。歌の優劣につき判決を下すものを判者と言ひ非常な名譽でもあり斯道堪能の人が推されてなる。若し判者のない時は多數決で勝負を極めて之を衆議判といふ。又取組の番數が餘り多い時はその中の秀咏を拔いてその分だけを爭ふ。之を撰歌合といふ、この催しは王朝初期から始まつて後世益々盛んになつた。縉紳の雅懷を遣るたづきともなり、上流社交の機關ともなり、そして文學では咏歌や歌學の進歩に貢献するところも少くなかつた。在民部卿家歌合・寛平御時后宮の歌合・天德歌合・高陽院（かや）歌合など有名だが大規模なのは後鳥羽院御主催の千五百番歌合であつた。その他群書類從歌合の部には各種の歌合の歌を載せてある。歌合そのものについては古類文學部一一一—一一五に出て居る。

うだいしやうみちつなのはゝ　右大將道綱母　？

藤原倫寧のいつき娘として、深窓の下に當時の貴族としての教養を嗜んでゐる中、東三條攝政兼家（當時は右兵衛佐）に見そめられ、天暦八年遂にその身を許し翌年八月道綱を產んでから迎へられて正妻となつたが兼家は好色で彼の外に藤原仲正の女（時姫）藤原國章女、源兼忠女と三人を愛し、三人寵を爭うて時の人「三ツめ錐」と笑つた位なので彼女はいつも孤閨にわびくらした。それに性格も夫の快活瓢輕なるに反して彼女は眞面目で、氣位が高かつたので始終に衝突した。蜻蛉日記はこの愛慾と性格の爭鬪とを綴つた生活記錄で天歷八年から貞元二年まで廿一年間（但し天德三—應和元の三年間の闕文がある）に亘つてゐる。文も上手だつたが歌も拾遺・後拾遺・玉葉等の諸集に散見してゐて秀咏が多い。

うたがたり　歌語

村田春海の著、作歌の心得を十箇條にわけて說いたもの（日歌一二・校註和歌叢書七、四七九—五〇〇）

うたこ　中島歌子　二五〇一—二五六三、天保一二—明治三六、六十三歳

明治の女流歌人として有名な人、十八歳の時に水戸の藩士林忠右衞門に嫁いだところ、夫は王事に奔走して下野田野原で戰死し、彼女も亦反對黨の爲めに投獄の厄に遭つたが間なく免されて靑天白日の身、そこで心をみやびに潛め加藤千浪を師として歌文に熱心し又筆蹟に巧みであつた。維新後、皇族や上つ方の教授を賴まれ又女子大學の講師をも囑託せられ同校草創の際の教育にも貢献するところ尠くなかつた。

うたじやうるり　歌淨瑠璃

曖昧な言葉で義太夫以後に於ける新淨瑠璃とも、上方淨瑠璃に對する江戸淨瑠璃をいふとも、語りものに對するうたひものをいふとも、段ものに對する端（は）ものをいふとも、操淨瑠璃、歌舞伎浮瑠璃に對して座敷淨瑠璃をいふとも解せられるが、大體は以上を總合して、一、義太夫以後に盛行した。二、主として江戸に發達した。三、謠ひがゝりや端唄がゝつたもの。四、構想も斷片詞形も短小な。五、座敷淨瑠璃をいふ、と思へばよろしい、早く吉原流行小歌惣まくりに「砧

の卷うた淨瑠璃」と題する文句があるが初期のものは今傳はつて居ない。寛文の頃の近江節、元祿寶永頃の土佐節・外記節・永閑節・半太夫節・享保の河東節・元文の豊後節・寶暦の常磐津・文化の富本・文政の清元・寶暦明和の薗八・安永の新内・繁太夫諸節は皆この系統に屬するものである（高野辰之氏日本歌謠史中所々參照）

うたせつきやう　歌說經

今昔物語廿八に西塔の敎圓座主が經義の通俗化を企て面白をかしく講說した頃から始まつて、經義以外名僧知識の發心得度の由來や、苦樂や、往生をも語り、更に轉じて佛敎以外男女の情交、父子の恩愛、世相の樣樣を語るやうになつてから「歌說經」といふやうになつた。それは德川期に入つて歌念佛などに相前後してのことであつた。その題材は、五翠殿・山椒太夫・愛護若・苅萱・小栗判官・俊德丸・松浦長者・生贄・小晒物語・熊谷・志田小太郎・法藏比丘・伏見常盤・阿彌陀胸割・信田妻・梅若の十五六曲に限られ、名手には「日暮」を名のる、小太夫・市九郎・小九郎・天滿十太夫などで、現存家元は若松若太夫といふ。文詞は始め口語を以て

コトバ　只今語り申す御物語、國を申さば丹後の國かなやき地藏の御本地をあら〳〵說き立て弘め申すに、これも一たびは人間にておはします。

と樣に出たのが、後には古淨瑠璃まがひの叙事文體に變つた。

說經は古典的樂曲といふには近代的なり、情話的といつても二上りの淫縱な蠱惑味なく、宴席に不向なので懷中用音曲書なども出ないし、歌舞伎にも向きにくかつたし、操りには用ひてゐたが、それも享保以後は義太夫に代位せられた。

うたねんぶつ　歌念佛

もと佛敎流布の方便に念佛に節つけしたものなのが後には歌謠と同じく色々の詞を歌ふやうになつた。蓋し鎌倉時代以後に行はれた念佛卽の變態であらう。德川期に入り京都に最も早く流行し、日暮林清・同弟子林故・林達のやうな名手も出た。又大阪にも行はれ、上町に住んでゐた存道といふのは鳴らしたものだ。元祿板の「人倫訓蒙圖彙」にその風貌を畫き次の如くいつて居る。

夫念佛といふは萬德圓滿の佛號なり。然るをそれに節をつけ歌ふべきやうなけれども、末世愚鈍の者を

導きせめて耳になりと觸れさすべきとの權者の方便ならん。それを猶誤ていろいろの唱歌を作り、是を鉦に合せてはやし淨瑠璃說經のせすといふ事なし。末世法滅の表じなり。悲むべし、慨くべし。

うたぶくろ　歌袋

短册咏草反故などを入れる紙袋・檀紙や奉書紙を用ひ折合せて糊をつかはす、水引を通してさげるやうにして表裏には歌や繪を書いて雅味のあるものだ。その起源はいつ頃ともわからぬ。藤原爲顯や爲親の歌に見えて居る。爲顯は伏見天皇永仁頃の人である（廣文庫第三册四七四—四七五）

うたぶくろ　歌袋　八卷

富士谷御杖が歌學の書。彼が語學によつて得た見解を加へて江戸派や上方振の長所をとり、なるべく穩健に立說したもの。八卷の中六運六則・五體の三項は今、日歌一二及び校註和歌叢書七、三九三—四七八に收めてある。

うたまくら　歌枕

廣義には和歌に歌ふべき材料卽ち歌材の總稱、狹義では和歌に咏まれる諸國の名勝の地や名物、例「吹上の濱・なにはづ・ありそうみ・ちかのしほがま・末の松山・姉はの松・六玉川等」（僧澄月の著に歌枕名寄三十卷がある。嚴密な意味に於ての完全な歌枕の書は、萬葉以下各歌集の地理的訓詁の完全なものが集大成すれば出來よう。不完全ながら捷徑の一策としては吉田東伍博士の地名大辭書を拔萃し、之に各地方の鄕土誌的單行本から補つてもよろしからう）

うたものがたり　歌物語

歌を骨子にして想を構へた物語、例へば伊勢物語・大和物語のやうなもの。

うちこし　打越

連歌や俳諧の用語で、一句を挾んでその前後にある句を互に打越と言ふ。

例　一、鳶も羽を刷ぬ初しぐれ
　　二、一吹風の木の葉靜る
　　三、股引の朝からぬるる川越えて

に於て一と三とは互に打越と言ふ。

うちこないしんわう　有智子內親王　一四

六七—一五〇七、大同二—承和一四、四十一歲

王朝初期の女流漢詩人で、嵯峨天皇の皇女、賀茂の齋院を勤められた。その詩は經國集にある。

うぢじふてふ　宇治拾帖

源氏物語五十四帖中最後の十帖。即ち橋姫から夢浮橋までをいふ。主人公は薫、副主人公は匂宮。女性では浮舟・中君・大姫君などが旨と描き、背景を宇治にとり主想を悲戀に構へ、前四十四帖と比べると多くの對照が見られる。

うぢしふゐものがたり　宇治拾遺物語

十五卷

凡そ百九十餘の和漢梵に亘る昔話を聽書した體に編んだ王朝末期雜纂の部に屬する作品で、作者は宇治大納言隆國だといふ。

題意は、

一、今昔物語に遺ちたるを宇治で拾ひ編んだ意とも

二、大納言の唐名を拾遺といふから、この題名は「宇治大納言」といふ意で、宇治大納言物語即ち宇治拾遺物語であるとも

三、この物語中には源隆國薨去以後の出來事を補つてあるから、宇治大納言物語とその拾遺とを一つにした意ともいつて所說區々である。流布本の本書の序に左の文がある。これは必ずしも眞實とは解せられないが、これ等區々の諸說をうまく融合した作話であると思ふ。

世に宇治大納言といふものあり、この大納言は隆國といふ人なり。西宮殿の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年高うなりては暑さをわび、暇を申して五月より八月までは平等院一切經藏の南の山際の南泉房といふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞えけり。髻を結び分けてをかしげなる姿にて蹇を板にしきて涼み居侍りて大なる團扇をもてあふがせなどして、往來の者高き卑しきないはず呼び集めむかし物語をせさせて我はうちにそひ伏して語るにしたがひて大なる草紙にかゝれけり。天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり、それがうちに貴き事もあり、あはれなる事もあり、きたなき事もあり少々はそら物語もあり、利口なる事もあり、さまざまやう〳〵なり。世の人これを興じ見る、十五帖なり。その正本は傳はりて侍從俊貞といひし人のもとにぞありける。いかになりにけるにか。後にさかしき人々書き入れたる間、物語おほくなれり、大納言より後の事書き入れたる本もあるにこそ。

さるほどに今の世に又物語書き入れたる出で來たれり。大納言の物語に漏れたるを拾ひあつめ、又その後の事などかき集めたるなるべし。名が宇治拾遺の物語といふ。宇治に遺りたるを拾ふとつけたるにや差別しりがたしおぼつかなし。

この書を以て隆國の作でないと認める人々には藤岡佐藤兩博士・坂井衡平氏（具體的に多くの例證をあげて）などある。尾上柴舟博士は最近「今昔物語・宇治大納言・宇治拾遺」は同じものを三色に呼んでゐる中に「今は昔」の「今昔」が名稱の上で優先してあとの二つはすたれたが、そのうち今昔の續篇とも謂ふべき一二篇の說話集に「宇治拾遺物語」の名が復活したものと觀てよろしからうと述べられた（國華一三九號卷頭一、二、三、狩野守信安信、尙信筆宇治拾遺物語畫二四九號一六七住吉具慶筆—宇治拾遺畫卷、國大一七、誠之堂發行本、三木五百枝三輪杉根兩氏宇治拾遺物語註釋）

うぢだいなごんものがたり　宇治大納言物語

今昔物語に同じ、その項を見よ。

うちとほ　本居内遠　二四五二—二五一五、寛政四—安政二、一〇・四、六十四歲

尾張の人、本名鎌田謙次郎（後久次郎、又、彌四郎と改む）木綿桓又は榛園と號した。幼より國學を好み本居大平の門に入り、日夜精勵、遂に師家を嗣ぎ、紀州侯に仕へて江戸詰となつた。彼又狂歌をよくし狂號を秋津といふ。今の本居豐穎博士はその養子。故小中村清矩・木村正辭の兩大家はその門人である。著書は次の四十種、丹生祝氏文考・伊太曾三神考・天野告門考・熊野祭神考・紀伊國神社考・紀伊國神名帳・神武紀巡幸路次辨・三穗窟考・和歌の浦鶴・古事記年立・三韓紀涉・水草上物語標註・小倉百首證文・後奈良院阿曾考解・大嬰机考證・古今官位指圖・官職界抄・冠帽革制考・源氏物語年立考・紀伊國造職補任考・紀伊國續風土記・紀伊國古昔國界考・紀伊國名所和歌集・紀伊國名所辨・妹脊山考・條理圖帳考・半臂考證・尾張濱主考・古調考・黑鳥考・眞律考・田祖度量考・獨考辨・小野小町考・賤者考・宍倉禁忌考・金枕考・古學大意・佐喜美多滿・初榛集

うぢぶみ　氏文

上代文學の一つで、一家に語りつたへた傳記を記した奈良朝期の散文。蓋し家系を尊重する我國民性のあらはれとして注意すべきものだが、現存するは唯高橋氏氏文だけである（その項參照）

うぢやす　北條氏康　二一七五—二二三〇　永

正一二—元亀元、五十六歳

戰國時代豆相武上を併有して一方に雄視した事蹟は正史に顯著である、彼は又和歌を好み吟咏の見るべきあり。その著に武藏野紀行（群歌二三九）がある（但しこれは僞著であらうと、史學雜誌に田中博士の說が出て居つた）

うつぼものがたり　宇都保物語

梗概。　昔清原俊蔭入唐の途次颶風に遭うて、波斯（はし）に漂着し、梅檀の林に天人の琴を得、歸朝して京の三條京極の邊りに居を占める。一女あり、當年十五歳才色双絶時の太政大臣の子兼正之に通ひそめて一男を產んで永らく音信不通であつた。その中俊蔭は病あつしくなり色々遺言して逝く。うしろみの確たるものなくしてその女は日毎に活計のたづきを失ひ、遂に北山なるうつぼの（大木のうつろ）中に母一人子一人（子は五歳）の佗住ひをしてゐたが、熊やその他の鳥獸はその子の孝心にめで色々の木の實草の實を運んで、このあはれむべき母子を援けてゐた。その中勢子（せこ）の犀が聞え、兼正の狩に來てゐるのに見つけ出され、再び彼の家（兼正の邸）に引きとられた。兒は美しく成長してやがて元服、仲忠といふ。當時の權貴藤原君（左大將正賴）は仲忠の人物を見込み、之を自邸に招き十四人の姫君の內誰れかを引出物にしようとした。

十四人の姫の中才色眞に絶世なのを第九の貴宮（あてろや）と言ひ、この貴宮の愛を得ようとして兵部卿宮以下十四人の貴公子が或は才を以て、又德を以て、容を以て、誠心を以て、姦計を以て、修法を以て、色々に言ひ寄つたが何れもその意を得ずして、名花一輪高嶺を飛んで月の都東宮の坊に御入輿。之が爲めに或物は蟄居隱栖し或者は訴訟を提起して却て流罪に處せられ、或は病を得、或は焦れ死にし情界の波瀾一時高潮してやがて仲忠は帝の一の宮を涼は正賴の十の君を許され、その他の貴公子もそれ〳〵他の姫君を娶はされて田鶴群鳥はおのも〳〵の戀に自得した。仲忠は京極の舊宅を開けて亡父が遺愛の琴や書物を朝廷に獻じ、褒美として小野宮清愼公の石帶を賜はり、その他仲忠の一族萬事めでたく榮える。

以上がその大體で、大まかに觀ると始めは俊蔭中心、中は貴宮中心、最後は仲忠中心の構想になつてゐる。

作者　一、源順—河海抄

二、藤原爲時—玉琴（細井貞雄）

三、不明—通說

まあ不明としておくの外なからう。

年代、大體、圓融・花山二帝の頃の作といふに衆說は一致してゐる。文藝百科全書解題部には「源氏物語より一代前即ち源順と同時代の某作家の作」と樣にあり。安齋隨筆一〇三三六には「源順より三十六年の後、清愼公より十八年の後といへば一條帝の永延元年に當るがその時のことをもいとあがりたる世のやうにいひなせる點から推してこの物語は源氏、枕よりも後の作であらう」との意を述べ、尙又この說を取り容れるには好都合なやうに工夫して「この書の中最初の俊蔭中心の說話だけが古くて、あとの大部分は源氏、枕以後、後人の追加であらう」といふ說もあるが、之を通讀しての感じは矢張同一人の手に成つた文章といひたい。

卷の立て方も精粗種々あつて、一、田中道曆本—二〇卷・二、織錦舍隨筆—三〇卷・三、玉琴—一五卷・四國文大觀本—一九卷

四が流布本の體であるが、まだ本文（テキスト）が定まつてない

形式、

一、古拙、あまり名文ではない、一寸讀んでも拙、くど〳〵しい修辭が隨所にある。

二、漢字音の語彙が多い。不孝・娑婆・極樂淨土・震動・音聲・因緣・禮拜・淫慾・施し（せ）・刹那・輪廻生死と樣に。

三、斷句が多い。源氏物語をよむと何だか「絶えんとして絶えざること縷の如き」趣があるが、本書は冒頭の僅か數行の間にでも五つも斷句がある、隨て、

四、主語の省略は少ない。斷句ばかり多くて主語が省かつた位には晦澁難解に陷るであらう。

五、和歌が多い。全部で九百九十四首もあつて源氏よりも二百首許も多いし、和歌專門の古今集一千一百十首と比べて大差がない位だが、歌の質そのものは平板で劣つてゐる。

六、消息文も多い。

七、秀句は竹取に比べると減つてゐる。

想、竹取から源氏に至る過渡の代表的作品たる宇都保は、そが着想を竹取的ロマンチック要素と、源氏的リアリスチツク要素とにわけて考察することに意義があらう。

甲、ロマンチック要素

一、波斯への漂流（波斯とは今いふ交趾支那地方のことか？）

二、天人より琴を授かること。
三、宇都保の住まひ、鳥獸の感動、山居八年。
四、神泉苑の彈奏。
（但し當時は種々なる迷信の盛行した時世だから今日から見て架空無稽なことでも當時に在つては常識的な人情として描かれたもので、一見傳奇的で、其の實、寫實的手法に成る部分も少くはなからう）

乙、寫實的要素

一、愛慾の世界、戀愛の種々相、榮貴公子一美女を爭ふことは已に竹取にあつた型なのに、この物語のは、その竹取の繼承よりは當時の世相の反映たる分子を多分に含んでゐるとは衆文學史家の諸說である。
二、唯美主義の世相。
三、一夫多妻の風。この物語の正頼（二妻、二十六子女　の系譜を藤原道長（三妻十三子女）と比べると略々相似た恰好になる。
四、國讓の卷は藤原氏が慣用の外戚政策を見現したかの趣がある。
五、反藤原氏派の一線として清原俊蔭、その一女仲忠、その子犬の宮をおいたのは王朝期を通じて、藤原氏にとつては警戒すべき暗流。紀氏・在原氏・西宮左大臣・菅原道眞等に相當する。
六、夫婦・父娘・乳母と養ひ君などの愛情。
七、音樂强調の世相。
八、その他當代史實と交渉ある本物語中の記事として坂井衡平氏が國文學通史上（卷二八八—二八九）にあげてゐられるのを借用すると、
1. 弘仁、冬嗣、勸學院を作る事。
2. 寬平六年以前の遣唐使船の記事。
3. 弘仁頃實在せる人物、藤原俊陰・清原夏野・岑成・秋雄。
4. 嵯峨院の子一世源氏凉（物語の主人公で、父は紀州牟婁郡の長者神奈備種松、母は嵯峨院の女藏人）源弘、源融。
5. 新羅高麗と並稱することは古くは天智以前、近くは延喜十八年後承平五年以前の三韓の樣なり。
6. 北野行幸を文字通りにとればこのことあるは天曆九年以後のこと。
7. 石帶のことある貞信公は天曆二年に薨じた。

8. 小野宮大臣や、順の卒去は圓融帝の朝である
9. 臨時の祭賀茂は寬永元年、石清水は天慶五年
10. 朱雀院の名は最後の卷に見える。
11. 「心にもあらでうきよにながらへば」の歌は

三條院の御製とすれば細井貞雄のいふが如くずつと後なれど、これ院が古歌をとられしものか？

批評。之を通讀しての感じをいふと、構想蕪雜の憾がある。作者は果して何を描かうとしたものか？　若し貴宮を描かうとなれば、かぐや姫の昇天のやうに、この姫の入內を最高潮においてそこまでを勾配ゆるく漸層法的に描きそれ以後を急轉直下させればよろしいから、以下の叙述はどうも蛇足としかとれぬ。若し仲忠を中心においたのなら第一その前提としての俊蔭、第二愛慾生活の對象としての貴宮、第三富貴慾實現の生活としての初秋以後の卷々、と樣に畧々首尾を一貫して主想に繫ぎとめてゐるやうだが、それにしては愛慾と富貴の兩者に於ては輕重多寡の比例がとれてゐない。貴宮中心の戀物語が餘りにも饒舌である。若し又誰を中心といふ譯でもなく數美女、數貴公子の享樂の世界を描かうといふのならば、筋の爲めの筋、場面の御都合の人物が多くて本當に血肉のある人物らしくもない人物が餘り頻出し過ぎる。東宮、正頼の一方の妻（橘太政大臣の女）貴宮以外の二十五子女、樂聖彌行今宮、梨壺女御など、もつと力を入れて描く必要があらう。藤岡博士はこれにつき左の通り論じて居られる

著者が企つるところは、人性の發表、感情の變化等を紙心に描寫せんとするにあらずして、むしろ一種の傾向を筆端に寓せんとしたるなるべし。蓋し著者の理想とするところは簡單なるもの、如し。すなはち種々の智能才藝のいづれかよく美の愛樂を得るか

といふにあり。

と、けれどもまだ創作意識のさう發達してゐない當時のことととて、寧ろさうした意識的な立意も趣向もなく唯漫然と自家消閑の手づきとして筆を執つたものと觀る方が正しくはなからうか。何にしても本書の構想はまだ〳〵精煉の餘地があらう。が此缺點を抜きにして本書通讀後瞑目一番すれば、流石に王朝の世相が眼前に髣髴するものがある。そして事件の反照や、年中行事の細叙や、誇張法や、なかしみは相當筆が行き届いてゐる。人情を旨と寫した純ノーヴェルの始祖は何といつてもこの宇都保であらう。

尙鈴木暢幸氏が謂はれるやうに（新修國文學史上一六七）本書には次の時代の一基調たる宿世の思想さへもほの見えて居る。この作が源氏物語に影響を及ぼした點の多いことは細井貞雄の玉琴に細說して居る。「源氏物語」といふ題名からが本書の「一世の源氏云々」から思ひつかれたやうにとられる。一條天皇の頃、宮廷に於て如何に本書が愛讀されてゐたかは清女の枕草子に出てゐるし、源平時代に至るまでも本書が盛んに讀まれたらしい形跡は「かしがまし草葉にすだく」の忠度とさる女房の逸話ででも察せられる（この事は閑田次筆二ノ四〇にある）

諸本。

本文は、一、萬治三年版三册本・二、國文大觀物語部五・三、有朋堂女庫第二輯四五・四、校註國文叢書一三、一四ノ内・五、古典全集・第三期の豫定・六、校註國文學大系第四五卷等に入つてゐる斷片的な資料は可なりにあつても纒まつた良註はまだない。今分のところ國註十によるがよい、これには次の諸本が入れてある。一、細井貞雄玉松五卷文化十二年・二、同　玉琴二卷・三、山岡明阿細井星阿宇都保物語二阿抄・四、清水濱臣宇都保物語考證一卷

うづらごろも　鶉衣　十四卷

俳文の代表的大家横井也有が一生を通じての俳文集で也有歿後江戸の太田蜀山人が非常に推稱して發行してから世に廣まつた。「鶉衣」といふ題名は謙遜の意で、序文に

あやしく榮もなききれ〴〵を集め綴りたるを鶉衣とはいふなり。げにその鶉なればたゞ深草の深くかくろへてかりにだにも人には知らるまじきものにこそとある。蜀山人が之を愛したのはその超脫味と、輕味と、高尙な談理を輕く茶化し而かもよく人情の機微にふれる點にあつたらしいし、事實これ等が本書の美點である。明治俳文集といふ書で現代諸家の俳文を見たが、さり〴〵面白くは出來てゐたが矢張り「俳文では鶉衣」といふ感じを搖かすまでには至らなかつた。

蓼花巷記・長短解・摺鉢傳・俳席之掟・借物之辨・旅賦・音曲說・絲瓜辭・百蟲譜・臍頌・瓢・長者傳など殊に佳章としてよく引用せられるが、著者縱橫、眞行草無碍の俳才は寧ろ全作品に橫溢してゐるかの觀がある。本文は、天保十二年大阪版　俳諧文庫第六編等にあり、明治に入つて今古堂から俳諧叢書うつら衣として單行、註釋には武笠三氏校註の鶉衣三册帙入が

よろしく、一部のものだが佐々政一氏うづら衣評釋も參考になる（その他本書の佳章は近頃高等學校程度の教科書に屢々引用せられ頭註若くは卷末註が附してある）

うどんげものがたり　優曇華物語　十五回

七册

山東京傳が四十八歳の時、出世作とも謂ふべき讀本で皎二郎弓兒といふ好對の佳人才子が共通の親の仇を討つて遂に夫婦となると謂ふ筋、文は演義體で雅俗を折衷し平明優雅な趣致に富んで居るが挿畫が支那風で構想が陳套な爲めに、好文であるに拘らず名高い割に賣れは少なかつたといふ。この作は馬琴の月氷奇緣に暗示されて又馬琴の稚枝鳩に暗示を與へてゐる點が少くない（帝文一五、八〇九—九五四）

うまかひ　藤原宇合　一三三九—一三九七、天武七—天平九　五十九歳

奈良朝に出た名家、不比等の子で式家の先祖である。元明・元正・聖武の三朝に仕へて、遣唐副使、按察使持節大將軍・參議式部卿等に任ぜられた。和歌漢詩の才あり、和歌は萬葉の一・三・八・九の各卷。新古今續古今・新拾遺の各勅撰集に出て居り、漢詩は懷風藻・經國集などにある。

うまき　近藤芳樹　二四六一—二五四〇、享和元—明治一三、二、二九、八十歳

周防の人、名は晋一郎、寄居子庵（がうな）と號し、本居大平に師事して國學和歌に通じ、明治維新後宮內省に出仕しては御歌文學御用係をつとめ、聖上、東北御巡幸に供奉して紀行「十符の菅薦」「陸路迺記」あり、その歌寄居百首は續歌一二にとられ、文には寄居文集あり、歌論の書に古風三體考・寄居歌談あり。その他神道や有職故實の編著もある（殊に明治の堂上風歌人の先輩の一人として注意すべき人であらう）

うまき　加藤（又、河津）美樹（又宇萬伎とも宇万伎とも）　二三三八一—二四三七、享保六安永六、六、一〇、五十七歳

姓は藤原、通稱大助、家號靜迺舍。幕府大番の士で、賀茂眞淵の門人中歌文を以て鳴る（千蔭・春海・魚彥と共に縣門の四天王と云ふ）寶永年間公務大阪詰となる。京阪有志の士、門を叩いて敎を乞ふ者甚多く、彼の上田秋成の如きもその一人であつた。その著書は、一訓詁、古事記解・兩夜だみ辭・土佐日記註・古葉注解・伊勢物語注解、二、文字學・假名問答・假名類纂、三、

家集・靜舍歌集、四、文集・木曾路之記・靜舍雜著、彼は萬葉派歌人と謂はれてゐるが、その歌について見るともつと近代的で先づは萬葉と古今の中間とでも評すべきであらう（佐々木信綱氏評）

春霞たゝるを見ればくゝもりし神代の昔おもほゆるかな

思ふ人ありとはなしに春雨のふるさとのみぞ戀しかりける

もののふの草むす屍としふりて秋風さむしきちかうの原

最後の一首殊に人口に膾炙し、上田秋成は慨々信州桔梗ヶ原に出かけて師翁の爲めにこの咏を石に彫らせて建てた。

うまのないし　馬内侍？

一條三條後一條の頃の人、父は右近權頭源時明、彼女は一條天皇の皇后に仕へ、梨壺の五歌仙の一人ともてはやされて才媛の譽れ高かつたが生歿の年は不明である。歌は馬内侍集（群二七二、一〇、一五七—一六七、續國六七六—六八四）の外、拾遺（四）後拾遺（一〇餘）、新古今（八）等の諸集に收められてゐる。

うまやどのわうじ　厩戸皇子

しやうとくたいし「聖德太子」を見よ。

うめごよみ　梅暦（春色梅暦）　五卷

爲永春水天保三年の作、狹斜の巷を如實に寫し、殊に男女兩性の愛慾心理を露骨にこまかく、俗語で書き別けたのが特徴で、思春期の青年子女に對しては今でも一種の蠱惑力があるかも知れぬが純文藝の見地から見れば大した作品ではない。ただ洒落本を人情本としてこれまで認められなかつたのが一躍大家の斑に入つて——否事實入らないまでも自身入つたものと自惚れるまでに得意がらせたこの作は春水の一生からも小說の沿革からも劃期的な作品として、注意すべきものがあらう。（帝文一〇に入り薫志堂や野村書店よりも單行本發刊）

うらしまたらう　浦島太郎

資料、

浦島子傳・續浦島子傳・雞迺宇計木・神武紀集解上、二七・書紀集解一四ノ四六・萬葉集九ノ一八・續史籍覽南京遺響中ノ四九・日本紀竟宴和歌下ノ八・釋日本紀一二ノ一〇・日本書紀纂疏上ノ一三・湖月抄夕霧五八・和集童蒙抄二ノ一一、六ノ一八・古事談一ノ一・水鏡下、二五・神明鏡上、八・如是院年代記二八・皇代記上、一六・扶桑略記二ノ一八・諸社一覽七ノ一九・本朝神社考五ノ一三・本朝通鑑二ノ九・一三ノ一九・史籍集覽神皇正統錄上ノ二三・史籍集覽丹州三家物語一七・前々太平記一二ノ五・本朝高僧傳七四ノ九・名所方角抄一六一・詞林采葉抄四・廣益俗說辨一〇ノ一・合類節用集四ノ二一・歌林良材集下ノ二・雜和集中ノ五日本書紀通證一九ノ三一・倭訓栞「うらしまがこ」・三神山餘考四六・類聚名物考三ノ四九三、六ノ五一九・古今要覽六ノ六八七・扶桑故事要略四一・叢書安齋隨筆二九ノ九二九・市井雜談集上一七燕石雜志四ノ四三、六ノ二五・萬葉集古意九ノ上二一・繪本年代記二ノ一七・宗祇諸國物語一ノ一（生所）・龜桑夜談上、一六（垂釣の所）・江戸名所圖會二ノ一〇三（墓）・和漢三才圖會七七ノ七（浦島明神）・蜀山人全集一話一言一ノ三二（浦島明神）・國花萬葉記一三ノ一二（浦島明神）燕石雜志五ノ下一三（島子考或問）廣文庫第三册七九二—七九七・お伽草子中「浦島太郎」・野村書店、浦島物語・木村小舟作歌田村虎藏作曲浦島太郎（家庭唱歌）東京堂。

うらずみ　大屋裏住　二三九四—二四七〇、享保一九—文化七、七十七歳

元、白河の藩士、後辭して江戸に出て更紗の製作を業とし、傍元木網を師として狂歌を學び恬淡の性と相俟つてこの方に奇才を發揮し本町側狂歌師の元祖として名高いものになつた。

めを出せばはさみきらふと横に行く宇治の茶畑は香に匂ふ也

羽衣の裳にとぢてゆくかりをたぐりもどせよ青柳のいと

鶯も蛙もおなじ歌仲間經よむもあり唯なくもあり

うらのしほがひ　浦農志保貝　本集二卷　拾遺三卷

熊谷直好の家集で本集の方は弘化二年（二五〇五）門人三井宗之等が、直好の舊知東塢の反古から拾つて一册にしたもので、拾遺は同門茂之等が、その後安政三年（二五一六）に殘れるを拾ひ集めたもの、題名は初篇宗之序に「をちこち拾ひ集めおなじ渚にあさりせん友人にも見せまほしくてかくは……」などあるので察せられよう。明治十二年にこれ等をまとめて一册に復刻し今日では續歌五に入つて居る（本集の歌については、「直好」の項參照）

うりうし 雨柳手
せいけん「三宅青軒」を見よ。

うをとりへいけ 魚鳥平家（精進魚類物語）
祇園林の鐘の聲、きけば諸行も無常なり、沙羅雙林寺の蕨の汁、盛者ひつすいしぬべき理をあらはすおこれる炭も久しからず美物も燒けば灰となる。
と平家もどきの冒頭で、魚鳥元年八月一日御料大番で上京の鰤（ハハラゴ）の太郎次郎が納豆太郎糸重と席次を爭うたのが抑々で、魚鳥と蔬果とが大軍を始めた。先づ魚鳥方には、鯨の荒太郎、鯛の赤介、鰐の大内權介、獅子駄麟何々まで其勢都合二萬五千、一方蔬果方では「蒟蒻兵工・酸吉・牛房長左衛門長吉・大根太郎・苣次郎・昆布大夫・荒和布新助・椎少將・棗宰相・桃侍從等五千餘騎とゞ後者即ち蔬果方（即ち精進方）の勝に歸したといふ。室町時代お伽草紙の一種で、をかしみと擬人との點に於て成効に近い作品と謂はれてゐる。（續帝三二）

うんかく 千葉芸閣 二三八七―二四五二、享保一二―寛政四、六十六歳
江戸の人、名は玄之、字は子玄、通稱を茂右衛門といひ、初め秋山玉山に學び拮据營々多年の後遂に詩文の大家として世に稱せらるるに至つた。學説に於ては徂徠の古文辭學を奉じ、講説に能辯でついて學ぶ者多く古河侯に聘せられて藩儒となり、後又辭して駒籠に帷を垂れ諸子を敎へ、名聲、井上金峨紀平洲等と相拮抗したその著に左記の諸書がある。
標箋孔子家語・標箋荀子・標箋莊子・標注國語・孔子行狀圖解・官職通解・年中吉事鑑・唐詩選掌故・唐詩選講釋・四聲韻選・詩學小成・文章小成 芳閣文集。

うんしうせうそく 雲州消息 三卷
又「雲州往來」とも「明衡往來」とも謂ふ。（明衡は出雲守であつたから）「明衡往來」の項參照。

うんぴやうざつし 雲萍雜誌 四卷
大和氷山の藩士柳澤淇園の著、天保十四年（二五〇三）發行。著者が隨聞漫錄に訂正增補を加へた隨筆で、德川時代和漢混淆文の優れた一作品である。百説八に收まつて居るし、その抄本は中等學校上級用の教科書に用ひられたりして居る（續國民一）

エの部

えいかいつたい 詠歌一體 一卷
藤原（冷泉）爲家の著、父定家が詠歌大概にほのめかした「制の詞」の觀念を一層具體化したもので、
主ある詞―霞みかれたる、うつるも曇る、花の宿貸せ等、
先達加難詞――たつや霞、うす霞、露の夕暮等、避くべき歌語を一々列擧して居る。蓋しその趣旨たる單に當座の心得に過ぎなかつたらうが、後世子孫之を自家の金箔とし、勿體かつげ尾鰭をつけて、和歌史上一大沈滯期を醸成したのは遺憾の至りである。
今群二九二、一〇、七〇七――七一二に收まる。之には大永二二仲冬桑門、堯空の奥書がある。

えいかたいがい 詠歌大概（詠歌之大概）
一卷
藤原定家が梶井の宮（後鳥羽院の御子尊快法親王）から詠歌の法を問はれて答へたもの、いはゞ作歌法概論とも名づくべきもの、漢文で簡結に書かれてあるが、後に二條流が金科玉條視したもの、今全文をあげる
情以レ新爲レ先　求二人未レ詠之心一　詞以レ舊可レ用　詞不可レ出
三代集二新古今古風體可レ働二堪能先達之秀歌一　論二不レ人歌同可レ用レ之
古今遠近二見二宜歌一可レ働二其體一
近代之人所二詠出一之心詞雖二一句一謹可レ除二棄之一七八十年以來之人所二詠出一於二古人歌一多以二其同詞一心詞努力不レ可レ取二用之一
詠レ之已爲二流例一但取二古歌一詠二新歌一事、五句中及三句一者頗過分無二珍氣一二句之上二三字取レ之猶案レ之以二同事一詠二古歌一顏無念歟以レ花詠レ花以二四季歌一詠二戀雜歌一以二戀雜歌一詠二四季歌一如レ此之時無下取二古歌一之難上歟
「足引の山鳥」「み吉野の吉野の山」「久方の月の桂」
「時鳥鳴くや五月」「玉梓の道行人」
如此之事全雖二何度一不レ憚レ之
「年の内に春は來にけり」「月やあらぬ春や昔」「櫻散る木の下風」「ほの〳〵と明石の浦」
如レ此之類雖二二句一更不レ可レ詠、常觀二古歌之景氣一可レ染レ心殊可二見習一者、古今伊勢物語、後撰拾遺三十六人集之内殊上手歌可レ懸レ心、人麿、貫之、忠岑、伊勢、小町等類也雖レ非二和歌之先達一時節之景氣、世間之盛衰、爲レ知二物哀一白氏文集第一第二帖常可二握翫一深通二和歌和歌無レ師只以二舊歌一爲レ師染二心古風一習之心一
詞於先達一者誰人不レ詠レ之哉
形古想新の提唱、模擬剽竊の排斥、換骨奪胎の要領讀むべき古歌書、白氏文集一二の推奬、和歌に常師な

しとの主張と大約この六項を含んでゐる。之を定家が作歌と對照すると、彼の歌風を如實に表白した歌論である。唯後世の子孫が之に極端に拘泥して黨同伐異の具に濫用したのがわるいだけである。

本書は寫本一卷として傳はり承應元年（二三一二）和歌七部抄の第一に收められ、細川幽齋が天正十六年（二二四八）に詠歌大概抄二卷を著した。これは歌學文庫卷三に入つてゐる。

えいかたいがいせう　詠歌大概抄　二卷

細川幽齋、久我亞相の求めに應じて定家の詠歌大概を敷衍して天正十六年（二二四八）に作る。近世堂上の歌人多くは之によつて定家の歌風を辿つた。歌學文庫卷三にある。

えいかのたいがい　詠歌之大概

「詠歌大概」を見よ。

えいきやううたあはせ　影供歌合

歌道熱心の徒が相集まつて柿本人麿の追善供養をし、その肖像の掛軸をかけて參り、その席でする歌合をいふ。鎌倉時代建久二年に起る。これの濫觴と想はれることは王朝末の歌人藤原顯季が大の人麿崇拜であつたが、嘗て藤原兼房が夢に人麿を見て塑朝畫工をしてその相貌を畫かしめ、後、白河天皇に奉つたものが、近頃鳥羽の寶藏に納められてある。そのことを顯季が聞き込んで朝廷に請うて借り出し、畫工右衛門佐大夫信義をして之を寫させ、文章博士大學頭日野敦光に賛を乞ひ、その賛を神祇伯源顯仲に淨書して貰つて秘藏し「和歌をよくせざるものは親子といへどもこれを傳ふべからず」といつたが、末子の顯輔が歌の能才で讓り與へられた。さて顯季は元永年間に俊頼を招待してこの像を祭り、爾後毎年恒例とした。天皇がそのことを聞し召されてその祭田として讃岐里海士邑を賜はり、一方御寶藏のはその後燒失し、この方が却て正本となり、保季盛實につたはつたのを堀河院がめされて宮中に納まり、建長の頃から公に影供などを行はせられたといふ（群一九二に建仁元、八、三と同二、五、二六、兩度同二〇一に建長三、九、一三、の影供歌合がある尙古類八七―八八、一七五―一七九を見よ）

えいきゆうひやくしゆ　永久百首

「堀河院後度百首」を見よ。

えいきゆうよねんひやくしゆ　永久四年百首

「堀河院後度百首」を見よ。

えいきよく　郢曲（詠曲）

各が楚の都「郢」に來て下里巴人などいふ。俗曲を謠つたら和するものが多かつたが、陽春白雪などいふ高尙な曲を謠ひかけると段々和するものが減つたといふ故事から出來た語（郢の流行曲ととるは非）で、支那では當世風の俗曲といふ意。我邦では平安朝時代の流行にかゝる龍馬樂風俗今樣朗咏の類を總稱し古今著聞集・東鑑・十訓抄・徒然草などにその用語例があるし正安中明空の「郢曲撰要」十八卷の書名にもなつてゐる。

（廣文庫第三册八八九―八九〇大日本國語辭典第一册四八一上段）

えいぐわものがたり　榮華物語（世繼）

四十卷

我國で始めて書かれた國文の歷史で、宇多天皇より堀河天皇に至る十五代二百餘年間の事象を編年體に叙述し、之に美的題目を附したものである。「榮華」と名づけたのは主として關白道長の顯榮光華を寫したからで物語はこの期通有の小說的散文の稱呼である。年代に少しの相違はあるが、之を大鏡と比べると

榮華　大鏡

編年史　記傳體
表面觀　裏面觀
女性的　男性的
讃美的　批評的
文章典雅優麗　簡古雄勁

と樣な邀たる對照觀が成立つ。

著者未詳、但し早くから赤染右衛門だとの說が有力である。法橋顯昭の色葉和歌集、大石千引の榮華物語考難注、和田英松・佐藤球二氏の詳解卷頭、古典全集の解題皆さう謂つてゐる。處が、本朝書籍目錄には「世繼四十卷自二宇多天皇一至二堀川院御宇一載二君臣事一藤爲業作」とあつて爲業說も有力である。一體赤染右衛門の生死が不明だから何とも謂へぬが、上東門院に奉仕した一才媛であるから、もしこの物語の終りの寛治六年まで存命したとすると百二三十歲になる譯で、如何に長命といつても少し老人すぎる。若し爲業とすればこれは法名寂然と謂つて大體崇德の朝を世盛りとして仕へた人だから、年代の點はよく一致するが筆はどうしても女の文致であるからあはない。

處で、段々各卷についてしらべて見ると、第一卷から第卅卷までが一人の筆であとの十卷は別人の手して補

はれたものらしい（三十卷十卷と區切つて正編續編とすることは契沖から始まつた）さすれば正編を赤染右衛門の筆として續編は誰が書いたか！出羽の辨（契沖土肥經平）とも爲業（大石千引）とも謂はれるが、要するに不明である。つまり前後篇又は上下篇とわけることは現存する記錄についてみて間違ないことだからよろしいが、作者を誰彼と推測することは容易でない。年代はいつ頃か、全部書き上げられたのは堀河天皇の頃で、分けていへば正編は萬壽五年以後天皇御治世の終の長元五六年位の間に出來、續編は寛治六年以後嘉承二年までの間に出來たものであらうといふことに一致して居る。

榮華や大鏡の作品が如何なる動機から出來上つたか、行きつまりの物語から新しい方面への打開と見るもよし、竹取のロマンチックなる、うつぼのロマンチックにして且リアリスチックなる、源氏のリアスチックなる―その寫實が源氏以上に高潮した表現形式が雜史であるとも見られ、漢詩から和歌が獨立し、書牘から消息文が手を切り、純漢文體の日記から土佐日記が獨立すると如く、六國史から榮華・大鏡が獨立した。つまりこれ等は次第に盛り上つて來た日本的意識の表れであるとするもよし、源氏物語を當時の世相さながらで行かうとした作者の企てと見られないこともない。何れにしてもこの一本は、三鏡・四鏡・月の行く方・池の藻屑などに尾を曳いて、文學史的にも史學的にも重きをおかるゝ良書である。

異本も、參考本も、註釋本も少くないが、最近のでは史籍集覽本・國史大系本がよいし、意味を精解するには校註國文學大系第十一卷、卷頭の尾上博士の解題を見てから、和田英松・佐藤球兩氏の榮華物語詳解を精讀するがよい。（國華二三六號一八七・榮華物語駒競行幸詩繪四三號一二二―一二三・榮華物語繪四六號二〇六、二〇七・榮華物語船樂圖・國大、一五、八四五―一七六）

えいさうおくがき　詠草奥書

「隨所師說」を見よ。

えいし　詠史

歷史上の古蹟や人物を題材とした和歌や俳句や今樣や漢詩をいふ。懷古憑弔の感を寓することが多い。

例　駒わたす人かげもなし犀川の岸のつかさはかたくづれして　加納諸平

笠置山あすの時雨をさきだてゝみだるゝ雲に嵐ふくなり　同　上

夏草やつはものどもが夢の跡　芭蕉

むざんやなかぶとの下のさりぐす同　上

えいじつ　永日

尾上柴舟の歌集

今日もまた人を導くわが住まぬ理智の世界を指し示しつゝ

しらぬ人今日も來たりてわれを呼ぶあゝ君が名は老かあらぬか

等約三百首を集めて居る。中澤弘光・山本森之助・岡野榮三氏の裝幀に係る（四六版一五二頁、明治四十二年八月八日、弘道館）

えいしん　詠進

明治六年宮中御歌會始に一般臣民詠進の道を開かせられ、爾後毎年この例に倣はれた（晴光館編輯部明治勅題歌集）

えいたいぐら　永代藏

にほんえいたいぐら「日本永代藏」を見よ。

えいぶくもんゐん　永福門院　一九三一―二〇〇二、文永八―康永元、五、七、七十二歲

太政大臣藤原兼實の女、伏見天皇の中宮で、御名は鐸子、京極派爲兼について歌道を嗜み、最もよくこの風を承けつがれた。御歌は玉葉（四〇）風雅（七〇餘）等に出てゐる。

空遠く月さしのぼる山の端に止りて消ゆる雲の一村

さまぐゝの我慰めも事つきて今はと弱る程ぞ悲しき

えうきよく　謠曲

一　本質。　權勢にあこがれ利慾に汲々たる間は趣味や理想は閑却せられるが、權勢利慾に奔走する必要なき身は知らず識らず趣味にあこがれ、理想に欣求する。謠曲は正しく室町幕府が彼の權勢利慾に飽滿して人間本然の心のふるさと、美の王國を欣求し、趣味の殿堂にあこがれた結成物である、その勃興が足利將軍の地歩やうやく固定した三代義滿の時であつたことも偶然ではない。永和四年の今熊野の猿樂に彼自ら觀阿彌太夫の舞をたゝへて之を同朋の列に加へ、その子世阿彌元淸にも特寵を加へたことは謠曲發生史上劃期的の事件であつた。これより觀阿彌世阿彌の父子が將軍家に出入をして多くの謠曲を作り又これより猿樂そのものの品位もずつと高まつた。猿樂といつても最早明衡の新猿樂記にあるやうな粗笨なものではなく、細心の用意と渾身の精煉とを加へた極に成つた新猿樂でとりも直さず能である。こ

の能を演ずる爲めの臺詞が即ち謠曲で能は一種の樂劇謠曲はこの樂劇の脚本と謂つて可い、隨て謠曲の任務は所演の能を引き立たさせる點にあつて、能の見所が歌と舞とである以上謠に於てもここに力點をおいたのは當然であらう。然るに當代文化が一面王朝文化に對する强き思慕を感じ一面鎌倉時代の質實剛健の武士道精神脈離穢土他力本願の新宗教に思惟行動の根柢をおき尙且つ亂雜無秩序にして政治的に下剋上なる世相の反動として古典を重んじ傳統を尊ぶ風があるところから、この謠曲も著しく王朝式な文致があり、源平時代の種があり新宗教の通俗宣傳めいた傾向がある。それとこれ等作家は大抵作曲者でもあり、實演者でもありした關係上、節つけの手法や振つけの手法と同じ骨法を以て古物語古記錄古典文學を補綴した。

即ち取材に關しては

一、神事　イ、神社の緣起又は奇特を述べたもの、弓八幡・三輪・龍田・岩船・賀茂・白髭・竹生島右近・淡路大社・鼠山等。ロ、特殊の神事を述べたもの、放生川・和布刈等

二、歌人　小町（草子洗・關寺・卒都婆・通）業平（雲林院、小鹽）檜垣（同名）貫之（蟻通・吉野）紫式部（源氏供養紫野）和泉式部（和泉式部・小式部・誓願寺）式子內親王（定家）西行（西行櫻江口・雨月）

三、武家物　田村麿（田村）四天王（大江山・羅生門、土蜘蛛）朝長・經正・俊成・忠度・敦盛・生田敦盛・知章・通盛・淸經・實盛・盛久・大原御幸・景淸・熊野・千手・義經（鞍馬天狗・橋辨慶・烏帽子折・熊坂・八島・正尊・舟辨慶・吉野靜・二人靜・安宅・接待、錦戸）賴朝（七騎落）賴政（鵺、賴政）義仲（巴）

四、復讐物　曾我兄弟（元服・小袖・夜討・禪師・伏木・十番斬）

五、戀物語　伊勢物語（采女井筒）大和物語（求女塚）源氏物語（半蔀・夕顏・葵上・野宮・須磨・源氏・住吉詣・玉葛・柏木・浮舟）平家物語（小督、祇王、佛の原）

六、支那の傳說　虎陽宮・項羽・張良・王昭君・三笑・白樂天

之を文詞より見ては

一、朗詠　六十餘回春不レ飽、他生定爲二愛レ花人一（二人靜）

二、佛典　夢幻泡影至誠深心迴向（兼平）

三、和歌　見渡せば松の葉白き吉野山幾世積りし雪ならん深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の苦菜つむ頃にも今やなりぬらん云々（二人靜）

四、故事成語　漁翁夜西岸に傍うて宿す曉湘水を汲んで楚竹を燃くも今に知られて蘆火の影ほの見え初むる物凄さよ（八島）

之を修辭より見ては秀句法・緣語法・引用法・句拍子等を補綴運用し中には不自然と思はれるまでこの種の運用が頻繁なところがある、この意味に於て謠曲は一種の折衷文藝である。而かもその着想多くは佛教的脈世觀と他力の解脫に終り、如何なる古英雄古美人も劫風一過無常の前には力なく朽ちては一个の髑髏と化するを免れぬから佛に歸依して死後永遠の安心立命を期すべしと云ふに歸するところ鎌倉以來流布した新宗教を美的に宣傳した趣がある。

二、番數　今日傳はるところ千五百三十八番もあるといふが普通行はれてゐるのは二百數十番である中には室町以後の作（たとへば豐太閤の吉野の櫻狩）もあるが優れたものはこの期の作品に限る。

三、作者　能本作者註文（大永四年吉田藏人兼持作）によると左の通りである。

世阿彌作一五五番・觀世小次郎作三二番・觀世彌次郎作二五番・金春禪竹作一八番・金春禪鳳作五番・宮僧作一〇番・近江能四番・竹田法印宗盛作一番（善界）・音阿彌作一番（住吉）・小田垣能登守作一番番（樒）・內藤藤左衞門作三番・善德作一番（吉備津宮）・河上神主作四番・作者不明ノモノ八十八番・（計三百五十一番）

（但しこれはまだ疑ふべき餘地があると吉澤博士は明治四十一年十一月雜誌「能樂」に論ぜられた。）

四、番組の順序　能に演ずる時プログラムを組むには略々昔からの約束がある。

一番、翁　脇能（高砂弓八幡鶴龜）・略脇能（三輪龍田竹生島）・二番、修羅物、兼平忠度巴淸經等勝修羅物（田村・八島・熊野）三番、鬘物、（女能繼愛物）井筒・東北・熊野・松風・采女・野宮・羽衣・四番、現在物、鉢木七騎落芦刈仲光・狂女物・三井寺百萬角田川、復讐物、望月、再會物、土車高野物狂、五番、鬼物・土蜘蛛・紅葉狩・船辨慶・天狗物・鞍馬天狗・善界・太刀打

物・正尊・夜討曾我・早舞物、融海士、六番、祝言物、岩船・猩々・金札の後半、

五、五座　謡曲は之を演ずる能の諸家により觀世今春金剛寶生喜多の五座に別れてゐる喜多は後世のものである。一番廣く流布してゐるのは觀世流である　芳賀矢一博士四流對照謡曲二百番）

六、劇的構成　幽靈を出現させて寢式能としたのは在來猿樂より一歩進んだ構成で之によつて現在と過去とを展開させ社會劇と史劇の興味に加ふるに幻想の美をかりて夢幻劇美をさへ產み出すことが出來る。

能劇は支那元代の雜劇に倣つて起つたとは荻生徂徠新井白石室鳩巢近くは田邊尙雄七里重惠（十證）の諸氏によつて唱へられてゐる臆說として注目に値するがまだ確證がない又古代希臘劇との異同を對照したものには嘗て大阪朝日新聞に藤代禎輔博士の有益有趣な論文が揭載せられた（高野辰之博士日本歌謡史四九八―五六四校註日本文學大系第二十卷尾上八郎博士卷頭解題）

えかささきのないだいじん　衣笠前内大臣

いへなが「藤原家良」を見よ。

えきけん　貝原益軒　二二九〇―二三七四、寛永七―正德四、八十五歳

敎育史上英のジョンロックに比照せられ、文化運動上明治の福澤諭吉翁に類した大家である。生れは筑前、福岡黑田家の藩士、家は代々醫を以て仕へたが、彼は家業の外に佛書をも繙き、京師に出ては松永・木下・山崎等の門に入つて大いに陸象山・王陽明の造詣を深め、京に門戸を張つて子弟を敎へ、餘暇あれば諸國を歷遊した。その學は和漢古今に涉り、その著は平明通俗、讀者を裨益する點から云へば德川時代を通じて最も多大であつたらう。加ふるにその人となり、名聲益高くして謙遜愈深く、平居自ら韜晦して謹愼を主とした（乘合船で或る若者が益軒と知らないで滔々論語を說き、後でそれとわかつて深く恥ぢたといふ逸話もある）

その著は、養生訓・家道訓・五常訓・大和俗訓・文訓武訓・樂訓・初學訓・和俗童子訓・君子訓・の敎訓書又、大和巡・諸州廻・都めぐり・豐國紀行・木曾路の記等の紀行の外、詩集に損軒詩集、藥學に大和本草、家政に果譜菜譜、語原論に日本釋名等がある。その文は何れも平易明晰で當代和漢混淆文の代表的なものだ。彼、通稱は久兵衛、名は柔齋（後に篤信）字は子誠號は益軒又は損軒と云ふ（益軒全集・益軒十訓）

えきさい　狩谷掖齋

もちゆき「狩谷望之」を見よ。

えぐち　江口

謡曲。前シテ女　後シテ　江口の君

ツレ遊女　ワキ　僧

處ハ攝津

梗概。「諸國一見の僧、津の國江口の里に來て、昔この里の遊君と西行との問答のみやびを追懷してゐると、川に一艘の遊船浮いて遊君江口の委を現じ浮世の無常を說いて「假の宿に心とゞむな」と說くかとすれば、件の船見る〳〵中に白象と化し、江口の君は普賢菩薩となり、雲に乘りつゝ翩々として西のみ空に飛び給ふ」

えつじん　遠藤曰人　二四一八―二四九六、寶曆八―天保七、七十九歳

仙臺の藩士、性磊落、俳諧を好み、周く諸國に遊んでその俳腸を肥やした。その句一茶・大江丸に及ばないけれども亦一味の滑稽情趣の掬すべきものがある。

たんと居て打解て追ふ螢かな

立よれば名月もたぬ松もなし

蓑の鹿短く聞て通りけり

道ばかり歩いて戻る枯野かな

えつもくせう　悅目抄

作歌の用意・題目・歌枕・緣語・やすめ字・八病・歌の諸體・天仁遠派・禁忌等につき、初心の爲めに說述した歌學の書で、通常藤原基俊の著といはれて居るが藤岡博士はその僞書なることを立證せられた（日本評論史一九二―一九三）併し歌學書の中では最も廣く讀まれたものである（日歌一二、尙校註和歌叢書七、六六九―六八二、異本悅目抄の原本は烏丸文庫舊藏本で今松井簡治博士の所藏に係り原始の悅目抄に近いものと推定せられて居る）

えどうまれうはきのかばやき　江戸生艶氣樺燒

山東京傳、天明五年（二四四五）の作。黃表紙中の一傑作として名高い。

「爰に百萬兩分限とよばれたる仇氣屋の獨り息子艶次郎とて年も十九や廿といふ頃なりしが」元來浮氣な事が好きで、殊に浮名を流すことを無上の名譽と心得、曲り鼻の醜男の妻にも恥ぢず、何がな浮氣の名をとら

うと苦心百方、近所に北利屋喜之助といふ放蕩息子と輪留井思庵といふ太鼓醫者があつて、浮名引立方の顧問として出入する。めりやすな習へ、ふみの文句は掛く〳〵せよ、刺青が浮氣の始まりだなど云つて痛いのを滿々彫らせて「近所評判の藝者おえんといふ節子を五十兩にてやとひ」「艶次郎様の爲めにこがれ死になしさうだ」などと家へかけこませ「もう十兩やるからもそつと大きな壁で」となるべく聞えよがしに云はせても隣ではそしらぬ顏、これではならぬとて讀賣を買收し一人一兩宛を與へて江戸中を無代で賣らせるが一向買手なく、女郎買ひがよいときいて吉原浮名屋の浮名を揚詰めにし、一方家には妬き手が入るとて「どうかやきもちさへやけば容貌に罪はないからとの注文で二百兩出して姿を抱へ」たが、錢だけはりんきしても「もうこのあとは八丈と縞すりが出來てから」とて斷はられ、新造禿に金をやつて羽織位は引さけても大事ないといふ約束で引張らせたり拳固で頭をつゝかせたりすると、「此時餘程馬鹿な奴だといふ浮名が少し斗り立たり。」親に勘當受けるのも浮名の一方便とて、無理に頼んで七十五日だけ勘當して貰ひ（と云つても金は幾らでも母親がやるのなり）地紙賣と洒落たつもりで季節外れの賣りあるきをしても「鳥羽繪からぬけ出た面」と笑ふだけ。此上は一番趣向をかへて情死と出かけそれについての色々な必要な諸道具一對の小袖などを買ひ集め浮名を千五百兩で身受けし「南無阿彌陀佛」と云ふのを合圖に例の兩人が飛出して止める約束、それさへすませば浮名は好いた男と添はせてやらうと、まるで由良之助もどきで納得させて、あたりまへでは不都合放浮氣屋の二階から格子を破して飛び出し（この修繕費二百兩前拂）さて型の如く手に手をとつてかれて用意の死に場處へ道行して「南無」といふ迄は段取よく運んだが、その時物蔭から本當の覆面があらはれて「死んで行くなら着物は無用おいて行け」とすつかり剝ぎとられ「どうせこんな事が落だらうよ」と浮名も苦りきつてゐる。約束の日限がきれて勘當取消し、親の意見が始めて身にしみてそれより心を改めて身持を謹んだ。

作のねらひは今で云ふなら「戀を戀する男」の愚、「女郎買などをする物には其の事よりもその名の爲めにうきみをやつす愚かもののある」事を諷刺するに在ると見られる。

とにかく大分世間に歡迎された名作で、人物や筋の踏襲もあり、作者自身も得意の一作として所々にその意をほのめかしてゐる。艶次郎の獅子鼻を世に京傳鼻と云ひ、鼻山人と自署するに鼻の字の代りに京傳鼻を書いた作者もあつたほどだ。原本は北尾政演畫、今は本文だけ續帝三四、三六一―三六九に入れてある（尙明治に入つてから春陽堂から大通世界第三として發行）

えとうみどり　江東綠

りよくう「齋藤綠雨」を見よ。

えどさ　江戸座

蕉門寶井其角一派の俳團をいふ。門葉七世に及び明治に入つても其角堂機一は相當門戸を張つては居たが、其角が立てた洒落風の新味はその後段々邪道に墮ちて樂屋落の謎のやうな沒趣味となり、沾德の化鳥風となり入式點料に重きをおく月並風と成り下つた。

えどじやうあけわたし　江戸城明渡　五段

高安月郊三十六年六月作、明治座初演の史劇脚本。

第一段（慶應三年十月）

其一　京二條城門御坐の間

後藤象次郎、將軍慶喜に政權奉還を勸告し、慶喜嘉納一座錯愕、慶喜「これを見よ」とて勝安房の手紙にも同じ意見を述べてゐると云ふ。

其二　堺町御門前

新撰組の若侍、坂本龍馬を斬り妻お龍を追うて走る中同志伊庭八郎に遭う。後藤、西郷一叩きの下に彼等をばらし悠々と下手上手に別れて行く。

其三　洛北岩倉村閑居

岩倉具視蟄居の閑室に、芝坊瑟琶を抱いて平野次郎が作「花の都」を語り、それから時勢談となり

芝「……あれから姉小路様の闇撃、中山様の旗擧、三條様始め七卿の長州落、蛤御門のいくさ。一體これからどうなるのでござりませう」

などいふ。夫が十津川で討死したといふ狂女千草が來る。夫を斬られたお龍も來る。長藩の廣澤兵助も來る最後に西郷吉之助も來て「どうしても幕府を相手に一合戰せねばなりません」といふ、岩倉「しかし私の戰になつてはならん。宣旨を戴くことにしようかな」……西郷「誠に此儘で王政復古などゝ兎ても出來ん事で、五百年の不義、三百年の積弊が六十餘州に染込んで居るから、天下の耳目を一新する大英斷をやらねばなりません」岩倉「思ひ當るは關ヶ原の時家康の遺口ぢや是非一戰と石田を挑んだが、それを學ぶともなく今はこちらから―」などいふ外には千草が無心の唄聲――

菊はさく〳〵夢は枯れる　西で櫓の音がする

第二段　慶應四年正月

鳥羽街道　其一

薩兵の守りで幕士を止め双方押問答。

同　　其二

幕府方佐久間近江守重傷。後事を伊庭八郎（娘藤野の許婚）に託して絶命。祖先が東照公より拜領の一刀を八郎に與へ、娘にはやるものがないので鐵扇に血のにじんだ手形を捺して言傳てる。

第三段　慶應四年三月

其一　日本橋魚河岸

江戸ッ兒の氣を吐いて一同「官軍には一足でも江戸へは入らせないぜ、それがならずば江戸の花を咲かせて見せる分のことよ」と意氣軒昂、そこへ勝安房、魚河岸の頭相模屋武兵衛を訪れて來て「こゝは江戸中の江戸とも謂ふべき處、少しく思ふ仔細があるから、其方こんど上方軍の襲來があつても皆なよく取り鎮めてくれよ……だが併し、萬一事が圓滿に行かぬ時にはこの安房も最先かけて奮闘しようから、その時にはうつて變つて潔く防戰するやう頼むぞ」と苦衷を吐露して快諾を得て歸る。

其二、高輪薩摩別邸

勝安房、官軍の參謀西郷に會見を求め、江戸城明渡しの眞意を語る

「……こりや徳川の民ではない。日本の民ぢや。萬一事情が通ぜんばかりで徳川の爲に此民を御斟酌ないといふ事なら、是非に及ばん。此方より火をかけて民を殺して相果てる——主家を亡ぼすばかりか民を殺して國を危うする大罪……西郷様、お察し下さい、暗涙を呑む）

西郷、旨を諒して戰を休止させ、さて打解けて左の對話で幕を閉ぢる。

吉之助　（一轉して）勝さん、今度は一番困ッたらう

安房　どうぢや、君と入れ代らうか。

吉之　ワハ……イヤ分らぬのは天運ぢや。月照上人と身投をした時、息吹返へさにやお目にもかゝらぬ。

安房　また、上人は死に、有志家も殺されなけりや櫻田の變も起るまい。

吉之　此方が殺され、其方が殺され、とゞのつまりが今日唯今ぢや。

安房　國を開いた將軍は、開いた爲に失ふとはなあ

吉之　また夷狄が攘はふとした陛下が、夷狄より幕府を討つとは——

安房　其發頭人は誰であらうな（吉之助の顏を屹と見る）

吉之（とぼけた顏で）イヤ天ぢや、命ぢや（ト横を向く）

安房　誠に天命には向はれん。大勢には是非が無いて（俯むく）

吉之　大勢には敗けましたな（と氣の毒相にいふ）

安房　それに乘るとはお仕合せぢやな（微笑する）

吉之　いや從ふのも負ではない。天地の道は一でござあす。

（互に顏を見合はせて融和の思入——道具廻る）

其三　同門前

安房　薩摩邸を暇乞す。番兵「やつつけろ」といきまく。西郷睨む、兵卒餘儀なく安房に捧銃の禮をする、

安房　皆さん二三日の中には何とか決定します、から、御答禮をするか、其筒にかゝつて死ぬか、どちらにしても好く此胸を見覺えて居て下さい。

吉之　イヤ其胸は底の底まで私が刺して見ませう。

二人　ワハ……

（痛快に笑ふ——幕）

第四段　其一　上野山内

藤野、八郎に逢ひ我身をはかなみ夫に遺言して生害。（これも騷擾が產んだ悲劇の一雛型）

「……いゝえ私は……親に別れ、あなたに別れ……お城は人のものになり、江戸は田舍者に踏みにじられ、私共までどんな恥辱を受けるかも知れません…」

其二、大慈院

八郎、妻藤野の遺した上書を慶喜に捧ぐると共に、自分も主戰論を建策しようと參上。將軍目通りを許されず。勝安房が參上すると直ぐと通して種々御聽きとり御述懷あり。近咏一首

花もまたあはれとおもへ大方の春を春とも知らぬ吾身を

といふを示され

「死ぬより苦しい事があるのう」

と仰せられる。安房、恐縮して「明日勅使御入來城明渡し」のことを報告する。慶喜公滿足。

「……吾本意を知つて居るのは其方ばかり其方を知つて居るのも自分ばかりぢや」

との仰せ。

第五段　其一　城内大奥

十三代將軍後室天璋院（三十一歳）（薩摩藩より御輿入）今日しも西郷がやつて來るといふので、來たら散散怨み言を並べるつもりで居られるとやがて西郷參内昔の恩誼を忘れずうや〳〵しく世の成り行き已むを得ないことを申上げると、女ながらも發明さて直ぐと御諒解、とはいへ永年のお住まひを後に退かれる御心事に想到しては流石に暗然とした。後室も泣かれる。附添の局達も揃つて泣く……

其二　城外堀端

明渡し圓滿に結了し、勝安房、武兵衛と感慨深い對話の裡終幕となる。

武　（上手を見まはして）今頃は將軍樣は——どんなお心持でございませうね——

安　（上手を見返つて）其將軍も夢になつた——黑船の渡來此方、十五年の波風も——敵も、味方も、夢になり、一人一人の働から、互に流した血汐も涙も——

武　それも夢でございますか

安　いや、それは昔露になり、根本に泌んで、花になり日景に匂ふ御國の維新——目出たいのう（ト悲を含んでいふ）

武　（涙聲で）……へイ……お目出たうございます……ト（俯むく）

安　（一同を見渡して）江戸はこれで誠の太平、鎖國の中の繁昌より世界に開く大都會、畠田の水はアメリカからイギリスまでも自由自在ぢや（ト稍快活にいふ）

武　でもお城は何となりませうな。

安　（城を見上げて沈痛な表情で）城も草になるものか三百年は空で無い。夢は覺めても力は殘る——ああ世の中は誠ばかりぢや。

この作につき作者自身は左の如くに言つて居る。

「江戸城明渡は私に取つては殊に深酷な思出のあるものである。手をつけたのは京の三本木、松菊が隱れた藝者屋のあつた瓢簞路次にゐた時、其前「月照」を南座で出して、意外に成績が好かつたので次にこれをと思ふと飛込んで來たのは川上音二郎であつた。彼も西洋から歸つて一旗あげようとした所、これで歌舞伎派の根城を拔かうとした。其武器としたのは「自然」しかし私はそれ程自然派で無かつた。

されば先づ作意と演出方と一致せぬ所があり、新派の精鋭を集めた一座の諸優も强て統一したが、委勢と品位とを缺いて、殆比類少い大攻撃中にも歌舞伎派の重な人々が公に激烈な打撃を加へたので、川上等は反撃しそれではそちらでやつて見よといふ。それにはたち〳〵となると横から飛出したのは伊井蓉峰であつた。しかしそれは餘りに小勢であつた。川上は更に鴈治郎に勸めると魁けたのは片岡我當であつた。これも其平生から見たら一飛した自然的演出であつたが、しつけた委勢の整頓で前ほどの打撃を受けなかつたが、其後十幾年、やつと東京の歌舞伎派が立上つた。彼等もいつもの型と離れたが、丸で自然でも無く、傳說の素養は陰然有效であつた。いかに老朽しても傳統を破壞して丸で新しい藝術を成立させる事は國民性からしても不可能。しかも其儘は踏襲せず新な精神で活用する必要をつくづく感じて私の作意の方針も定まつた。第五段は近年全く作り替へたので、作の努力もあの頃の志士の樣に空にならなかつたら幸である（現代戲曲全集三、二〇五—八二五）

えどじやうるり　江戸淨瑠璃

徳川期、江戸に發達した淨瑠璃のこと、寛永・正保・慶安に起つて、元祿・享保（上方淨瑠璃隆盛期）に衰へ、寶曆・明和以後に於て勃興した。劇場では肥前・外記の兩座、作家では平賀源内・烏亭焉馬などが名高い。以後は主として歌淨瑠璃として長足の進歩した。

（歌淨瑠璃參照）

えどながうた　江戸長唄

「長唄」を見よ。

えなほ　加藤枝直　二三五二—二四四五、元祿五—天明五、八、一〇、九十四歳

伊勢の國に生れて橘諸兄の遠孫、幼名は爲直、通稱又兵衛、家號を芳宜園と云ふ。早く江戸に出て大岡忠相に仕へて與力となる。加茂眞淵が江戸へ來てからは逸早くその門に入り、弟子であり親友でありと謂つた風の關係で、その交情は非常にあつかつた。果ては眞淵の居を我が邸内に移させて淸交の益々深いものがあつたと云ふ。七十二歳仕へを退いてからは益々讀書執筆に思を遣り、多くの門弟をも敎へ極めて平和な順調な生涯を送つた。八十歳の時自詠中得意の歌を選つて「東歌」六卷としたが、後その子千蔭の刊行によつて廣く世に行はれた。彼は又和歌史觀の上から古今風を

奬勵し「歌の委古へ今を論ふ詞」を著した。けれども彼自身の歌は寧ろ新古今張の華麗なものが多いのは蓋し寛潤な江戸趣味の影響であらう。

朝霞立ち出でて見れば梅咲きて有明の月にはる風ぞ吹く

秋の夜の月かげ白ししら樫の枝にも葉にも霜を見るまで

こよひしも降り來る雨は久方の月のかつらのはなの雫か

斯て、彼は江戸派の祖と稱せられてゐる。其他の彼の著、新撰梅曲・享保御定書立案・東歌・子に與ふる文・改正觀世流謠曲・青木氏推薦事實。

えんう　青山延于　二四三六—二五〇三、安永五—天保一四、九、六十八歳

水戸藩の儒者として有名な人、通稱量介、字は子世・雲龍又は拙齋と號し、早く藤田幽谷の門に入り後、藩の儒官となり、弘道館小性頭から累進して同總裁となる。能文にして史學に精しく、藩の東藩文獻志は大部分彼の盡力によるといふ。拙齋文集・皇朝史略・泉譜等の著がある。

えんぎしき　延喜式　五十卷

醍醐天皇の延喜五年八月、勅を時平に下され紀長谷雄藤原菅根・三善清行等をして撰ばしめられたが、中途にして時平が薨去したので更に同十二年二月忠平に勅せられて延長五年十一月廿六日に完成した。格十卷・式五十卷の中「格」の方は今傳はらない（類聚三代格にその一部が殘存して居るといふ）

朝廷に行はるゝ祭典をはじめに、太政官及び諸官の職掌を記したもので、後世解釋訓詁の上に度々典據的に引用せられる書物である（國大十、三八五—一一九〇）

えんきよく　宴曲

鎌倉末期から南北朝にかけて、酒宴の際にうたはれた歌謠で、從前の歌謠に比べて何等質的に進歩したものではないが量的にはずつと長いものになつてゐる、歌詞は古歌朗詠今樣を補綴し、想に渾然たる統一なきことさながらあの頃の社會の委の趣がある（續帝三・歌謠類聚・吉田東伍　中古歌謠宴曲全集・國刊三期宴曲十七帖）

えんけいりやうきやうそちんじやう　延慶兩卿訴陳狀

勅撰の撰者の資格について爲世・爲兼兩卿が花園天皇の延慶年中に上奏したもので今、群二九三、一〇、七

四二—七五一に入る。一同狀云とあるのが爲兼の言ひ分で、その他は爲世がもどいたもの、共に漢文體で書かれてある。爲世の側からその内容の斷片をあげて見ると、

甲、破邪論

一、爲兼の道統は薄弱だといふこと。

亡父爲氏、繼母阿佛尼と違背の後、彼卿父子爲教爲兼阿佛に追從して僅に當道の事を習ふ歟、仍て父祖の正說にあらざるの間、風體といひ訓說といひ偏に當家の說に違ふものなり。

二、爲兼の歌風を非難す。

爲兼自身に堪能と稱せんと欲すれば詠歌更に先賢の秀逸に似ず、父祖に學ぶ所を假らんと欲すれば存知又當家の庭訓に叶はざるの間術盡くるの餘、自身の不堪を隱す爲めに寛平宇多天皇以往の風體を稱へ病を避けず禁忌を憚らず詞を嫌はず委を飾らず唯だ世俗の詞を以て僅に眼前の風情を詠ずる歟。

乙、顯正論

三、自家傳說の久しく正しいこと。

爲世元來管見を恥づと雖も懲に父母の庭訓を守り後輩の諷誦を致す其趣は詞は舊を慕ひ心は新を求む、而して花麗幽玄の體を先にして世俗凡卑の詞を棄つ……近代の人の詠ずる所の心詞一句と雖も之を用ゐるべからざるの由なり、是老臣爲氏の今案にあらず併せて列祖の教訓に任す也。

四、自家の勤勉振。

凡そ父爲氏祖父爲家に從ふ五十年、爲世亡父爲氏に從ふ三十餘年、晨昏の禮を致し家業を談ぜざるなし。

五、相傳强調。

凡そ諸道文書の法、相傳を以て最とす、爲世蓄ふる所數代相傳の文書なり。

定家（八、九）—爲氏（十二）爲世（十三、十五）…二條
爲家（十、十一）—爲教——爲兼（十四）……京極
　　爲相——爲秀……冷泉

の表でわかる（括弧内の數字は撰んだ勅撰集の番號）

通り、爲世と爲兼は各自親の子として忠實に自家の歌論を主張したもので、その内爲世は相傳の文書や家訓の多いのが强み、爲兼は自身颯爽の英氣を以て嶄新の歌調を庶幾し、持明院系の伏見・後伏見・花園諸帝の庇

護を蒙つて居ることが強み、兩々相持して相爭うた有樣、それに附帶して祖先以來の感情問題など當時の歌壇の醜い現實を暴露したものがこの文書である。

えんげき　演劇

廣義に解すれで能・狂言及び之等を產むに至つた猿樂以下の諸樂舞も入らうが、通常演劇と云へば芝居のことで、之に舊劇と新劇とがある。舊劇は即ち歌舞伎で出雲の阿國が創めて以來、德川期の平民藝術として武家の能と對照的に論ぜられるもの、之には狂言と所作事とあつて、狂言は普通に言ふ芝居、所作事は長唄・常盤津・富元・清元など所謂歌淨瑠璃に合せて演ずる舞踊をいふ。新派劇は明治中期角藤定憲・川上音二郎等によつて始まつた壯士劇の發達したもので、新興劇の中比較的古典的なものを云ひ、新劇は新派劇より新に醸課劇の示唆によつて一層寫實的に科學的に、綜合藝術的になつた現代劇をいふ。何れにしても演劇は劇場といふ建築藝術、脚本と云ふ文學、俳優、音樂、大道具、小道具、舞臺監督とあらゆる藝術の有機的融合によつて演ぜられるもので文化の主要なる一要素を分け持つべきものだ（島村民藏氏、劇の本質）

えんげきかいりやうくわい　演劇改良會

明治十九年末松青萍の主唱によつて出來た會で、

一、在來の演劇の陋習を打破すること。

二、在來の脚本を改良し及び新たに新時代の趣味に適應する新脚本を創作提供すること。

三、劇場の改良を圖ることを主眼とした。

藤田鳴鶴・外山正一の二人が之を助け、その會員には矢田部尙今・矢野龍溪・福地櫻痴などがあつた。

えんげききやうふうくわい　演劇矯風會

明治廿一年七月田邊太一を會長とし、團菊諸優も賛成したが、唯だ一種の演劇の集團といふに止まり「矯風」といふ名には相應はしくなかつた。

えんくわう　青山延光　二四六七—二五三〇

文化四—明治三、六十四歳

通稱彙太郎、字は伯卿、又佩弦齋とも號した。水戸の儒者として有名な延于の子で、彼亦幼より强記好學、十八歳にして赤穗四十七士傳二卷を著し、藩主烈公に認められ拔擢して彰考館編修總裁を命ぜられ、修飾刪潤の功尠なからず、ついで弘道館が出來るとそこの教授となり、藤田東湖・會澤正志等と共に一藩文武の教化を補佐し、明治維新後は召されて大學中博士に任ぜられた。その著非常に多く、國史記事本末・國史論贊

南狩野史・佩弦齋外集・征韓雜誌・野史纂略・三藩事略年表・雪夜清話・義人遺草・酒史新編・文集等は殊に名高い。

えんごほふ　緣語法

歌文を作るに甲の語句に關係のある（緣のある）語をつゞけてあやなす修辭法で、語句の聯接について發達した我邦持有の修辭である。

例、昨日といひ今日とくらして飛鳥川ながれて早き月日なりけり「ながれて」のところは「うつりて」「くらして」「おくりて」など云つてもよい所だが上に「飛鳥川」とあるから川の緣語で「ながれて」としたものでこの方がすつと調子が流麗になる。

えんし　艶詞

えんしよ「艶書」を見よ。

えんしよ　艶書

歌集中戀の部の歌を散文で書いたやうなもので、男女間の戀ぶみをいふ。源氏物語などには隨處に出て來るもので、果ては之を一種の娯樂扱にして艶書合なども催されるやうになつた。

えんしよあはせ　艶書合

艶書や戀歌を取組ませてその優劣を判定する催しで王朝末期文雅と淫蕩の糊熟するところ自ら斯る遊戯も始まつたものと想はれる（堀河院艶書合、群二二六、八、一二二七—一二二九）

えんせいぶんがく　厭世文學

厭世思想を盛つた文學作品。例へば古今集哀傷の部や雜歌中佛教の「厭離穢土欣求淨土」の想を歌つたものや、方丈記や、屈原の漁父辭・離騷のやうなもの。

えんせきざつし　燕石雜誌　六卷

文化六年（二四六九）瀧澤馬琴の隨筆で、數百年前和漢の史傳から近世の巷談に至るまで八十餘項についての所見を披攄したもの。中に大分誤があつて友人にも糾し、自身にも改めた旨を「烹雜之記」にことはつてある。

えんば　烏亭焉馬　二三八九—二四六八、享保一四—文化五、六、二、八十歳

江戸の人、名は利亨、通稱和泉屋和助、號は立川談洲樓、別に狂號として挑栗散人・柿發齋・野見てうなどん黑金なども云ふ。近世末期の小說家で、主として酒落本・草双紙に筆を執り、又狂歌・淨瑠璃などをも作つた。その作二十餘篇。忠孝重來武士五卷・江戸鼠貞鉢卷一卷等の酒落本もあり、碁太平記白石噺の戯曲狂

歌千載集の狂歌集、談洲樓隨筆の雜文などもある。殊に「歌舞伎年代記」十卷は歌舞伎の濫觴から元祿の發展、寶曆、寛政の全盛期まで約二百年間に於ける東都演劇の沿革史とも謂ふべく、好劇家や劇史研究家座右の寶典として今も貴重されて居る。

えんぱさんじんたいし　烟波山人黛子

びさん「川上眉山」を見よ。

オの部

おいのくりごと　老のくりごと　一卷

和歌連歌の沿革概評を記載したもの、意見も文章も見るべきものがある。室町時代心敬僧都の著（群三〇五、一〇、一〇七五—一〇八三）

おいのすさみ　老のすさみ　一卷

室町時代、宗祇文明十一年（二一三九）三月の著、連歌の沿革を評論したもの（群三〇五、一〇、一〇八三—一一〇五）

おいへもの　御家物

戯曲小說などで大名のお家騷動を描いたもの。例、伽羅千代萩・宇都宮釣天井・鍋島猫騷動。

おうあんしんしき　應安新式

北朝後光嚴天皇の應安五年（二〇三二）二條良基が連歌の式目を制定したもので、後世永く連歌にも俳諧にも典據とせられて居る。發句脇句（入韻）三句四句……舉句・百韻記載の形式・五十韻・千句のこと・指合去嫌のこと・輪廻・遠輪廻・本歌取・賦物の取方・等一々規定してゐる。

おうぐわい　森鷗外　萬延元、一、一九—大正一一、七、九、六十三歳

島根縣士族森靜雄氏の長男で、明治十四年東大醫科を卒業し、その前後各科の學を修め、殊に獨逸語に精通し、文學趣味が深かつた爲めに我邦に於ける獨逸文學の紹介者として、明治初期に於ける文學啓蒙運動の大家として及び小說・戯曲・詩・歌の創作家として、現代文學史上、偉大なる業績を遺した。蓋し一面には氏の地位が高くて研究、思索に好事情があつたからでもあらう。氏が晩年の肩書は醫學博士・文學博士・陸軍軍醫總監・帝國美術院長・臨時國語調査會長・東京帝室博物館長兼圖書頭・正三位勳一等功三級であつた。其著書中、

評論、つき草・かげ草・柵草紙誌上の諸篇

飜譯、即興詩人・一幕物・續一幕物・寂しき人々（ジョンガブリエルボルクマン・フワウスト）

小說、舞姫・高瀨舟・

戯曲、日蓮上人辻說法・新生田川

考證、北條霞亭・帝諡考

韻文、うた日記

等がある（鷗外全集十八卷は目下刊行中）

おうくわしさう　歐化思想

「歐化主義」を見よ。

おうくわしゆぎ　歐化主義（歐化思想、歐洲崇拜　歐米崇拜）

明治初年から二十年頃まで流行した思想で、歐羅巴文明に心醉し、彼の文物制度といへば可否を問はず盲目的によいとしたもの。丁度奈良朝から王朝にかけての唐制模倣の根柢になつた思想傾向と相似たものがある。天井竹をステッキにつき、頭髮に燒ごてを當て、鰻頭を餡ぬきにしてパンをまれるといつた風の滑稽が演ぜられ、英語を國語にせよ、男女を同權にせよ、西洋人と結婚を奬勵して人種の改善を圖れといふやうな議論が唱へられしたのもこの時のことであり、鹿鳴館事件といつて假裝舞踏會の騷ぎのあつたのもこの期間内のことであつた。

おうしうあだちがはら　奥州安達原

寶曆十二年（二四二二）九月、竹本座の爲めに近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛が合作で書下したもの。大和物語の平兼盛の歌話や、謠曲「安達が原」や「同「善知鳥」とから趣向を立て、前九年の役を脚色したものである。梗概は、

「謹丈直方二女あり、姉袖萩は親の許さぬ不義の戀をして貞任の妻となり、妹は義家の御臺所となり、袖萩は夫が韜晦した後一子を連れて袖乞とまでおちぶれ、眼も悲しさに泣きつぶしいまはのきはに兩親に一目あひたいとて我家の垣の外まで來て「この垣一重がくろがねの」と歎く。折柄來合した僞勅使桂中納言敎氏は實は夫の貞任であり、禁制の鶴を撃つたとて召捕はれた南兵衛、實は宗任（彼は貞任の臣善知鳥安方が若君即ち貞任の子千代童の藥代を得よう爲めに、禁制の鶴を撃ちとめた事情を察し、身がはりとなつて引かれて上京したもの）も居合せ親子夫婦、兄弟一時に邂逅する。直方は預り奉つた環の宮の御行衛知れぬ責めを負うて腹を切り、袖萩も今は此までと生害を遂げる。義家は安部兄弟と感づいたが、寛仁大度の襟懷に「何れ

晴れの戰場で再會な」と約して許し歸す。その環の宮は頼時の妻（貞任等の母）岩手御前が奪ひとり、之を擁立して再擧をはからうとて、名にし負ふ安達ヶ原の黑塚にたて籠つて追剝强盜を稼いで軍資金を集めてゐたが、事成らずして宮は小姓生駒之助がお連れ申して首尾よく歸京」

といふ筋、妙宮が啞なので、それを直すに懷胎兒の生血が入るとて、たま〳〵駈落の生駒之助の戀妻戀衣がこの一つ家に泊つて產氣つくのを幸、之を屠つて宮を直したはよかつたが、その瞬間亡夫頼時の髑髏に血がにじんだので、偖ては戀衣は我が娘と驚くところなどはあまり因果にからみ過ぎた、又殘酷に過ぎた作意だが併しそれだけ作者苦心のあとは察せられる（帝文一四八九—一六八）

おうしうすうはい　歐洲崇拜

「歐化主義」を見よ。

おうち　福地櫻痴　天保一二、三、二三—明治三九、一、四　六十六歳

肥前長崎の生れで、碩儒苟庵の子である。幼名を八十吉と云ひ、少壯、蘭學を名村八右衛門、箕作阮甫、杉田成卿等に、英語を森山多吉郎について學び、明治二年伊藤博文公の知遇を得て一等書記官にあげられ、七年官を辭して東京日々新聞を經營しついで東京府會議長となり、二十年頃より專ら文學に心を傾け千葉勝五郎氏と結托して歌舞伎座を起し、自ら脚本に筆を染めて梨園の改良をはかり、又小說を書いて文藝倶樂部などに掲げ、三十七年復憲政本黨に入り代議士に當選し晩節稍振はうとして一臥起たず眞に惜しむべきであつた。

氏は我邦初期の新聞經營者で、江湖新聞はその手で發行し、後には東京日々の社長にもなつた。その作、脚本としては俠客春雨傘・夜の鶴・春日局は名高く・小說には人生X光線・斬奸・女浪人も愛讀せられた（櫻痴全集三册博文館　縮櫻痴集二册春陽堂）

おうべいすうはい　歐米崇拜

「歐化主義」を見よ。

おからかさ　御傘

松永貞德が俳諧の式目を定める爲めに執筆したもので題名は天皇の御傘は皆人の「さしあふことならぬ」ものだからとも「この一本さへあればあめが下に、またさし合する人あるまじ」との意だとも云ふ。內容は應安新式の簡易化とも謂ふべく、在來の式目によりてその結句ないろは順にあげて、性質・用法・忌禁などを說いたもので、これによつて俳諧道に於ける五十韻、百韻の式が定まつた。之より先守武、宗鑑の徒が、俳諧の羈絆を解放して自由の風を世に布いてから、段々放逸無拘束に流れて、初心の輩往々その道師に迷うやうになつたので、貞德は本書によつて更に新しい約束を設けたもので、之を連歌の始めからずつと眺めると、短歌の反動、連歌の發生——連歌規定の反動、宗鑑、守武自由の作風、自由の作風の反動、貞德の御傘と正反正の推移が肯かれる（日本俳書大系第六卷芭蕉以前（一）貞門俳諧集）

おきかぜ　藤原興風　？

醍醐天皇の御代の歌人、父道成、曾祖父濱成（參議）彼は院藤太と號し、延喜の始め治部少丞・上野大掾・下總權大掾、同十一年相模掾（歌仙傳には六位、河內大掾とあり）管絃をよくし、彈琴の師となつてゐた。歌は古今集に十八首採られ、後撰・新古今・續古今・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・三十六人撰等の諸集にも入る。家集を藤原興風集（群三六一、九、一〇〇七—一〇〇九、續國四四〇—四四一）と云ふ。その歌風一帶に纖細巧緻、よく古今集歌人の趣を發揮し、時には華麗にして寧ろ新古今振とも評すべき咏もある。

春霞色のちくさにみえつるはたなびくのべの花のかげかも

聲絕ずなけや鶯一とせにふたゝびとだにくべきはるかは

死ぬる命いきもやすると心みに玉の緒ばかりあひみてしがな

何かその名の立ことは惜からむしりてまどふは我ひとりかは

たれなかも知人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

さだやすの親王后の御五十賀に奉給ける時の御屏風の繪に梅見たる所

いたづらにすぐる月日は多けれど花みてくらす春ぞすくなき

（國華三四九號四二五歌仙畫「興風」）

おきかぜしふ　興風集

おきかぜ「興風」を見よ。

おきなぐさ　翁草　寫本百一册

大阪民間の雜學者、神澤貞幹（杜口）の編著で、口碑・

傳說、奇話、逸話等苟くも一節ある見聞は採摭網羅して遺すところがない。中に、他人の著書を全部轉載したものとしては、國朝舊章錄・義人錄・別所記・戸川記・同文通考・武野燭談・元室莊子・萬國夢物語・感入錄・常用書札・春蘐獨語・四十六士論・名君享保錄・御參内記・庵百首・東武紀行・鎌倉記等四十三册で、拔萃したものには、老人雜話・爲人錄・永夜茗談・耳底記・由井根元記・古老燭談・太閤記などである。安永五年（二四三六）正月の版行、續篇一百一册あり、略前編と同性質のものである（前後編共内一册は目錄）今「存叢一三二」に入る。

おきなまろ　黑澤翁滿　二四五五—二五一九

寛政七—安政六、六十五歲

名は重禮、號は菲居、伊勢桑名の人。藩主桑名侯、忍に領替に就いて、大阪の忍藩邸留守居役となる。本居宣長の學風を慕ひ、古典の註に筆を執り、歌も筆蹟もみごとであつた。その著已刊のもの十九種、外に未刻の稿もあると云ふ。萬葉集大全・古今集大全・神樂歌催馬樂抄・消息譯文・菲居集（前後二編）（博文館で發行）・童話長編（昔噺を長歌にしたもの）・異人恐怖傳・言靈抄、言靈のしるべ・北勢古志・源氏百人一首・消息案文・類題採風集・難波職人盡歌合・示正論・道行振・雅言用文章・藐姑射秘言隨意稿。

（翁滿、翁曆二色に書くが翁滿の方が正しいと想ふ。大阪南區天王寺六萬體町三五寺に墓があつて碑面は矢張翁滿である）

おきまろ　長忌寸奥麿（ながのいみきおくまろ）？

歌人、その咏萬葉の二、三、一六等に出てゐるが傳は未詳（二、三には意寸麻呂、十六には意吉麻呂とある）

おくのほそみち　奥の細道　一卷

芭蕉が一弟子曾良を伴ひ、元祿二年三月廿七日江戸深川の芭蕉庵をたつて一時杉風の採茶庵に假寓そこから奥州長途の行脚に出で、奥の細道（地點については數說あり）のこなたかなた、別けても松島象潟の風物に吟嘯して越路に出で荒波のかなた銀漢の下に横ほりふせる佐渡が島に驚異し、越中加賀を行脚して九月四日美濃に入り、美濃より伊勢の「二見にわかれ行く秋」と吟ずるまで、六百里程百五十日間の紀行で、原文・註釋共に澤山あるが、元祿七年門人素龍の跋あるもの同八年門人去來の跋を附したものが廣まつて居る。註には早く菅薦抄もあるが、近刊には大藪虎雄氏の奥の細路の新研究などがある。

おくら　山上憶良？　一三二〇—一三九三、白雉六、天平五年、七十四歲

生歿未詳たが、續日本紀天平五年七十四歲の時病氣危篤の記事があつてその後、何等の記事のないところから推せば前記の通りになる。大寶元年四十二歲遣唐少錄として渡唐、この時は無位。和銅七年五十五歲、和銅七年從五位下。靈龜二年五十七歲、伯耆守、養老五年六十二歲頃より東宮に侍し、神龜三年頃六十七歲筑前守、天平五年頃七十四歲、學樂に歸任。大體右のやうな閲歷で、その歌は四六駢麗體の華麗な漢文の詞書のあること、漢藉や佛典の造詣深く、或程度まではよく消化して自家の詩囊にしたこと、憫み多き人生の哀思を悲歌してゐること、（これは彼自身貧苦と病苦とに苦しみ、早く愛兒を亡ひ、多くの不幸の人々を周圍に見た爲めだと謂はれてゐる）同情の厚いこと、などで、この點に於て萬葉歌人として特殊の地位に光つてゐる。その咏は萬葉集卷五に大部分と外に三に短歌三首、六に一首、八に七夕歌十二首、十六の終の方に筑前國志賀白水郎歌十首（左註に或日山上憶良作とあるもの）などがある。長歌としては「貧窮問答歌」「長俗先生を戒めて惑情を反せしむる歌」「瓜はめば子ども

おもほゆ云々」の「子等を思ふ歌」などは殊に有名で短歌反歌には

いざこども早もやまとへおほともの　みつのはま
まつ待ちこひぬらむ

しろがねもこがねも玉も何せむに子にしくたから世にあらめやも

おくららはいまはまからん子待つらむその子の母もあをまつらむぞ

ひさかたのあまぢは遠しなほ〳〵に家にかへりてなりをしまされなど秀咏が多い。

おちくぼものがたり　落窪物語　四卷

王朝繼子いぢめの筋の物語で、今は昔、或中納言、今の北の方との間に多くの姫君を設け、それ〳〵聟えりして時めかせられてゐる中に、一人先の故北の方の姫君だけは寢殿の廂の凹まつた一室に營居して、年頃になつても母北の方の憎悪さに良緣も定まらず、毎日世をはかなんで暮らして居られる「落窪の君」といふ醜名がいつか通り名となつて、緣さまたげの憂ありとて新婚の三の君の聟君藏人少將などにもさるものありとだに知らせなかつた。けれども落窪の君こそは事實、理想的な婦人で、容貌のめでた

さは勿論、心ばへのやさしくゆかしくおほらかなる、手わざのたくみなる和歌に堪能なる、實にこの物語中第一の人物であつたが、常々姫に同情せる阿漕と阿漕の愛人帶刀とが執持つて、當時妹が君寵を得、その身も才かたち整うた近衛少將の君といふのに逢はせる。二人の交情がだん〳〵親密になつて、とど物の紛れに少將は別邸の方へ姫君を引き取り、善美を盡してのかばひだてにやがて堂々たる新奥方となり父母の君も悅んで優遇せられる。そこで少將はこの愛妻の爲めに中納言家に對し機會ある毎に復讐をする。始めは何の故ともわからず中納言は心外さに怪しからぬことと憤つて居つたが、段々事情が明らかになるにつれて「成程これは自分が惡かつた」とて我を折る。あの意地わるの北の方まで遂に屈伏すると少將はそれ等をも庇護を加へて結局めでたし〳〵に畢る。

この物語にあらはれる男三十二人、女二十七人、何れもよく性格が附與せられて一人も偶人の坊がない。その上可なり紛雜したいきさつを手短かに四卷に纏め毎段變化を設けて讀者を飽かしめない。行文は典雅は稍缺けて居るが、寫實の筆にすぐれたものがある。

中村秋香の落窪物語大成は十三種の諸異本を對校して詳註を加へたもので、この物語を研究するには是非一讀すべき力著である。

おちぐりあん　落栗庵

もとのもくあみ「元木阿彌」を見よ。

おつに(おつじ)乙二(松窓院)　二四〇一—二四六九、寛保元—文政六、七、九、六十九歳

もとは奥州白石の修驗僧で、片倉氏祈願所の千手院に住してゐたが、中途俳諧に志し獨學自得して遂に宗師となり(一說には白居に入門したとも云ひ俳人の麥羅の男ともいふが、門人多代女の記には誰も師傳はないとある)江戸に出て道彦・成美・月居と併せて四大家と稱せられた。彼は最も即嗇に長じ、居常蕪村の風調を慕うた。その著に乙二發句集・乙二七部集等がありその弟子に一具・多代女等の名俳があつた(乙二七部集、目黒支店)

おつゆ　中川乙由　?—二三九八(一說二三九九)?—元文三、八、一八(一說に元文四、八、八)

伊勢の山崎に生れ山田の祠官となる。涼莵の紹介で芭蕉晩年の弟子となり、師翁の歿後は涼莵等と呼應して伊勢風の勃興に盡した。その門からは柳居・希因・加賀の千代女等多くの名俳が出た。句集を麥林集といふ

(彼の家號は麥林舍、通稱利右衛門。慶德圖書と呼んだ時もあり、中川梅我と云つた時もあつた)

おとぎさうし　お伽草子

室町時代の小說で童話と小乘佛教の合の兒のやうなもの。明治卅四年萩野由之博士編の「新編お伽草子」二册には左の二十種を入れられた。上卷、福富草子・十番の物爭・音なし草子・わか草・かざしの姫君・常磐の嫗・小おちくぼ・今宵の少將・毘沙門の本地・貴船の本地・下卷、淨瑠璃十二段草子・つき島・化物草子・魚鳥平家・狐の草子・こうろぎ草子・玉蟲の草子・柿本の系圖・立烏帽子・犬の草子

その他今泉定介氏の御伽文庫本の御伽草子校註國文學大系十九卷のお伽草子などがある。

おとぎばうこ　御伽婢子　十三卷

淺井了意寛文六年(二三二六)の作にかゝる假名草子。支那剪燈新話・剪燈夜話や我邦の事件に飜案し、その實在性を附與する爲めに地名・時日まで一々明記し、一見實際地方に在つた事のやうに書きつゞつてゐる。作話凡そ六十餘種、その一例をあげる。

越前敦賀の富豪濱田長八二人の美しい娘があつて姉は隣の檜垣平太の息子平次と婚約を結び、眞紅の繫帶を與へて結納した。處で平次は商賣見習の爲め上京五年もたつてゐるのに何のたよりもない。姉はあけくれ戀ひ焦れて十九といふ春のあたら身を空しく蕾のまゝに逝く。親は泣く〳〵小鹽の山寺に野邊送りの營みをすます…と間もなく平治が歸つて來た。いきなり濱田が宅を訪ひありし次第をきいて悲歎やる方なかりしも、今更泣いて返らぬことと今回はその妹と契つた。然るに亡き姉は眞紅の帶にまつはつて妹の上にのりうつり、夜な〳〵かは妹すとの枕も妹と見たのは實は幻で姉の一念凝つたる亡魂と共寢をして、その間妹は病氣で別室に臥せつてゐた。この事實判明の後、改めて父母の許しを得て二人めでたく合衾の式をあげたといふ(剪燈新話・金鳳釵中牡丹燈籠の飜案)

支那小說、剪燈新話の飜案は或意味に於て德川期小說の一流行とも謂ふべく、それの早いものにこのお伽婢子があることを忘れてはならぬ(國刊二期近世文藝叢書第三册に入る)

おとじらう　川上音二郎　元治元、正、一、—明治四四、一一、一一、四十八歳

元、政黨の壯士であつたが明治廿二年頃角藤定憲が壯

士芝居を始めた頃それと相呼應して大阪で壯士劇を創め、日清戰爭が劇材にとりいれてから一大飛躍をして東都の大劇場ででも演ずるやうになり、二回洋行して彼地の劇壇を視察し、歸來大阪北濱に帝國座が建て、驥案劇などを紹介し追々地歩を占めて多くの配下を養成した。つまり彼の明治劇壇史上に於ける功績は新派劇の基礎を築いた點にある。その妻貞奴また彼の劇團の花形としてよく活動した。

おとたちばなひめ　弟橘媛命

資料、古事記中三五・日本書紀七（景行紀一六）・古事記傳七ノ六五・熱田太神宮緣起・大日本史八六ノ二九・日本書紀通證一二ノ二一・本朝列女傳六ノ二・日本人物史六ノ一・姫鑑、紀行一五ノ二。

おとは　大橋乙羽　明治二―三四、六、一、三十三歳

羽前、米澤渡部治兵衛の男、入りて博文館大橋佐平の女婿となる。文才あり、旅行を好み、素人寫眞の始め頃、くろうと以上に巧みに撮影し之を自署の紀行文に挿んで好評を博した。

氏が明治文學に對する貢献は自作の小說十數篇と多くの新進名家を引立てたことである。小說は硯友社風のはでな文章だが、取材は下町情話めいたものの外維新當初の世の搖きを凝視めたやうなのもある。花鳥集はその作品全集で第三番の露小袖が氏の第一の力作であらう。氏は博文館の養子としてその富と地位と共に好事情に在ることゝて樋口一葉・川上眉山を始め多くの新進無名の作家を拾つて出版の便宜を計つた。當時の硯友社同人は勿論、その他苟くも文壇に擡頭せんとするの人で一度も氏の手を潛らぬものは殆どない位であつた。尙氏の著には千山萬水・續千山萬水の外、耶馬溪・初子集・風月集・藤侯實歷・名流談海・若菜籠果卵之東洋などがあつて、以上を「乙羽十種」と云ふ。この外に時代管見・あられ酒等の隨筆めいた作がある。

おとりとていしゆ　お鳥と亭主

岩野泡鳴四十五年作の小說。芝西の久保の神谷町に、十五の男兒繁と云ふ先妻の子を連れて、寂しく夫の留守を稼ぎ守つてゐるお鳥――彼女はもと大阪道修町で生まれて、さる小學敎師に嫁いで、東京に來て、その頃土木請負師をしてゐた（今の夫）林新平と隣合はせに住んで、そこの細君が年若で締りなしなので、近所姑のやうによく出入をしてゐたが、先方の主人に嫁はれてパッタリ中止、その中、林は別の處へ引越して御來

音信不通。而かも御互に不幸な月日が廻つて、林は妻に死なれ、お鳥は夫に死なれした。此鰥夫、寡婦は大阪の千日前でゆくりなくも再會した。女は實家へ歸つてゐる時で、男は德島へ傭はれて行くところであつた「まあ私の宿までいらつしやい」と云はれて久濶の情が、やがて魚心に水心となり、勘定づくの戀愛が釀されて直ぐと夫婦になり、一緒に德島に下つて、小一年それから東京へ來て二年三年とたつ中、仕事が思はしくないので男は臺灣へ出稼ぎ、お鳥一手に月々六圓五十錢の家賃を拂つて、一子繁に餓じい目もさせず、近所の交際も、向ふが九つお萩をくれたら、こちらは十一もお壽しで返す位にして、夫大事家大事と忠實に留守を守つた。繁は畫が上手なのを幸、安あがりで稽古の出來る畫師につかせ、此節では向ひ筋の罐詰の空罐屋のマークなどを頼まれて書くやうになつた。併し此と云ふ學問もさせないで、こんな賃仕事をさせるのは、夫の手前申譯がないと思つて心苦しくないではなかつた。……と或日突然たよりがあつて夫は臺灣の土木收賄事件の嫌疑で豫審に附せられてゐるとのこと――哀しい二年の月日も過ぎて又もや臺灣からのたよりとして一人の女が夫の添書を以てやつて來た。夫の妾――と思ふとお鳥も流石に嫉妬のほむらが燃えて、家におくことを承知しなかつたので、女は浦和の實家へ歸つた。「ムザイホウメン」の電報が、三年目の正月に來た。母子の悦びは譬ふるに物がない。不自由ながらに尾鰭のついた着も取りよせ歡迎の準備をしてゐると夜十時頃にひよつこり「歸つたよ」と云ふ夫の聲、妻。お鳥は云ひたいこと、怨みたいこと、嬉しいこと、悲しいことのありつたけを吐き出したいやうで、適當な言葉かないのを苦しむと云ふ風であつた。併し歸つた抑々から夫に打たれた。が併し、その打たれると云ふことさへが彼女にとつては快い刺戟であつた。男の持つて歸つた金額は二百圓だつたが、次第に使ひへらして行つてもまだ此と云つて思はしい職業にありつけない。唯一頼みにしてゐる工學博士も何だかアヤフヤだ。それや此やのムシヤクシヤ腹で、つい一杯機嫌の不機嫌の揚句にお鳥の面部へラムプを投げて、大やけどをさせた。彼女は數日間裂じい疼痛で寢た。その間に口走るうは言は一々夫をして斷腸の思あらしめた。矢張り此廣い世界に、頼りになるのは工學博士よりも誰よりも、妻に限る子に限ると。心氣一轉堅氣の小金貸を始めようとたくんだ矢先、長屋一統の排斥を喰つて、

同じ區内の濱松町へひつこした（泡鳴全集第二巻、五二六―五九二）

おとりのくるしみ　お鳥の苦み

岩野泡鳴、四十三年作の小説。清水お鳥は一度國元の紀州で緣づいたが、夫を見くびつて我と去られてしまつた。それから國を飛び出す時、萬一の場合には自殺しようと云うので、兄の醫師の宅からアヒサンを盜んで持つてゐた。上京、間なしに文學者の田村義雄と情交した。併し彼女は「妾」として甘んずる考はなかつた。男も今の妻子はホンの形式的の關係があるだけで眞の本妻はお前だと云つて居つた。その中彼女は彼によつて惡性の病氣にかゝつた。若い女の誇を傷つけた上に病氣までうつしておきながら、戸籍上の手續をしないのが腹が立つて、段々男を怨むやうになつた。男は彼女を友人の加集と云ふのに托して、物資の補助もしなかつた。その紛れに彼女は、はからずも加集に許したが、流石に省みて疚しく「いつそ死んで――」と例のアサヒサンまで呑まうとした。併し田村との愛が復活して又暫らくは無事なるを得た。ついで、田村は樺太へ事業の爲めに行つたきり段々たよりが少くなつて、札幌の舊友有馬勇の宅に寄食してゐるやうになつてからは益々疎遠になつて、日毎月毎の藥代は愚か、食費すら屆けて來ない。彼女は無上に腹立たしくなつて、單身北海道まで出かけて行くと、田村は道會議員と道内巡視中で不在、有馬夫婦は田村の末頼もしくないことをいひきかせて、此際にきれいに別れたが得策だと勸める。考へて見ると男が怨めしくてならないがさりとて之を散々惡口する有馬も怨めしい、札幌の宿の番頭の夜中頃にやつて來るけはひも恐しい……イヤ此いふのもとは自分が惡いのだ。人が淺墓だと云ふ虚榮心に驅られたのがもとで、こんなことになつた。あゝもとの夫が戀しい。併しアノ人ももう誰かを娶つてゐよう。母は居ない。父も居ない。兄や姉には合はす顔も無いとしみ〴〵悔いる（泡鳴全集第二巻、一八四―二二八）

おとんど　大江音人　一四七一―一五三七、弘仁二―元慶元、六十七歳

王朝初期の漢學者として名高く、清和天皇の侍讀となる。その著に「弘帝範」三巻「江音人集」一巻がある。

おもかげばし　おもかげ橋

廣津柳浪三十二年二月作の小説。梗概は、毎日々々おもかげ橋の袂まで來て、通りすがりの村娘

村女を見てはお辰〳〵と呼ぶ青年紳士の氣狂がある。名は「熊倉正治」もとは陸軍士官で其同僚には藤堂新吾と云ふ英逆の友があつたが、日清戰爭中太平山の戰の時、端なくも二人が中に爭論が起きてそれ以來二人は絶交してしまつた。熊倉の母お時と藤堂の母お佐代とは此も若い時から親しい中なので、新吾の妹「お玉」は驕て正治の處へ嫁ぐべく婚約が成立つてゐた。それに絶交となると此緣談も成立はむつかしいと失望した。それかあらぬか歸つてからの正治は賤しい村の女のお辰を愛して、非常に濃熱であつたが無慚にもそのお辰は病死した。彼の發狂は此が原因なのである。お玉の年は廿一二、極めて美人といふのでは無いが「色が白いのと、女には太過るほどの清しい眼と口元が締つて居るのとで顔が明るく見えて、而も少しも媚いた處が無い」（二）が一旦正治の所へ嫁がうと思つて居た心の操と正治が發狂して老母が一人待ちあぐねで居るの氣の毒がる俠氣とから、强いて母兄の許しを得て熊倉の家に行つて傍の見る眼も痛ましい程懇切な看護をするが、當の正治はお辰ばかりを慕つてお玉の方は見向もしない。お玉は色々苦心をした揚句自身村娘のいでたちで白地の手拭を被つて裾を端折つて居るけれども「手甲も脚袴も附けぬらしく近付く儘に手と足とが著しく白く見え、妻さえ何となく上品で」（三四）「おもかげ橋の邊を態と正治の目に着くやうに通る。正治の直覺は直ぐ之をお辰と見誤つてその手を取つて宅に連れてかへる。老母のお時が之を見て「お前はまあ（四〇）」と顔をおほうと云ふ筋（柳浪叢書前編一―四一）

おもひぐさ　歌集おもひぐさ

佐々木信綱が明治廿五六年以後、約十年間の詠を抄錄したもの。この頃に於ける著者の歌道に對する意見は舊來の桂園派に飽かぬふしありとして、一、千篇一律の平弱を打破すること、二、形よりも想を第一義とすること、三、單に自分の即興のみならず色々の人の色色の境遇に同情して人間の感情を歌ふべきこと、四、狹く限られた在來の題詠の弊を打破すべきこと、五、用語も自由にして或程度までは漢語も新語も取り容れること、六、調も唯だ優美とだけに限つてはいけない想に應じて雄大にも輕快にも調へればならぬ、と考へこの抱負を以て詠出したもので、渡清間際の彼の地の友人に示さうとていそいで編んだとあるが、森鷗外が巻頭に序して……あはれ佐々木ぬしの此一巻よ、詩のこころに從ふ表現の數多くしてこれに應ふる形式の彈

力性大いなること、世に詩集はさはにあれどもこれに上こすものまた有りぬべしやは……と推稱した（四六版一三九頁、明治卅六年十一月廿九日、博文館）

おのがつみ　己が罪

菊地幽芳が出世作の家庭小説。

天下茶屋の富豪箕輪傳藏は早く妻に訣れて娘環を乳母日傘で愛育し、知人の勸めによつて上京してある學校に通はせたところ、誘惑の多い都會の事とてさなきだに才色優れた彼女は早くも男學生が注目の的となり中にも福島の素封家の息子の塚口虔三といふ醫學生が熱心に愛を求めた。環の下宿は大木小枝子という彼女の學校の女教師だが、教育者にあるまじき俗物で利慾の爲めに虔三から手引して、環は遂に處女の誇を傷つけられた。處が虔三は戀愛即肉慾と位に淺く考へて居ることとて、一旦手折つて見れば環があまりに淑女で律儀なので少々鼻につき出した矢先に、同縣出身の富豪の娘で彼の許嫁でこれも東都に遊學のお島に氣を移しその蓮葉で嫉妬深い處が氣に入つて、段々此に接近し遂に正式に結婚をしてその記事の麗々しく掲げてある新聞と虔三の離緣宣告の手紙とが一時に環の許に届く。彼女は失望やる方なく而かもこの時已に姙娠して居たので、小枝子も百方苦心してかばつては居つたが、日毎に目立つ彼女の懐胎はどうすることも出來ない。やがて月滿ちて彼女は男子を產んだ。天下茶屋から父が驅つけた頃は憐れにも彼女は發狂して、ニヤリ〳〵と笑つて居つた、時には發作的に產兒を刺さうとした。それを宿の主婦歌子の心づくしで色々と介抱して、男兒は虔三が引とつて里子に遣り、彼女は正氣づき、日だつを待つて心にもあらぬ故郷天下茶屋の月日を再び見る身となつた。父がなさけの流石にこの世捨てもならず、味氣なき月日を過す中、或日の園遊會に櫻戸子爵（除弘）と相知つた。子爵の母陵子夫人の熱心により除弘は持論を飜して環と結婚した。琴瑟相和して間なく懐胎、又もや一男兒をあげた。「正弘」と名づけて一家の愛はこの新生の主に鍾まつた。けれども環の心には一點拭ひもあへぬ蔓りがあつた。初戀のみじめなくずをれ――これを思ふと今にも又例の發作が起きさうである。自然產後の日だちも惡く、氣分すぐれぬ勝なるより、夫は之を氣遣つて親子三人婆やを連れて箱根宮の下に一夏を送つた。その中愛兒が病氣してだん〳〵症狀が惡化し遂に腦窒扶斯――との宣告さへ受くるに至つた。そこへ丁度塚口醫學博士が來合し、熱心

こめて診察をし手當りしたので、一時危篤であつた正弘はメキ〳〵と健康を回復した。博士は即ち往年の虔三で、今東京で細菌學の泰斗として時めいて居る、……環の健康尙もすぐれず更にその後、房州の海岸轉地療養に心ゆくまで身を浸る外、物皆は不自由勝な鄙の里、その中正弘はここへ里子に預けられて居る玉太郎――實は環と虔三の兒と懇意になり共々「日本男子」の軍歌などを高唱して出るにも入るにも手をとつて殆ど兄弟同樣――否な二人兄弟にならうとまで親しみかはした（玉太郎の容貌も鄙には似合はぬ高貴さで正弘に瓜二つといふ程酷似し居つた）……と間もなく不幸な運命が襲來して或日の海水浴に正弘は兜岩のほとりで浪にさらはれ、それを救はうとして玉太郎が飛び込んで無慚にも二人とも手をとり合つて水死した。それを聞いて驅けつけた塚口博士は、これまでの不都合を詫びて環に許を乞ひ子爵に事實をつげようといふと、その前に環は夫の前に凡てを懺悔したといふ。子爵は苦悶の裡に決心して環とは名のみの夫婦で實際は別居することにきめた。さうかうする中に彼女の父傳藏死去の電報がきた。實は凡てを仄聞して自殺したのであつた。彼女もなやんだ末に臺北赤十字病院の特志看護婦になつた……と或日長い電報が子爵家家扶から來て除弘が海外漫遊中風土病性の發熱でサイゴン病院に入り、切りに彼女を慕つて居るとのことに蒼皇サイゴンに渡航して、はたの見る目も氣の毒なほど心をつくして看護したので子爵の病氣はすつかりよくなつたと同時に改めて彼女の前に詫び「私の考へちがひでしたこれまでを許して下さい」とてやがて相連れて京都に歸り、以前にも增して世間の信用も高まり、富と貴と美と夫の愛とに惠まれて彼女は幸福な後半生を送つた

全篇の大意は以上に盡きる、今日から見ては批評すべき點もあらうが、家庭小説勃興當時の代表作で、作者自身としても最も創作の興の湧いた執筆で、當時忽ち多くの版を重ね後には劇にも演じ、歌謠にも唄ひ繪葉書にも刷られた（幽芳全集第一卷、四六版七一〇頁、大正十三年三月十五日、國民圖書株式會社）

おほえまる　大伴大江丸　二三八二―二四六

五亨保七―文化二、八十四歳

先祖は武士だが、父祖の代から大阪の飛脚問屋をして島屋と云ふ。名は政胤、舊國と稱し又大江隣ともいふ。十二三歳の頃から俳諧を稽古し、半時庵淡々・活々坊舊室・駁霞庵凉袋等の數師につき、大阪の蕪村・江戸

の蓼太などの句の消息を取次いで斯壇東西の親交に益し、一方家業に勵みつゝも一方風雅に自適した。時の人之を「富豪の遊俳家」と呼ぶ。その著に俳懺悔・俳諧袋あり、句振りは人事詩多く、一帶に輕快飄逸の趣がある（俳文一一、一茶大江丸全集）

巣の蜂の地主さしたる騒ぎかな
千兩のかくし妻あるかきつばた
萬石の露この秋に置き足らず
北濱や水うつ上の初しぐれ

おほえやま　大江山

資料、謠曲「大江山」・日本通紀・前編二三ノ四・久美壽理上ノ三〇（源頼光の願書）・新群書類從酒呑童子・甲陽軍鑑一六ノ一三・前太平記二〇ノ二・本朝通鑑二九ノ一九・日本百將傳抄一ノ一八・益軒全集扶桑記勝六ノ四八〇・合類節用集四ノ四九・廣益俗說辨一〇ノ一三・本朝武家評林三ノ一、三ノ一七・和漢三才圖會七七ノ五・閑田耕筆一ノ二八・倭訓栞「しゆてんどうじ」・天地弧問珍四ノ一八・隨筆大鑑莚響錄下ノ二三・類聚名物考六ノ八〇二・湖亭涉筆二ノ三九・掃聚雜談一ノ一・古道大意下ノ五四・醍醐隨筆下ノ一六・櫻陰腐談一ノ二〇・翁草一一八ノ七七・市井雜談集上ノ一三・驛路の鈴五ノ二二・玄同放言三ノ下二〇・世事百談二ノ二〇・蜀山人全集百家說林續篇燕居雜話六ノ四一〇八同一話一語四ノ三一五・半日閑話二二ノ四〇・北越奇談六ノ一・北越雪譜二編、下ノ七・松亭漫筆下ノ一六・嬉笑遊覽九ノ四七・續々群書類從傳奇作書後本朝地理志略六・越後名寄五ノ四・新群書類從傳奇作書後集上、三九六・類從名物考六ノ八〇二（酒顚童子の首塚）・蜀山人全集金曾木七三七（酒顚童子の忌日）・松屋筆記一ノ二五七（酒顚童子の書卷）

廣文庫第四册二〇六—二〇八第十册、三七七—三八二國華三四二號、一六七、大江山繪圖・二〇四號、六六三、狩野元信筆、大江山繪卷・二一四號、二四一、狩野探幽筆、大江山繪卷

謎山人、大江山、博文館

國刊一期續々群五（歌曲）酒呑童子一卷

おほかがみ　大鏡（世繼物語）　八卷

文德嘉祥三年（一五一〇）から後一條萬壽三年（一六八六）まで百七十六年間の記傳體國文の歷史書で、發端雲林院の菩提講に落ち合つた夏山繁樹（百四十餘歲）大宅世繼（百七十六歲）若侍などが講師待つまの茶噺に文德以後御代々の出來事を話したのが本書の內容であることを假構し、

あきらけき鏡にあへば過ぎにしもいまゆくすえの事も見えけり　繁樹

すべらぎのあとをもつぎ〳〵かくれなくあらたに見ゆるふるかゞみかも　世繼

などの唱和があるからこれがやがて「大鏡」と名づけられた所以で「鏡」は「正史」の象徵であることがわかる。始めには歷代をあげ、次に藤原氏の攝關をあげ最後の第八卷には賀茂八幡兩社の臨時祭九月節會止の事などを記してゐる。

作者は未詳であるが、王朝末期、敎養あり閑日月ある男子の手に成つたものであることは確かで、さうした見地から云へば藤原爲業だとの說（尊卑分脈・大日本史・國書解題等）は有力と看做される。けれども爲業ならば崇德の御代を世盛りに藏人から皇太后宮大進まで累進し、後剃髮して寂念と號し大原山に隱栖し、二弟寂然・寂超と併せて「大原の三寂」と呼ばれた人なのに花山院の落飾、小一條殿の東宮引退さては南院の類燒など、どうしてもその事象に當面した人でなくては把み得ない機微の消息を描いてゐる點から推すと、爲業よりはもつと前の人でないかとも想はれる。若くは藤原氏に對して暗々裏に反抗精神を持ち續けたさる有職の家筋に生れてつひにこの史筆となつたものかとも想像せられる。行文雄勁にして簡古、而かも雅致に富み、王朝文の純正なる一體を示してゐる。

異本は澤山あるが、國大一七にあるものなどがよろしからう、古典保存會第一期第九回千葉氏藏本の大鏡の復刻もある。註釋としては落合直文・小中村義象校註大鏡・關根正直新註大鏡詳解・鈴木弘恭二氏　大鏡詳解・佐藤球　大鏡詳解などによるがよい（榮華物語の項參照）

おほくのひめみこ　大伯皇女（大來皇女）

一三二一—一三六一、白雉七、正—大寶元、一二、四十一歲

天武天皇の皇女で、備前邑久（おほく）の里でお產まれになつた十四歲の時伊勢齋宮として下され十四年（正味十一年餘り）止まつて朱鳥元年十一月には歸京になつた。歌の方に秀でさせられ、御歌は萬葉集二卷にある。

おほすみ　守部大隅（もりべ）　？

上代の學者、文武・元明・元正・聖武の諸朝に歷仕し、文武の御代には律令の撰に與つた。詩は懷風藻に出てゐる。

おほたふのみやあさひのよろひ　太平記綱目　大

塔宮曦鎧（太平記曦鎧）

享保八年（一三八三）二月、竹本座上場の太平記物で作者は竹田出雲・松田和吉で老近松が添削した。後醍醐天皇北條氏を討つ爲めに土岐藏人頼貞に命を下されたので、頼貞は妻早咲と一子力若を里に歸して舅の齋藤太郎左衛門利行（六波羅の重職）に味方になるやうに勸めた所、剛直な齋藤はいつかな之をきゝいれず、頼貞は大事を洩らした申譯にとて腹を斬る。齋藤が打つ陣太鼓に六波羅は非常を知つて勢揃ひし、宮に攻め入つて官軍は散々の敗北、大塔宮は行方知れず、御妃の三位局は若御子と共に檜ににせられた處、六波羅の鎌倉御名代常磐駿河守は三位局に横慕して、種々に言ひ寄るのを局は「隱岐におはす天皇が都へお歸りになるやう取計はれるならばそちの心に從はう」との仰せにむつとしてその戀を棄て齋藤に折柄の切籠燈籠（つひ今の前、この燈籠の下で媾曳しようと局に迫つたその切籠燈籠）を齋藤に與へて「御子を殺せ」と謎をかける局と預かりの永井右馬頭夫婦は若君のいとほしさに一子鶴千代を身替りに立てようと決心する。盆の宵を奥庭に切子籠燈を灯して、大勢の子供が音頭につれ輪になつて舞つてゐる。その中に齋藤は孫の力若を見つけて一思ひに刺し殺して若君の御身替りに立てた。この齋藤は實に好個の悲壯劇の主人公で、このやうに親王方に忠義を盡したが彼は元來六波羅の臣下として決してその節を曲げたものでなく、唯土岐夫婦の不憫さにその志を爲さしめたのである。その後、宮は赤松・村上・平賀（三郎）等の忠義によつて旗幟を立て直され六波羅は陷り齋藤は割腹する」といふ筋。

おほつのみこ　大津皇子　一三二三―一三四

六、天智第二年―朱鳥元、二十四歳

天武天皇第一の皇子で、體格も御立派、才氣も煥發、加ふるに博學强記、歌文にも秀でて居られたが、新羅僧行心が誘惑して「あなたは到底人の臣たる御人相ではありませぬ……と申してこのまゝに居られては御身が危うございます云々」と云つたので、反を謀り事あらはれて誅戮せられた。皇子の詩は懐風藻に歌は萬葉集二三等の卷に出てゐる。

五言、臨終一絶

金烏臨二西舍一　鼓聲催二短命一
泉路無二賓主一　此夕誰家向

石川郎女に贈りませる御歌一首

足引の山のしづくに妹まつと吾たちぬれぬ山の

しづくに

おほとのほがひ　大殿祭

祝詞中の佳什として稱へられるもので、大殿に災のないやうに祈りを捧げる詞をつられたもの。この祭を行はれる場處は仁壽殿で、祭神は屋船久久遲神・屋船豊受姫・大宮實命の三柱で、又この祭を行はるゝ場合は、一神今食・二新嘗祭・三臨時皇居のわたまし・四齋宮齋院ト定の後などである。

おほなり　葛井連大成？

奈良朝の歌人だが、傳記未詳。歌は萬葉四、五、六、九に入る。

おほのやすまろ　太安麿　？―一三八三

？―養老七

文武・元明・元正の三朝に歴仕して修史上の功績に不朽の名を遺してゐる。即ち元明天皇の勅により稗田阿禮の暗誦を文章化して古事記三卷を著し、後、元正天皇の養老年中日本書紀の撰にも與つて功があつた。古事記の叙に、

上古之時。言意並朴。敷文構句。於字即難。已因訓述者。詞不逮心。全以音連者。事趣更長。是以今或一句之中。交用音訓。或一事之内。全以訓錄。云々

和銅五年正月二十八日正五位上勳五等太の朝臣安萬侶謹上

とあるのは、明らかに彼の苦心と、成効月日と、地位とを示してゐる。彼は後累進して民部卿に任ぜられた。

おほはらひのことば　大祓詞

祝詞の中で最も古めかしく、文段の整つた文詞の優麗な諸點に於て代表的なものである。

大祓の名義は、一、一般衆庶の祓（祓とは罪穢をはらひ清めること・二、朝廷の行はせ給ふ公けの祓・三、祓具の多い祓（祓具二十八種を上祓二十六種を中祓二十二種を下祓と樣に）・四、朝廷の大切なる御行事としての祓。

など色々説があるが、祝詞の他の「大」の字を冠する題名と關聯して四が一番穩當さうである。（三は後樣の區別である）即ち、朝廷の大切なる行事として擧げさせられる神事で、その中には去穢と贖罪と改過遷善と淨化の四觀念を含んでゐる御禊と祓ひつものと清めとがある。緣起は神代の昔伊非諾命が夜見の國から歸りまして、日向の國の橘の小門のあはぎが原で御禊をせら

たのに起るといふ。

文段は、一、冒頭・二、天地開闢・三、罪の發生・四、天つ罪・五、國つ罪・六、太詔詞・七、天神地祇の感應納受・八、罪種消滅の譬喩・九、四柱の祓除神の分掌次第・一〇、結尾・一一、附言、と切ることが出來る。四祓除神とは罪穢を選び去り消し失ふ神々で瀬織津比咩・氣吹戸主神・速佐須良比咩を云ふ。(本居宣長大祓詞後釋・藤井高尚大祓詞後々釋・伴信友中臣祓要解・富士谷御杖大祓燈・近藤芳樹大祓執中抄・平田篤胤天津祝詞考・源安範大祓解等)

おほひら　本居大平　二四一六—二四九三、寶曆六—天保四、九、一一、七十八歳

伊勢の人初め稻掛茂穗といひ、通稱を三四右衛門といつたが、本居宣長の門に仕へて從學年久しくその篤實なるを見込まれて、遂に師家の養子となり藤垣内翁と號し、和歌山侯に仕へて甚寵遇せられ、斑側用人に准ぜられ、家學を守つて門人に敎ふる事親切なので門人千餘人にも達した。歌集に稻掛集(續歌學全書三)・藤垣内集(續歌學全書八)あり、文集に藤垣内文集・有馬日記などがある。その他の著には、萬葉集合解・萬葉集山常百首・玉鉾百首解・百人一首梓弓・古言類聚・三大考辨・古學要・神樂歌新釋・姓氏錄考・八十浦の玉・夏己路毛・關のうまや・吉野の若葉・名草の濱づと・己未紀行・名兒屋の日記。

おほぬがはぎやうかうわかのじよ　大偃川御幸和歌序

延喜五年(一五五六)宇多法皇大井川に行幸あり、貫之躬恒等多くの歌人が御供して、その詠を集めた時、貫之が仰せを受けて作つた歌序で、和歌の方は諸種の歌集に散見せる外纒つては殘つてゐないが、この歌序は完全に殘つて居る(扶桑拾葉集二)文體格調凡て古今和歌序と相似て共に漢詩集序を國文化し和漢混淆融化の先驅と看做される。

おほをかせいだん　大岡政談

實錄物で、江戸町奉行大岡越前守忠相の名判官振を寫したもの「大岡越前守出世の事」「白木屋お熊一件」等十六ケ條を記す(有朋堂文庫第二輯帝文四五の外左の各種がある)大岡名譽政談　上田屋・同　野村書店、魁眞樓・同　五件合卷　上田屋・同　廿八件合卷　上田屋・大岡政談大全　野村書店・同　上田屋・即智明察大岡政談　上田屋・その他大岡政談とか大岡仁政錄とか題して、花咲屋藤作傳とか、煙草屋喜八傳といつた風のものは無數にあつて宛然明治の大衆文學とも謂ふべきさまがある。

おゆ　春日老　？

萬葉集一、三・九に歌があり、懷風藻に「從五位下常陸介春日老一絕年五十一」として一首詩がある。藏人は姓で「春日老」としてよいのであらう。萬葉の古註には辨基が法師名とし、續紀には大寶元年三月に辨紀を還俗させてその後任として老を僧侶にならせたとあり傳記不明である。

おゆ　小野老　一三五三—一三九七、朱鳥七—天平九、四十五歲

天正、聖武の朝に仕へて太宰大貳に任ぜられ、歌に巧みで萬葉集に採られて居る。

おゆ　穗積老　？

持統・元明・天正・聖武の朝に仕へ、式部大輔より大藏大輔に至る。歌は萬葉の三、十三、十七に出てゐる。

おろちたいぢ　大蛇退治

資料、古事記上の二四・古事記傳九ノ二二・日本書紀一、神代紀上ノ三五・熱田太神宮緣起一ノ一・樋河上天淵記五ノ八・古語拾遺六・大三輪神社鎭座次第一・駿河國風土記一ノ一二・日本書紀纂疏上ノ五ノ一九二・廉添燈囊抄八ノ六・諸國周遊奇談五ノ三、五ノ五・參考源平盛衰記四四ノ四・史籍集覽豐薩軍記三ノ二九・神代卷藻鹽草三ノ四一・神代卷清地傳三ノ四〇・古史通二ノ一六・廣益俗說辨、附編三一ノ八・白石全集祭祀考四八五・日本書紀通證五ノ五・うきくさの跡一一・煙草三ノ九・栗里先生雜著一五〇—一〇〇・廣文庫第十九册七〇三—七〇六・次田潤古事記新講一二四—一三五・飯田武鄕日本書紀通釋一、五一九—五三八・高木敏雄比較神話學・武者小路實篤一日の素盞嗚命・蓮山人八頭の大蛇、博文館。

おんざうししまわたり　御曹子島渡

お伽草子の一つで「源義經土佐の港を船出して四百三十餘日で千島に渡り、天女と夫婦の契りをかはし、その授けを以て魔王の所持する兵法の祕術を寫し取り、七十餘日を經てもとの土佐に歸りそを讀破して平家を討ち滅ぼした」ことを綴る。

おんりつがく　音律學

しけいがく「詩形學」に同じ、その項を見よ。

カの部

かあん　淀屋个庵　二二三七—二三〇三、天正五—寛永二〇、六十七歳

大阪の人、連歌、茶道をよくして有名であつた。

かいおん　紀海音　二三二三—二四〇二、寛文三—寛保二、一〇、四、八十歳

元祿・寶永頃の戲曲作者。父は俳諧師の貞因なり。兄は狂歌師の貞柳なり。文學の好尚は一家の遺傳でもあつたが別けても彼は性來讀書を好み、家職醫藥の餘暇契沖に敎を受けて國文の素養を得た。會々元祿十五年豐竹座分立の時、迎へられて座附作者となり、竹本座の近松に拮抗して末廣十二段・八百屋お七・播州曾根松・油屋お染袂白絞等を出し、それより名家を以て目せらるゝに至つた。彼と近松とは能才と天才との對照をなすもので、作劇の天分に至つては近松の如くに惠まれてはなかつたが、その學識と着想と、文詞の流麗とは近松に優るとも劣るまじきものがあつた。その作三十餘篇、就中鎌倉三代記・心中二ツ腹帶・八百屋お七歌祭文・義經新高館等が傑作と謂はれて居る（帝文一九）元文元年夏法橋に叙せられた。彼、本姓は榎並、俗稱は喜右衛門（後に善八）契沖の弟子としての號は鳥觀齋契周（後に貞我庵貞峨）大阪八丁目寺町寶樹寺に墓がある。

がいかのいへ　崕下の家

江見水蔭三十六年十月作の小說。梗概は、

「思ひ切つて崕から飛降りようとする處を老松の枝が引留めた。それが折れた一刹那に若竹の根が又引搦んだ。それと同じやうなものだと九郎次は悶え始めた。（五八一）

憫れむべき「お重」は此崕下で最後の息を引きとつた「九郎次」と「お米」とはその終焉の床で水盃で婚禮を濟ませた。「吾作」は警察のまはしものとなつてどこかへ行衛を暗ました。實は九郎次の罪跡を搜査にであつた……お負けに九郎次の惡口を言ひふらして「墓の人骨を東京へ賣つてその金で崕の家を建てた」など批難した。

思ひがけなくも黑川の家へ强盜が闖入して星戸巡査は職務に仆れた。星戸を助けて素手で强盜の墓を追ひ拂つたのは九郎次であつた。「九郎次はえらい」と村民は俄に彼をほめたてかけた。慰藉の金員物品も可なり集まつた。お米は心から悅んで「かうして九郎次と村民との仲が融和するんだつたら何も云ふことは無い」とまで思つた。其時九郎次は人事不省で寢てゐたがさめて此事を聞いて「それではダイナマイトのやりばがないわ」と怒つた。

一夜暴風雨に加ふるに地震落雷、彼の不在中崕下の家は毫なしに破された。

番傘森の八幡宮にお百度を踏んでゐる美しい女——お米は一心こめて夫の情の和らぐやうに村民と折合つて行くやうにとそればかりを神樣に祈つてゐるのである。そこへ市森の「勝美」が來て又々戲れかゝる。

「斯うしたのでは何にもならぬ。却つて神樣に失禮である」と二十八度目についと共儘お米は鳥居の方へ走り出した。

靴足袋の跣足で勝美は追うて來た。

悲鳴の聲に白鳩は飛んで番傘森を去つた（六五二）」

お米は勝美の爲に貞操を蹂躙された「兄さんにすまぬ……口先ばかりのお詫びでは濟まぬ」と死を覺悟した。

「市森の息子にれ、大事な櫛を折られたから。と然う云つてお呉れよ……よ……よ……好いかえ（六五五）」

と「淺坊」に言傳てゝ、

「悲叫一聲耳を貫きむら立ちのぼる白煙の中これぞお米の覺悟の投身、黑髪亂れて紅色に漂へど合掌は崩れず乳の上（六五六）

九郎次は猛獸のたけるが如く吾作を殺し、市森を襲ひ息子の寢室目がけてダイナマイトを投げつけ、其火事のあかりで父母の墓つゞき深さ六尺までを掘り下げたやがて、

「其穴の中に入り厨に馴れし出刄庖丁に喉笛掻切つて自らを殺し、石器時代の遺跡に鐵器を留め、永久地底の人と成り了して、光明を見たのはされば東の間であつた。

後世の人此所を發き考古學の眼を以て、明治此頃の不自然なる人情と不完全なる社會とを見出し得るか如何か？（六五一）」（水蔭叢書五七七—六六一）

かいせいしよ　開成所

文化八年「蠻書和解方」と名づけて洋學敎習の機關としたものの。文久三年（二五二三）以後の名稱で（その間にも洋學所、洋書取調所など云つた時代もあつた）今日の東京帝國大學の前身である。事務官には頭取、並等があり、敎官には敎授手傳出役等があり、生徒は始めは幕臣の子弟に限つて居たが、安政五年以後は一般藩士の子弟も文典の句讀さへ終へれば入學を許したので、人數はずつと增して二百名にも達した。學科は最初經學に限りついで蘭學專門とし、後には英佛獨露

の諸外國語も地理・醫學・物理・博物・兵學・歴史・物理等をも加へ、傍ら數學・西洋畫學をも課し、隨時講演を公開して一般の傍聽をも許した。

かいだうき　海道記　二卷

貞應二年卯月上旬、都を立つて同十八日鎌倉に下るまで道途の光景を新文體の和漢混淆文で書いた紀行文で作者は鴨長明とも源光行とも謂はれてゐるが反證の確かなものがあつて首肯されない。けれども此等と略時代を同じくする男子で和漢梵の三學に至り深い人の文章であることだけは確かである。

群三三〇、一一、九六〇—九九五・名著文庫第四十七編幸田露伴校訂・續帝二十四岸上質軒校訂、等に入る。

かいなん　藤野海南　二四八六—二五四八、文政九—明治二一、六十三歳

伊豫松山の人、名を正啓、字を伯迪といひ昌平黌教授より編修官に進んだ。先朝事略・足利德川時代編年史・水戸黨爭始末等に筆を執り、遺著に海南遺稿といふのがある。

かうかうかく　角田浩々歌客（劍南富士行者）　明治二—大正五、三、四十八歳

駿河の人、名は勒一郎、慶應義塾出身、大部分を新聞記者生活に送り、國民・大朝・大毎と轉じて最後は東京日々の學藝部長であつた。評論家として健筆を揮ひ三十八年頃には新體詩の論議などを執筆して世の注目を惹いた。その著「鷗心錄」は廣く讀まれ、その他に漫遊人國記・出門一笑・詩國小觀などを書いた。

かうけい　伴蒿蹊　二三九三—二四六六、享保一八—文化三、七、二五、七十四歳

近江の八幡の富豪に生れ、名は資芳、その居を閑田廬と號し自ら閑田子と稱す。性、篤孝溫順物と爭はず、有賀長伯・武者小路實岳等について學び、更に獨學研鑽して、國史に精しく、國文に妙を得（但し所々文法上の誤格あり）和歌の如き當時蘆庵・澄月・慈延と共に平安和歌の四天王と稱せられた。又林泉院六如上人と入魂で佛理にも精しかつた。妙法印の宮厚く彼を寵遇せられた。

その著「國文世々の跡」は文章本位の文學史とも謂ふべく、今も世に行はれ（閑田耕筆・閑田次筆、二册共吉川弘文館百說續篇下卷一に入る）閑田文草は近世國文の中平明を以て優れ、近世畸人傳は文と內容と相俟つて多くの人に愛讀せられた、その他の著には、謌辭要解・萬葉類葉代匠記句解・同續篇・國歌八論評・譯文章喩・津島祭の記・庭の訓抄・增補廻字要解・大和物語抄補翼・かぐつちのあらび・門田の早苗・勝地吐懷編贅頭などがある。

かうけしだい　江家次第　十九卷（二十一卷、二十卷）

大江匡房が後二條關白の命によつて「年中の常例・臨時の公事・大小の儀式等」を詳記した有職の書。

かうじじゆう　江侍從　？

王朝の女流歌人。大江匡衡の女で母は赤染右衛門。彼女の咏は後拾遺・金葉・詞花・千載・新拾遺の諸集に散見する。

祐子內親王の家の歌合に詠侍ける

小倉山たちども見えぬ夕霧に妻まどはせる鹿ぞ
なくなる

陽明門院はじめて后にたゝせ給ひけるを聞きて

紫の雲のよそなる身なれ共たつときくこそ嬉し
かりけれ

永承四年內裏の歌合に月をよめる

いつよりも曇なき夜の月なれば見る人さへに入
り難さ哉

かうしよう　考證

文獻・遺蹟・遺物等から歸納して古代の事蹟や傳記や著作を論定すること（考證學は史學の一分科となつてゐるが、國文學に於ける考證の分野はまだ餘り開拓されてゐない。纔かな局部だけが科學的に闡明され、あとの大部分は內部徵證や、關聯的推測や、他邦文學史の比論や、純主觀的の臆測や、時には驚くべき大膽な獨斷論位の程度である）

かうしようがくは　考證學派

德川時代吉田篁墩（二三九二—二四五八）によつて唱へられた儒學の一派で、古今、和漢、學派に偏せず博く群書をあさつて、歸納的に妥當點を發見することを主旨とする。皆川淇園・安井息軒等はこの派に屬する名家である（古類、文學部二、八〇八—八〇九）

かうしよくいちだいをんな　好色一代女　六卷

井原西鶴が貞享三年（一六八六）六月、四十五歳作の浮世草子。

處は嵯峨の山奥に好色庵といふを結んで世を靜かに栖みなす老女、二人の訪づれ客に向ひて我が身一代の戀語りをするといふ筋で、女の體驗した愛慾の生活を披

撫したもので、西鶴の女性觀の鋭尖なことがわかる。好色一代男と相並んで傑作と謂はれてゐる。その女といふのは先祖は後花園天皇に仕へたさる公卿で、今落魄のさすらひ女、天性の美貌と、何歳になつても若さうな小體（がら）軀とは國守の艶姿、島原の太夫、浮世寺の大黒、諸禮女祐筆、江戸の御物師、伊勢古市の宿場女郎と對手も場所も柄もその日〳〵の風の吹きまはしで種々なる戀をし盡したといふ。

かうしよくいちだいをとこ　好色一代男　八卷

井原西鶴が天和二年（一三四二）の作の浮世草子。西鶴自身にとつて從來俳諧（談林派）の一明星として活動して居つたものが新たに小說家として立たうとする轉期をあらはした意味深い作品であり、我小說界にとつては新たに浮世草子の發生を見た劃期的の意義がある。一代男與之助が情解放生活を赤裸々に述べ「五十四歳まで戯れし女三千七百四十二人、小人のもてあそび七百二十五人（このかた）、手日記に知る、井筒に倚りて垂髫兒より已來腎水を替へ干してさても命はあるものか」といふを冒頭に「是より女護の島へ渡りて抓取りの女を見せんと云へば何れも歓び、譬へば腎虚して其處の土となるべき事偶男に生れての其れこそ願ひの道なれと戀風に任せ伊豆の國より日和見すまし天和二年神無月の末に行方知れず成りにけり」に終る。三版までは荒砥屋孫兵衛が發行し、ついで秋田屋市兵衛、大野木市兵衛と轉々として度々版行した。五年後の貞享四年九月中旬には日本橋青物町大津屋四郎兵衛方から江戸版も出た。江戸版の挿畫は菱川師宣が書いたが、大阪版のは大部分西鶴自身畫も書いた。

かうせつ　前田香雪　天保一二、正—大正五、一二　七十六歳

東京の人、名は夏繁、國學者夏蔭の嗣で國粹美術の愛護者として、美術學校の講師として有名だつたが、また明治の新聞小說（始めは「續き物」といつた）の早い作家としても有名で、十一年九月繪入新聞に連載の「金之助之話」は多くの讀者の血を沸かせた。その他尙數篇の作あり、自ら「繪入朝野」といふ新聞をも起した。

かうてい　村瀨栲亭　二四〇六—二四七八、延享三—文政元、七十三歳

京師の儒家、名は之熙、字は君績、通稱嘉石衛門、栲亭又は神州と號した。又自らは土岐中書と稱した。武田梅龍について古學を學び、秋田侯に仕へて藩政に與り晩年辭して歸京した。詩文書畫共に秀でその著には次の數種がある。藝苑日抄・論語集義・學庸精義・周易拾象稿・萬象一旨・楓樹詩纂・栲亭集。

かうとうは　高踏派

文藝思想方面では貴族主義的な一派をいひ、政治や實業界では超越的態度を採る一味の人々を云ふ。古代希臘に於てアゼンスの西六十哩、パルナシユース山といふのはヒンドス山脈中最南端の一靈峰で海拔八千六十尺、希臘神話中第一の靈蹟で、こゝに集合した希臘詩人の一團を佛語でパルナシアン "Parnassiens"（即ち高踏派）といひその詩風を承けた十九世紀の中頃佛の革新派の詩人、ゴオチエ・ボオドレエル・コペエの一派をもパルナシアンと云つたのが起りだといふ

かうなのうたがたり　寄居歌談　五卷

近藤芳樹の著、詠歌の心ばへ・文字・用語等につきて翁の意見を述べたもの、天保十三年（二五〇二）の著で出版したのは元治元年（二五二四）のこと。

かうまんさいあんぎやにつき　高慢齋行脚日記

「鎌倉最明寺時頼の頃扇ヶ谷の隱士、高慢齋萬屋が行脚に出かけた留守に、天狗、留守の弟子法外や茶の宗匠村田自休を誘惑して慢心を增長させ、最早濟度すべからざる頃主人萬屋旅より歸り、弟子の墮落を見て旅中の夢と暗合せるに驚き、早速四書や五經やありとある聖經賢傳を煎じて呑ませると氣もなく全快した」といふ。戀川春町安永五年（二四三六）の自畫自作で黄表紙の一傑作である（續帝三四）

かうやうこく　高暘谷　二三七九—二四二六　享保四—明和三、四十八歳

肥前長崎の人、實名は渡邊奔、字を君乘、通稱を忠藏といふ。僧大湖について詩を學び、遂に一世の大家と稱せらるゝに至つた。その著には、五經音義補・樂府變・詠物詩雋・明七子續篇・暘谷詩草・瓊浦社草・清七子詩選などがある。

かうわかまひ　幸若舞（舞舞）

源義家の後裔宮內少輔直詮（童名幸若丸）が、幼時叡山で寺僧の慰めに舞つて見せたのが起りで、早く室町初期能樂と共に行はれ、德川期元和・寛永の頃から寛文・延寶にかけて最も世に流布した。幸若丸の末は八郎九郎と、小八郎と、彌次郎との三家に分れ、德川時代となつては三家共に越前家の保護を受け、維新前まで幕府の祿を食んで長くその生命を持續した。尙「舞の